

# アラブ首長国連邦オマーン湾岸のイスラーム時代町跡

Islamic Town sites on the coast of Oman Gulf in the United Arab Emirates

佐々木 達夫, Tatsuo SASAKI

## 本論の目的と構成

本稿は筆者が実施しているアラビア半島オマーン湾沿岸北部地域のイスラーム時代考古学調査の成果をまとめたものである。1987年以来ペルシア湾岸アラブ首長国連邦のジュルファール遺跡、ハレイラ遺跡、ジュメイラ遺跡やバハレン国のアーリ遺跡などで、海上貿易史研究のためイスラーム時代の遺跡を発見し発掘した。それらペルシア湾岸遺跡と近接するオマーン湾岸遺跡を比較研究するため、オマーン湾岸の遺跡調査を1994年以来実施している。遺跡踏査や採集後にオマーン湾岸ルリーヤ砦遺跡、コールファッカン砦遺跡、コールファッカン町跡、フジェイラ町跡、コールカルバ町跡を発掘し、ビスナ町跡、オワラ町跡では出土品や採集品を整理した。現在フジェイラ、コールファッカン、ディバで調査継続中である。遺跡調査研究の成果、主要な出土品である陶磁器の分類と組み合わせ、出土品を使用した場所である町や家の構造と配置、特に港町に焦点をあてた研究成果を述べる。

- 第1章 地勢、研究史、歴史的背景
- 第2章 オマーン湾岸イスラーム遺跡1994年踏査
- 第3章 ルリーヤ砦周辺表面採集1995, 1997年
- 第4章 ルリーヤ砦
- 第5章 コールファッカン砦
- 第6章 コールファッカン町跡
- 第7章 コールカルバ町跡
- 第8章 ビスナ町跡とオワラ町跡
- 第9章 フジェイラ町跡
- 第10章 ディバ
- 第11章 オマーン湾岸北部遺跡の陶磁器
- 第12章 出土品を使用した町や家の検討
- 第13章 古地図に印されたオマーン湾岸の港町
- 第14章 オマーン湾岸の港町景観復元

## 第1章 地勢、研究史、歴史的背景

### 1. オマーン湾岸バティナ地域の地勢

アラビア半島でオマーン湾岸に面している国はアラブ首長国連邦とオマーン王国である。アラブ首長国連邦内では、シャルジャ首長国、フジェイラ首長国がオマーン湾岸の海岸線を領地としている。シャルジャ首長国に属するオマーン湾の海岸で遺跡調査を実施した町は、北からディバDibba、ルリーヤLuluyah、コールファッカンKhorfakkan、カルバKalba、コールカルバKhorKalbaである。フジェイラ首長国の主要な町は、ディバの一部とカルバの北に位置するフジェイラFujairahであり、いずれも遺跡調査を行った。コールカルバ付近一帯はマングローブの茂る低湿地サバハSabkhaが広がる。

オマーン湾岸に沿ってハジャル山脈が南北に連なり、北端のホルムズ海峡付近では切り立つ崖を形成し平野がほとんどなく、山の民シーフー族Shihuhが住む。ハジャル山脈の西側は広大な砂漠が広がり、西北側はペルシア湾（アラビア湾）に面する。オマーン湾側は狭い海岸平野を形成し、農地として利用されている。ハジャル山脈から涸川ワディが東側の海へ注ぎ、それは山越えの東西内陸交通路として利用され、山脈裾部のオアシスを結ぶ南北内陸交通路、さらに砂漠交通路を越えてペルシア湾岸に達する交通路に通じている。

オマーン湾岸の気候は、ペルシア湾側と比較するとわずかだが穏やかである。そのため様々な種類の植物栽培がペルシア湾側よりも可能となる。夏は高温となり降雨がないため植物栽培による収穫はできないが、冬は最高気温が30度前後まで下がり、降雨もある。僅かな降雨を利用した冬雨天水農耕が山地頂部や

山斜面の一部を農地として行われていた。岩山を登ると、鞍部に石積み囲いの小さな農地が段々畑として今も残る。海岸平野では山裾の湧水を利用した灌漑農耕が行われていた。現在、ペルシア湾側のアブダビやドバイよりもコールファッカンやフジェイラは夏10度ほど、冬5度ほど最高気温の低いときがあり、山脈の東西で気温差が大きい。

沿岸では漁労が盛んであったが、Shashabと呼ばれる椰子の木で作ったボートが20世紀後半まで使用されていた。現在でも沿岸では地引網が盛んに利用され、自然のクリーク（内陸部に川のように長く入り込んだ入り江）は漁船の停泊地・港として利用されている。山羊や羊、鶏、ラクダも飼われている。

以前は道路が整備されていなかったため、沿岸の町の交通は小舟を利用することがあった。ディバより北方の海岸には今でも車が通れる道路がない。南からディバに北上した道は断崖と海に面して途絶える。ディバとコールファッカンを結ぶ海岸の道路も20世紀後半にできた。それ以前は山脈内を通る内陸路が利用されていた。こうした海岸道路のない地域間の往来は小舟交通が一般的だったと言われる。

アラビア半島オマーン湾岸地域は近隣の町ばかりでなく、海上交通路でインド洋各地の港とも結びついていた。ペルシア湾沿岸アラビア半島やメソポタミア、イラン、オマーン湾岸のイラン、パキスタン、アラビア海沿岸のパキスタンからインド西側、アラビア半島沿岸から東アフリカ沿岸にかけての地域との強い結びつきが各時代にわたってあったと言われている。18世紀から20世紀前半に首長が居住した砦Fortは修復保存され歴史的観光資源として公開されることが多くなったが、修復され公開された砦には屋根材として東アフリカのザンジバルから木材が輸入され、長持のように大きな衣類・財宝を入れたインド製木製家具が室内に置かれている。それらはインド洋交易や交通の範囲の一端を語る。一般の民家では現地の棗椰子やマングローブを木材として利用し、インド製木製家具は高価で使用していなかったという。遺跡から発見される陶磁器の産地からもこうした広域交易圏の状態が推測できる。

オマーン湾岸の港町と内陸の町を結ぶ陸上交通路は東西に走るワディ交通路が利用された。最近まで一般的であった数本の代表的な東西陸上交通路を北から順に挙げると、1) ディバ～カット～ラッセルカイマ路、2) カルバ・フジェイラ～マサフィ～マナーマ～シャルジャ・ドゥバイ路、3) ソハール～ブレイミー（アライン）～アブダビ路となる。ペルシア（アラビア）湾岸とオマーン湾岸には途切れる部分もある沿岸路が走り、ハジャル山脈西側山裾部と砂漠の接する地域には南北の内陸路が走り、その中央部にブレイミー（アライン）のオアシス都市が位置する。こうした交通路は先史時代の類似遺構・遺物の発見状態から、イスラーム時代以前から長期にわたって利用されていたことが推測できる。地形や気候、その他病気や戦争、災害といった大きな変化がなければ、交通路と村落の位置は基本的には移動しなかったと推定できる。先史時代の墓や遺跡の発掘によって同じ場所が長期に渡り居住されたことが判明している。この地域は岩山と砂漠がほとんどを占める厳しい荒れた地勢であるため、最近の新道路建設に伴う岩山を削る土木工事のような例を除けば、自然発生的で自然地形に大きく影響されていた交通路を人為的に変えることは難しいことであった。

筆者が調査の主要対象地としている地域の北側部はディバ、南側部はコールカルバである。ディバより北は不毛な岩山が連なり平地がほとんどないムサンダム半島になる。ムサンダム半島には陸地では交通路が繋がらないが、海岸部は複雑な入り江の奥にいくつもの港町がある。陸地で交通できるという点ではディバがオマーン湾岸のもっとも北に位置する町、港になる。暗礁や海賊が多かったと言われるホルムズ

海峡を船で通過しない場合は、ディバから山越えてラッセルカイマのジュルファール遺跡方面に通じるのがアラビア半島東北部の最北の陸上交通路となる。ディバからオマーン湾岸に沿って南に向かう陸路は利用されることが少なかったと言われる。ワディが小さな峡谷を刻み、海岸線は砂地がなく岩が絶壁となる部分があり、沿岸道路の発達あるいは車が通れる道路開通が20世紀後半まで遅れたためである。海岸から離れた岩山内の陸上交通路は山脈内のワディを縫うようにして曲がりながらも南のコールカルバ方面に通じている。

こうした交通事情から、オマーン湾岸からペルシア湾側のラッセルカイマあるいはジュルファール遺跡に達するには陸路、すなわち山道とワディを利用するのが距離的にも時間的にも最短となり、実際に用いられた交通路であった。ディバとラッセルカイマの距離は地図上を直線で計ると30kmほどである。ホルムズ海峡を挟んで位置するディバとラッセルカイマあるいはジュルファール遺跡は、ペルシア湾とオマーン湾というそれぞれの地勢・地域の先端地という地理的位置の共通性だけでなく、歴史的に深い関連性があることが容易に想像できる。

また、調査地域の南側部に位置するフジェイラやカルバから西に山脈を越える陸上交通路は次のようである。オマーン湾岸の港町カルバKalbaからワディハムWadi Hamに沿ってハジャール山脈Hajar Mountainsを越え、内陸で湧水の採取地として今も知られるマサフィMasafi、ワジシジWadi Siji、マナーマManamahを経て、デドDaydの平原を通り、さらに西に砂漠地帯を経てペルシア湾に達する。マナーマまでは岩山の間を縫うようにして行くが、マナーマは平原と岩山の接する中間地帯となる。山裾の湧水と灌漑による内陸農耕の中心地がデドで農園が広がるが、それからペルシア湾岸までは起伏に富む広大な砂丘が波打つ砂漠が続いている。ラクダでこの砂漠を越えるには1日ないし2日の行程であったが、現在は砂の海の中に1本走る高速道路を利用すると1時間で抜けることができる。

ハジャール山脈は涸川ワディが急峻な谷を連続的に刻み、山から流れ落ちた大小の石が涸川に堆積しており、土地は植物が育つにはあまりに痩せている。降雨時には涸川を激しい勢いの濁流が石を巻き込んで瞬時に流れていくという。生業は山羊の放牧、斜面に石垣で囲った段々畑で作る小麦や蔬菜の栽培、涸川の一段高い部分に石垣をめぐるして作るナツメヤシや果物樹の栽培である。段々畑では冬の降雨期に灌漑水路で水を引き作物を作る。山並み頂上部における冬雨水農耕が主であった。20世紀第4四半期になると山中でこのような農業は非常に少なくなり、山奥に放棄された農地跡と村跡が残るのは現在とくに珍しいことではない。集落(村、町)を作るというより、1軒から数軒の家があるという場所が多く見られ、山の頂や周囲よりやや高い位置に住居を造る。冬雨水農耕は季節的居住移動を引き起こし、夏は山裾に村ごと下る季節的移住が最近まで行われていた。

そこでは一時に過ぎない水の流れを巧みに利用して灌漑農耕していたという。今も人々が居住し農地を確保しやすいのは、山裾と海岸平野である。居住する村は涸川に沿う段丘に位置して平野を望む場所や、涸川の濁流に襲われない地形の場所が適している。村内や周囲にナツメヤシ畑が広がる地域もある。水を確保する方法は他の地域と類似しており、涸川に掘られた井戸の水が利用されている。カルバの山際地域のように、地下水道ファラージュ(Falaj、複数形Aflaj)が作られた地域もある。一般には泉や井戸も利用され、涸川の水が流れ込むように作られた地下貯水地の跡も村ごとに残るようである。

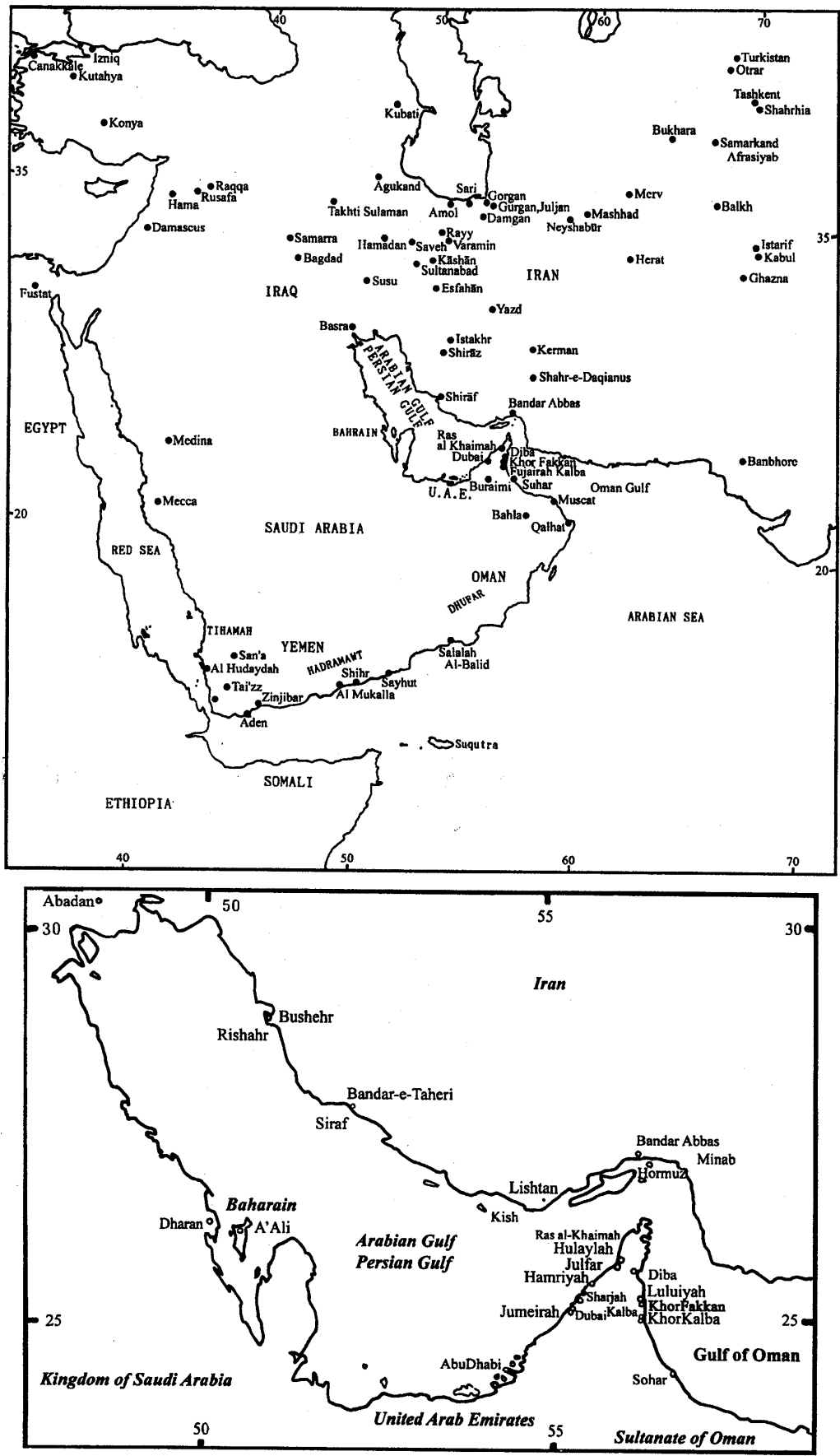
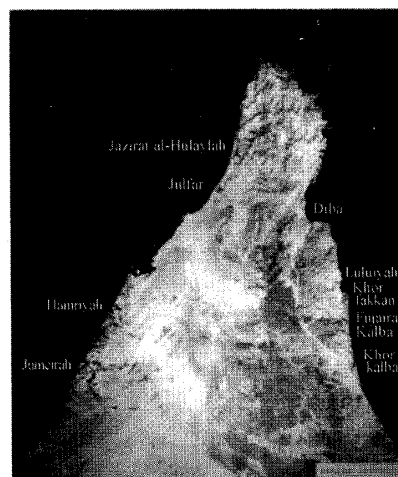
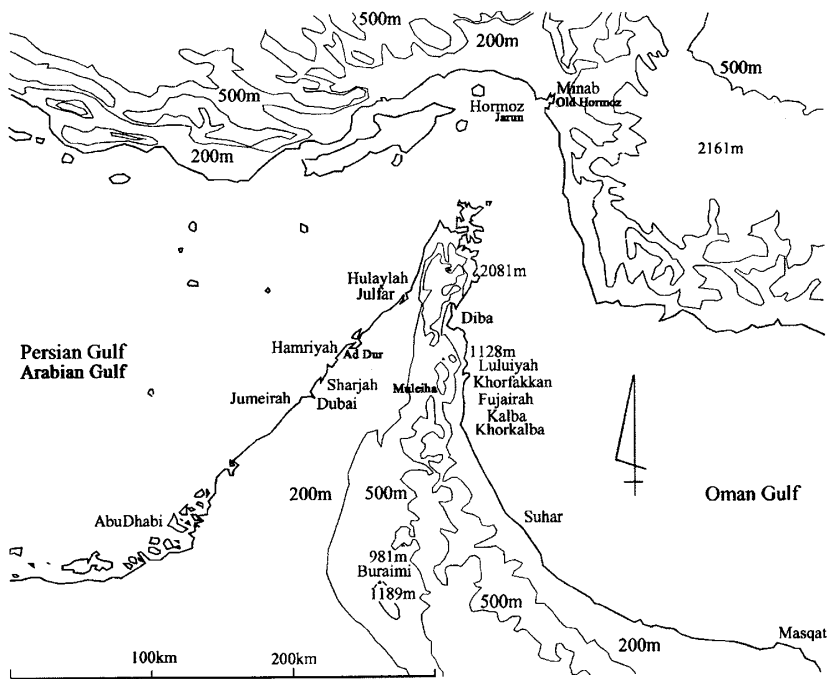


Figure 1 Archaeological Maps of the Persian Gulf and Oman Gulf showing the sites mentioned in the text.



North-east Arabian peninsula between Persian Gulf and Oman Gulf, showing Jumeirah, Hamriyah, Julfar, Jazirat al-Hulaylah, Diba, Luluyah, Khorfakkan, Fujairah, Kalba and Khorkalba, where Japanese team had researches.

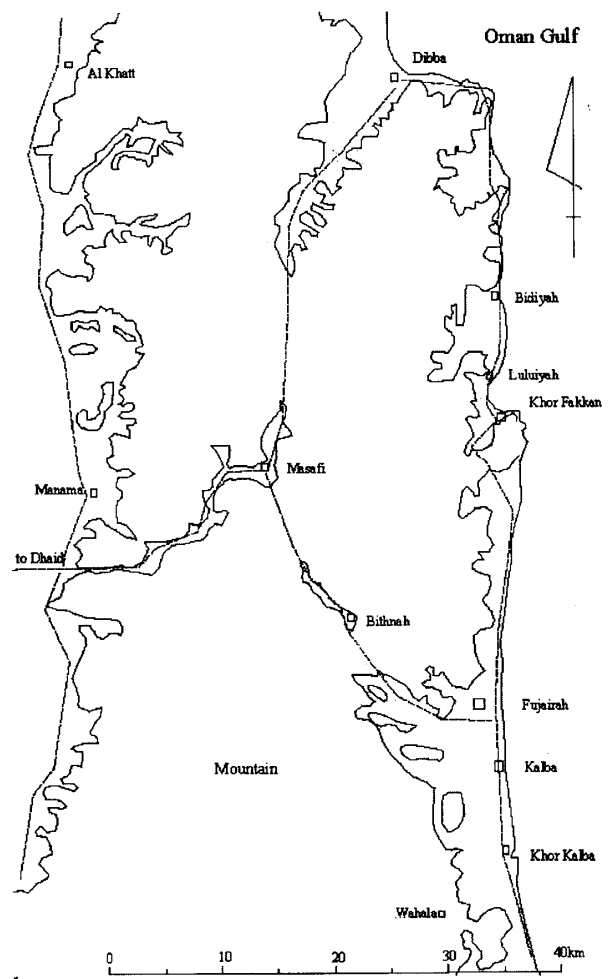
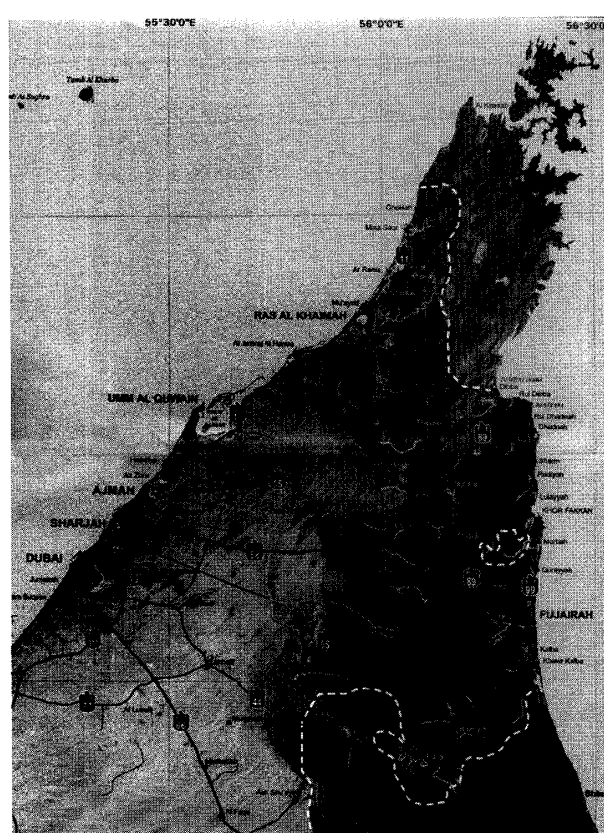


Figure 2 Archaeological Maps, showing the sites mentioned in the text.

## 2. オマーン湾岸のイスラーム時代遺跡研究史の概要

### 〔調査前史〕

アラビア半島沿岸のイスラーム時代遺跡に関する調査と研究は他の地域や時代と比べて非常に少ない。20世紀に入ってわずかな先史時代の遺跡の調査が始まったが、その後も欧米人による先史時代の調査が主に続けられ、イスラーム時代に関心を示す研究者はきわめて少なかった。オマーン湾岸を考古学者が訪れたのは1959年であり、デンマーク考古学調査隊がアラビア湾岸ラッセルカイマとオマーン湾岸ディバDibaを訪ねたのがそれであるが[Bibby 1965, 66 pp.151-152]、イスラーム時代には関心が払われなかった。

### 〔第1期の調査・遺跡の発見と遺物の表面採集〕

オマーン湾岸を含む地域の考古学調査が始められたのは1968年2月であった。イギリス人ピアトリス・ドゥ・カルディ Beatrice de Cardi と D.B.Doe は当時イギリス領であった現在のラッセルカイマ首長国、フジェイラ首長国を中心とする地域の遺跡踏査を行った。当時の道路状況は悪く四輪駆動車でも砂地を走るのは困難な踏査であり、車の走れない地域はラクダの背に乗って移動したという。ホルムズ海峡に突き出るムサンダム半島西側ペルシア湾沿岸(Ash Sham, Rams, Wadi Haqil, Julfar, Khashm Nadir, Khawran) と東側オマーン湾沿岸(Dibba, Khawr Fakkan, Qurayyah, Kalba, Sohar)、および内陸(Buraimi)で数十の遺跡を発見している。4週間踏査成果の最初の報告は1970年に刊行され[De Cardi & Doe, 1970]、遺跡と遺物を含む詳細な踏査の成果は翌年に発表された[De Cardi, 1971]。

土器や彩文土器がもっとも多かったが、目立つ採集遺物に中国の染付があった。明代16世紀後半の製品と推定されたため、ポルトガルのペルシア湾岸及びインド洋の支配と遺跡の歴史を関連させた史的枠組のなかで説明がなされた。オマーン湾沿岸の遺跡は、カルバKalbaからコールファッカ Khawr Fakkanの北までの地域が政治的・地理的な理由で主に調査され、バティナ海岸のこの地域では中国陶磁器の採集が非常に少なく、ポルトガル到来以前にインドとの貿易で繁栄していたと推定されるカルバKalba、コールファカン Khawr Fakkan、ディバDibbaでも、わずかな中国染付が採集されたに過ぎない。この理由として、ポルトガルが完全に港や街を破壊したため、中国陶磁器を使用した住民がいなかったことをあげ、一方でジュルファールは真珠生産地であったために、この悲運をまぬがれたとドゥ・カルディは推測している。

### 〔第2期の調査・ソハール遺跡の発掘調査〕

オマーン国ソハールの海岸に建つ城塞内の空き地が1980年代にフランス人モニク・ケルブランによって発掘された。イスラーム時代の遺構が残ること、発掘によって中国の青磁や染付などを含む遺物が出土することが明らかになった。出土した中国陶磁器はピアゾリッツによって簡略であるが報告され、13～14世紀の青磁が含まれることがわかった。海岸砂地に深く掘られたトレンチ内下層からは緑釉陶器が出土し、前1世紀頃と推定されたが[Kervran & Hiebert 1991]が、紀元後1世紀と修正された[Kervran 1996]。しかしハレイラ島出土品と類似の緑釉陶器碗が出土しているから、さらに時代が下がる可能性があると筆者は推定している。こうした調査によって、オマーン湾岸の紀元後の港町跡の存在が確認できた。

### 〔第3期の調査・フジェイラ国内の調査〕

1987年から1994年に実施されたスイス人コルブッド P. Corboud によるビスナ及び付近の遺跡踏査によって数百の遺跡が発見され、ドゥ・カルディの調査による遺跡数をすっかり書き替えることになった。一部の遺跡は試掘された。筆者は彼らの表面採集土器等を整理中に観察したが、その中にイスラーム陶器は含

まれていなかった。これは、彼らの専門分野が先史考古学であったため、イスラーム陶器を採集しなかったことによる。イスラーム時代遺跡についての知見はこの分布調査によって増加しなかったが、筆者もこの時期に同じ地域で遺跡を探しており、ピスナでイスラーム時代の陶器が遺跡に落ちているのを見ていた。

〔第4期の調査・シャルジャ国内カルバ、フジェイラ国内フジェイラ、ビドゥヤの調査〕

1993年に開始されたイギリス人カール・フィリップスによるカルバの発掘調査によって、先史時代の墓が発見された。幅広い潤川内の大小の石が堆積する平坦面に、地表から墓群の存在が推定できるものもある。この調査によってアラブ首長国連邦内のオマーン湾岸遺跡が発掘されたことになる。近くのカルバの農園内では12世紀頃のスグラヒアト数片がカール・フィリップスやシャルジャ博物館のイッサによって採集され、イスラーム陶器も無視されていたわけではない。しかし、陶器片が採集されても住居などの存在すなわち遺跡は不明であった。

フジェイラ砦の修復工事が1990年代末に進み、オーストラリアのシドニー大学チームにより砦内にトレンチが入れられ、採集された炭片が測定された。その結果砦は17世紀頃まで遡るといふ説が生まれた。この地域最古という伝承があるビドゥヤモスクの外壁際にもシドニー大学チームがトレンチを入れ、数十点の陶器片が出土している。モスクは山際の平坦地にあるが、裏山には砦が築かれ、砦のある山斜面で住居が発掘された。これらの調査は小規模であり、発掘報告書は刊行されていない。

〔第5期の調査・シャルジャ及びフジェイラ国内の調査〕

日本人佐々木によるシャルジャ首長国内の考古学調査は、1994年3月に現地調査が始められた。調査目的は、オマーン湾岸のイスラーム時代の港湾都市遺跡を発見することであった。私たちはペルシア湾岸の調査を1987年から開始し、14世紀後半から16世紀にかけての港湾都市遺跡ジュルファール等を発掘した。多くの貿易品が出土し、この地域の14世紀後半以降の研究資料を入手した。関連調査としてホルムズ海峡からペルシア湾を出てオマーン湾岸の遺跡を調査することが必要となっていた。ペルシア湾岸とオマーン湾岸では出土品の様相が違ふ可能性もあり、それはポルトガルなどの海域支配のありかたと関係していることも予想された。また、10世紀以降14世紀前半以前の研究資料が当該地域に少ないため、その時代の遺跡を発見することが最初の調査目的になった。オマーン湾岸には私たちも1987年から毎年訪れていたが、本格的な調査が開始されたのは1994年であった。

1993年7月、シャルジャ首長国古文化財庁長官ナスル・アル・アブーディ氏と会見し、オマーン湾岸イスラーム時代の港湾都市遺跡あるいは交易拠点都市遺跡の調査を実施したい旨を口頭で申し出た。同年8月、同氏に許可願文書を送付し、9月初めにシャルジャ首長国から公式の調査許可証が日本に届いた。その後、オマーン湾岸の遺跡踏査や発掘調査を実施した。同時にペルシア湾岸のジュルファール、ハレイラ、ジュメイラなどの遺跡発掘を継続し、サウジアラビア、オマーン、イエメン、イラン等の周辺国関連遺跡を訪れ、遺跡及び出土品研究等を科学研究費国際学術研究(1994-1996,2000-2004,2005-)、三菱財団(1994-1995)、鹿島財団(1998-1999)、西田記念東洋陶磁史研究助成基金(2000-2001)等の助成金補助を利用して実施した。周辺関連遺跡研究成果はロンドンやオクスフォード、マスカット、アブダビ、シャルジャ等で開催された学会や研究会で研究発表した際に情報収集した。オマーン湾岸現地調査実施期間は1994年3-4月、1994年11月～12月、1995年11月～1996年1月、1997年3月～4月、1997年7月、1997年12月、1998年12月～1999年1月、2000年4月～5月、2000年12月～2001年1月、2001年4月、2001年9月、2001年12月～2002年1月、2002年4月～

5月、2003年3月～4月、2003年8月、2003年12月～2004年1月、2004年4月～5月、2004年12月～2005年1月である。第5期の成果については遺跡ごとに以下に述べる。

### 3. オマーン湾岸の歴史的背景

インド洋を航海してきた船舶はオマーン湾岸からホルムズ海峡を形成するムサンダム半島・岬を廻ってペルシア（アラビア）湾に入る。しかし、狭く岩礁の多い海峡を通過し、しかも海賊が出没する海域であったため、航海上の危険がかなり多かったという。そのため、オマーン湾に沿う海岸から上陸し内陸交通路を通ることが一般的であったと言われる。この交通路を使えば山岳と砂漠に接する比較的よい気候に恵まれ農業を営んだ地域に住む人々に物資を供給し、その産物を運び出すにも便利であったと思われる。沿岸地域にはペルシアの影響が強かった、すなわちイラン人が居住しイランの産物が流通したといわれる。ペルシアの政治的支配が続くことが多かったようだが、内陸部ではオマーン人が独立しているという考えもある[Ross 1874,p.118]。ただし、その実態は文献史料が少なく、考古学調査では人種問題の解決が難しく、不明なことが多い。

この地域の港町に関する歴史地理的な知識はきわめて限られている。調査対象としている遺跡についての情報は文字資料が少ないこと、わずかに残るアラブの地理学者の記録は地名が出てくる程度であること、記録された地名が現在はどこに当たるかを知ることさえ難しいこと等が、研究を困難にしている。しかし、考古学資料は断片的ながら増加していることから、遺跡と文字資料の組み合わせによって、この地域の歴史的背景を推測することは可能である。

アラブ以前の文字資料では、ストラボン『地誌』、『エリュトラ海案内記』（1世紀）、プリニウス,Pliny, Periplus『博物誌Natural History』（77AD 以前）、プトレマイオス『地理学』（2世紀）がある。この地域に関連するかもしれない町名がいくつか残り、ペルシア湾で真珠が採取されたことがわかる。これまでの研究によっても、現在どの場所に当たる町かを知ることが難しいが、それらの町は海岸の港町・貿易センターであったろうと私を含めて研究者の多くが推定している。地名だけでは遺跡と関連させて利用することが難しい文献ばかりである。プリニウスはオマナOmanaと呼ばれた港の位置は、ホルムズ海峡から東へ6日の航行にあるイラン側にあるという。しかし、Pliny the ElderはOmanaの位置をホルムズ海峡の西でアラビア側という。『エリュトラ海案内記』にはペルシア湾の口を6日間沿岸航行すると、そこにこのオマナがあるという[薮 1997]。オマナの位置についてはイラン側とアラビア半島側、ペルシア湾内とオマーン湾側の4カ所に分かれる。ホウラニHouraniはソハールSuharかマスカットMasqatあるいは他のオマーンUmanの港であったろうと推定していたが[Hourani 1951 p.17]、その後も多くの研究者がこの問題についてさまざまな意見を述べ[Potts 1990]、最近では考古学発掘の成果からペルシア湾内アラビア半島側の紀元後1世紀にほぼ限られる短期間の都市エド・ドゥールad-Dur遺跡を、発掘したポッツやヘリック等がオマナの有力候補と言う[Haerincx 2001]。最新の遺跡調査の成果と周辺環境、及び諸文献が紀元後1世紀頃の情報を記載しているとすれば、きわめて妥当であるがまだ確定ではない。当時のオマーン湾岸のイラン側はパルティアに属し、ペルシア湾側の北部も同様であったようである。プリニウスはゲルッハGerrhaという大きな町があること、ムサンダム岬近くのAcilaという町はインドへ向けて出航する港であると述べている。ドゥ・カルディはElder Pliny the Elderが述べるインドへの出航地Dabanegoris regioは、ディバDibba かもしれないと推定している[de Cardi 1971 p.229]。推定理由は述べていないが、インドとの貿易を行うDabaで始まる町名は現在のディ



バの可能性が高い。2004年夏にヘレニズム期の墓がディバで発見されメソポタミア緑釉瓶等が出土し、ディバは紀元後1世紀頃にも拠点的な町であった可能性がある。2004年の遺跡踏査でもディバの農園内遺跡から14～15世紀の中国青磁や15世紀のミャンマー青磁、中国染付や土器片を採集し、ディバの遺跡状態を推定できるようになりつつある。

アラビア海からオマーン海岸に至りその後、陸路を経てペルシア湾に出るか、陸路を通らずにムサンダム半島を回りホルムズ海峡からペルシア湾に入るか、この2種類の交通路が最近まであった。インド遠征から戻るアレクサンドロス軍の船が、この2本の交通路のどちらを選ぶか論争していることが記される[大牟田 1996]がこの交通路の文献に見える最初と薮は言う[薮 1998]。

アラビア半島の特産品は一般に馬、真珠、香料などと言われる。このうち馬は『エリュトラ海案内記』にカネー港の支配者への献上品として挙がるから、紀元後1世紀頃から貴重な品として登場したと推定できる[薮 2000]。それから半世紀ほど経つと騎馬兵が活躍しているから、馬が増えていると薮は言う。馬の増加はメソポタミアかイランからの移入が原因と推測されている。ただし紀元前2千年期にはラクダの家畜化が進行しており、アラビア半島ではラクダが馬以前から最近に至るまで一般的に利用されていることも知られる。真珠採取はペルシア湾に限られておりオマーン湾岸での真珠採取記録は見えない。香料はアラビア海沿岸に見られペルシア湾沿岸では育たないが、オマーン湾岸北部地域も香料はなかった可能性が大きい。アラビア半島内の地域差はかなりある。

3世紀からペルシア商人がペルシア湾とオマーン湾を利用するようになったと言われ、ササン朝創始者アルダシール1世の征服がアラビア半島に及んだかどうか問題とされる。バハレン島とその周辺までは征服したがオマーン湾までは征服していないようで、パルティアやササン朝は当該地域の海岸地帯を支配地域としていた可能性があるという[薮 2000]。イスラーム化以前はアラブ人とペルシア人の入り交じる地域であったようで、ネストリウス派キリスト教も広がっていた可能性がある。ペルシア湾ではアブダビ首長国のダルマ島のキリスト教会跡がイスラーム時代に入った頃のもっとも東方における発見となることがアブダビの考古学調査で判明した[King 1998]。

アラビア半島を1年で巡回する定期年市があり、その起源は6世紀初頃で、ディバにはシンド、ヒンド、中国からの商人や東西の人々が来て、ジュランダールが10分の1税を徴収したという[医王 1996]。オマーン湾を含む地域の商業の発達と交通路の整備の状態を知る手がかりとなる。ジャヒリーヤ時代の暦月はイスラーム暦と異なり、季節と密接な関連をもち、新年は春分か4月に始まり、ディバの定期年市は第7月だから今の10月にあたり、北東モンスーンの吹き始める頃でインドからオマーン湾岸に商船が来る時期であり、ディバの定期年市はインドから来航する貿易船に合わせていたと推定できる[薮 2000]。

この地域の中心的な地域あるいは都市は、古代はオマナ、イスラーム時代に入るとジュルファールであった。オマナはその位置についてもさまざまな説があり、エドゥ・ドゥールとすれば紀元後1世紀に限られる。いくつかの時代の異なる町がオマナと呼ばれたかもしれない。アッバース朝頃のジュルファールは現在ジュルファール遺跡と呼んでいる14-16世紀の港町と異なる場所であったことも判明している。ヨーロッパの印刷地図に現れるジュルファールは、地図が刊行された当時には存在していなかったことも判明している。紀元一千年紀及び二千年紀のオマーン湾岸の具体的歴史は不明瞭であり、もっぱら遺跡の発掘成果に頼ることになるが、地勢や環境から見てもインド洋貿易と沿岸漁業、農牧業に頼る生活が繰り広げられ

ていたと推定できる。

1492年、ベネチャやエジプトと紅海の香料貿易の支配権を争っていたポルトガルがインドに到達すると、新たなインド洋貿易段階が始まった。グジャラティやアラブの商人が活躍していた海上貿易をポルトガルが侵略し始めたといわれ、16世紀初頃インド洋に進出したポルトガルによりペルシア湾やオマーン湾の主要な港が征服されていった。アラビア側からではなく、来訪者側の記録が散見されるようになる。

16世紀初めのバティナ海岸の状況はつぎのように述べられている[Albuquerque 1875 II,p.99]。ポルトガル船がバティナ海岸を帆走しているとき、ポルトガルの司令官Affonso d'Albuquerqueはすべての港という港を必ず襲った。多くの場合、港の船舶ばかりでなく街そのものも破壊した。漁民の葦家や網を焼き払い、デーツ園を切り倒した。ポルトガルが去ったとき、立っている建物は一つもないほど、町は徹底して焼き払われた。コールファッカンKhawr Fakkanに住んでいたグジャラティGujerati商人の集団は、町が襲われる直前に荷物を持ってなんとか逃げることができた。しかし、その他の住民は、男、女、子供を問わず殺されるか、または抵抗の悲惨な結末の見せしめに耳と鼻を切り取られたという。16世紀初頃、バティナ海岸のすべての港町は悲劇的な大惨事によって廃墟になり、復興は困難をきわめたことが推測できる。このため、バティナ海岸では中国陶磁器の発見が少ないのかもしれないとドゥ・カルディは述べた[de Cardi 1970 p.292]。現在でも16-17世紀の中国陶磁器が遺跡から発見される量は極端に少ない。

1514年、ついにペルシア側の拠点港湾都市ホルムズがポルトガルに屈伏し、次いで湾内の貿易港バハレンが1521年に支配下に入る。こうしてポルトガルはアラビア海貿易の支配者になり、貿易の拠点となる港町に砦を築いていったという。ジュルファールもこの頃ポルトガルによって征服され、要塞が築かれ税関が置かれたという。ポルトガルはインド洋の東側では1511年にマラッカを支配下に置き、香料貿易を独占しはじめ、1557年にマカオに拠点を設けた。16世紀後半にインド洋西側での中国陶磁器やその他の物資流通に果たしたポルトガルの役割は大きかったであろう。しかしオマーン湾岸遺跡からの出土量は少ない。ポルトガルが16世紀にペルシア湾・オマーン湾岸地域を支配するようになって、その影響範囲は砦を中心とする地域に限られたと推測できる。そのため、ポルトガルの文献にアラビア全体が記録されることは少なかったといわれる。また、オマーンに対する都市民の抵抗運動で記録類が焼かれたことによるとも推測されている[Ross, 1874]。

湾岸地域にはポルトガルの後にオランダ、そしてその直後にイギリスも到来した。いずれの国も貿易利権の獲得を目指していた。町が完全に無いという状態ではなく、資源もあったと推定できる。1585年にイギリス人商人たちがホルムズに着いたが、競争相手のポルトガルはそれをスパイ行為とみなし、すぐに彼らを投獄した。しかし1600年、ペルシアはイギリスに貿易権を与え、新たに創設されたイギリスの東インド会社はペルシアのバルチスタン海岸に貿易の拠点を設けた。イギリスの貿易船はポルトガルの攻撃を受けるようになるが、1622年ペルシアとイギリスは連合してポルトガルをホルムズから追い払い、イギリスはそこに駐留し、後に新港のバンドル・アッバスへ移る。

16世紀末には各地でポルトガルの乱暴な行動が現地民との間に度重なる紛争を巻き起こした。ポルトガルの支配に対するアラブ人の抵抗も続いていた。ジュルファールもホルムズ側に付こうとしていた。それに気付いたポルトガルは、1621年大モスクから街を攻撃し、要塞を破壊し、ポルトガルの小部隊が残された[Andrada 1930 p.51-2]。1633年ジュルファールはオマーンの軍隊によって解放され、ポルトガルは終に東ア

ラビアの拠点マスカットから追い出された。ポルトガルが去った後の17世紀後半以降の中国陶磁器も遺跡からほとんど採集されないのは、オマーン湾が海賊の略奪場所になったため住民が陶磁器を輸入する量が少なかったとも推定できる。またはオランダも多くの陶磁器を西に運んだが、その船舶がアラビア半島各地に寄港することはなく、南の喜望峰を廻ってヨーロッパに向かったためかもしれない。こうした推定の歴史的事態は発掘を含む遺跡調査によって明らかになる。

### 遺跡とその周辺の状況

ディバDIBBA, Diba, Daba, Doba, Dvbo : オマーン湾の西北隅のくびれ部湾内に位置する港町がディバであり、ムサンダム半島の東側付け根にあたる。これより先のホルムズ海峡まで町は存在しない。サンスクリットの島はdvipaであるが、インド人が名付けた町名かもしれない。ただしDibbaには島がない。ホルムズ海峡に近い港なので島のように見えたのであろうか。ここから山越路はマサヒMasafiに通じる。山は灌木がまばらに生える程度で、小石や岩が露出している部分と、泥や砂で覆われた部分が見られる。遠距離航海に積み込む食料と水の補給のためには地理的に好適な場所である。ディバもインドへ向かう船舶が船出し、ペルシア湾に入る船舶が停泊する港の一つであったろう。町の南東側は海岸に山が迫り、海岸を通る道ができたのは最近のようである。西側の山内には谷部に多くの路が走る。ムサンダム半島の東西、オマーン湾岸とペルシア湾岸にそれぞれ位置するディバDibbaとジュルファールJulfarの間は徒歩で山越えすると一日行程の距離である。西側に山を越えるとアル・カットal-Khattの南側に出る。南に下って西に出るとマナーマの南側に出る。陸上交通路で内陸部に物資を運ぶ場所としても好適である。ディバの北側にあるムサンダム半島のルース山脈Ru'us al-JabalにはシーフーShihuh族が住み、山にも海岸にも陸上の道はなかった。

P.B. de Resende, *El Livro do Estado da India Oriental*[British Museum Sloane MS.197, fol.149-150]によると、ディバの湾岸には三つに分かれた城壁に囲まれる家々が並び、城壁の外にはナツメ椰子樹園が描かれている。中央には方形石作りの小さな城が位置している。壁は二重になり、上を歩ける強固な壁によってつながる四隅の塔には大砲が配置されている。司令官の住む区域に加えて、教会、倉庫、井戸があると、ドゥ・カルディは図を読み取っている[de Cardi 1971 p.233]。豊かな生活と富の存在あるいは支配を想像させる図である。この図と同じような城壁が存在していたことをウィルキンソンが指摘している[Wilkinson 1964]。

コールファッカKHAWR FAKKAN, Corfacam, Corfaqan : 古い町は岩山の下湾岸平坦部にあった。現在は漁港、観光地として活発な地域であり、古い家も僅かだが残る。現在の町は海岸から続くなだらかな山中の平坦地斜面部に移っている。1529年にポルトガル人Weimar planisphereが作成した地図[A.Cortesao, A.T.da Mota, *Portugaliae Monumenta Cartographica*, Lisbon, 1960, l.pl.40a]にはCorfacanとして載るが、その位置は正しくないという指摘がある[de Cardi 1971 p.232]。

カルバKALBA, Quelba : 1620年に描かれた図には角に稜堡がある石壁で四角形のFortが見える[de Cardi 1971参照, Plan by M.Godinho de Eredia, c.1620; A.Cortesao, A.T.da Mota, *Portugaliae Monumenta Cartographica*, Lisbon, 1960, V, p.1581]。ドゥ・カルディはこの図について次のように述べる[de Cardi 1971 p.233]。内側に面する防御施設は側面が丸くなる壁で拡がっている。小さな丸い塔が漁夫を守るために砂浜に建てられている。北側の高い稜堡には、水漆喰塗りの司令官本部、倉庫らしいもの、30人の駐屯兵が住む藁葺きの泥レンガ建物、そして中庭に井戸がある。多くのFortは門が1つだが、カルバでは門が2つあり、海岸部と陸地側に向いている。

カルバとコールカルバの間にも少し内陸部でワディ・マドハWadi Madhahに沿ってFortが描かれている。1635年の地図に載るカルバのポルトガルFortはほぼ四角形で角に稜堡があることをドウ・カルディが指摘している[de Cardi 1971参照, de Resende, *El Livro do Estado da India Oriental 1646*, British Museum Sloane MS.197]。

コールカルバKHAWR KALBA : コールカルバ付近一帯はマングローブの茂る低湿地サバハSabkhaである。木材資源の少ない乾燥地帯でマングローブは船舶、屋根材、燃料として利用されたであろう貴重な資源である。低湿地周辺の海岸に沿う砂丘上にジュルファールやハレイラと同様の遺跡が存在することを期待していたが、数度の踏査によっても遺跡は発見できなかった。

#### 文献

- Albuquerque, 1875, *The Commentaries of the Great Affonso Dalboquerque, I-II*. Trans. W.de G.Birch, Hakluyt Society, LIII, London.
- Andrada, 1930, *The Commentaries of Ruy Freyre de Andrade*. Ed. C.R.Boxer. The Broadway Travelers Series, London.
- Barbosa, D., 1918, *The Book of Duarte Barbosa, I*. Trans. M.L.Dames, Hakluyt Society, 2nd ser., XLIV, London.
- Bibby, T.G. 1965, 66, *Arabiens Arkaeologi*, Kuml.
- Chang, T'ien-tse, 1934, *Sino-Portuguese Trade from 1514-1644*, Leiden.
- de Cardi, B., 1970, *Trucial Oman in the 16th and 17th Centuries*, *Antiquity*, 44; 288-295.
- de Cardi, B., 1975, *Archaeological Survey in Northern Oman, 1972*, *East and West*, 25-1,2; 9-75 de Groeje (ed.).
- de Cardi, B., 1877, *al-Muqaddasi, Kitab ahsan al-taqasim*, (*Bibliotheca Geographorum Arabicorum*, III), Leiden.
- de Cardi, B. & Doe, D.B., 1971, *Archaeological Survey in the Northern Trucial States*, *East and West*, 21-3,4; 225-289.
- Haerincx E., 2001, "Archaeological research at ed-Dur, a large coastal site at Umm al-Qaiwain, U.A.E. of the 1st. c. A.D." 『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』
- Jaubert, P.A. (trans.), 1886, *Geographie d'Edrisi, I*, Paris.
- Locke, J.C. (ed.), *The First Englishmen in India. Letters and Narratives of Sundry Elizabethans*. The Broadway Travelers Series, London.
- Kervran, M. & Hiebert, F., 1991, *Sohar préislamique, Note stratigraphique*, (K.Shippmann, A.Herling & J-F.Salles eds., *Golf-Archäologie*, Buch am Erlbach, 337-348).
- Kervran, M., 1996, *Indian Ceramics in Southern Iran and eastern Arabia: repertory, classification and chronology*, (H.P.Ray & J-F. Salles eds., *Tradition and Archaeology: early Maritime contacts in the Indian Ocean*, New Delhi.), 37-58.
- King, G.R.D., 1998, *Abu Dhabi Islands Archaeological Survey*, Trident Press Ltd.
- Maurizi, V. (Shaik Mansur), 1819, *History of Seyd Said*, London.
- Mundy, P., 1919, *Travels of Peter Mundy*. Hakluyt Society, 2nd ser., XLV, London.
- Piacentiti, V.F., 1992, *Siraf and Hormuz between East and West: Merchants and Merchandise in the Gulf*, *Global Interests in the Arab Gulf*, ed. by Charles E. Davies, 1-28, Externel Press.
- Potts, D.T., *The Arabian Gulf in Antiquity*, Vol.1,2, Oxford, 1990.
- Ross, E.C., 1874, *Annals of Oman, from early times to the year 1728 AD*, *Journal of Asiatic Society of Bengal*, XLIII, pp.111-196, Calcutta. (A Partial translation of the *Kashf-al-Ghumma* by Sirhah bin Sa'id al-Azkawi. This was probably completed shortly after 1728.).
- Wilkinson, J.C., 1964, *A Sketch of the Historical Geography of the Trucial Oman down to the Beginning of the 16th Century*, *Geographical Journal*, CXXX-3; 337-349.
- 医王秀行 1996 「ジャーヒリーヤ時代の偶像神と巡礼行事」 『東京女学館短期大学紀要』 18:1-19.
- 大牟田章 (訳註) 『フラウィオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌』 東海大学出版会, 1996.
- 薮勇造 1997 「新訳『エリュトラエ未案内記』」 『東洋文化研究所紀要』 132:1-30.
- 薮勇造 「文献史料に見る南東アラビア(1)ササン朝支配期以前」 『金沢大学考古学紀要』 24:20-38, 1998.
- 薮勇造 「文献史料に見る南東アラビア(2)ササン朝支配期～イスラーム征服期」 『金沢大学考古学紀要』 25:19-31, 2000.

## 第2章 オマーン湾岸シャルジャ首長国イスラーム遺跡1994年の踏査

### はじめに

シャルジャ首長国オマーン湾岸のイスラーム時代遺跡踏査許可を得て、1994年3月末から4月初めにかけてディバDiba、コールファッカ(Khorfakkan(Khawr Fakkan)、カルバ(Kalba)、コールカルバ(Khawr Kalba)の4地域を中心に遺跡分布調査を実施した。シャルジャ博物館長兼古物文化遺産局長官ナシル・アブディ、イッサ・アバス・フセイン(Eisa Abbas Hussien Yousef)、ナビル・アハマド・アブドラらに世話になった。調査目的は、シャルジャ首長国内オマーン湾岸で、9世紀から16世紀にかけてのイスラーム時代遺跡を発見することである。

調査したアラブ首長国連邦内のオマーン湾岸は、シャルジャ首長国とフジェイラ首長国に属するが、海岸線はいずれも20世紀後半に大幅な変更がなされた。砂浜と低湿地サバハは、道路や家屋の建設のために岩山を切り崩した土砂で厚く覆われている。元の海岸の砂浜は観光地の一部を除いて残らない。現在、元の地表面を見ることは不可能に近い。1994年時点で、それ以前の20年から10年の間に、多くの考古学的遺跡が破壊されたと推定できた。現在の都市内では地表からの観察で遺跡を発見することはできなかった。以下に記す遺跡状態の説明は1994年当時の様相であり、その後建物や道路建設でさらに大きな変貌を遂げている。

### 踏査した遺跡

#### ディバ地区 DIBA AREA

1994年のディバは政治的に3分されている。アルベヤ、ハッサン、バイヤである。アルベヤDiba al-BeyaとハッサンDiba Hassanはシャルジャ首長国に属し、海岸部に近いディバの中心地である。バイヤDiba baiyaは北側はオマーン国に属し、南側はフジェイラ首長国に属する。ディバ海岸線で自然のままの砂浜が残るのは北側海岸のみである。北方からつながる岩山の南裾に接する部分、すなわちオマーン領の海岸である。町の中央部から南側のシャルジャとフジェイラの海岸は人工的に土砂と石で埋め立てられ、道路、公園、住宅になっている。こうした事情からディバ海岸で地表面から遺跡を発見することは難しい状態であった。

#### (1) ディバ・アルハッサン DIBA AL-HISN (Al-Hison, Al-Hassan)

シャルジャ領ディバのワディ中央部で農耕地際の部分には多数の人工の丘が残る。これらの丘は海岸から1kmほど離れ、海拔8-10mのラインに沿って発見される。陶磁器片が容易に採集できる丘は、アルハッサン・スポーツ・カルチャル・クラブとオマーン・シャルジャ国境線の道路に挟まれた部分に位置する。これらの丘の北東側は農耕地と市街地の境となり、南西側はワディと粗い丸石の堆積する地域になる。

丘の平均的な高さは2-3m、直径は20-30mほどである。30を越える数の丘が、1km以上の範囲に点在している。イスラーム時代の墓がいくつかの丘の上、とくに南東部の丘に発見される。家の壁の痕跡は丘の表面に見えない。このことから、丘は最近できたものではないこと、以前の町と農耕地が丘と海岸の間に存在したことが推定できる。丘の表面には18世紀以降の陶磁器片がかなり多く容易に発見できる。初期イスラーム時代の破片は非常に少ないけれども、いくつかは発見できた。12世紀後半の中国青磁碗1片、13世紀前半の中国青磁碗片1片、12-13世紀のスグラヒアト(多彩釉刻線文陶器)1片など、いずれも小片であるが、アルハッサン・スポーツ、カルチャル・クラブの前の丘で採集された。こうした採集品は中世都市ディバが海岸からこの地域まで広がっていたことを示している。

その後数年間でこれらの丘は破壊され、現在は住居が密集している町に変貌し、発掘はできなかった。

(2) 海岸に近いワディ・アルハッサン Wadi al-Hisn, near the coast, Diba

海岸とワディに沿う平坦な地域に小さな丘が一つある。周囲は家となるがこの部分に家はなく、新しい墓が丘の周りに造られている。丘の上から陶磁器片と土器片が発見された。石壁の痕跡が地表面に見られ、多くの珊瑚の塊と貝混じり石が地表面に掘り出されている。これは、古い家が地下に埋もれていることを示している。ここで発見された多くの陶磁器片はかなり新しい年代を示しているが、中国青磁2片は注目に値する。1片は14世紀前半の青磁鉢片である。他は14世紀の青磁盤片で、内外面に刻線と劃花による蓮弁文が描かれている。これらの採集品は、中世都市ディバが海岸に沿ってポルトガル砦付近からこの地域まで広がることを示している。

(3) アルガラビア AL-GHARRABIYAH, Diba

ワディの中で、現在の家と農耕地の近くにいくつかの丘がある。泥レンガ壁の痕跡が地表面にまだ残る丘の上には、多くの施釉陶器と土器が散らばる。これらの陶器の年代は、主に19-20世紀であろう。

コール・ファッカ KHAWR FAKKAN

新しい町が山際の斜面上に最近建設され、港の近くの古い町は廃墟になった。しかし、人は住まないが、古い家並がまだ港に近い海岸地域に残る。港に近い地域は、地勢的には中世の港町として良い位置を占めている。遺跡は現代の港の裏手にあたる廃墟となった古い家並の地下に埋もれているに違いない。

(4) コール・ファッカンの廃墟となった古い町 RUINED OLD TOWN OF KHAWR FAKKAN

廃墟となった町の南地区は、最近平坦にされ、家屋の基礎が地表面に残る。石積み壁基礎は最近廃墟となった家よりも古いが、その両方とも地表面に痕跡を留める。この地域から採集された陶磁器の主な年代は、19-20世紀である。

(5) 砦丘 FORT HILL between the port and the ruined old town of Khawr Fakkan

小さいが急な丘が、港と廃墟となった古い町の間にもそびえる。1968年に撮影された写真には、一基の塔が丘の上に見られる。現在、塔はない。丘の上と下の廃墟となった古い町では、出土品が少し違う。18-19世紀の陶磁器片が主に採集できる。しかし、17世紀以前の陶磁器が混じる可能性もある。多くの青色釉と灰色釉の陶器碗が丘の上に散らばるが、丘の下の地表面からはこの種類の陶器が採集できない。

カルバ KALBA 地域

現在のカルバ町は以前サバハSabkhaであった地域とワディで石が堆積した地域に広がっている。サバハの上に山から切り出した岩石などを2mほど敷き詰め、その上に現在の家を建てている。現在のカルバ町の中及び町周辺のサバハでは遺跡が発見できない。耕作地帯は現在の町の北側すなわちワディハムの南側に広がっている。古い町跡は耕作地帯の内部にあったに違いない。現在40ほどの小高いマウンドが幅3km長さ200mの範囲にあり、その範囲は海拔8mから9mの間である。小さな破片となった施釉陶器と土器が量は少ないけれどもマウンド表面に散乱している。これらのマウンドのいくつかは以前の耕作地帯のすぐ外側に土砂を盛り上げたものであり、耕作土を取り替える作業が行われたために堆積したマウンドと推定できる。現在はモーター使用の深い井戸を使用するため耕作地帯がより海拔の高い地域まで広がり、これらマウンドは耕作地帯の中間部に位置している。最近の耕作地帯の高い部分は海拔10mのラインとなった。しかし高い部分の耕作地帯は塩水を汲み上げるためにナツメヤシが枯れ始め、農園が荒れ始めている。

農園が造成される時、一般的には地表の小石混じり土は1mほど取り除かれる。次いで新しく運び込んだ土砂がそこに埋められる。多くのマウンドは地表面の小石混じり土を農園内から農園周辺に移動したときにできる。こうしたマウンドのいくつかは居住地の土砂堆積の可能性があり、住居を内部に含む遺跡のマウンドがある。

(6) アル・カシミ家の古い家跡 HOUSE OF SHEIKH SAID BIN HAMAD AL-QASIMI

アル・カシミ家の廃墟となった家が海岸に沿って、カルバ岩の向かいに位置している。家基礎の部分の周辺は、壁基礎を発見し修復する目的で掘られている。採集されている陶磁器片、ガラス片、青銅片、鉄片などすべての出土品は、19-20世紀の製品のものである。この家に沿う海岸は、以前スークがあったというが、いまは海岸道路に沿う緑地帯になる。古い町はこの家の近くの海岸に沿って建っていたのだろう。

(7) スール・カルバ SUR KALBA

スール・カルバ(カルバの壁)はワディハミの南端と海岸に沿った場所に位置する。この地域には、地勢的・環境的に見て古いカルバの町が存在したと推定できる。しかし、現在の町中に砦や街壁は残らない。表面調査では遺跡の場所が不明である。

(8) スール・カルバ西側のワディ内 West of SUR KALBA in Wadi

スール・カルバ町の西側にあたるワディハミ内の紀元前の石積み墓地群の近くで、スグラヒアトが数片、イッサ・アッバス・フセインによって採集された。陶器を使用した遺跡の場所は不明である。

(9) カルバ農耕地域A丘 KALBA GARDEN, Mound A

カルバ農耕地域A丘には二つの丘がある。それぞれ100mほど離れている。北丘は4mほどの高さがあり、径40mほどの方形丘である。南丘は2.5mほどの高さで、径は15mほどである。無釉土器のクッキングポットや施釉陶器が丘上で発見された。

(10)カルバ農耕地域B丘 KALBA GARDEN, Mound B

カルバ農耕地域B丘は二つの丘からなる。南北の丘は20mほど離れている。北丘は4.5mほどの高さがあり、径は40mほどである。南丘は高さ3.0mほど、径は30mほどである。南丘では、施釉陶器片が最近の中国陶磁器片とともに発見された。北丘では施釉陶器が発見されなかったが、無釉の土器片は南丘よりも多く散布していた。

(11)カルバ農耕地域F丘 KALBA GARDEN, Mound F

カルバ農耕地域F丘には、10以上の小丘がある。イギリス人カール・フィリップスが発掘している丘では円形に広がる厚い石積壁が発見され、先史時代の神殿と推定されている。無釉の土器が大量に採集されている。その周辺には最近のものとも推定できる水路や水を分ける土手状施設が見られる。

コールカルバ KHAWR KALBA 地域

最近廃墟となったコールカルバ町跡周辺には砂州とサバハが広がる。町跡内には一辺40mほどの平面方形の砦が残り、周囲四隅の4カ所に塔があり、海側に入出口がある。廃墟となった町跡内には土器や施釉陶器の破片が落ちており、町跡の南西部でも発見される。南西部のクリークに沿う地域は最近になって平坦にされたように見える。町跡の東南部には砂州あるいは島がある。十年以上前にクリークを掘り下げたときの砂と小石が砂州の当時の地表面上に1mから2mほど堆積している。現在は砂州あるいは島の部分で地表観察によって遺跡を発見することは不可能である。町跡の南方はサバハとクリーク、マングロー

ブが広がり、遺跡はないと思える。踏査による地表面観察から、遺跡は現在の農耕地と現在の町が建設されている地域にあったと推定できる。

(12) コールカルバ砦 KHAWR KALBA FORT, old Khawr Kalba town

最近になって廃墟となったコールカルバ町の海岸に近い部分に位置する砦である。大きな方形の平面形をもち、角に3つの円形塔の痕跡が残る。出入り口は海岸の砂浜に面している。19-20世紀ころの陶磁器片が大量に砦内の地表面に散乱している。

(13) コールカルバ KHAWR KALBA, the section of the southern outside of the ruined town

古い小さな白いモスクがコールカルバの港の近くにある。モスクの南西部、すなわち廃墟となったコールカルバの町の南部に平坦な地が広がる。平坦地は、東が海とクリーク、南西が小さなクリーク、北が最近廃墟となった古いコールカルバ町に囲まれている。地表面は平坦で海拔2~3mである。家の泥壁の痕跡が、二百メートル四方の範囲に見える。18世紀以降の陶磁器、とくに19-20世紀の破片が地表面に散乱している。青釉下黒彩陶器、刻線文土器、それに少数の中国染付を採集した。

### 採集品

1994年踏査で採集した陶磁器及び数点のガラス・バングルを紹介する。オマーン湾岸イスラーム時代遺跡踏査で採集された遺跡ごとの陶磁器種類を表に掲載しその説明を以下に記す。採集時に比較資料はほとんどなく年代や産地は不明なものが多い状態であったが、採集日に分類整理と写真撮影をした。採集品はシャルジャ首長国国立考古学博物館に保管している。その後の調査で研究資料は飛躍的に増加したが、1994年踏査資料は研究史の上でも重要であるため、報告する。

- 
1. Blue-green glazed ware 青緑色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Jar. Applied pattern. 9th-10th century.  
Sgrafiato 刻線文多彩釉陶器, Grey/pink fabric ピンク色+灰色素地, Bowl. Interior; incised line decoration. Opaque white/yellow glaze over pinkish slip. Exterior; unglazed.
  - Sgrafiato 刻線文多彩釉陶器, Red fabric 赤色素地, Bowl. Interior; Dark brown and yellow colour glazes remain. Incised under-glaze. Exterior; dark brown glaze is upper part, unglazed lower part.
  - Grey glazed ware 灰色釉陶器, Grey fabric 灰色釉, Bowl, dish. Exterior; incised lotus design, incised line decoration. Interior; incised decoration. South-east Asia?.
  25. Yellow glazed ware 黄色釉陶器, Red fabric, Bowl. Interior; black decoration. Exterior; no glaze.
  2. Transparent blue and grey glaze 透明、青色+灰色釉, yellow fabric, Bowl/Large bowl. Interior; painted blue glaze. Underglaze Black/purple(Manganese) line decoration. Exterior; Grey glaze, lower parts no glaze.
  3. Brownish Yellow glazed ware 茶黄色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Bowl/Large bowl. Interior and Exterior; monochrome colour glazed.
  24. Red glaze 赤色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Bowl. Interior; yellow drawing on Red colour glaze. Exterior; no glaze/red glaze/Brownish yellow glaze.
  4. Yellow/grey/brownish Green glazed ware 灰色緑釉および黄茶色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Bowl/Large bowl. Interior and Exterior; monochrome colour glazed.
  5. Blue glazed ware 青色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, small Bowl. Interior and Exterior; monochrome colour glazed.
  - Light Blue glazed ware 淡青釉陶器, Grey sandy fabric 灰色砂素地, Large bowl.
  6. Dark green glazed ware 暗緑色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Bowl. Interior; Incised wavy decoration, or no decoration.
  21. Light green glazed ware 緑色釉陶器, Yellow fabric 黄色素地, Bowl. Interior and Exterior; monochrome colour glazed. no decoration.



7. Blue/green glazed ware青緑色釉陶器, Yellow/pink fabric黄色・ピンク素地, Bowl/Large bowl, vase. Interior; monochrome glazed. Exterior; unglazed.  
Blue/green glazed ware青緑色釉陶器, Pink fabricピンク素地, Bowl/Large bowl.
8. Green glazed ware緑色釉陶器, Red fabric赤色素地, Bowl. Interior; monochrome glazed. Exterior; unglazed.
9. Green/grey glazed ware緑色+灰色釉陶器, Red/grey fabric赤色+灰色素地, Bowl. Interior and Exterior; monochrome glazed.  
Green glazed ware緑釉陶器, Grey sandy fabric灰色砂素地, Jar. Exterior; green colour glazed. Interior; grey colour glazed.  
Green glaze on white slip緑釉陶器, Red fabric赤色素地, Jar and Bowl.
10. Olive Green (brown+pink+grey) glazed ware灰茶褐色釉陶器, Red/grey fabric灰色+ピンク色素地, Bowl/Large bowl. Interior and Exterior; monochrome glazed.
11. Brown black glazed ware黒褐色釉陶器, Grey fabric灰色素地, Large bowl. Interior; monochrome glazed. Exterior; lower part, unglazed.
12. Brown glazed ware茶色釉陶器, Red/grey fabric赤色・灰色素地, Large bowl. Interior; monochrome glazed. Exterior; lower part, unglazed.  
Reddish Brown glazed ware紅茶色釉陶器, Red fabric赤色素地, Bowl.
- Whitish grey glazed ware with green line白灰色釉陶器, Red fabric赤色素地, Bowl. Interior; painted green line. Exterior; no glaze.
13. Painted red earthenware赤色彩文土器, Coarse pink fabric with white & black inclusions粗いピンク色素地, Jar. Interior; no decoration. Exterior; cross decoration. Wadi Haqir ware?  
Painted red earthenware with white slip赤色彩文土器. Coarse pink fabric with white & black inclusions粗いピンク色素地, Jar/vase. Interior; no decoration. Exterior; Line decoration on white slip. Wadi Haqir ware?
14. Painted red earthenware赤色彩文土器, Coarse and dark grey fabric with white & black inclusions粗い灰黒色素地, Jar/vase. Interior; no decoration. Exterior; vertical lines and others. Wadi Haqir ware?  
Painted red earthenware赤色彩文土器, Pink/yellow fabricピンク・黄色素地, ever.
23. Painted red earthenware赤色彩文土器, Pink fabricピンク色素地, Jar/vase.  
Painted black earthenware黒色彩文土器, Pink fabricピンク色素地, Jar/vase/ewer.
15. Earthenware無釉土器, Coarse Red/Grey fabric with white & black inclusions粗い赤色/灰色素地, Jar, cooking pot, lid of pot. Interior; no decoration and orange colour. Exterior; no decoration and grey or blackened colour. Wadi Haqir ware?  
Earthenware無釉土器, Coarse red/grey fabric粗い赤・灰色素地, Jar. Exterior; incised/plane.
16. Incised earthenware刻線文無釉土器, Fine pinkish red fabric緻密なピンクがかかる赤色素地, Jar/Vase. Interior; no decoration. Exterior; Incised line decoration.  
Earthenware無釉土器. Fine pinkish red fabric緻密なピンク・赤色素地, Jar/vase?. no decoration.
17. Incised and combed earthenware with white surface刻線文無釉土器, Fine pinkish red fabric緻密なピンクがかかる赤色素地, Vase. Interior; no decoration. Exterior; Incised line and combed dots decoration.  
Earthenware with white surface無釉土器, Fine pinkish red fabric緻密なピンクがかかる赤色素地, Vase. Interior and Exterior; no decoration.
18. Incised and combed earthenware with white surface刻線文無釉土器, Pinkish red fabric with yellow sandy inclusionsピンクがかかる赤色素地, Jar/Vase. Interior; no decoration. Exterior; Incised line and combed dots decoration.
19. Earthenware無釉土器, whitish grey fabric with large black inclusions黒粒混じり灰白色素地, Jar. Interior and Exterior; no decoration. brownish coloured.  
Earthenware無釉土器, Coarse yellow fabric粗い黄色素地, Jar/vase. Exterior; Incised cross and line decoration. Interior; no decoration.  
Earthenware無釉土器, Yellow fabric黄色素地, Jar/vase.  
Incised earthenware刻線文無釉土器, Yellow fabric黄色素地, Jar/vase.  
Earthenware無釉土器, Greenish Yellow fabric緑色かかる黄色素地, Jar.

Earthenware無釉土器, Light pink fabric with white inclusions淡いピンク色素地, Jar/vase. Exterior; incised decoration. Interior; no decoration.

Earthenware無釉土器, Pink fabricピンク色素地, Jar. Exterior; incised.

Earthenware無釉土器, Red fabric with sand赤色素地, Jar, cooking pot.

Earthenware無釉土器, Grey fabric with sand灰色素地, Jar.

22. Grey-green ware灰緑色釉陶器. Grey fabric灰色素地, Large Bowl. Interior; incised and curved decoration.

Chinese Green ware (celadon)中国青磁. [DIBA-Hsn]: Grey fabric灰色素地, grayish green colour glaze, Bowl. Interior; incised and curved decoration. The latter half of 12th to the early half of 13th centuries. [DIBA-Wadi]: Whitish grey fabric白灰色素地, transparent green colour glaze, Bowl. Exterior and Interior; rough cracks, no decoration. The latter half of 13th to the early half of 14th centuries. Grey fabric灰色素地, dark green/grey colour glaze, large dish. Exterior and Interior; carved lotus decoration. 14th century.

Chinese White ware中国白磁, White fabric白色素地, Box without cover盒子. Interior; white glaze. Exterior; lower part no glaze and moulded lotus decoration. 13-14th century.

Chinese Blue-and-white中国染付. [DIBA-Hsn, KHAWR KALBA,s-w of ruined town]: White fabric白色素地, Bowl. Exterior; band pattern on rim. Interior; no decoration. 17-18th centuries. [DIBA-Hsn]: Whitish grey fabric白色素地, Grayish white colour glaze, Bowl. After 18th century. [KALBA GARDEN, MOUND B,north]: White fabric白色素地, Dish. Interior; cloud pattern. Exterior; no decoration. [KHAWR Fakkan-Fort, KHAWR KALBA,s-w of ruined town]: White fabric白色素地, Bowl. Exterior; ? pattern. 18-19th centuries. Interior; no decoration. Dish. Interior; ? pattern. 18-19th centuries. [KHAWR Fakkan-Fort]: White fabric白色素地, Bowl, Dish. 18-19th centuries.

Chinese Cobalt blue glaze中国コバルト青釉磁器, White fabric白色素地, bowl, vase.

Chinese Enameled ware中国上絵磁器, white fabric白色素地, bowl.

Iranian Blue-and-whiteイラン染付, Stone paste fabrics石英素地, Bowl.

Glass Bangleガラス・バングル, twisted. Blue-black colour glass. Round section. Glass Bangleガラス・バングル, Green Applied line, Blue-black colour glass. Triangle section. Glass Bangleガラス・バングル, Yellow and Blue twisted line applied, Light green colour glass. Triangle section. Glass Bangleガラス・バングル, plane, blue-black colour glass.

20. Dark brown glazed ware暗褐色釉陶器, Grey/red fabric灰・赤色素地, Large bowl.

ほぼ同じ種類の陶磁器片を踏査したオマーン湾岸の各遺跡で採集した。ムサングム半島反対側の西側海岸になるペルシア湾岸のシャルジャ市でも同じ種類の陶磁器が建設工事現場から出土している。シャルジャ空港近くのムエイラーMuwlah遺跡からは類似の彩文土器が出土している。シャルジャ市内の修復された古建築の基礎部周辺から大量の陶磁器が出土している。それらはオマーン湾岸の遺跡から採集された陶磁器とほぼ同じ種類である。18～20世紀にはムサングム半島を中心としたオマーン湾岸とペルシア湾岸の両地域で同じ種類の陶磁器が使用されたことが採集品からわかる。これ以前の時代に両地域で陶磁器がどのように使用されたかは遺跡の発掘成果を行って研究を続ける必要がある。

## 結論

1994年バティナ北部海岸における踏査で多くの遺跡を発見した。現在の海岸線、農園、ワディ、山地、町と比較することで、以前の海岸線の位置や遺跡の存在する場所がほぼ推定できるようになった。ディバで採集した中国青磁は12世紀から14世紀のものであり、16世紀以前の町跡を探す手がかりとなる。しかし海岸線の最近の都市整備に係わる工事による変貌は著しく、現代の町と重なるイスラーム時代遺跡の発見は踏査によっては期待できない状態となった。ただし遺跡は厚い堆石土の下に埋もれている可能性が高いため、数メートル下に遺跡がまだ残る可能性は高い。

Table 1 Finds and Sites in Diba, Khawr Fakkan, Kalba and Khawr Kalba, research in 1994.

Ceramics, glasses	Sites															
	1 DIBA, AL-HSN (Hian, Hison, Hissam), mounds	2 DIBA, AL-GHARRABIYAH, mounds	3 DIBA, mouth of WADI near the coast, mound	4 KHAWR FAKKAN, Loleyah	5 KHAWR FAKKAN, Fort	6 KHAWR FAKKAN, Ruined Town near port	7 KALBA Garden, Mound A (North mound)	8 KALBA Garden, Mound A (South mound)	9 KALBA Garden, Mound B (North mound)	10 KALBA Garden, Mound B (South mound)	11 KALBA Garden, Mound F	12 KALBA Garden, Mound H	13 KALBA Garden, Interior garden	14 SUR KALBA, in the middle of Wadi	15 KHAWR KALBA Fort, ruined town	16 KHAWR KALBA, sw. ruined town
01. Blue-green glaze. Yellow fabric	○															
Sgraffiato. Grey/pink fabric	○															
Sgraffiato. Pink fabric																
Grey glaze. Grey fabric	○	○														
25. Yellow glaze. Red fabric	○															
02. Blue & grey glaze with black. Yellow fabric	○	○														
03. Brownish yellow glaze. Yellow fabric	○	○														
24. Red(+Brownish Yellow) glaze. Yellow	○	○														
04. Yellow/grey/brownish Green g. Yellow	○	○	○													
Yellow/grey/brownish Green g. Pink fabric																
05. Blue glaze. Yellow fabric	○															
Light Blue glaze. Grey sandy fabric			○													
06. Dark green glaze. Yellow fabric	○															
21. Light green glaze. Yellow fabric	○															
Blue/green glaze. Yellow fabric																
07. Blue/green glaze. Yellow/Pink fabric	○															
Blue/green glaze. Pink fabric	○		○													
08. Green glaze. Red fabric	○															
09. Green/grey glaze. Red/grey fabric	○															
Green glaze. Grey sandy fabric																
Green glaze on white slip. Red fabric																
10. Olive Green glaze. Red/grey fabric	○	○	○													
11. Brown black glaze. Grey fabric																
Brown glaze. Yellow fabric																
Brown glaze. Yellow coarse fabric																
12. Brown glaze. Red/grey fabric	○															
Reddish Brown glaze. Red fabric	○															
Whitish grey g. with green. Red fabric																
White g. with black. Pink/yellow fabric																
13. Painted red ew. Coarse pink fabric	○	○														
Painted red ew. Coarse red fabric																
Painted red ew. Coarse red fabric. Black																
Painted red ew. Coarse red/grey fabric																
Painted red ew. Coarse red/black fabric																
Painted red ew. white slip. Coarse pink fabric	○															
Painted red ew. white slip. Coarse red fabric																
14. Painted red ew. Coarse grey fabric		○	○													
Painted red ew. Pink/yellow fabric																
23. Painted red ew. Pink fabric																
Painted black ew. Pink fabric																
15. Earthenware. Coarse red/grey fabric	○		○													
Earthenware. Coarse red/grey fabric																
Incised ew. Fine pink fabric																
16. Incised ew. Fine pinkish red fabric																
Earthenware. Fine pinkish red fabric																
17. Incised ew. white surface. F.p.r.fabric	○	○														
Earthenware. White surface.F.p.r.fabric																
18. Incised ew. Pinkish red f.with sand																
19. Earthenware. Whitish grey fabric																
Incised ew. Coarse yellow fabric																
Earthenware. Coarse yellow fabric																
Earthenware. Yellow fabric																
Incised earthenware. Yellow fabric	○		○													
Earthenware. Greenish Yellow fabric																
Earthenware. Coarse greenish yellow fabric																
Earthenware. Light pink fabric	○															
Earthenware. Red fabric																
Incised ew. Red fabric	○															
Earthenware. Red f. with sand																
Incised ew. Red f. with sand	○															
Earthenware. Grey f. with sand	○															
22. Grey-green ware. Grey fabric	○															
Chinese Green ware (celadon)																
Chinese White ware	○															
Chinese Blue-and-white																
Chinese Cobalt blue glaze																
Chinese Enamelled ware																
Iranian Blue-and-white																
Glass Bangle, twisted, blue-black	○															
Glass Bangle, Green Applied line	○															
Glass Bangle, Yel.+Blue Applied line	○															
Glass Bangle, plane, blue-black	○															
20. Dark brown glaze. Grey/red fabric	○															

ディバやカルバの農園内または農園周辺部で小さな低いマウンドを数多く発見したが、そのマウンド地表には土器片が散らばり、施釉陶器片も含まれていた。陶磁器片の年代はイスラーム時代の前中期まで遡るものもあるが、多くは18世紀以降のものであった。どのマウンド内にイスラーム時代居住跡が残るかは不明である。

今回1994年踏査は海岸平坦地を中心とした地表からの観察にとどまり、試掘を行わなかった。この地域で先史時代の遺跡を探すことは容易であり、青銅器時代や鉄器時代の石積み墓は今でもワディ地域では地表に現れている。山斜面にも青銅器時代から鉄器時代の石積み墓が数多く残り、墓内に白骨片さえ見える。しかしイスラーム時代9世紀から16世紀の町跡は現代の町の下に埋もれているようで、地表観察で発見することは難しい。居住跡を含む可能性があるマウンドを試掘すること、あるいはマウンド周辺の平坦地にトレンチを入れることによって、埋もれているイスラーム時代の遺跡が発見できると思われる。オマーン湾岸地域はイスラーム時代全般にわたって、イランやアフリカ東海岸のみでなくインドや東南アジアとの季節風利用の海上交通が盛んであった。ペルシア湾岸との交通もオマーン湾岸の港町にとっては重要であった。ディバ、コールファッカンなどの地域拠点的な港町でトレンチ調査を実施し、イスラーム時代の町跡を発見することが課題となった。

### 第3章 ルリーヤ砦と家跡地区の採集調査・1995,1997年

#### はじめに

1995年12月、筆者はコールファッカン北部海岸に近い小山上に築かれたルリーヤ砦（北緯25°22'46"、東経56°20'46"）とその周辺の住居跡を踏査し、遺物を表面採集した。1994年3月に実施したオマーン湾岸遺跡踏査においてルリーヤ遺跡は未発見であったが、1995年夏にシャルジャ考古学博物館のイッサ・アッバス・フセインはルリーヤ地域を踏査し、石積み区画壁跡、家跡、墓を発見した。家跡はイスラーム時代で、墓は青銅器・鉄器時代であった。1995年12月表面採集では家跡地域、山裾テラス地域から陶磁器片が集められた。採集した陶磁器の多くは18～19世紀頃と推定したが、いくつかの破片は14世紀、あるいは12～13世紀まで遡るものがあつた。イッサは1997年春に再度ルリーヤ地域を踏査して砦の存在を確認し、佐々木は1997年12月に砦の確認調査を行い、小さな丘上にある砦の表面から中国青磁、緑釉陶器、黄釉彩画陶器片を採集して年代等に関する情報を得た。

ルリーヤ砦はコールファッカン町の北側にある小さな岬部分に沿い、北側のルリーヤと南側のコールファッカンの境となる山筋に位置している。西側には険しい岩肌を剥き出しにする山並が続き東側が海となる。派生して東方の海に落ち込む山裾の小丘上に砦が築かれ、砦と海の間を貫く山裾部の北側に広がる平坦面は農園となる。

#### ルリーヤ遺跡の遺構

山から海際まで東西方向に石積み壁が山上に築かれている。ディバからカルバを結ぶ道路が1970年代に山裾のもっとも低い岬の下部をカットし、石積み壁も併せて切られた。石積み壁に沿って建物跡が道路の両側で発見され、山側はA地区、海側はB地区とした。

#### A地区

丘陵の低くなった部分を現在の道が通り、道の山際の50mほど上に小さな独立した丘がある。頂上に、径8mほどの円形の石積みタワー基礎が残る。タワーから数段の小さなテラスが少しずつ斜面を下って築かれる。石積みで段の基礎を作る。道路方向の十数m下の段に、3×4mの長方形ピットがある。珊瑚やBeach Stone をきれいに積んでいる。内側は楕円形に泥プasterを貼る。深さ2mほどか。

タワーから幅1mほどの石積み壁が、海側の丘陵途中の石積みタワーまで連続して延びることが明らかだが、現在は道路の部分は切られているから石積みが残らない。タワーから、コールフアッカンの入江と反対側のルリーヤ全体がよく見える。

## B地区

岩山の裾部は3段ほどの東西に長く狭いテラス状となり、平坦部の上に石積み壁基礎が見える。テラス状の際から農園が始まり、農園とテラス状部の比高差は2~5mである。岩山裾に沿うテラス状の細長い平坦地に家跡石壁が伸びているが、とくにその中央部分に家跡が多い。ただし、農園との境となる平坦地や農園内にも家跡があった可能性はある。

ワディから運んだと思われる大きな丸石が家壁基礎に用いられている。壁基礎は岩上に置かれているようで、堆積土はきわめて薄い。平面が方形の小さな1部屋の家や、部屋数が多くタワーをもつような家もテラス状の上に見える。ルリーヤ地区の農園を含む町跡と推定できる。

## ルリーヤ砦と家跡地区の表面採集品

1994年及び1997年にルリーヤ砦とルリーヤ家跡で採集した陶磁器は年代と種類が異なるため、地区を分けて報告する。

1997年A地区（ルリーヤ砦）採集品。採集した陶磁器片は小袋1つ分である。

黄釉下白化粧土上刻線文陶器。碗、胴部片。Pale pink fabric with white and red inclusions, soft. Interior; yellow glaze on incised white slip. Incised lines appeared black. Exterior no slip and unglazed. Decoration technique is similar with Sgraffiato of the 12th and 13th centuries. Iran. Similar sherd was found from layer 1 of Mound 1, area C, in Jazirat al-Hulaylah.

褐釉陶器。瓶、胴部片。Pale pink fabric with red inclusion, soft. Width of wall is thin. Exterior brown glaze and incised horizontal lines. Interior iron slip. 12<sup>th</sup>-14<sup>th</sup> centuries? Arabia?

白濁釉上緑彩陶器。碗、底部片。Sherd of rough cut concave base. Base diameter 6.5 cm. Yellow fabric, soft. Interior painted green cross lines on white glaze. Spur marks. Exterior unglazed. 12<sup>th</sup>-13<sup>th</sup> centuries. Made in Iran.

黄釉上褐彩陶器。碗、底部片。Fine pink fabric with white and small red inclusions. Base diameter 8.0 cm. Interior brown painted lines on yellow glaze. Exterior unglazed. Foot ring was made by left turn wheel. 13<sup>th</sup> century. 黄釉上褐彩陶器。碗、胴部片。Fine pink fabric with black, red and white inclusions. Interior brown painted line on yellow glaze. Exterior unglazed. 13<sup>th</sup> century.

緑釉下白化粧土陶器。碗、口縁部片。Pale pink fabric, soft. Interior green glaze on white slip. Exterior no slip and unglazed. 13th centuries? Made in Iran?

緑釉陶器。碗、口縁部片。Mouth diameter 20.0 cm. Pale pink fabric with red inclusion, soft. Interior shallow curved line under pale green glaze. Exterior unglazed or peeled off. 13<sup>th</sup> centuries? Made in Iran. 緑釉陶器。碗、口縁部片。Yellow fabric, soft. Interior glaze peeled off. Exterior pale green glaze. 13<sup>th</sup> centuries? Made in Iran. 緑釉陶器。碗、口縁部片。Pale pink fabric. Interior green glaze d. Exterior green glazed upper parts, unglazed lower parts. 14<sup>th</sup> centuries? Made in Iran? 緑釉陶器。碗、底部片。Base diameter 9.0 cm. Rough cut base. Yellow/pale pink fabric with small black inclusion. Interior dark green glazed. Spur marks. Exterior unglazed. 13<sup>th</sup>-14<sup>th</sup> centuries. Made in Iran?

無釉土器。Cooking jar. Sherd of carinated mouth. Red fabric with black and red inclusions. Surface red and inside gray. Mouth diameter; 30.0cm. Incised line on rim. Exterior shallow curved line and polished surface. 13<sup>th</sup>-15<sup>th</sup>

centuries? Pakistan? 無釉土器。Cooking jar. Sherd of carinated mouth. Red fabric with black and red inclusions. Mouth diameter; 30.0 cm. Exterior applied line and blackened by carbon. Pakistan? 無釉土器。壺。Sherd of carinated mouth. Pink fabric with black and red inclusions. Mouth diameter; 16.0 cm. Rim and interior painted red slip. Exterior no slip. Pakistan? 無釉土器。壺。Sherd of carinated mouth. Red fabric with red, black and white inclusions. Mouth diameter; 14.0 cm. Incised line on rim. Pakistan?

無釉土器。瓶、口縁部。Yellow fabric with red, black and white inclusions. Mouth diameter; 14.0 cm. Local? 無釉土器。瓶、把手片。Yellow fabric. Applied decoration.

1994年B地区（ルリーヤ砦）採集品。農園と山裾の間の家跡付近で採集した陶磁器片は小袋1つ分であり、無釉土器が多く施釉陶器は少ない。

緑釉下白化粧土上刻線文陶器・スグラヒアトSgrafiato。鉢、口縁部片。Pink fabric, hard. Mouth diameter; 33.5 cm. Interior incised lines on white slip and underglazed. Exterior without slip and decoration and unglazed. 13<sup>th</sup> century. Made in Iran.

青緑釉陶器。鉢、底部片。Yellow fabric, soft. Base diameter; 12.0 cm. Green colour glaze. Left turn wheel made. Interior green glazed, smooth. Exterior unglazed. 15th century? Made in Iran?

淡緑釉陶器。碗、底部片。Yellow fabric with large black and small red inclusions. Base diameter; 7.2 cm. Left turn wheel made. Interior green speckled glaze. Exterior unglazed. 15th to 17th century?. Made in Iran?

オリーブ緑釉陶器。鉢、口縁部片。Gray fabric, hard. Mouth diameter; 23.0 cm. Right turn wheel made. Interior and exterior glazed thinly and speckled. Rough wheel traces remain exterior surface. 17th or 18th centuries? Made in Northern Oman?

中国青磁。碗、口縁部片。Whitish gray fabric, hard. Mouth diameter; 18.5 cm. Interior and exterior incised lines and glazed. Early half of the 14th century. Made in China. 中国青磁。瓶、底部片。Whitish gray fabric, hard. Ring base diameter; 4.7 cm. Left turn wheel made. Base made used left turn wheel. Vertical nine lines (six lines remain) were put from exterior and made bridge interior. Interior and exterior glazed except ring base. 12<sup>th</sup>-14<sup>th</sup> centuries. Made in China.

中国藍釉磁器。碗、底部片。Grayish white fabric, hard. Ring base diameter; 5.5 cm. Interior glazed transparent, exterior glazed cobalt dark blue. Ring base unglazed. 18<sup>th</sup> or 19<sup>th</sup> centuries. Made in China.

白化粧土上赤彩文土器。瓶、口縁部片。Painted red earthenware, Coarse red/black fabric. Mouth diameter; 12 cm. Exterior painted red on white slip. Interior without slip. Made in Ras al-Khaimah. 白化粧土上赤彩文土器。壺、口縁部片。Painted red earthenware, Coarse red/black fabric with black, red and white inclusions. Jar. Mouth diameter; 21 cm. Exterior painted red on white slip. Interior without slip. Made in Ras al-Khaimah.

無釉土器。壺、口縁部片。Red fabric with small sized inclusion. Mouth diameter; 21 cm. Interior surface rouge and painted red. Only the exterior surface became black.

無釉土器。瓶、口縁部片。Fine pinkish red fabric. Mouth diameter; 17 cm. Interior and exterior both coated with white slip. The ware of this kind has incised decoration on the body.

無釉土器。壺、口縁部片。Coarse red fabric. Mouth diameter; 24.5 cm. Interior coated with whitish slip. Exterior coated reddish slip.

無釉土器。鉢、口縁部片。Greenish yellow fabric with large black inclusion. Mouth diameter; 28 cm. Large black inclusion on the surface.

無釉土器。鉢、底部片。Coarse greenish yellow fabric with red and white inclusions. Base diameter; 8.0 cm. Left turn wheel made. Base made used right turn wheel. There is one small hole in the centre.

無釉土器。小碗、口縁部片。Pink/black fabric. Mouth diameter; 11.5 cm. Carinated rim inside. Mouth of interior and exterior smoothed by fingers. Rough surface under mouth. Local? 無釉土器。碗、口縁部片。Coarse red/black fabric with black and white inclusions. Mouth diameter; 32 cm. Interior surface smoothed by fingers and red colour. Exterior rough surface and black. Local? 無釉土器。鉢、口縁部片。Coarse red fabric with black inclusion. Mouth diameter; 18 cm. Interior painted thin red slip. Exterior rim smoothed by finger. Local? 無釉土器。碗、口縁部片。Coarse red/black fabric with large sized black inclusion. Mouth diameter; 17.5 cm. Interior surface smoothed by fingers and painted red. Exterior rough surface. Local?

## ルリーヤ採集陶磁器の種類

採集した陶磁器は釉、素地、装飾によって次のように分類することができる。主要な年代は13世紀後半から14世紀前半であるが、家跡地区は時代が下るものが多い。

スグラヒアト Incised on white slip and under yellow glazed ware (Sgrafiato), pink and pale pink fabric. 13<sup>th</sup> century. 青緑釉陶器 Blue-green glazed ware, Yellow fabric, harder than Sasanian and Abbasid blue-green ware fabrics. 青釉陶器 Blue glazed ware, yellow fabric. 緑釉陶器 Light green glazed ware, yellow fabric. 緑釉陶器 Green glazed ware, yellow fabric. 緑釉陶器 Green glazed ware, pale pink fabric. 緑釉陶器 Green glazed ware, yellow/pale pink fabric. 青緑釉陶器 Blue/green glazed ware, yellow fabric. 青緑釉陶器 Blue/green glazed ware, pink fabric. オリーブ緑色釉陶器 Olive green glazed ware, red/grey fabric. 褐釉陶器 Brown glazed ware, yellow fabric. 褐釉陶器 Brown glazed ware, yellow coarse fabric. 褐釉陶器 Brown glazed ware, red/grey fabric. 褐釉陶器 Brown glazed ware, pale pink fabric. 黒褐釉陶器 Brown black glazed ware, grey fabric. 黄釉褐彩陶器 Brown painted on Yellow glazed ware, fine pink fabric. 白濁釉緑彩陶器 Green painted on White glazed ware, yellow fabric. 白濁釉黒彩陶器 Black painted on white glazed ware, pink/yellow fabric. 刻線文無釉土器 Incised earthenware, yellow fabric. 刻線文無釉土器 Incised earthenware, fine pink fabric. 刻線文無釉土器 Incised earthenware, fine pinkish red fabric. 刻線文無釉土器 Incised earthenware, white surface, Fine pinkish red fabric. 白化粧土上赤色彩文土器 Painted red earthenware, white slip, and coarse red/black fabric. 赤色彩文土器 Painted red earthenware, coarse red fabric, black surface. 無釉土器 Earthenware, light pink fabric. 無釉土器 Earthenware, fine pinkish red fabric. 無釉土器 Earthenware, pink fabric. 無釉土器 Earthenware, red fabric. 無釉土器 Earthenware, coarse red fabric. 無釉土器 Earthenware, coarse red/grey fabric. 無釉土器 Earthenware, coarse red/black fabric. 無釉土器 Earthenware, yellow fabric. 無釉土器 Earthenware, coarse yellow fabric. 無釉土器 Earthenware, coarse greenish and yellow fabric. 中国青磁 Chinese green ware (celadon), 中国藍釉磁器 Chinese cobalt blue glazed ware.

## 発見された遺跡の意義

コールファッカンのルリーヤ地区の岩山北側裾部テラスで石壁作りの家跡群が発見されたことは、オマーン湾岸地域で発見が遅れていたイスラーム時代遺跡の一つとして資料的価値がある。家跡群の前方は平坦となり、海岸部から農園が広がる。山際の小丘上には砦が発見され、採集資料は限られた年代と推定され、砦構造と生活用具としての陶磁器研究に意義がある。家跡と砦は同じ山際の北側の至近距離にあり、関連する施設とも推定できる。地名はルル真珠に由来すると言われ、地元民は18世紀頃に農園の水供給及び土地所有に関連した争いが遺跡近くであったと記憶している。

ルリーヤ砦はポルトガル侵攻以前に地元民が建てたイスラーム時代の小砦建築と遺跡踏査時点で推定できた、文献や伝承の記録はないようである。ルリーヤ砦の年代は採集した中国青磁から見ると13世紀後半から14世紀前半に限られるようである。オマーン湾岸地域の歴史と出土品を考えるうえで発掘調査に適した遺跡である。

## 第4章 ルリーヤ砦

### 概要

アラビア半島イスラーム時代考古学研究の一環として実施した、アラブ首長国連邦シャルジャ首長国オマーン湾岸における発掘調査の研究報告である。13世紀末を中心とした年代の遺跡と推定でき、砦及び砦内部の構造と機能、出土品の組み合わせと特徴、出土品からみる生活を描き出すことができた。塔を中心とする砦内の生活空間の平面的配置と実態、土器・イスラーム陶器・中国陶磁器を組み合わせた生活用品の実態、新たなイスラーム陶器の編年と型式研究、骨貝殻等の食料残滓から復元できる食生活、等が研究成果として特筆できる。

### 調査目的

1994年以降、当該地域のイスラーム時代遺跡を対象として考古学的踏査を実施し、ディバ、コールファッカン、カルバ等の地域において、インド洋海上貿易研究に適したいくつかの遺跡を発見した。その後の数年間、調査研究の対象としてどの遺跡が発掘に適しているかを現地において検討し、ルリーヤ砦も候補の一つとして何度か踏査と表面採集を行った。その結果、コールファッカン北部ルリーヤ地区に位置する砦の発掘を行うことにした。砦部分の地名や砦名もないため、北側の地域名ルリーヤを砦名とすることにした。

2000年4月から5月にかけての第1次発掘調査では、13世紀～14世紀頃を中心とする砦と推定したルリーヤ遺跡の発掘調査と測量調査を主に行い、併せてディバにおいて遺跡の状態を知るために試掘調査を行うための踏査を実施した。しかし、ディバにおける試掘はオマーン、フジェイラ、シャルジャの3国が市内に入り組む政治的状況から、目的に適う遺跡範囲を選択して試掘を実施することが難しかった。2000年12月から2001年1月の第2次発掘調査では、主要な遺構の確認調査を継続した。2001年9月には現地で出土品の実測撮影等を終了した。

ルリーヤ砦を研究対象として選んだ理由は遺跡の存在した時代である。海上貿易研究を目的としてラッセルカイマ首長国のハレイラ遺跡とジュルファール遺跡をすでに調査し、5世紀から17世紀にかけての資料を得ることができた。しかし、11世紀から14世紀前半にかけては、2つの遺跡を合わせても当該期の適切な資料が欠けていたためである。

### 第1次発掘調査の経過

2000年4月25日、ルリーヤの考古学遺跡踏査と砦測量を開始する。東側の152m山頂には円形石積み塔が残り、いくつかの峰にも同様の塔がある。いずれも内側は円形で、内径3m前後である。外側は円形になるものと、方形になるものがある。山斜面でシャルジャ博物館のイッサは75の墓を発見し、遺体の上に石を積み重ねているのが見える。西側のFortのある山斜面付近でも87の墓を発見した。26日、6時測量及びFort周辺の表面採集を開始し12時に終了する。採集品を持ち帰り、水洗後に実測。27日、Fort地区の表面採集を継続。山上にあるFortへ至る小道を造る。水タンク内に堆積している土砂を上げる。海岸側の山上に点在する塔の位置測定を継続する。29日、Fort地区の表面採集継続。水タンク内堆積土を掘る。水タンクの北側に幅1mのトレンチを設定し、掘り始める。Fortよりも海岸側の山裾に沿った地域で地形測量する。30日、Fort地区の表面採集継続。水タンク内堆積土中に人骨を発見する。一抱えほどの石が周辺に並ぶ。水タンク北側の幅1mトレンチの継続発掘。Fort近辺を1/5000で地形測量。5月1日、Fort地区の表面採集継続。水タ



ンク北側の幅1mトレンチの継続発掘。灰色灰が円形に広がる炉が現れ、黒炭片も残る。Fortを1/200で測量開始。2日、Fort地区の表面採集継続。水タンク北側の幅1mトレンチの継続発掘。ピンク色土の表面になる。その面に径24cm程の穴が3つ並ぶ。ピンク色土は、水タンク表面の漆喰の下に塗られたピンク色土と同じ質である。水タンク内堆積の半分を掘り終わる。底は漆喰が平坦に塗られる。Fortの1/200測量継続。3日、Fort地区の表面採集継続。水タンク北側の幅1mトレンチの継続発掘。ピンク色土表面に、穴3つ、炉3つがある。水タンク内堆積のセクションをとる。平坦面の確認と遺構発見のため、新たに水タンクの西側中央に1m幅のトレンチ、塔から東西ラインのエレベーションを描く線に沿って水タンクテラスに3m幅トレンチを設定し、掘り始める。Fortの1/200測量継続。4日、Fort地区の表面採集継続。トレンチA,Bの発掘。トレンチBで黒灰が広がる炉を発見し、バングル片と魚骨片が出土。Fortの1/200測量継続。6日、Fort地区の表面採集継続。トレンチA,Bの発掘。水タンク内堆積の残り部分を掘り始める。Fortの1/20測量継続。7日、Fort地区の表面採集品がほとんど無くなり、採集を終了する。トレンチA,B、水タンク内の発掘。FortのTowerの1/20測量継続。8日、トレンチA,B、水タンク内の発掘。トレンチAを西側、南側に少し拡張する。トレンチBで灰がまだらに広がり、魚骨やBangle片が混じる。Fortの壁の一部、水タンクの1/20測量。9日、トレンチA,Bの発掘。水タンク内の清掃が終わる。Fortの向かいの山裾にある石壁家の1/20測量を始める。10日、トレンチA,Bの発掘。全体に灰が混じり、広がる部分がある。Fortの向かいの山裾にある石壁家の1/20測量。11日、トレンチA,Bの発掘。灰の堆積する場所が層位の全体に見られる。Fortの向かいの山にある塔及び塔のような遺構を1/20で測量する。13日、トレンチA,Bの発掘。トレンチBで岩盤面にいくつかの穴を新たに発見した。小さな穴もある。トレンチAでは西側下層で鉄製品が出土した。鏝のようである。東側下層では石囲いのHearth 12が発見された。上面は黒灰が広がるが、その直下に石組みがある。南側にも同様の炉がある。水タンクに接して、河原石が積み重ねられ、やや硬くなった粘土が東側に広がる。それに接して水タンクに沿って石組炉が2つ並ぶ。上に黒灰が広がり、下に小さな石が詰まるように見える。周囲にやや大きな石を巡らせる石組炉ではなく、炉の床面に石を敷くタイプかもしれない。Fortの向かいの山裾にあるHouse群の1/20測量を終了する。14日、トレンチA,Bの発掘。トレンチBでは岩盤面に大きな穴を新たに発見した。穴内の堆積土から青銅製コイン状品や中国青磁蓮弁文碗小片が出土したので、他の出土品・採集品と同じ時代である。堆積土の上には炉の一部が広がっていたので、もっとも古い遺構の一つである。トレンチAは最初に3つのピットが発見されたピンク面とそれより少し上の面で発掘を終了した。北側で南北に延びる小石列を発見した。3つのピットや南側の炉群と同じ組になる遺構である。昨日、水タンクに接して発見された河原石群と炉の組み合わせと同様のものである。Fortの東側の山上の塔等の追加測量を終了する。15日、トレンチ内の清掃。トレンチBで新たにPit 12、及びLarge pit 2を発見する。ピットの底は平坦である。トレンチAは清掃後撮影し、ビニールを置いて埋め戻す。表面採集品で分類等が終わった遺物は、北側にあったピットをさらに大きく掘った穴内にビニール袋に入れて納める。上に石を置き土砂をかける。16日、シャルジャ博物館の倉庫に選別後の出土品を置く。表面採集のバングル片16片を許可を得て分析用に持ち帰る。5月18日帰国。

### 第2次発掘調査の経過

2000年12月20日、遺跡で調査の準備をする。21日、6時30分発掘開始。B区北側と南側に発掘区を設定する。水タンク面から塔に上る階段の発掘を始める。上方ほど階段の石段の残りがいい。ガラス・バングル

片が階段面から出土。土器片や貝殻片が少し散らばる。12時30分発掘終了。23日、遺跡にテント設営。Fort地区の発掘調査を継続する。階段は上段から下方の住居面に近い部分まで続く。中段付近は石段の残りが良くない。石段面に付くように、ガラス・バングル片や土器片、施釉陶器片、骨片が少し出土。トレンチの拡張部分の発掘を継続する。発掘している平坦面を中心に、5mのグリッドを組む。トレンチA, B, Cをうまく含むようにして、新たにグリッドを設定し、北側から南側にA, B, Cの順に、また東側から西側に1, 2, 3の順に名称を付け、グリッド名はA1, A2, B1, B2というように呼ぶ。24日、階段の北側半分をほぼ掘り終わる。上方と下方に石段列がよく残る。中央部はやや傾斜が緩くなるせいか、石段列の残りがはっきりしない。下方東側の表面に散乱する石を取り除く。石段の面からガラス・バングル片が数点出土。小さな灰混じり穴があり、炉15とする。柱穴のように見えるものもある。C3で表土の下から炉がいくつか見つかる。赤く焼けた土の上と周りに灰黒色の灰が円形に広がる。4カ所の炉がまとまって発見され、その近くからガラス・バングル片1、中国白磁2片、中国青磁1片、骨片、土器片なども出土した。ゴミが少し散らばっている。25日、C3区の炉はHearth 16,17,18,19,20とする。炉20は赤く焼けた粘土が薄く堆積する。炉19は砂混じりの黒灰が堆積する。17,18も黒灰が堆積する。いずれもほぼ平面形は円形状である。炉16は中央部に丸石があり、周囲にやや大きな石がある。炉に用いた石の可能性ある。階段部分は下方と南側を広げる。26日、ラマダンが本日まで。C3区は表土を掘り下げると、すぐにいくつかの炉が発見される面が見える。D3区は出土品は少ないが、ガラス・バングル片とカーネリアンビーズが出土。すぐに岩盤になる。階段通路でいくつかの石列が発見される。27~29日、ラマダン明けの休み、遺物整理と図面整理。30日、発掘。31日、発掘。C3区、D3区、階段の発掘を続ける。C3区でいくつかの炉を発見する。いずれも平面形は円形か楕円形で、砂混じり灰黒色灰が薄く堆積している。下部は赤く焼けた土の部分もある。炉118内から中国白磁合子片1点出土。表採集品と同じ種類である。D3区は岩盤に近い部分で炉をいくつか発見する。岩盤上の炉は岩が焼けて茶赤色に変色している。他は灰黒色灰が薄く堆積している。階段下方から石内で炉30を発見する。同じ面と思われる石積み壁下で灰黒色灰が厚く堆積した部分がある。炉31と名付けた。炭化材の小破片のような炭化物が多く出土した。2001年1月1日、Tower A, Tower B, Stone construction A, Stone construction B,及びFortの写真を撮影。2日、発掘。House地区を見てくるが今回発掘しないこととする。3日、水タンクからタワー方向に向かってグリッド線に沿ってセクションを描く。C3区から青釉をかけた陶器ビーズ1片が出土。4日、C3区から青銅輪が出土。指輪よりも少し大きい。6日、C3区の斜面際で半円形に石が並び、内部に三角形に小石が置かれた施設を発見。岩盤直上に薄く粘土が堆積し、その上に石が半円形に並ぶ。南側は2列に並ぶ部分もある。半円形内部に三角形に丸石と割石の小石が並べて置かれる。半円形状の石に近い三角形の先端は西南西の方向を指す。半円形はミヒラブ、三角形はキブラを示すと思われ、岩内の礼拝所と推定できる。石を並べただけの簡単な施設であるが、岩内のモスクに代わる場所として使用されたのであろう。7日、北側区画石壁に沿ってHouseがあることが明らかになる。仕切石壁によっていくつかの部屋に分かれる。室内には壁際に灰が堆積し、炉が造られていたことがわかる。C2区、C3区の下層生活面の清掃に入る。岩盤を平坦にし、居住面にしていると推定できる。8日、家跡が北壁に沿ってさらに1室確認される。9日、家と階段を清掃する。下層居住面のPitを出す。パン焼き竈を発見。径74cm。昼頃、雷の後大粒の強い雨。午後も時折雨。10日、道路には水たまりができ、水タンクにも水が溜まる。居住面には泥が堆積し、Hearthの灰などは流れ去った。雨が遺跡内の遺構を消し去る状態

を見る。11日、家と階段の清掃。家の西側外壁崩れの上に石組炉を発見。13日、発掘終了日。シャルジャTVが発掘風景を撮影。全体写真撮影。14日、遺構を保護するため、水タンクを中心に土砂を埋め戻しする。登録品や今後研究予定の出土品を除いて、計量と簡単な分類を行った出土陶器片を砦東南部に新たに掘った穴に埋める。遺構図面の追加修正を行う。15日、シャルジャ博物館に行き、出土品を博物館倉庫に置く。夜シャルジャ博物館で発掘成果について講演。シャルジャTVとGulf newsが取材。発掘レポートを博物館に提出。1月17日帰国。

### 現地における出土品研究

2001年9月4日～16日、シャルジャ博物館にて出土品整理研究を行い、出土品の重量測定がほぼ終わる。2001年12月から2002年1月にかけて、現地において一部の未整理品を実測撮影した。

### ルリーヤ砦の発掘・2000～2001年の成果

#### 遺跡の位置

ルリーヤ砦は、アラブ首長国連邦コールファッカン湾北部のルリーヤ岬に突き出す標高152mの独立した山の西側、海岸から1kmほど西側で峠の低くなった部分に、貼り付いたような標高66.7mの三角錐状の丘があり、その上部を砦として利用している。北緯25°22'30"、東経56°20'42"である。砦頂上の塔からは、北側にルリーヤの居住区、棗椰子畑、海岸がよく見え、南側にコールファッカンの街並みが見える。すなわち、北と南の両側地域からも砦はよく見える。また、東側山に築かれた2つの塔も砦から見えるが、その塔からも砦の全景がよく見下ろせる。居住区ではないが、地域の要となる見張り用砦として2つの塔は恵まれた位置にある。

砦はルリーヤとコールファッカンを結ぶルートの低い峠道を見下ろす山の東側面に築かれている。砦の西側はさらに高い山がそびえている。峠部分は現在、道路建設によって切り通しとなり削られているが、アラブ首長国連邦Sheet 42/80, 1976地図によると、削られる前の峠は標高34mであったことがわかる。削られた後もまだ低い峠となり、道路面の最高標高は25mである。ルートの峠部分に門を作れば、北側のディバと南側のコールファッカン、フジェイラ、カルバなどを結ぶ交通を管理規制できたはずである。砦の東側下を走る道路を海岸側方向に越えると、東西方向に峰をもつ最高標高152mの切り立つ山があり、岩肌が海に接する。この東西方向に屏風のようにそびえる山が北側のルリーヤと南側のコールファッカンを分けている。

#### 遺構

##### 152m山の遺構

152m山の中心的な尾根は東西方向に走り、いくつかの遺構が尾根上に残る。東側の海側から西方向に向かって、方形石囲い(120m)、塔A(152m)、塔B(104m)、方形石室、そして石垣列と続いている。さらにこの線上にあたる小丘上にルリーヤ砦が位置している。塔A、塔Bの両方からルリーヤ砦は全景がよく見え、同時存在の可能性が高い。これらの遺構表面には遺物がない。

##### Tower A(152m)

塔Aは152m山の頂上に築かれている。基礎部平面形は方形で、かなり高く自然石が積み上げられた状態で残る。側壁は垂直になるが、現在はかなり崩れた壁石が塔下部に堆積している。塔内部床は現在高くなり、狭い。塔からルリーヤ砦全景がよく見える。

### Tower B(104m)

塔Bは152m山頂上から西側に少し下った尾根上の斜面に築かれている。標高104m部分に自然石を積み上げ、隅丸方形の基礎部平面形である。塔Aより残る壁は低い。側壁は垂直になり、塔内部床面は外側とほぼ同じ高さである。塔内部のやや北寄り部に大きな石が残る。塔を築いたときにあった自然石がそのまま残るのであろう。塔からルリヤ砦全景及びその内部が斜め下によく見える。

#### 仕切り壁

塔Bの上方には壁がないが、下方には石積み壁がある。尾根上に築かれ、石積み室で途切れる。ここから下方には尾根部分に盛り上がる自然の大石が壁のように続く。さらに下方は再び石積みの壁があり、現代の道路による切り通し部分につながり、石積み壁の存在は不明となる。こうした状況を見ると、塔Bとルリヤ砦を結ぶ尾根上部分には仕切壁があったと推定できる。砦下の低い峠道に門を設ければ、砦から交通路を管理することが容易であり、砦の機能の一つとして仕切り壁は重要となる。

#### Stone construction A

長方形石囲い遺構が152m地点から東側・海側に下った部分にある。尾根上に位置しており、両側は自然地形で高くなり、その間の低くなった平坦部に石列が長方形に残る。平坦部の標高は120mであり、これも自然地形に近い場所に、石列を並べた時点で地面を平坦にならしたのであろう。石列は板状の石を立てており、1枚の石を並べた部分が多い。数個の石を並べた数列になる部分も北側のみに見られる。北東隅に切れた部分があるので、入り口と推定できる。石列はいずれも現在は1段で、壁のように石を積み上げた部分はない。尾根に直行する南北方向が長軸となり、石列を含めると10.25m、石列の内側は9.3mである。東西方向が短軸となり、石列を含めると6.5m、石列の内側は6.2mである。石列の周囲には崩れたような石はない。したがって、初めから石列は1段だけで築かれたと推定できる。石列内部には現在何も残らず、平坦な土が見える。地表面から観察する限り、石列の用途は不明である。囲い込みをした施設と考えるのが妥当であろう。この付近の墓はいずれも独立した石積みや石囲いの小さな墓であるから、墓域の可能性は薄い。家畜の囲いとしては石列が低すぎる。石列に沿ってヤシ樹枝葉等で囲いをした可能性はある。

#### Stone construction B

塔Bから尾根筋に沿って少し下った部分に石積み室がある。自然石の板状石を積み上げて壁とし、持ち送りで天井を造る。入り口は南側にある。入り口から奥までの南北方向が長軸となり、石の内側で210cmである。短軸は東西方向で、石内側で110cmである。やや隅丸長形状の室内は現在ほぼ平坦であり、天井までの高さは1mほどである。室内壁の西側奥に蜂の巣の痕跡が残り、蜂蜜をとる施設と推定できる。砦遺構よりも新しい最近の施設であると推定できる。この石積み施設から尾根筋の西側下方に向かって石垣列があり、道路で切られた崖よりも手前で石垣は切れている。石垣列は現在残る程度に造られたもので、もともと砦方向に長くは続いていなかったと推定できる。また、石積み室と石垣列が関連するよう見えるが、その場合には石垣列も砦より新しい可能性がある。

#### 砦の構造

砦は標高67m、峠からの比高33mの小さな丘上に築かれる。丘の両側にはさらに高い山がそびえる。平面形は長方形で、石積み壁と自然石、及び斜面によって区画される。石積み壁は岩山斜面に自然割石を積み上げて造られる。石積み壁の外側は10cmから30cmほどの石をスムーズに積み上げている。区画石壁の幅

は1.2～1.3mほどで、壁の両側面に石を1列積み上げ、その間の壁内部には小石と泥を詰めている。

各区画石壁内は上方の塔、下方のテラス、その間をつなぐ階段に分かれる。上方の塔は方形石積み壁の基礎部分が残る。内部は現在平坦となり、標高は66.7mである。下方のテラス（水タンクテラス）は炉や灰混じり砂が多く発見され、土器片なども多く出土し、居住空間として用いられた場所である。ほぼ平坦な面は長方形状となり、長さ36m、中程で幅13mほどである。これらの施設を結ぶ石積み列の階段は、上部の傾斜がきつく、下部の傾斜は緩い。

### 第1次発掘調査の成果

2000年4～5月の第1次発掘調査で、水タンク、その周囲のトレンチA、B、Cの4カ所を発掘した。水タンクを中心として、その周りにトレンチを3カ所設定し、水タンクテラスと名付けた同じ面を発掘した。

#### 水タンク

水タンクの平面形は外枠が長方形で、南北方向が長軸となり、4.60×3.10mである。内側壁は四隅が半円形となり、長軸3.90m、短軸2.20mである。内側壁はほぼ垂直に立ち上がり、底はほぼ平坦にプラスターが塗られている。北側が少し低い。深さは2.80mである。壁材としてビーチストーンが主に用いられるが、珊瑚も少し用いられる。上から見ると、壁は両側2列に積み上げた石列から造られている。ピンク色粘土が詰められ、石の上にも塗られている。次いで、その上を灰白色漆喰で塗っている。現在はかなり汚れた色となっている。ピンク色粘土の表面には打ち欠いた小さな穴が多く付けられ、上塗りされた灰白色漆喰が剥がれにくいようにしている。

中国青磁碗2片、多くの土器片、大きな石塊と小さな丸石などが、水タンク内下部に堆積した土中から出土した。廃棄後に落ちたものである。

水タンク外壁北側上部は、岩盤上の赤色土居住面よりも40～50cmほど高い。居住面上に広がる小石群は外側壁に貼り付いているから、水タンクが先に造られたことが明らかである。小石上面よりも水タンク外壁北側上部面は30cmほど高い。また、北側流路の可能性のある部分は後に石で塞がれている。水タンク外壁南側上部は、やや高くなる。岩盤面の上に40cmほどの黄色土が堆積しているが、岩盤面あるいはその少し上の黄色土面を雨水が水タンク南側流路を通して流れ込む可能性はある。第2次発掘調査中の2001年1月9日、雨が降った。翌日、水タンク内に水が11cm溜まっていた。現在、水タンク外壁周囲は発掘したため周囲のほうが低くなっているが、周囲から水が流れ込まなくとも雨水は溜まる。発掘中に遺跡を訪れた地元民たちは、この土地では数十年前は今よりもっと雨が多かったという。

#### トレンチA(C2区及びD2区の一部)

トレンチAは当初、幅1m、長さ4.5mの広さで水タンクに隣接する平坦地に設定されたが、最終的には東西両方向に幅が4.8mに拡張された。この区画はグリッド設定後、C2区と呼ぶことにした。また、水タンクに沿って南側に2.4×1.6m四方のトレンチも追加された。少量の魚骨、動物骨、鳥骨、貝殻や灰がトレンチの上層から下層まで全体的に発見された。中国青磁盤1片、中国青磁碗5片、中国白磁合子1片も出土した。いずれも小さな破片である。

径24cmの穴3個と黒灰が堆積する炉3個がピンク色粘土表面で発見された。ピンク色粘土は水タンクのビーチストーンを積み上げた石壁面を塗った粘土と同じ質である。3個の穴はほぼ並んでいるように見える。穴跡には小さな砕けた岩片と粘土が堆積していた。穴の深さはそれぞれ穴1、2、3が5cm、14cm、5cmであ

る。柱穴の底部は平坦である。これらの穴は柱穴の可能性が高いと推定できる。

やや締まった粘土といくつかの石がトレンチA北東隅で発見された。家の床面の可能性があると考えたが、皆使用の主要年代より後の時代の墓の可能性もあろう。炭化物と灰がやや締まった粘土層の間から発見された。

水タンク東側壁の外側に沿って、小丸石群が広がり、やや締まった粘土が部分的に広がり、さらに炉14と名付けた黒灰が一つの単位として発見された。いずれもピンク色床面上にある。少し積み上げた小丸石群は水タンク東外壁に沿って長さ90cmほど広がっている。やや締まった粘土は東側で小丸石群と接している。炉14は水タンク壁に沿い、粘土の南側にある。黒色灰が炉14の上に3カ所に分かれて広がっている。やや大きな周囲に置かれる石ではなく、小さく割れた石が炉の床面上にあり、小さな貝殻と小石が灰の中に含まれている。

第1次発掘調査では、ピンク色床面で発掘を止めた。この面には、水タンク北側にも、穴1、2、3があり、小丸石群も北南方向に置かれており、近くの南側にある炉もこれらと関連する一つの単位の遺構になるのであろう。

#### トレンチB(D3区)

トレンチBは緩い傾斜面に当初1m×4.1mで設定したが、発掘の進展に伴い、3m×4.1mに拡張した。炉4と炉5は、砕けて小さくなった岩が斜面に広がる上に、暗い灰色灰が円形に広がる炉である。炉4内の暗灰色灰のなかにガラス・バングル4片が飛び散っていた。1片のバングルは捻り型で、他の3片は無文様型である。炉5からは魚背骨が出土した。

小さなビーズがいくつかの炉内または炉周辺で発見された。炉7の周辺から小さな白色の貝ビーズ3点が出土した。炉11からは黒色ガラス棒1片と青銅指輪1片が出土した。炉7と11は近くにあり、現在の地表面のすぐ下に位置している。炉10は砕けた岩斜面上で発見された。銀灰色岩の一部は、火を受けたために黄色と赤色に変色している。暗灰色灰も炉内に残っていた。

いくつかの穴が岩面上に、ほぼ線上に並ぶようにして発見された。穴4と5は斜面岩面上で発見された。穴4の径は44×31cmで、深さは斜面のため30cmから23cmほどになる。底部は平坦であり、小さな石が堆積土中に含まれていた。小さな黒色ガラス・ビーズ1片、小さな炭片と鳥骨1片が、穴1の下層から発見された。穴5は穴4の近くで発見された。径31×25cm、深さ10cmで、底部は平坦ではなく、粘土が堆積していた。穴6と7は近くに位置している。穴6は径16cm、深さ13cmで、底部は平坦である。穴7は径17cm、深さ15cmで、底部は平坦である。穴8は径27×23cmで、深さは15cm、底部は平坦である。穴9、10、11は小さな穴で、4cmだけ離れて線上に並んだ状態で発見された。それぞれ径は16cmで、深さは4cm、底部は平坦である。穴12も岩上の清掃時に発見された。

柱穴跡と推定できる穴の他に、柱穴では無いことが明らかな柱穴より大きな穴も斜面岩面で発見された。岩面を掘った穴である。大穴1内堆積土からはコインのような形の青銅製品が1点、中国青磁蓮弁文碗の小片1点が出土した。出土した青磁碗の型式は皆から表面採集された他の青磁と同じものである。大穴1の堆積土上にはいくつかの炉が造られている。したがって、この大穴1はもっとも古い穴の一つである。大穴2は大穴1の北側で部分的に発見されたが、第2次発掘調査で残り部分を掘るとそれほど大きくないことがわかった。大きな穴の用途は不明であるが、貯蔵用であろうか。

## トレンチ C(F2,3区)

トレンチCは3m×3.6mの大きさで、岩全体の断面図線上に沿って設定した。砕けて小さくなった岩表面上に、20cmから30cmほどの小さな石を含む粘土層が堆積していた。中国青磁碗1片も堆積土中から出土した。土器片、貝殻、骨等も出土したが、その量は多くはなかった。住居や炉などはない、空き地であったと推定できる。

## 第2次発掘調査の成果

2000年12月～2001年1月の第2次発掘調査で、水タンクテラスの水タンク周辺を発掘した。第1次発掘で調査したトレンチA、B、Cの周辺を拡張した発掘区域、及び塔と水タンクを結ぶ通路である階段部分を発掘区域に設定した。今回はトレンチ発掘ではなく、5mグリッド調査とした。グリッドの設定は、トレンチの発掘区域を新設定グリッドに取り込みやすいようにした。ほぼ南北方向を上下線とし、上からアルファベットのA、B、Cを、右から数字の1、2、3をグリッドに付けた。北東隅から西側に向かってA1区、B1区、C1区、南側に向かってA1区、A2区、A3区となる。今回発掘した区域はB2,3区、C2,3区、D3区、E3区及び階段（B5,6、C5,6区の一部）である。

## House 1(B2,3区)

岩区画北側石壁を北側壁として利用した家である。部屋は3室あり、西から第1室、第2室、第3室と呼ぶことにした。階段下方斜面と接する面であり、水タンク北側の居住面とも接する面である。表土を3cmほど剥ぐとwhite plaster粒の広がる面が現れる。炉と呼ぶほどではないが、灰がかなり広がる面である。上方の最終生活面である。すぐに東西に並ぶ石列と南北に並ぶ石列が発見され、石列は家壁であることがわかる。北側区画石壁を家の北側壁として利用し、東西方向に室区画の1列の薄い石壁を造り、3室としている。室内には壁際に灰がかなり堆積し、炉が造られていたことがわかる。西側ほど床面が高い。第1室の西側外壁は2列の石壁である。家内仕切壁は1列で薄く、北側は壁がないように見える。第1室と第2室の間は北側に岩が露出しており、第2室と第3室の間は北側にHearth 51パン焼き竈が壁部分に造られている。また、床面が高くなるにつれ、仕切石壁も上部に造り直しされた部分がある。

パン焼き竈（タンヌール、Hearth 51） House 1の第2室と第3室の境壁内あるいは境石壁北部、すなわち岩区画北側石壁際南側からパン焼き竈が発見された。平面形は底径74cmの円形で、その上に後に造られた灰混じり炉の下方から発見された。壁は上方が内側に反り、厚さ6cmで石灰混じりピンク色土で造られる。上方の壁ほど赤い色になる。内部には黒灰上に崩れ落ちた赤色壁土、割石、粘土が堆積している。竈底部は平坦である。

石囲い炉(Hearth53)がHouse 1の西側外壁の北側で発見された。家石壁が岩区画北側石壁に接する部分で、家壁の切れた部分にあたり、家壁が崩れてから炉が造られた可能性がある。あるいは、家石壁がこの部分に無かったかもしれない。Room 1内にある黒灰が薄く堆積する炉は、レベルが少し低いので、石囲い炉が後に造られた可能性が大きいのであろう。

## C3区

第1次発掘調査のトレンチBの北側、トレンチAの西側となる旧トレンチに接する区域である。西側に向かって緩やかに高くなり、堆積土も西側の傾斜部分は薄くなる。表土を掘ると、灰黒色灰が円形に広がる部分がいくつか見える。これらの炉が発見される広がり面は、トレンチAで見られた表土層下面に広がる

white plasterの面となる。このwhite plaster混じりの面は、自然石に混じる石灰が広がった面である。さらに下方は粘土と砂が混じる層で、ここからもいくつかの炉が発見される。発掘区域の東側は堆積層が厚くなり、下方は小さく割れた小石層があるが、ここからも他の層からも多くの貝殻が土器片や魚骨、動物骨とともに出土している。C2区、C3区の下層生活面は岩盤を平坦にし、水タンクの石面に厚く塗られた赤色土を貼って居住面にしている。水タンクと最初の居住面が同時に造られたことがわかる。多くのpit穴が岩盤に穿たれている。とくに斜面下方の平坦面と接する緩斜面範囲に多い。数個が並んで組になるように見えるものが多い。

#### 礼拝所

C3区の斜面際で半円形に石が並び、内部に三角形に小石が置かれた施設が発見された。岩盤直上に薄く粘土が堆積し、その上に石が半円形に並ぶ。南側は2列に並ぶ部分もある。半円形内部に三角形状に丸石と割石の小石がやや乱雑に並べて置かれている。半円形状の石に近い三角形の先端は西南西の方向を指す。半円形はミヒラブ（アーチ形をした壁のくぼみ）の代わり、三角形はマッカの方角の目印であるキブラを示すと思われる。砦内の礼拝所と推定できる。やや乱雑に石を並べただけの簡単な施設であるが、砦内のモスクに代わる場所として定期的に使用されたのであろう。

礼拝所に接する斜面下方には多くの穴が開き、水タンクと家の間の平坦面に続く。砦内の狭い範囲が異なる目的の施設に使用された状態がわかる。

#### D3-4区

第1次発掘調査のトレンチBの南側、トレンチCの北側となる旧トレンチの間の区域である。塔下方となる西側部分は表土の灰黄色粉状土を掘ると、いくつかの炉が現れる。円形や楕円形が一般的な平面形で、いずれも灰黒色灰が薄く堆積し、下面の土は赤く焼けてやや固くなった部分もある。岩盤上の炉は、岩盤が茶褐色に焼けている。岩盤は塔を中心に弧状に広がりながら斜面となって下るが、西側上方ほど表土の堆積土が薄い。東側下方は水タンクに接する部分で、現地表面は平坦になる。水タンクの南側は25cmほどですぐに岩盤になり、隣接するトレンチCの堆積状態とほぼ同じである。

#### 石段通路

西側上方に位置する塔と東側下方に南北方向に広がる水タンクテラスを結ぶ石積み階段が、砦区画北側石積み壁に沿って東西方向に造られる。塔のある西側が高く家のある東側が低い。自然石を1段積み並べて階段とする。列幅4.4m、長さ3.8mほど残る。上方はやや平坦になり、ここで幅のある階段は終わり、南西方向に塔に向かって再び上る小道がある。

石段は上方の傾斜がきついため狭く造られ、下方は傾斜が緩いため段が不明瞭な部分がある。北側の階段際の砦区画石垣は、部分的に下段が1.3mほどの広がりがある部分もある。上段の石列は全体に広がり、その下方の幅は1.0mほどが平均的であり、上方はやや狭くなる。

#### 水タンクを通る東西セクション

東側で幅が広い石積み段が発見される。砦平坦面を造成したときの東側区画石積み段で、岩盤上に石が5段以上築かれている状態が発掘で確認できた。その西側に作られた平坦面に下層居住面が造られ、水タンクがある。水タンクの西側は上方に傾斜した岩盤上面とその上に堆積した黄色土中の居住層に接する面であり、さらに西側は土留め用の6列の石段列がある急斜面となる。現在の地表面に見える段は数段であり、



土砂を被って見えない段が半分ほどある。さらに西側には上方の西南方向のタワーに向かう通路がある。

### 水タンクを通る南北セクション

北側は砦区画北側石壁がある。区画石壁を家壁として利用し、3室の石積み壁家がある。家の床面から少し下がった部分が下層居住面となる。家も居住面もともに岩盤上に造られている。水タンクの南側は堆積も薄く、粉状黄色土が単純堆積しているだけで、黄色土の下は岩盤となる。

### 出土品

第1次発掘調査時に砦が築かれた小丘急斜面の岩面上で遺物採集を行った。陶磁器片、石製品、ガラス片、その他の少量であるがさまざまな物が発見された。無釉の土器片が大量に落ちており、採集した土器片の総量は324.9kgであった。土器に次いで数が多い表面採集品は施釉陶磁器である。多くはイランから運ばれたと思われ、破片量は?Kg(data lost)であった。重量のある石製品は播石upper grinding stones and lower plate for grindingと回転播石upper and lower mortar/millの2種類があるが、点数は十数点ほどでそれほど多くない。中国陶磁器も発見された。ガラス容器片やガラス・バングル、及び小さな装飾品等も採集できた。魚骨、鳥骨、動物骨、貝殻もかなりの量が採集できた。これらの採集品の年代と砦の使用年代は、採集された中国陶磁器から推定することができる。青磁と白磁は多くが13世紀後半から14世紀初頭に属し、大部分が13世紀第4四半期に生産されたものである。採集品は居住した人々の食生活や日常生活等を復元する資料となる。

第2次発掘調査の発掘区画内から出土した遺物は、陶磁器については表面採集品の半分ほどであるが、骨等は表面採集品よりも多い。発掘区域トレンチから出土した土器は181kgである。出土品の種類や傾向は表面採集品とほぼ同じである。堆積土の上層から下層まで、どの地点でも魚骨、動物骨、鳥骨、貝殻が出土する。土器片もどの層からも出土する。施釉陶器は数量が少ない。ガラス・バングルも各地点から発見される。しかし、ビーズなどはほとんど発見されず、十数点ほどであった。

階段上部の石段面には10cmから15cmほど堆積土があり、石段面に緑釉陶器碗(LLY-IW033)や中国青磁蓮弁文碗、コバルト青色ガラス・バングル、蛤、帆立などの貝殻、魚や動物の骨が発見された。そのうち、陶器碗、青磁碗、バングル、貝殻の出土状況写真を撮影した。どの地点でも同様の状態で遺物が堆積土中から出土している。

陶磁器は釉の種類、素地(胎土)、装飾によって分類する。緑釉陶器と青釉陶器が最多である。青釉陶器のいくつかは釉下に黒色の装飾が描かれる。黄釉下黒彩文陶器と黄釉陶器は青・緑釉陶器に次いで多い。中国陶磁器の数量は少ないが、決して希なものでもない。土器あるいは無釉土器は廃棄量をもっとも多いものである。陶磁器は種類ごとに分類し、器種ごとに口縁部、胴部、底部に分けて、破片数と重さを計測した。発掘区域及び採集品の陶磁器総重量は565kg、そのうち中国陶磁器は2.3kg(破片数37)で0.45重量%、イスラーム施釉陶器は40.6kg(破片数3244)で重量7.18%、イスラーム無釉土器は522kgで92.41重量%を占める。土器を除いた中国陶磁器とイスラーム施釉陶器の重量比率は5.4%と94.5%、破片数比率は1.1%と98.9%である。

### イスラーム施釉陶器

イスラーム施釉陶器は出土した陶磁器のなかで重量が7.53%を占める。土器を除いた施釉陶磁器のなかでイスラーム施釉陶器が占める重量割合は94.82%である。中国陶磁器を除いたイスラーム施釉陶器のなかでもっと

も多いのは青・緑釉陶器で重量は78.29%を占め、碗鉢が主である。青釉陶器には釉下黒彩文が描かれるもの、釉下刻線文様があるものが含まれる。次は黄釉陶器で、重量はイスラーム施釉陶器のなかで17.77%を占め、碗鉢が主である。黄釉陶器には釉上に褐色と緑色で彩文されるものがある。青・緑釉陶器も黄釉陶器もわずかだが瓶盤等もある。その他の種類は重量全部を併せても4%ほどの少量だが、多彩釉白化粧土上刻線文陶器（スグラヒアト）、藍、緑、黒色を別々に用いた透明釉下彩画陶器や白濁釉陶器、色絵（上絵）陶器（ミナイ）がある。

青・緑釉陶器は青緑釉陶器、青釉陶器、緑釉陶器、淡緑釉陶器、灰緑釉陶器等に分けられる。素地は淡紅色素地が79.98重量%、黄色素地が8.05重量%、淡紅黄色素地が4.44重量%、黄色/淡紅色素地が0.51重量%、紅色素地が0.07重量%である。素地の色は紅色が8割を占め、1割ほどが黄色、残りが中間的な色である。これらの青・緑釉陶器のなかで重量は碗鉢が92.72%、瓶が4.80%、壺が4.75%、盆が1.47%、盤が0.95%である。青・緑釉陶器の碗鉢がイスラーム陶器の大部分を占める器種であり、その素地は多くが紅色である。装飾される割合は少ないが、釉下刻線文、釉下黒彩文、素地上盛り上げ等が見られる。Blue-green glazed ware青緑釉陶器. Yellow fabric黄色素地, harder than Sasanian and Abbasid blue-green ware fabrics. Blue glazed ware青釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Light green glazed ware淡緑釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Green glazed ware緑釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Green glazed ware緑釉陶器. Pale pink fabric淡ピンク色素地. Green glazed ware緑釉陶器. Yellow/pale pink fabric黄色/淡ピンク色素地. Blue/green glazed ware青/緑釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Blue/green glazed ware青/緑釉陶器. Pink fabricピンク色素地。

黄釉陶器は黄釉下に褐彩で弧状線が描かれるものが多い。素地は紅色が92.17重量%、黄色が7.22重量%、淡紅色が0.62重量%で、紅色が大部分を占める。器種は碗鉢と皿が主で、大形は折縁となり、数量は少ないが瓶もある。褐彩と緑彩の2色で装飾したものもあるが、2彩装飾品は少ない。やや淡い紅色の素地に、金色に光る小さな雲母がわずかに混じるのが9割を占める素地の特徴であり、産地を知る手がかりとなる。Yellow glazed ware/ Brown painted on Yellow glazed ware黄釉陶器. Fine pink/red fabricピンク/赤素地. Dishes and large bowls are dominated. Bowls and Jars are also existed. There are sherds decorated brown and green but they are very rare. Olive green glazed wareオリーブ緑釉陶器. Red/grey fabric赤/灰色素地。

釉下刻線文陶器スグラヒアトは多彩釉がなく、黄釉と緑釉の2種類である。素地上に白スリップを掛けるので、黄釉下白スリップ上刻線文陶器と緑釉下白スリップ上刻線文陶器に分けられる。Incised on white slip and under yellow glazed ware (sgrafiato). Pink and pale pink fabricピンク色素地と淡ピンク色素地。13世紀であろう。

褐釉陶器は緑色がかかる褐釉で、黄色素地、黄色粗質素地、赤/灰色素地、淡紅色素地、灰色素地などがある。釉に緑色が混じらず、褐釉よりも黒褐釉陶器と分類できる釉発色もある。いずれも瓶壺の類で、碗鉢はない。Brown glazed ware茶褐釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Brown glazed ware茶褐釉陶器. Yellow coarse fabric粗い黄色素地. Brown glazed ware茶褐釉陶器. Red/grey fabric赤/灰色素地. Brown glazed ware茶褐釉陶器. Pale pink fabric淡ピンク色素地. Brown black glazed ware黒褐釉陶器. Grey fabric灰色素地。

白釉、白濁釉、透明釉の陶器。白釉陶器釉上緑彩は黄色素地である。白釉陶器釉上黒彩は紅/黄色素地である。透明釉下に装飾した陶器は3種類があり、透明釉下コバルト青色彩陶器、透明釉下褐彩陶器、透明釉下青・緑彩陶器である。Green painted on White glazed ware透明白釉陶器. Yellow fabric黄色素地. Black

Painted on White glazed ware. 透明白釉陶器 Pink/yellow fabric ピンク/黄色素地。

以上の陶器は素地が粘土であるが、stone pasteと呼ばれる石英を主とする素地の陶器も3種類ある。青釉下黒彩陶器は淡いピンク色素地で、重さ0.5gである。透明釉下黒彩陶器は白色素地で、重さ1gである。色絵陶器は12gである。3種類を合わせた重量はイスラーム施釉陶器のなかで0.03%ときわめて珍しいものである。数少ない珍奇な品、美しい色彩の品である。色絵陶器は白色素地であり、コバルト青色、褐色、黒色の上絵装飾がある。

補修孔のある施釉陶器片もある。黄釉陶器、黄釉刻線文陶器、緑釉陶器の3片のみを示したが、いずれも孔に鉄を通して割れた破片を固定している。当時の補修技術を示している。

イスラーム施釉陶器で轆轤成形の際の痕跡が見えるものは、いずれも成形が轆轤左回転である。底部の高台削り痕が見えるものは、いずれも轆轤左回転で高台を作りだしている。

ミナイは3片であり、小片のため全体の文様を知ることはできない。いずれも草花文あるいは抽象的な文様のようなものである。人物画は12世紀後半に多く、草花文は13世紀に多くなるようであるが、出土片は13世紀代と推定できる。中国青磁の年代は13世紀後半から14世紀初に生産されたものが大部分である。同時に使用された他の陶磁器もほぼこの年代のものと推定することが可能であり、ミナイの年代を考えるうえで重要である。古い時代に作られたものが伝世した可能性は残るが、遺跡の状態から見れば出土ミナイ片は13世紀後半に作られた可能性が高い。

#### 無釉土器

施釉されない土器は出土量がもっとも多い。その多くが壺や瓶であり、岩外の斜面上で採集された。表面採集土器の重さは338.7kgである。そのうち、胴部片は229.65kgであり、これには彩文のある胴部片1.35kgを含む。底部片は48.0kgである。把手部分の破片は31.20kgで、彩文のある破片0.15kgを含む。口縁部片は16.05kgであり、これには彩文のある破片0.05kgを含む。発掘された土器片は181.36kgで、資料として扱った土器片は522.27kgである。土器は陶磁器全体のなかで92.05%の重量を占める。型製土器は黄色素地で瓶がある。刻線文土器は黄色素地、細質紅色素地、細質紅赤色素地がある。表面白色で細質紅赤色素地の刻線文土器もある。赤色彩文土器には表面白色スリップで粗質赤/黒色素地、表面黒色で粗質赤色素地がある。土器の多くは淡紅色素地、淡紅赤色素地、紅色素地、粗質赤色素地、粗質赤/灰色素地、粗質赤/黒色素地、黄色素地、粗質黄色素地、粗質緑黄色素地、黄白色素地などである。黄白色素地の土器はフィルター付瓶のみであり、他の土器と異なる産地と推定できる。

Molded earthenware 型製土器. Yellow fabric 黄色素地. Vases. Incised earthenware 刻線文土器. Yellow fabric 黄色素地. Incised earthenware 刻線文土器. Fine pink fabric 細かいピンク色素地. Incised earthenware 刻線文土器. Fine pinkish red fabric 細かいピンクがかかる赤色素地. Incised earthenware 刻線文土器. white surface. Fine pinkish red fabric 細かいピンクがかかる赤色素地. Painted red earthenware 赤色彩文土器. White slip. Coarse red/black fabric 粗い赤/黒色素地. Painted red earthenware 赤色彩文土器. Coarse red fabric 粗い赤色素地. Black surface. Earthenware 土器. Light pink fabric 淡ピンク色素地. Earthenware 土器. Fine pinkish red fabric 細かいピンクがかかる赤色素地. Earthenware 土器. Pink fabric ピンク色素地. Earthenware 土器. Red fabric 赤色素地. Earthenware 土器. Coarse red fabric 粗い赤色素地. Earthenware 土器. Coarse red/grey fabric 粗い赤/灰色素地. Earthenware 土器. Coarse red/black fabric 粗い赤/黒色素地. Earthenware 土器. Yellow fabric 黄色素地. Earthenware 土器. Coarse

yellow fabric粗い黄色素地。Earthenware土器。Coarse greenish yellow fabric粗い緑色がかかる黄色素地。

フィルター付瓶。2点出土している。ともに登録している。LLY-E037は黄白色素地の瓶で、頸部が狭くなり、径4.0cmである。上方からスペード形の文様を切り取り、周囲に円を描いている。LLY-E031は黄白色素地で、素地は薄い。エジプトの同時代と比較すると、ペルシア湾及びオマーン湾北部ではフィルター付瓶の使用はきわめて少ないのが特徴となる。

### 中国陶磁器

中国陶磁器は出土した陶磁器のなかで重量が0.41%を占める。土器を除いた施釉陶磁器のなかでは中国陶磁器が占める重量割合は5.44%である。染付や色絵はなく、青磁、白磁、褐釉の3種類である。

**青磁** 青磁は13世紀後半から14世紀前半、とくに13世紀末14世紀初の生産年代が推定できる碗と鉢が大半を占める。外面に蓮弁文が施される碗鉢の破片が多い。多くが貿易品として世界各地で出土する竜泉窯製品であるが、他に少量の他産地の灰色青磁（灰釉陶器）もある。これまで年代が不明であった灰色青磁が遺跡から共に出土した竜泉窯青磁から年代推定が可能となった。

**白磁** 白磁は型物合子、口禿碗がある。多くが福建省産と推定できる。景德鎮の青白磁皿もある。これらも青磁と同じく13世紀から14世紀初の製品である。

**褐釉陶器** 褐釉陶器の破片は表面採集、C1区、B1区からの発掘品がある。いずれも小さな破片であり、全形を復元する事はできないが、素地と釉及び器形から壺6個体の破片があると推定できる。壺1はC1区B1区及び表面採集品2片からなる大型耳付壺で、胴部最大径は約40cmである。素地（胎土）は灰色で、黒色や白色の粒を含み、腰部の素地は焼成ではじけている。上方の素地は薄い、下方は厚くなる。壺2は淡いピンク色の素地（胎土）の口縁部1片である。壺3は胴部片で、素地（胎土）は白茶色、腰部までオリーブグリーンの釉がかかる。壺1と同じ釉と素地（胎土）であるが、焼成温度と作例の違いから別個体と推定できる。壺4は壺3と同じ釉と素地であるが、やや小形であり、釉もオリーブグリーンから茶色に発色している。壺5は灰白色の素地（胎土）で、胴部片。オリーブグリーンの釉が外面と内面にかかる。壺6は口縁部1片と胴部4片で、灰色の素地（胎土）で厚さは薄い。

青磁は碗が1194g、盤が254gであり、碗が盤の数十倍の個数であったことがわかる。青磁は白磁の約7倍の量が出土している。白磁は型物合子、口禿碗が主であり、多くが福建省産と推定できる。数量は少ないが景德鎮の青白磁皿もあり、これも13世紀から14世紀初の製品である。型物合子は高台と口縁部が無釉で、外側面に蓮弁の型文が施されるものが多い。碗の内面に刻線文が施されるものがある。白磁は合子が145g、碗が63g、瓶6gで、合子の個体数が多い。褐釉陶器はいずれも小片で全形の復元は難しいが、壺6個体の破片、重さは671gで、青磁の半分以下の出土量である。褐釉陶器は1個体のわずかな部分のみが採集されているから、青磁や白磁についても採集した破片は廃棄されたものの一部であろう。

### ガラス

ガラス・バングル。黒色で捻りのあるものがもっとも多い種類である。ガラス・バングルの発掘品の出土区、破片数、重さは次のようである。B1区3点、29.4g。B2区17点、38.1g。B2,3区1点、7.2g。B3区3点、21.3g。B6区2点、5.7g。C1区4点、8.8g。C2区21点、61.6g。C2,D2(trench A)区43点、94.8g。C3区52点、104.2g。C4区2点、11.2g。C5区4点、8.7g。C6区2点、4.9g。D2区3点、16.2g。D3区57点、127.7g。D4区1点、1.3g。E2区3点、32.2g。Stepped passway22点、63.7g。Water tank deposit4点、4.6g。発掘時の表面採集品5点、11.7g。

発掘したガラス・バングル片は合計249片、653.3gである。

ガラス細棒。トレンチBから黒色の小さなガラス棒片の先端が出土した。コールスティックであろう。

ガラス容器。ガラス容器はいずれも小破片となって発見された。小形の瓶・壺が多いようである。ガラスの色は緑色が多く、黒色や黄色、紫色もある。ガラス容器の発掘品は次のようである。B1区1点、1.6g。B2区6点、24.5g。B2,3区1点、10.7g。B3区5点、11.0g。C1区1点、14.4g。C2区33点、39.9g。C3区33点、63.2g。C5区2点、3.6g。D3区25点、30.8g。E2,3区1点、1.3g。Stepped passway4点、10.2g。Water tank deposit1点、4.4g。発掘時の表面採集品2点、3.3g。発掘したガラス容器片は合計115片、218.9gである。

ガラス・ビーズ。コバルト青色地ガラスの上に黄色、コバルト青色、赤色のガラスをモザイク状に貼付して装飾したビーズ片が1点、表面採集された。当該時期の製品に類似品がないが、出土した陶器と同じ年代の可能性はある。緑色ガラスのビーズ1点、黒色ガラスのビーズが2点、トレンチBから出土した。その他のビーズ出土品は表に掲げた。

### 金属製品

青銅製細長棒。コールスティックまたはスプーン柄であろう。3本の細長棒が採集された。1点は片側が失われており、残存長87mm、断面は円形で厚さ4mmである。青銅製リング。トレンチBのhearth 7付近から青銅製リングが1点出土した。鉄製細棒も1点出土している。

金属製コインまたはペンダント。トレンチCの表面から青銅製と思われるコインまたはペンダントが1点出土した。両面に文様が打ち出され、小さな刻みもある。ペンダントとして使用されたと思われる。

その他の出土品 石製紡錘車または錘。土製紡錘車または錘。ビーズ。珊瑚製ビーズ。ピンク色の細長い珊瑚ビーズが2点発見された。1点は表面採集品で、長さ15mm、厚さ6.5mmである。他の1点はトレンチBから出土したもので、長さ11mm、幅4mmである。貝製ビーズはトレンチBの炉7周辺から3点が出土した。外径は3.6mm、孔は0.6mmほどの小ささである。径7.3mmの緑色ガラスの6面取りビーズ1点、径2.5mmの黒色ガラス2点が出土した。透明水晶製ビーズはトレンチBから1点出土した。長径16mm、幅11mm、孔径2.3mmである。瑪瑙ビーズも1点、青釉陶器ビーズも1点出土した。

鍬 石製鍬。原形を留める石製鍬1点が水タンク内の堆積土から出土した。茶褐色のフリントまたはチャート製で、長さ37mm、幅11mm、厚さ4mmである。紀元前5千年紀の製品と推定できる。青銅製鍬。やや腐食し壊れた青銅製鍬が、砦から見下ろす平地のルリーヤ農耕地で採集された。ルリーヤ砦の採集品ではない。長さ72+mm、幅17+mm、厚さ3mmである。紀元前2千年紀のものと思われる。鉄製鍬。トレンチA北側下層から鉄製鍬1点が出土した。これは鉄器時代のB.C.1500年頃の製品に類似しており、ルリーヤ砦以前のものである。

### 石製品及び自然丸石

回転式で上下の2つに分かれる石臼が数十点発見された。いずれも割れて使用できない状態である。上から見るとほぼ円形で、上下面は平らとなる。上下を固定するための大きな穴が中央にあり、棒を差し込んで上部を回転させるための小さな穴が1つ周辺部にある。ビーチストーンと呼ばれる海岸から切り出す砂と貝の混じった石、及び灰色の凝灰岩が材料として使われる。石皿もある。石灰岩とビーチストーンが使われる。磨り潰すための石棒は細長い形の凝灰岩と石灰岩を用いている。

小形の自然丸石。人工品ではなく、自然の丸石であるが、遺跡内に運び込んで使用したものである。用

途のはっきりしているものは、粘土床の下に敷き並べたものである。その他の用途は証拠がないが、投弾なども含まれるかもしれない。特殊な床面に敷き並べたものが多いと推定できる。これらの丸石は海岸から採取したものであろう。表面採集の小形丸石を14個、撮影している。その重さは3.35kgで、平均すると1個の重さは240gとなる。表面採集の丸石を10個ずつ計量した。その重さは1.45, 1.70, 1.70, 1.80, 1.85, 1.90, 1.90, 2.00, 2.00, 2.00, 2.10, 2.15, 2.20, 2.25, 2.25, 2.25, 2.30, 2.30, 2.30, 2.30, 2.35, 2.35, 2.35, 2.40, 2.50, 2.50, 2.55, 2.60, 2.60, 2.60, 2.60, 2.65, 2.65, 2.70, 2.70, 2.70, 2.80, 3.00, 3.10, 3.25, 3.75kgである。割れたものを除き、表面採集品の多くを計測したが、その個数は434個であり、重さは合計100.00kgとなった。1個の平均的重さは230gである。発掘でもかなりの数量の丸石が出土した。そのうち、トレンチAから出土した丸石を計測した。その重さは10個単位で記すと、1.30, 1.45, 1.60, 1.60, 1.65, 1.70, 1.70, 1.75, 1.75, 1.80, 1.85, 1.85, 1.85, 1.85, 1.90, 1.95, 1.95, 2.00, 2.00, 2.00, 2.00, 2.05, 2.05, 2.10, 2.10, 2.15, 2.20, 2.20, 2.25, 2.25, 2.25, 2.30, 2.30, 2.30, 2.30, 2.30, 2.35, 2.45, 2.50, 2.60, 2.65, 2.65, 2.65, 2.75, 2.80, 2.90, 2.90, 3.05, 3.10, 3.10, 3.20, 3.20, 3.25, 3.30, 3.70kgであった。トレンチA出土で計測した丸石の個数は550個で、合計の重さは125.70kgである。1個の平均的重さは229gである。この数字をみると、丸石がほぼ同じ大きさで採取されたことがわかる。計測した以外にも、数百個の丸石を発掘した状態で遺跡に保存している。

**骨・貝、魚骨** 魚骨は大きなものもあり、岩が外洋に面する位置にあることを反映していると思われる。動物骨は羊・山羊の骨が多いが、その他にも多くの種類がある。チュービンゲン大学M. Uerpmannに4kgほどの出土骨片を渡して暫定的鑑定結果を得たが、それによると骨の数で家畜が43.2%、野生動物が0.3%、海の動物が56.5%である。家畜類は牛、羊、山羊、ラクダ、猫、鶏があり、羊・山羊で家畜類の93%を占め、羊がやや多く、鶏が4.3%、牛が1.8%である。地上の動物はウサギ、キツネ、ガゼル、鶺鴒がある。出土量は少ない。海の動物は魚、イルカ、Chelonidae indet, 甲殻類であり、魚が99.5%を占める。魚の種類については現在分類中である。表面採集品の骨は少なく、骨の重さは0.6kgであり、表面採集された貝殻の重さは7.5kgである。アサリが90%以上を占めたハレイラ遺跡出土の貝殻と比較すると、アサリなどの2枚貝がルリーヤ岩出土品は非常に少なく、巻き貝が多い特徴が見られる。ただし、数量はきわめて少ないが、大きなハマグリも出土している。

C14測定用の炭化物を炉から段ボール1箱分採集し、博物館に保管している。

## 討論

岩の位置は南と北の両地域を見渡せる位置を占める。南と北を結ぶ道を眼下に管理でき、戦闘あるいは見張りの際の有利な位置にある。岩構造は厚い石積み壁で方形に区画し、方形区画岩内を上方の監視用塔、下方テラスの居住空間としての家と水タンクという使い分けをする。入り口はルリーヤ側に面する塔の下方部分になり、岩内の階段通路を経て居住空間の下方テラスに通じる。家外側には緩い斜面上に折りの場を造り、その下方や隣接する部分には多くの炉やピットが造られていた。

家の壁が1段しか残らないことは不思議である。家壁は上方まで石を積み上げていたと考えるのが妥当であろう。残らない理由はなにか。上層面の白色石灰混じり土面が家石壁を覆う。この時点で家壁が排除された可能性が大きい。すなわち、家壁は居住していた時代に近いころに取り外されたと推定できる。あるいは石積みが基礎部に限られた可能性もある。水タンクは発掘開始時点で内部は下部のみが埋もれている状態であったため、後の時代に新たに造られた可能性も捨てきれなかった。しかし、水タンク壁の構築

は砦構築の最初の段階のものであることが、住居面の広がりや小石敷き面、及び水タンク構築に関連する重なり状態から判明した。入り口の構造は北側の比較的緩やかな斜面を登り、小さな石段に狭い門を設けていたと推定できる。

出土品については砦という限定された機能に対応するのではなく、一般の居住生活と同様の多様性をもっている。生活用品としての土器、陶器、ガラス容器、青銅製棒、ビーズ、指輪、ガラス腕輪などの出土品の存在は、居住空間としての場を彷彿とさせる。動物骨、魚骨、鳥骨、貝殻などが大量に居住空間及び周辺に飛び散っている状態は、海からの食料採取、羊・山羊を中心とする動物の飼育と利用を伝える。石臼の存在とパン焼き竈は、小麦粉でパンを作っていたことを示す。

砦構造と出土品から見る砦内の生活は、非日常的空間としての砦を想定することが難しい。日常的な生活を豊かに伝える出土品からは、居住空間としての砦構造を強く意識させる。第一に、砦の構造と出土品の組み合わせから、どのような日常生活を砦内でおくっていたかを知ることができる。第二に、砦内の日常生活でどのような産地・種類の陶磁器をどのような組み合わせで使っていたかも判明した。第三に、出土した陶磁器は遠距離貿易と地域内貿易の研究を進める手がかりを与えてくれる。今後の研究課題は第三の問題を追求することにある。

イスラーム陶器の年代研究は遺跡との関係及び同じ層位出土品の組み合わせが重要であり、遺跡出土品は貿易を考える資料でもある[佐々木 2002]。ルリーヤ砦は短期間に1軒の家に居住した家族の使用品と推定できるため、年代研究の資料として価値がある。出土した中国陶磁器の年代が13世紀末から14世紀初にほぼ収まることから、同時に出土したイスラーム陶器の年代も同じ頃と推定できる。この時期のイスラーム陶器年代研究に寄与すると同時に、砦内で生活用品として使用した産地の異なるイスラーム陶器の組合せ、及び遠隔地貿易品の占める割合等が研究成果と評価できる。筆者はアラビア半島の当該地域で海上貿易研究を目的としてハレイラ遺跡やジュルファール遺跡等を発掘調査し、周辺の遺跡調査も加えると5世紀から19世紀にかけての研究資料を得ていたが、11世紀から14世紀初にかけての適切な遺跡と資料は少なかった。そこで研究資料を追加するためにルリーヤ砦発掘を行い、当該期のイスラーム陶器の地域的実態の一端を明らかにした。

中国陶磁器の出土割合と青磁、白磁、褐釉の組合せ、及び器種構成はこの時代の貿易品に一般的なものであり、遠距離貿易が広範囲な地域に同質の文化をもたらした例の一つと解釈できる。東南アジアの陶磁器は出土せず、14世紀後半のジュルファール遺跡出土品と比較しても、この地域はまだ中国陶磁器の独壇場であった時代とわかる。中国陶磁器のなかでは14世紀中頃から増加する染付が見られず、13世紀末から14世紀初の特徴をよく示す組合せの出土品である。

イスラーム施釉陶器は中国陶磁器の18倍の重量が出土し、生活用飲食陶磁器の95%を占めている。施釉陶器で最多は8割を占める青・緑釉陶器である。黄釉陶器は青釉陶器の1/4ほどである。いずれも碗鉢が多く、盤瓶を含めれば大多数となる。一部に装飾付き製品もあるが、実質的な無装飾の実用品が大部分であり、装飾豊かな陶磁器が砦内に保管されたのは同時期に1個体程度であったと想像できる。黄釉及び緑釉の白化粧土上刻線文陶器、透明釉下に藍彩、緑彩、青・緑彩で装飾した透明釉下彩画陶器、色絵陶器があり、輸入した中国陶磁器と比較的近距离のイラン陶器、及びイエメン陶器を組み合わせた生活用品としての陶磁器、及び少量の装飾施釉陶器を組み合わせた生活様式が見える。イラン高原の装飾施釉陶器stonepaste

素地は遠距離貿易で運ばれた中国陶磁器よりも珍奇で高価であったと推定できる。

青・緑釉陶器は前後の時代にも一般的な種類である。さまざまな発色の釉が見られ、素地は淡ピンク、ピンク、ピンク黄色、黄色、及びその中間的な色に分けられる。いくつかの産地に分かれるが、多くはイランの同じ産地から搬入されたようであるが、イランの窯跡と出土品が不明なため産地同定が難しい。器種は碗が87.6%でもっとも多い。壺は6.4%、瓶は3.5%、盆は1.5%、盤は1.0%である。

黄釉陶器は14世紀中頃から居住が始まるジュルファール遺跡では数片のみしか出土せず、15世紀が中心のコールファッカ町跡[佐々木 2005]からは同じ種類の黄釉下褐彩陶器碗片が1点のみ出土している。ルリーヤ砦以後の時代にこの地域の黄釉陶器流通すなわちイエメンとの貿易はほぼ途絶えたことを示している。ジュルファール遺跡に近いクッシュ遺跡では20片出土している[Kennet 2004]。アフリカ東海岸では13～14世紀に広く流通した陶器として知られている[Horton 1996]。黄釉陶器、黄釉褐彩陶器はイエメン産と推定されているが、産地や窯跡についてはなお不明瞭な部分が残る。ルリーヤ砦出土品は13世紀末を中心とするイエメン陶器の型式設定ができると同時に、この時期のイエメンを含む海上貿易のありかたを特徴付ける資料である。

釉下刻線文陶器（スグラヒアト）は9～10世紀のメソポタミア製品と異なるものであり、それ以降に現れる硬質ピンク素地陶器は11～13世紀の年代と推定されている。しかし、多彩釉を用いない黄釉及び緑釉の2種類は13世紀後半まで作り続けられた、あるいはこの時期であるという年代を出土品は示している。

色絵陶器（ミナイ）は3片のみの出土であり、小片のため全体の文様を知ることはできない。いずれも草花文あるいは抽象的な文様のようである。ミナイは12世紀に限られるとも言われるが、人物画は12世紀後半に多く、草花文は13世紀に多くなると筆者は推定しており、出土した色絵片は文様から13世紀代と推定できる。中国青磁の年代は13世紀末から14世紀初が大部分であり、同時に使用した他の陶磁器もほぼこの年代のものと推定できる。イラン高原産のミナイは半世紀ほどの短期間の生産ではなく、年代の下限を広げて考える資料となろう。多量に出土している陶器は時期が限定できるが、破片数が少ない特殊な陶器は古いものが伝世して混じった可能性を否定できない。研究資料の増加が待たれる。

土器は主な用途が貯蔵等の瓶壺、煮炊き用の鍋壺、それに碗鉢である。彩文土器も見られる。採集した土器片の重量は陶磁器全体の92%を占めるが、この割合は筆者がフスタートやジュルファールなどで計量した数字とほぼ同じであり、西アジアの都市や港町では一般的な例である[佐々木 1995,1993]。土器碗の形はエジプト出土品などと異なり、イランと当該地域アラビア半島の製品が大部分である。フィルター付瓶は土器瓶が2片のみ出土している。14世紀中頃から15世紀中頃にかけてのジュルファール遺跡出土品でも数トンにのぼる発掘陶磁器のなかでフィルター付瓶は数点しか発見されなかったが、その前の13世紀末から14世紀初でもきわめて少ない。黄白色素地瓶E037は頸部が狭くなり径4.0cmで、上方からスペード形の文様を切り取り周囲に円を描く。黄白色素地E031も瓶で素地は他の土器よりも薄い。いずれも文様は単純である。この2点は他の土器の素地と異なるから搬入品である。エジプトで多く発見されるフィルター付瓶はペルシア湾岸及びオマーン湾岸では例外的なものである。

13世紀末を中心とするイスラーム陶器の研究にたいし、ルリーヤ砦出土品は一つの基準となる成果を提供している。

ルリーヤ砦から出土した13世紀末から14世紀初の新たな研究資料によって、不明な点が多かった当該時



期のイスラーム陶器の実態、年代や組合せ研究において見るべき成果をあげた。オマーン湾沿岸地域及びペルシア湾沿岸地域におけるイスラーム陶器研究の基準資料の一つとして、ルリーヤ様式が提唱できる。

## 結論

ルリーヤ砦は地域の小さな砦の構造と配置、砦内の一家族の生活の様相、この地域の生活の一端を教える。砦から出土した資料は中国陶磁器の年代から13世紀後半から14世紀前半と推定することができ、この時代の新たな研究資料によってオマーン湾岸の生活と物質文化交流の研究を進めることができた。ペルシア湾とオマーン湾沿岸地域における出土資料そのものの研究のみならず、不明な点が多かったイスラーム陶器の年代研究や他地域との比較資料としても見るべき成果をあげた。ルリーヤ砦遺跡はハレイラ遺跡とジュルファール遺跡をつなぐ年代の資料としても重要な位置を占める。とくにイスラーム陶器研究の面では、これまで不明な点が多かったこの時代の陶器の種類と組み合わせ、年代の限定を行う研究を進めることができた。

## 文献

- Kennet, D., 2004, *Sasanian and Islamic Pottery from Ras al-Khaimah*, BAR IS, 1248, Hadrian Books Ltd., Oxford.
- Horton, M., 1996, *Shanga, the archaeology of a Muslim trading community on the coast of East Africa*. Memoirs of the British Institute in Eastern Africa: 14, London.
- 佐々木達夫, 2005 「災害が作る遺跡」 『金大考古』 47:8-9.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2002a 「ルリーヤ砦の構造と出土品」 『平成13年度第9回西アジア発掘調査報告会報告集』 55-57.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2002b 「オマーン湾岸のルリーヤ砦」 『平成12年度第8回西アジア発掘調査報告会報告集』 92-96.
- 佐々木達夫, 2002a 「西アジアの陶磁」 『東洋陶磁史』 東洋陶磁学会, 301-309.
- 佐々木達夫, 2002b 「遺跡出土の破片が語るイスラーム陶器の変遷と流通」 『東洋陶磁史』 東洋陶磁学会, 310.
- Sasaki, T. & Sasaki, H., 2001, Excavations at Luluyyah Fort, Sharjah, U.A.E., "Tribulus" 11-1:10-16.
- 佐々木達夫, 佐々木花江, 2001 「イスラーム時代の交易を探る：シャルジャ首長国、ルリーヤ遺跡の第1・2次発掘調査」 『西アジア考古学通信』 10:5-6.
- 佐々木花江, 佐々木達夫, 2000 「アラビア半島シャルジャ首長国のルリーヤ砦」 『第7回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』 70-78.
- 佐々木達夫, 1995 「物が語るインド洋の交流」 『文明と環境10巻 海と文明』 朝倉書店, 109-130.
- 佐々木達夫, 1993 「インド洋の中世陶磁貿易が語る生活」 『上智アジア学』 11: 87-117.

## 第5章 コールファッカン砦

### はじめに

コールファッカン砦 Khor Fakkan (Khawr Fakkan, Khorfakkan) fort はオマーン湾岸のイスラーム時代砦遺跡である。本来の名称が不明なため、コールファッカン砦と呼ぶこととする。北緯25°20'33"、東経 56°21'49" に中央塔が位置する。コールファッカン砦は北側に港を見下ろす海拔50mの小山頂上に築かれ、コールファッカン湾の全貌を北側に、新市街を北西側に、旧市街跡を西側に見渡すことができる。砦は考古学遺跡として周知の遺跡であり、我々も1994年3～4月にバティナ海岸遺跡踏査の際に遺物の表面採集を実施した。1994年踏査時の遺物採集は主に砦西側斜面で行われ、北側、東側には遺物の散布が少なかった。

コールファッカン砦が築かれた小山の北側裾と周辺の山が港湾施設拡大のため1994年春から夏に掘削された。シャルジャ博物館のイッサ・アッバス・フセイン Eisa Abbas Hussien Yousef はシャルジャ政府として遺跡保護を行うこととし、1995年の11～12月、シャルジャ博物館長サバ・ヤシム Sabah Jashim を中心に砦発

掘が実施され、佐々木も遺構写真撮影等を行い、発掘調査報告は佐々木が担当することとなった。出土した陶磁器片は1995年12月に写真撮影した。15～16世紀の陶磁器も少量あったが、大部分の陶磁器片は18～20世紀のものであった。発掘時点での記録が不十分であったため、2001年12月から2002年1月に砦の地形測量及び遺構実測、出土品の実測を行った。併せて砦に隣接する旧市街・コールファッカン町跡の発掘を実施した。

### 調査経過

2001年12月23日、日本発。25日、コールファッカン砦で測量準備。26日、6時30分測量開始、12時30分終了。砦の裾野を含めて周辺山地はかなり掘削されており、1990年代後半に地形が変化している。海拔は海岸にそびえる砦東側の88m山頂から計算し、タワー床面を50mとする。88m山の南に隣接する112mの山はすでに頂部が削られて平坦になる。砦と88m山の間には湾が深く入り込んでいたが、今は周辺の山を削った岩で埋め立てられ、港湾施設ができています。砦の西側は古い町があったが、今は住民が新町に移住し港湾施設に伴う道路建設のため建物が撤去され平坦地になる。独立丘陵状となる部分に築かれた砦内では現在見張りタワー床面部分がかつても高く、海拔50mである。27日、地形測量継続。29日、コールファッカン砦下の平坦面に南北トレンチを掘り始める。砦見張りタワー中央部から西に150m、南に90mの点とさらに130mの点をトレンチ線とし、2mの幅で西側を掘る。30日、砦測量の継続。コールファッカン砦下平坦面のトレンチを継続発掘。最近撤去した建物の残骸が現れる。31日、トレンチ継続発掘と砦測量継続。トレンチは厚いコンクリートとビニールの層に覆われている。2002年1月2日、測量とトレンチ発掘継続。5日、砦測量、トレンチ発掘を継続。6日、7日、砦測量、トレンチ発掘を継続。8日、砦測量、トレンチ発掘を継続。トレンチ内で住居石壁を同じ面に出す作業をする。住居に伴う面は20世紀前半頃か。9日、町跡石壁測量を始める。トレンチ発掘を継続。強い雨が降り、11時過ぎに終了する。10日、砦測量、トレンチセクションの一部実測を始める。トレンチ発掘。12日、砦測量図の点検と補足修正実測。トレンチ発掘継続。13日、トレンチ発掘継続。砦測量図の修正。レベル2で、いくつかの炉が集まる近くに擦り潰し用の石棒が出土。14日、トレンチ発掘継続。港のクレーンに登り、砦東北側の側面を写真撮影。セメント層などの表土の下に遺構が現れ、遺構のある層位をレベル1とする。レベル1の石家壁の下にレベル2の表面となる層位がある。アサリ貝殻を主とする散布があり、灰も混じり、土器と陶器の小破片が少し、ガラス・バングルが1点、ガラス小容器1点等が出土。16日、シャルジャ考古学博物館に機材と出土品を保管。17日帰国。

### コールファッカン砦の構造

#### 地勢と位置

コールファッカン付近は石灰岩を基本とする岩山が北を向くと、左側上方向に褶曲して露出した岩並が北西と南東方向に走る。山並みの稜線も同じ方向に並び、細い尾根上に小山と鞍部が連続して見られる。砦もそうした小山の頂部を利用して築かれた。湾や入り江、島も同じ並びで造られる。20数年コールファッカンに住む人は1984年以降、雨量が少なくなったという。それでも他のアラビア半島地域と比較すれば冬の雨量が多く、地下水も豊富である。コールファッカン西方の山間にあるマサヒは今でもミネラル水の産地として知られる。

砦はコールファッカン湾の南側に位置し、海拔50mほどの小山上に築かれている。東側には小さな入り江が入り込んでいたが、1990年代後半に埋められた。東側の海岸に沿う山は山頂海拔88mとその東南の海

抜104mの山である。2001年の時点で104m山は頂上から数十mが削平され、港施設拡張の埋め立て土として使用されている。この2つの山の鞍部に先史時代の住居跡があったとサバ・ヤシムはいう。同時期の墓もあった。これらの小山の東北に小さな島が1つある。上部が削平された104m山の南側入り江に白い砂浜があり、最近まで海亀産卵場所として知られていた。

砦北側山裾は削られており、砦下方はすでに道路と同じ高さの平坦部となり、道路と港施設となる。砦の築かれた稜線はさらに北東に伸びており、以前は海に浮かぶような状態で海岸に接して三角錐状小山があった。1970年代と推定できる航空写真を見ると、二つの小山をつなぐ稜線部分の周辺も平坦な陸地となり、港施設が造られている。三角錐状小山の下に港が作られたのが1973年であったと地元民がいう。この時点では三角錐状小山はまだ削られていない。1976年作成図には砦の海側に三角錐状小山が描かれている。小山の北側海岸に小さな港施設も描かれている。三角錐状小山はこの時点でまだ存在している。88m小山から海に突き出た大きな棧橋も描かれていない。いくつかの航空写真を見ると、棧橋はあるが砦と88m小山の間の湾は埋められていない。1994年踏査時点では東側の岩肌が剥き出しになった湾に海水が入っていたが、その時点でも埋め立て工事の一部が始まっていた。

砦西側下方裾に接して現在建物があるが、この部分まで海岸だったと現在撤去された古い町に住んでいた人がいう。砦下方の西側地域は南側が岩山となり北側は現在の道路部分は海岸で、その間の平坦地に旧市街があったと推定できる。海岸に近い、砦に近いという位置は町の当初建設の場所であろう。とすれば砦建設当時の町もこの付近にあった可能性が大きい。地元民の話によれば、砦に隣接する地域は1945年以降、イラン海岸地帯から移住してきたイラン人が居住した場所であったという。

砦の南方には稜線に沿ってより高い小山があり、その南向き緩い斜面には石積み墓場が広がる。先史時代の墓とサバは解釈しているが、イスラーム時代の墓も含まれる可能性がある。さらに上方の99m小山頂上には石積みタワー1基が築かれている。石積みの中には泥モルタルは詰められず、石積みのままである。コールファッカン湾とオマーン湾が見渡せる位置にある。

港湾施設の拡大整備によって20世紀後半に砦及び周辺の地形が変化した。地元民と3種類の航空写真、1976年作成地図、及び1994年踏査、1995年観察などから次のように地形変化をとらえることが可能である。海に浮かぶような海岸沿い小山周辺に1973年頃から小さな港施設が造られた。88m小山から海に突き出るような巨大棧橋を造成中の写真には、海岸沿いにある三角錐状小山が残るが、104m小山上部が削平されている。これは1994年頃以降であろう。その後砦のある50m小山と88m小山の間の湾が埋められる。砦のある50m小山裾が段状に削平されたのは1995年頃である。

1994年3月に旧町から撮影した写真には削平前の砦が写り、西側にも石積み壁があったように見える。1976年作成図には海岸沿い小山は10mと20mの2本の等高線が描かれている。砦部分はこれに加えて40m等高線が塔部分付近に描かれている。ともに20mの等高線が回り、十数mの鞍部が存在したことがわかる。この鞍部は削られて現在は海拔数mの道路部分になっている。

#### 砦周壁及び石積み壁

砦は北東側を囲う石積み壁（石垣、石段、周壁）の残りがよい。西北側と東南方向にも石積み壁が残り、数段の石が積み重ねられた周壁が等高線に沿って緩やかなカーブを描きながら延びている。西南側の囲い石積み壁は1990年代工事によって破壊されたと思われたが、削られずに残る部分や石垣裏込め小石がわず

かに残る状態から、その元の位置が図面に復元したように推定できる。数段の石を積んだ壁が見える部分もある。西北突端はわずかな高さの石積み壁の痕跡があり、船の舳先のように狭くなる。東南側は緩やかな傾斜面で西北側と比べると砦内敷地幅が広い。東南側の石壁中央には出入り口があり、石壁も2列になる。内側壁から外に付きだして円形の塔基礎石壁が残り、その外側に砦外側石壁がある。砦出入り口はこの塔の南西側になることが石垣及び地形から推定できる。

見張り塔（タワー）はほぼ直線上に3基あるため、北側から順に西北塔、中央塔、南東塔と名付ける。砦周壁は大きな石を積み上げ、その裏にやや小さな石や土砂を詰め、砦内に平坦面を造る。中央タワーそのものと室基礎となる部分は小さな石を積み上げる。いずれの壁も石積みが基本である。砦周壁に使わなかった泥モルタルを砦内側の石積み壁や基礎部に用い、泥モルタルを石間に詰め、表面に同じ泥モルタルを塗る。ルリーヤ砦の周壁も泥モルタルは使用せず、石積みだけであった。

## 塔

塔（タワー）はいずれも見張り用塔であろう。50m小山頂上部に中央塔が築かれる。床面海拔は50mである。泥モルタルを塗り床とする。タワー床面径は3.8mほどである。外側円形基礎部の径は7.5mである。塔上部は壊れて残らない。床面より下方の外壁石積みが残る部分があるが、それでも詰め土砂が残るだけの部分が多い。塔下面から床面まで高さ1.8mで、外側面は石が10段ほど積まれている。外側石積みの中には泥モルタルを詰める。石積み外側全面に泥モルタルを塗ったのであろう。一部に石面を覆う泥モルタルが残る。泥モルタルは薄いピンク色で、細かな貝片と石灰岩が混じる。タワー基礎部から放射状または部屋壁方向に短い石壁が延びる。支え壁あるいは壁の防御用であろう。泥モルタルを間に詰めた同様の造りである。床面北側端には方形台が2つ並んで置かれている。石で方形を造り、泥モルタルを詰め、上塗りしている。現在は西側部がわずかに基礎だけ残り、東側は床面に窪み状で痕跡が残る。大砲置き台車の両側であろう。

西北塔、東南塔はいずれも長方形プラン砦の両端に位置する。東南塔は方形石壁の角ではなく、ほぼ中央にあり、石垣が2重に並ぶ2列の石壁内部に築かれている。外側径10mである。西北塔は外側5.6mである。西北塔は現状では1列しか残らない石壁の外に築かれているが、さらに北側に石壁があったと推測できる。砦山と海岸に沿う小山の間には十数mの鞍部があったことが1976年作成地図からわかるが、現在は道路で削平されている。その際にもっとも北側となる石壁1列が削られたと思われる。

## 部屋

中央見張り塔の北側平坦面にいくつかの小部屋がある。壁には石や珊瑚を積み、その間に泥モルタルを詰め、表面は石や詰め土の上に泥モルタルを2.5～3cmほど塗っている。壁厚さは東西の厚い壁が55cm、南北壁が50cm、Date pressの西側に接する壁が45cmほどの厚さである。壁内には石や珊瑚が泥モルタルとともに詰められ、表面に泥モルタルを塗る。部屋は現在明瞭にわかる部分で、西側に2室、さらに接して小さな部屋が2室、また東側に台所施設がある部分とDate pressがあり、その間は三角形であるが1室となる。三角形の部屋は天井のない倉庫のようであり、2つの方形台の痕跡がある。三角形の部屋または空間に接して周壁との間に小さな部屋があったようである。空間的な配置から部屋の存在が推定できるが、現状は壊れ土台が流れているので証拠は残らない。Date pressとタワーの間の台所と推定できる部分は、長方形の台があり、石と泥モルタルで造られる。暗渠となる小溝があり、水が流れたことがわかる。溝上に小石を並べ、

泥モルタルを塗っている。台所施設から流れる水を排水したと推測できる。小溝南側に焼け土があり、炉と推測できる。床面にわずかに痕跡を残す方形台と棗椰子ジュース製造施設との間の狭い部分に、円形パン焼き竈の痕跡がわずかに残る。直径85cmほどである。狭い部分に密集して台所関連施設が置かれていたと推測できる。

床面と壁面にはタワーで用いた泥モルタルと同じものがきれいに塗られる。室数は現在の残り状態から推定したが、中央タワーと室の両方の基礎段となる石段はさらに広い部分もあるから、小さいけれども室数は4~5室増え、平坦な面積はさらに広がる。

#### 棗椰子ジュース製造所

棗椰子から出る汁デブスを集める施設Date Pressは残りが悪く、平面全形を推定するのが難しい。1995年撮影写真と今回の観察から、東西方向の横幅は3m、南北方向の奥行きは2mほどと推定できる。床には小さな直方体状石片を並べ、上に白色漆喰を塗って畝状の高まり部を作る。その間は浅い溝状となり、汁が流れる部分となる。畝と溝は南北方向である。北側は壁であろうから、南側に出入り口、取り出し部があると復元できる。北側は砦部屋全体の基礎となる石垣基部と、その内側のDate press基礎の石段が1mほどの距離でほぼ接している。石垣はほとんど崩れており、床面の高さで残る部分はほぼ無いが、下部の外側線は図示したように推定できる。

#### 出土品

発掘による出土品と1994年やその後の採集品がある。大砲砲弾の錆びて小さく剥離した状態の鉄片が床面や周壁内外の数カ所に残る。表面に落ちている物で原形を留めるものはないが、元の大きさを復元推定できる鉄製砲弾が周壁外から1個採集された。ほぼ球形と復元でき、直径8.4cmである。まだ砦内に埋もれた砲弾があることが表面観察でわかる。石臼、鉛板、ガラス片も出土している。

陶磁器。わずかな数量の陶磁器片が遺跡内に散らばるが、多くはすでに採集されたようである。スグラヒイアトSgrafiato。碗。中国青磁碗Chinese green ware。碗。15世紀。中国染付Chinese blue and white。碗、カップ、皿。18-19th centuries。中国色絵Chinese enameled ware。碗、小碗、カップ。18-19th centuries。ミャンマー青磁盤Myanmar green ware; gray fabric. Dish. 15-16th centuries。褐色釉陶器碗Brown glazed ware; pale pink fabric. Bowl。淡緑釉彩文陶器Pale green glazed ware with black and green painted; yellow fabric. Bowl, large bowl。無釉土器Earthenware; pink, red fabric. Jar, vase, cooking pot, etc.。彩文土器Painted earthenware; red fabric. Vase, cooking pot。ヨーロッパ施釉陶器European painted ware. Bowl, dish, vase。

ガラス容器Glass, vessel。

中国染付は明代製品が未発見である。中国清代の染付、色絵磁器は多く発見できる。イスラーム施釉陶器も多いが、その種類はジュルファール遺跡出土品と異なり、明らかに時代差があり、コールファッカン砦出土品のほうが新しい。無釉土器は発見数量がもっとも多い。博物館に置かれていたKhorfakkan findsを整理しているとき、1996年3月22日付の遺物袋があり、紀元前の石製容器、大型や小型の土器片が入っていた。胴部片が多いが、注口、把手、彩文土器片などもある。砦出土品でなく、隣接する小山に残る墓や住居跡の出土品と推定できるものである。

#### コールファッカン砦構造の概要

砦は小さな細い岩山の上の平坦部を利用して築かれ、全長140m、最大幅60mの細長い長方形の平面形

である。砦周囲は石積み壁で囲われている。出入り口は南側の2列の石壁に挟まれた円形塔の側にある。円形塔は出入り口部を含めてほぼ直線上に3基ある。周囲の石壁は石面が剥き出しのままであるが、砦内の石積み壁は泥モルタルが塗られる。中央塔の床面は海拔50mで、内径3.8mである。中央塔には周囲に放射状に短い支え石壁がある。西北塔、東南塔は長方形プラン砦の両端に位置している。中央見張り塔の北側平坦面に居住用の小部屋がある。部屋は西側に2室、それに接して2室、東側に台所施設、及びDate pressがある。その間は三角形となる中庭があり、倉庫としても用いられた。台所施設には排水溝や円形パン焼き竈がある。防御施設を整えた常時居住用の砦と判断される。

## 第6章 コールファッカン町跡・エム・ゴバーナの発掘

### 発掘地概要

遺跡はアラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールファッカン湾内に位置し、コールファッカンで最古の町と推定できるエム・ゴバーナEm Gobanaにある。南側には急峻な岩山がそびえ、北側は湾内の砂浜、西側は山麓に沿う農園、東側は砦がある狭い丘陵が緩やかに下がりながら北に延び、砦山の先端は海に突き出た円錐状岩山となる。砦東側はAl Bandarと呼ばれた小さな細長い入り江があった。エム・ゴバーナは漁船の停泊に適した静かな湾と防御しやすい岩山に囲まれた町である。

ポルトガル砦が海岸の平坦面に建てられ、背後に高い山があったことが古地図から推定でき、その地形に合う場所が発掘地エム・ゴバーナである。表面採集品には14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が含まれ、ポルトガル来航以前から町のあったことが推定され、15世紀を中心とする家跡が発掘された。貿易品としての陶磁器が発掘され港町研究が期待できる遺跡である。コールファッカン砦測量調査と併せて、砦西側に広がる平坦面第1次発掘調査を2001年12月から2002年1月に行い、第2次発掘調査は2003年12月から2004年1月、第3次発掘調査は2004年12月から2005年1月に実施した。

### 調査経過

第1次発掘調査は2001年12月23日～2002年1月17日。コールファッカン砦測量調査と同時に実施した。第2次発掘調査は2003年12月19日～2004年1月14日。12月21日、第1次発掘トレンチに堆積したゴミを清掃し、厚い表土層の残りを掘り下げる。パキスタン人21名。作業時間は7:00-9:30分、朝食後、10:00-12:20分、祈り時間、12:50-13:30分。22日、第1次発掘調査で、コールファッカン砦下平坦面に南北トレンチを設定した。砦見張りタワー中央部から西に150m、その点から南に90mの点を基点Aとしてさらに130m先の点を結ぶ線をトレンチ枠線40mとし、西側2mを掘った。しかし、今回測量するとトレンチ枠線は南北方向でなく、西側に16°振れていることがわかった。そこで基点Aからすでに掘ったトレンチ線方向（磁北から16°西に振れる）をそのまま利用し、基点Aから南南西方向2.5m地点を0mとし5m間隔で35m地点まで鉄杭を打ち、0mと30mの西側20m地点にも鉄杭を打つ。南北方向からずれた形の30m×20m発掘区域を再設定した。23日、トレンチ内清掃と表土を掘る。コンクリート層を割るのに時間がとられる。24日、表土を剥ぐ。25日、表土を剥ぐ作業。26日、実測図をスキャンしてトレース。28日、本日から6:30-9:30、10:00-12:30とする。大型ユンボで遺跡表面のセメントと碎石層を撤去する。夜、今年冬初めての小雨。アラビア語新聞3紙に日本人考古学者がコールファッカンで遺跡発掘という記事が載る。29日、表土層の残り部分を掘る。30日、表

土層の残り部分を掘る。31日、表土層の残り部分を掘る。2004年1月。3日、表土層発掘継続。一部で最近の家壁を追い始める。夕方小雨。4日、表土層発掘継続。5日、6日、表土層発掘継続。ドラム缶利用のパン焼き籠の撮影。7日、表土層発掘継続。シャルジャ首長国首長シェイクスルタンに会い、遺跡発掘状況、日本招待を伝える。シャルジャテレビで会見の様子を夜放映。8日、表土層発掘継続。風強く、埃が舞う。7日のシェイクスルタン会見記事がGulf等の新聞に掲載される。10日、表土層発掘継続。Sharjah TVが遺跡に来る。11日、表土層発掘継続。12日、表土層発掘継続。13日、シャルジャ国立考古学博物館倉庫に出土品を置く。15日帰国。

第3次発掘調査は2004年12月から2005年1月に実施した。12月12日日本発、13日朝シャルジャ国立考古学博物館で挨拶・調査打ち合わせ。コールファッカン町跡で建物建設工事が数ヶ月前に始まり、博物館長は工事ストップをかけたが工事は進行中という。我々のトレンチは破壊された可能性がある。14日、日の出6時51分。今年の気温は例年より低く、最高26～30度、最低17～20度ほど。パキスタン人作業員20名が遺跡内にテントを張り調査の1ヶ月間住む。作業員の勤務時間は8時間。作業時間は6:45-9:30分、朝食9:30-10:00、10:00-12:30分、祈り時間及び日本人昼食12:30-13:00、13:00-14時45分。テント生活作業員食事に2人が専従する。トレンチは一部埋められていたがほぼ破壊から免れたため、同じ場所を継続発掘とする。西北方向の海側道路に沿って大きな建物を建設中で建物の周りを掘り下げている。地表面から数十cmは砂などの堆積であるが、その下は1.5～2mほど石積み壁家の層が見え、壁のない部分には砂の堆積も見える。それらの下は水平堆積した砂で、砂には貝殻が水平堆積しているのが見える。石積み家壁のある層は紅色土でその下の自然の砂層とはっきりと区別でき、コールファッカンの町跡の上下が判明した。トレンチの東側は1ヶ月前から港事務所の仮機材置場建設を始め、トレンチ際まで敷地境フェンスを張っている。トレンチ内清掃。15日、トレンチ内20世紀末埋土の除去再開。16日埋土除去。18日、シャルジャ博物館長が遺跡に来る。ディバDibaの遺跡を4カ所見に行く。農園Farm内遺跡(N25,36,37, E56,15,45)は以前マウンドがあったというが、現在は平坦な畑で、中国やミャンマーの14～15世紀の青磁、中国の明清の染付が地表面で採集できる。すでに遺構は攪乱・破壊されている可能性があるが、遺物を採集するには良い場所である。19日、埋土除去。20日、ブルドーザーの手配ができ、Department of Transport and maintenance, Khorfakkanの職員がトレンチ周辺に盛り上げた廃土を移動する。21日、埋土下に壁がある。壁は1段に敷き詰められた石積平坦面の上に載る。石積平坦面の下にはピンク色土が広がり、どちらからも土器片が出土する。ピンク色土のほうが広い範囲に見られる。その下に灰色の汚れた灰混じりの土があり、貝殻や土器片がかなり多く含まれ、灰やゴミが捨てられた生活廃土である。22日、ブルドーザーで廃土の山を除去する。23日、ピンク色土のなかで石積み壁を発見。25日、灰色土から15～16世紀の陶磁器が出土し、それ以外の時代のものは出土しない。26日、ピンク色土の下は砂層である。27日、一時強い雨。28日、一時雨。ピンク色土は壁崩れ土で、石積み面をきれいに同じピンク色土で上塗りしている。外壁は90cmで厚く、内の仕切り壁は40cmである。29日及び30日はブルドーザーとダンプカーで盛り上げた土を遺跡周辺から運び出す。発掘区域は東西方向が40m、南北方向が30mの長方形となり、上面の砂は16世紀と推定できる。2つのコーナーが現れ、東側家の大きさが推測できる。2005年1月2日、東側から10mまでを掘り下げることとする。3日、東家と北東家の壁基礎を発掘する。東家をHouse 1、北東家をHouse 2とする。4日、House 2の南側家壁を新しい家壁下で発見。5日、House 1,2の壁及び室内堆積土を掘る。6日、House内の発掘。8日、House 1室内発

掘、赤色土内からかなりの土器が出土する。9日、室内床面を出す。10日、シャルジャ博物館職員とシャルジャテレビが遺跡に来る。遺構撮影を行う。作業員パキスタン人や関係アラブ人とテント内で昼食パーティを開く。11日、コールファッカンを朝発ち、シャルジャ国立博物館で挨拶し、機材及び出土品を保管。12日帰国。

### 発掘区域

コールファッカン砦測量調査と併せて、砦西側に広がる平坦面の第1次発掘調査を2001年12月から2002年1月まで行い、第2次発掘調査は2003年12月から2004年1月に実施した。第1次発掘調査でコールファッカン砦中央塔中心点から西へ150m、その地点から南に90mのA点とさらに40m南のB点に基点を設けた。A点とB点の長さ40mを基線とし、西側に幅2mのトレンチを遺構と層位の確認のため設定し、A点から南10mからB点を結ぶ30×20mの発掘区域をトレンチ西側に設定した。30×20mの発掘区域の東北部はN25,20,29, E56,21,45である。ただし、第2次発掘調査時点で発掘区域の鉄杭がすべて抜き取られていたため、新たに基準ポイントの設定を行った。その結果、トレンチは南北方向から16度西側に振れていることが判明した。しかし、既に発掘を実施しているので、南北枠線を西側に16度振れたままとし、前年とほぼ同じ発掘区域位置を再設定した。30×20m発掘区域の北東側の点はA点から3.45m南東南方向に変更した。また、第1次発掘調査時点のトレンチ東側枠線を東方向に30cm移動した。砦との位置関係は図示した通りである。

30m×20m発掘区域の東北地点とし、発掘区域は600m<sup>2</sup>である。発掘区域東北地点を1aとし、その西南の10×10mの範囲を1a区とした。南東南方向に10mの点を2aとし、その西南区10×10mを2a区、さらに同様に3aと3a区とし、1aから西南西側10mの点を1b、南東南に10mの点を2b、さらに西南西10mの点を3bとし、それぞれ10m区画を1b区、2b区、3b区として10m区画を6区設けた。発掘区域内東側に40mトレンチの30m部分が含まれる。1aの緯度経度はN 25,20,29 E 56,21,45、4aの緯度経度はN 25,20,28, E 56,21,45である。発掘区域から北と南側の一部がトレンチで張り出すが、表面を覆うコンクリートなどを剥がす作業に時間を取られたため、張り出し部分の発掘は一部で終了した。

### トレンチ内層位

トレンチ内には0.5mから1mほどの厚さで1997年の港造成用コンクリートの場として使われた跡が残る。コンクリート材料であるセメント、砂利、砂が層位をなしている。その下には数人でも持ち上がらない大きさの切石が大型車を通す道路として敷かれた場所がある。壁石、土砂、砂、壁土が移動されて堆積する場所もある。これらの層を表土とした。表土下にはピンク色壁土を主とする層位があり、上層をレベル1とした。レベル1は石壁内に詰めた泥モルタルの白い貝や石灰岩の細かな粒が混じるピンク色泥モルタルが石壁基礎付近で発見された。家部分から少し離れると砂が堆積する部分もあった。一抱えほどの石が壁基礎石として積み上げた状態で残る。石壁の下の面はゴミが広がる面である。厚さは4~5cmほどで薄い。このゴミ層とそれより下の層をレベル2とした。2002年1月に終了した第1次発掘トレンチはこの面の最上層であるゴミ面で終了した。

### レベル1

砂層下またはピンク泥モルタル層位と同じレベルで数軒の家壁基礎部分が現れた。Mud brickが崩れたピンク色粘土の堆積である。この堆積土内に家壁基礎が残る。石や珊瑚を泥モルタルとともに積み、家壁としている。現在もコールファッカン市内で壊れかけて残る家と同じ材料を用いた造りである。



第1次発掘調査のトレンチ内で、同じ家のいくつかの部屋と思われる石積み壁基礎が現れた。黒く焼けた炉、その近くに擦り石なども発見された。土器片や陶器片がまとまって出土する場所もあるが、数量は多くない。

## レベル2

レベル1の石家壁の下にレベル2がある。第1次発掘調査トレンチ内では、アサリ貝殻を主とするゴミ層があり、灰も混じる。その表面から土器と陶器の小破片が少し、ガラス・バングルが1点、ガラス小容器1点等が出土した。すでに小さく割れた一部が残る状態である。レベル2のゴミ層の上に石壁基礎の家が建つ。

### 第3次発掘の層位について

地表面から1.5mほどは最近の堆積土である。第2次調査で設定した30×20mの発掘区域を西側方向に30×40mに広げ、最近の堆積土を除去する。

埋土下で最初に発見された石積み壁家の基礎部をレベル1とする。壁のない部分は貝や土器片が混じる灰砂土の堆積である。壁基礎下に割れて尖った石塊を平面形長形状に平坦に敷いた部分があり、石塊層及び石塊が載る砂層をレベル2とする。レベル2は薄い層であるが、下部にレベル3の家跡がある部分では厚くなる。灰混じり砂の層の表面に1段石塊を敷き詰めているため、灰混じり砂もレベル2とする。その下は赤色土が広がる部分と灰砂層が広がる部分があり、赤色土の広がる部分には石積み壁が残る。その家の壁が残る層をレベル3とする。赤色土は白い石灰粒を含む壁土の崩れ堆積である。灰砂層には牡蛎貝殻片がまんべんなく含まれ、その他の貝殻や多量の土器片も含まれる。レベル3の生活廃棄物の堆積層である。レベル3の下は水平堆積した砂で、砂には貝殻が水平堆積している。

レベル2の灰色土から15～16世紀の明染付やマンマー青磁が出土し、それ以外の時代のものは出土しない。レベル3の紅色土からは14世紀の元染付や15世紀の染付・青磁が出土し、レベル3の灰砂層からは15世紀を中心に16世紀までの陶磁器が出土する。クッキングポットもジュルファール遺跡の種類に対応し、出土品は14世紀後半から16世紀のなかに入ることを示している。レベル3家跡周辺には紅色土がわずかに薄く堆積するが、その周辺及び下には灰砂が堆積する。レベル3の生活層である。灰砂内には牡蛎貝片が目立つが他の種類の貝殻も含まれ、土器片は多い。魚骨片は多いが、羊/山羊及び鳥の骨はきわめて少ない。同じ時代のジュルファール遺跡や少し前のルリーヤ遺跡と比べ、動物・鳥の骨がきわめて少ないことが特徴となる。

レベル2の廃棄物はレベル3の生活廃棄物を含む灰砂層と同じものであり、レベル3の家跡が廃棄されたから、レベル3家跡の上に堆積したとわかる。レベル2の出土品はレベル3の上層部廃棄物を多く含む移動した層と推定できる。レベル1は出土品から20世紀前半を中心とすると推定できるため、レベル2はレベル1の家を建築する際に地ならしした層と解釈できる。発掘地点は4世紀ほどの空白期間があったことになる。

## 出土品

2003年12月～2004年1月調査出土品。表土出土品。表土からは小さく割れた土器片が多く出土する。マンマー青磁盤片も数点出土し、中国青磁盤15世紀頃の破片も1点出土したが、多くは20世紀の製品である。

レベル1出土品。レベル1の泥モルタルと同じ層位で、地表面から120cmの深さで、1920年インド製コイ

ンが出土した。パキスタン作業員は1960年始めまで使用したという。同じ層位から錠が出土した。また、石積み壁際から土器片がややまとまりをもって出土する場所があった。緑釉陶器鉢片もいくつか出土した。ジュルファール遺跡出土品と同系統の緑釉陶器であるが、釉は斑になり、ジュルファール遺跡出土品よりも新しいと判断できる。口縁部外側まで釉がかかり内面は全面に施釉され、口縁部内面に受け部が巡る一般的な型式である。形だけをみるとジュルファール遺跡出土品と同様に見える。パキスタン人は同様の製品がペシャワールで造られるといい、釉色の濃いものは半世紀ほど古いという。土器ランプ。1点のみ出土。

レベル2出土品。レベル2のゴミ層最上部の貝混じり層から数量は少ないが土器、陶器片が出土した。2004年12月～2005年1月調査出土品。

上層及び上下層混じりの土砂から出土した陶磁器はほとんどが15～16世紀のもので、17世紀以降の陶磁器はほとんどない。出土した土器の重量は71.514kg、施釉陶器Glazed wareは中国染付Chinese blue and white,0.097kg、中国青磁Chinese green ware,0.479kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware,0.838kg、イスラームIslamicの緑釉陶器green glazed ware,3.60kg、白濁釉陶器Opaque white ware,1.311kg、褐釉陶器green glazed ware,0.805kg、緑釉下褐彩陶器green glazed ware underglaze painted brown (pink素地),0.12kg、灰緑釉陶器grey green glazed ware,0.122kg、淡緑釉陶器pale green glazed ware,0.068kg、緑釉陶器green glazed ware,0.03kg、黄釉褐彩陶器yellow glazed ware underglaze painted brown,0.038kg、マンガン黒釉陶器manganese black glazed ware (pink素地),0.09kg、緑・紫彩陶器green and purple glazed ware,0.03kg、stonepaste染付blue and white,0.0073kg、stonepaste緑釉下黒彩陶器green glazed ware underglaze painted black,0.01kgである。

レベル2はレベル1の家壁下に接して広がる割石堆積面とその下の灰砂層である。レベル1の家壁下に部分的に広がる面であり、レベル3の赤色壁が崩れた赤色土の上に広がる。レベル1及びレベル3の家は上下で重なる部分が多いが、その間に堆積する石敷き面と灰砂層である。家跡が無い部分はレベル2を確認することが難しく、レベル2とレベル3は区別しにくい。House 1の上に広がる石敷き面及び直下の灰砂層は明確に分類できたため、一部の出土陶磁器の種類と重量を記す。土器Earthenwareは、yellow素地 (Vaseが主) が3.86kg、red coarse素地のcooking potが1.55kg、red coarse素地のJar/vaseが0.82kg、red coarse素地の白スリップ上赤色彩文土器 (Vaseが主だがbowlもある) が0.41kg、red coarse素地の蓋が0.22kg、この他にpink/gray素地で赤色面に叩き文がある薄手の土器 (Jarのみ) が0.02kgである。中国青磁Chinese green ware,0.05kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware,0.01kgである。イスラーム陶器は、緑釉陶器 (ピンク素地) green glazed ware,0.80kg、褐釉陶器 (ピンク灰色) brown glazed ware,0.11kg、白 (濁) 釉下黒彩陶器 (yellow and pink素地) opaque white glazed ware, underglaze painted black,0.56kg、白 (濁) 釉下緑彩陶器opaque white glazed ware, underglaze painted green,0.01kg、緑釉下白彩陶器 (ピンク素地) green glazed ware, underglaze painted white,0.05kg、透明釉下黒彩陶器 (red and yellow素地) transparent glazed ware, underglaze painted black,0.09kg、その他の施釉陶器0.02kgである。この結果からレベル2はレベル1の出土品と異なり、レベル3の出土品と同じ種類と組み合わせであり、レベル3の時代15～16世紀と同じであることが判明した。

また別の日にHouse 1上のレベル2から出土した土器は6.95kgである。北東側house 2のGray層から1日に出土した陶磁器は土器Earthenware,6.15kg、施釉陶磁器glazed ware,0.36kgで、94.5%と5.5%である。施釉陶磁器glazed wareのみの内訳はミャンマー青磁Myanmar green ware,0.09kg (25%)、中国青磁Chinese green

ware,0.05kg (14%)、イスラーム陶器Islamic glazed ware,0.22kg (61%)である。イスラーム陶器の内訳は緑釉陶器green glazed ware,0.06kg (17%)、褐釉陶器brown glazed ware,0.05kg (14%)、その他の種類0.11kg (31%)である。

レベル3のGray層出土の土器Earthenwareは230.955kgdである。中国青磁Chinese green ware,0.741kg、中国染付Chinese blue and white,0.18kg、中国白磁Chinese white ware,0.01kg、ミャンマー青磁Myanmar green ware,1.26kg、ミャンマー白濁釉陶器Myanmar opaque white glazed ware,0.02kg、タイ青磁Thai green ware,0.62kg、ベトナム青磁Vietnamese ash glazed ware,0.02kgである。イスラーム陶器Islamic wareは緑釉陶器green glazed ware,9.357kg、白濁釉陶器opaque white glazed ware,(underglaze painted black or blue)4.256kg、褐釉陶器brown glazed ware,1.594kg、灰緑釉陶器gray glazed ware,0.147kg、透明釉下白彩陶器transparent glazed ware, underglaze painted white,0.148kg、透明釉陶器transparent glazed ware, red fabric,0.93kg、透明釉下彩画陶器(イラン染付stonepaste) transparent glazed ware, underglaze painted black or green or cobalt blue,0.312kg、紫釉陶器purple glazed ware,0.4kb、その他1.79kgである。

Red層出土の土器Earthenwareは20.20kgである。House 1の壁を出すために壁周囲の赤土・灰砂・砂を掘り下げた層から出土した土器Earthenwareは23.55kgである。

House 1の室内に堆積した赤色土から出土した土器Earthenwareは35.34kgである。

なお、第3次発掘で出土した陶磁器のうち、段ボール2箱分の陶磁器は未整理のままシャルジャ国立博物館に保管中で、実測、撮影、計量を行う予定である。

文字を記した陶器片が1片出土した。House 1の室内赤土内から出土したイラン製と推定されるピンク素地瓶胴部片の白スリップ上に「□ from Larki」とアラビア文字が刻まれる。イランのラルキから運ばれたものを記した瓶と推定することが可能であろう。

### 発掘遺構

家跡が発掘された。レベル1では東側と東北側で道路を挟んだ両側で家跡が発掘された。道路の西側に1軒(西家)、道路の東側に1軒(東家)、その南側に1軒(南家)を確認できる。いずれも石積み壁で赤色土を詰め、壁幅は45cmである。西家と東家の間の道路幅は北側で3.0m、南側で3.5mである。レベル1の家面付近の出土品は20世紀前半からのものであり、家跡もその時代と推定できる。パン焼き竈として利用されたドラム缶が壁際に3つ並んで発見され、20世紀後半まで家が使用されたと推定できるが、この家跡の上部に新家があったかどうかは確認できない。発掘地点でどの面まで20世紀末に削平されたか不明である。

レベル2は上面がほぼ平坦になるように敷き詰めた石塊面である。レベル1の家壁基礎がある場所の一部にのみ見られ、平面形はほぼ長方形となる。石塊面は1段の部分と数段になる部分がある。数段の部分でもきちんと積んでいるのではなく、灰砂の窪んだ部分に投げ込んでいるように見える。レベル1の家を建てる際に地面を平坦にするために石を馴らしたように見えるが、ほぼ平面形となる理由はわからない。石積み平坦面を利用した可能性はある。石塊の下は灰砂が堆積しているが、傾斜した部分が多い。家壁はレベル2に無い。レベル2の出土品はレベル3の時代のものであるが、レベル2表面の石積み面はレベル1の時代と解釈できる。

石積みレベル3の家は2軒を発掘した。東側のHouse 1はほぼ発掘を終え、北東側のHouse 2は東側部を発

掘した。レベル3の家の上層には少しずれる程度でほぼ重なるようにレベル1の家跡がある。House 2の上にあるレベル1の家は、House 2の崩れた赤色土壁の上に壁基礎を置いた部分があり、赤色土が無い部分は灰砂の上に石塊を敷いた上にレベル1の家壁基礎がある。発掘区域内の中央部及び西側部には赤色土と壁石が数カ所に見られ、数軒のレベル3家跡の存在がわかる。レベル3の未発掘家跡を調査することが第4次発掘の目的となる。

House 1の壁基礎は砂地上に置かれる。外壁の厚さは90cmである。内側の仕切り壁のように見える部分は厚さ40cmであるが、壁の崩れの可能性が高い。壁の一部は石積みで石の周りの詰め土と表面の上塗りは同じ赤色土を用いる部分が多い。上塗り壁が発掘中に崩れた部分では上塗り部厚さが数cmで、その中はすべて砂が詰まっていた。砂が日干砂レンガであるかどうか不明瞭である。赤色土内には白い粒の石灰が含まれている。崩れた赤色土の一部に日干赤色土レンガが確認できた。目地として砂が利用されているため、赤色土がレンガであると確認できた。壁部分では赤色土が連続しており、目地に砂が使用されておらず、赤色土を目地に使用したか、レンガではなく泥塊を積み上げたか不明瞭である。南北方向の外壁は長く16.50m、東西方向の外壁は短く4.60mである。室内の東西方向の幅は2.90m、南北方向の長さは15.70mである。室内南側部の床は砂上に赤色土を薄く塗った状態である。その上に赤色土が厚く堆積していた。室内北側部は砂上に薄く赤色土を塗っており、その上に灰砂が堆積していた。2つのコーナーがきれいに出た南側では、ともにコーナー両側部0.75m部分で厚さ5cm厚く上塗りされ、コーナー部分で部分的上塗りは消える。そのため壁を厚くして壊れ難くしたのではなく、建物に装飾性を与えたと解釈できる。

House 2は赤色土壁で石積みであることはHouse 1と同じであるが、壁幅は50cmで狭い。東南角と東側、南側の壁部分が判明したが、西側と北側は未発掘である。

壁土として用いた赤色土は南側の山斜面表面に部分的に見え、白い石灰も同じ山斜面に粒状になっているのが見える。家壁材料は土と石を近くの山斜面から採取し利用したと推定できる。

### 発掘地周辺の地勢

発掘地点はアラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールファッカン海岸の湾内に面する。コールファッカンのなかで最も古い町と推定しているエム・ゴバーナEm Gobanaである。コールファッカンが西部の緩やかな傾斜地に拡大した後、アル・シェルクAl Sherque東と呼ばれるようになった町である。

南側には急峻な岩山がそびえ、北側は湾内の砂浜で、西側は山麓の農園、東側は砦がある50mほどの細い山が緩やかに下がり北に延び、砦山の先端は海に突き出た円錐状岩山となる。砦東側はAl Bandarと呼ばれた小さな細長い入り江があった。砂浜ではなく岩が海に接しており、20世紀後半の写真には何隻ものダウが停泊している様子が見える。西側の入り江はDirwazahと呼ばれた砂浜で、ここにも多くの漁船が停泊している写真が残る。コールファッカンとは2つの入り江という意味であり、異なる地勢の入り江を港として使用していた珍しい例となる。ただし、この状態は20世紀のものであり、それ以前に遡るかどうかの証拠はない。コールファッカンは漁船の停泊に適した静かな湾と防御しやすい岩山に囲まれた町である。21世紀初には山の削平と海の埋め立て及び町の移動で、南側の高い山を除くと昔の面影は残らない。

ポルトガル砦はコールファッカンにも建設された。ポルトガルの地図と当時の記述を併せて推定すると、海岸の平坦面に三角形の砦が建てられ、背後に高い山があったとわかる。その地形に合う場所がエム・ゴバーナまたはアル・シェルクである。20世紀末までこの地に町があり、その家を撤去中の1994年に見た散

乱する陶磁器片は19～20世紀のものであった。それらの家を撤去後に表面に石塊混じり土が厚く敷かれたが、その土と石の中から採集した陶磁器には14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が多く含まれるので、16世紀初ポルトガルが来る以前から町があったことがわかった。16世紀の出土品はきわめて少ないため、現状ではポルトガル人が砦を建設した前後頃、旧住民は殺され家や農園は破壊され、僅かに生き延びた人々は山に逃げたと想像でき、町の歴史的变化が大きかったと想像できる。馬や農産品も失われ、人と町と貿易が消失したと推定できる。そのため、16～17世紀の出土品が少ないのであろう。その後再び現地人や移住者によってコールファッカン町がこの地に再建され、エム・ゴバーナが再び町の中心地になったと推定できる。貿易品としての陶磁器出土が期待でき、同時にこの地域の歴史の変遷と貿易状況が具体的な出土品によって復元できる遺跡であろう。

コールファッカンの歴史を研究しているコールファッカンのMuhammad Khamisによれば、現在発掘中の地は20世紀に入るまで廃墟であったという。オマーンとの地域的な戦いが1808年にあり、殺戮された遺体が散らばり血が染みこんだ地には人が住まなかった、あるいは1521年にポルトガルが殺戮をしたときに町が破壊され廃墟になったと推定できる。狭い涸川を挟んだ西隣の海岸に首長シェイクの家や町が19～20世紀にあったにも関わらず、隣接する砦下の廃墟地に誰も住まなかった理由と推定できる。

発掘区域は砦に比較的近く、海岸際に建てられたと推定できるモスクの南側に近い。発掘区域は20世紀に海岸通りからモスク横を通して町内に入る主要道路に近い居住区の一部である。モスク南側壁から約40m南西南方向が発掘区域北東端となる。発掘区域と砦の間に建っていた住居群はイラン人あるいはイランから移住してきたアラブ人が空き地に新たに住み初めてからできたという地元人が何人かいる。1930年代にイラン国王の政策でイラン海岸に居住していたアラビア語を話す人々すなわちアラビア人がイランからアラビア半島に移動させられたためと解釈する地元民もいる。1935年にペルシア湾岸各地に移住を始め、1940年代頃には発掘区域と砦の間のそれまで家がなかった部分に、移動してきたイラン人・アラビア人が新家を建てたと地元民は言う。レベル1の家跡床面から出土した陶磁器は20世紀であり、15世紀の陶磁器の混じりもある状態から、400年間ほどの空白期間をおいて20世紀前半から新居住者が家を建てた場所と推定できる。

平屋のモスクが発掘区域東北端から40mの間隔を空けて北側の海岸側に残り、地元民はモスクの北側は海岸だったという。1980年前後の写真にはモスクの海岸側に1列の家並が見える。モスクの開き戸木枠にはヘジラ1359年と彫刻されている。西暦1937年にモスクが建てられた可能性がある。このモスクが建てられる前、同じ場所に大きなモスクがあったと言う地元民がいるため、それ以前からモスクがあったと推定できる。町東側外れにあったモスクを新居住者が建て直したと推定できる。

町跡西側部の海岸道路に沿って20世紀末建造の大きな新モスクがあり、隣接する新モスクの山側に住んでいたFatimaは1970年代の子供の頃、家の窓から足を出すと海水に触れたという。現在の舗装道路は海岸砂浜に建設されたことは明白である。この発掘地の西側海岸部にコールファッカン首長の家があったから、20世紀町の中心部は発掘区域よりも西側である。

エム・ゴバーナに居住した人々の生活はアラブ首長国連邦が成立する以前は、漁業、真珠採取、農業、貿易などと仮定できる。発掘でその具体的な証拠は未発見であるが、想像を交えながら自然と地勢を基に推定してみよう。地元民Abdullah A. Alnajjarは、以前は真珠採取と貿易が生計だったと言う。夏は真珠を採

り、冬にインド方面を含めて貿易に従事した人々がいたことは疑いない。アラビアの一般的な港町の状況と同じであったことを確認できる。町を見下ろす山上の平坦地に残る畑は小麦栽培を示し、今も産業の一つである近海漁業もインド人雇用者が現在担当しているが、主産業の一つだったと言えるだろう。今も残る町西側に接する農園ではナツメヤシを栽培していたに違いない。コールファッカンと比較的雨の多い地域であり、現在も周辺地域にDiba, Masafiなどのミネラル水産地がある。デーツや野菜類の農業も日常生活を支えた産業であったと思われる。ただし、真珠採取は20世紀末にはまったく実施されていない。

14～15世紀の出土陶磁器から遠隔地貿易の状態と地域の実態を調べることがコールファッカン発掘の主要な目的であった。海上貿易を担った人々の生活の場が発掘した遺跡であり、その人々が日常生活で使用した陶磁器の破片が貿易と生活を伝える。貿易と真珠採取、漁業は船を使用し、船は海岸近くの入り江または砂浜に停泊した。船の具体的な状況は復元できないが、貿易の結果としての各地で生産された陶磁器の破片は歴史資料として利用できる。そのため、陶磁器の種類や器種の分類は基本的な整理項目となる。産地分類や年代推定も重要な項目である。貿易を語る時、数量や重量も重要な項目となる。

産業は時代的に変化するが、基本的な生活が継続的であることも一般的なことである。具体的な出土品の様相と性格から、歴史的な変化を推測することも研究目的の一つとなる。第2次発掘調査終了時点では表土層及び第1層のみの発掘であり、時代的な変遷を示す資料がなかった。第3次発掘調査では漁業と貿易を行ったと推定できる魚骨や東・東南アジアの陶磁器などが家跡とともに発掘され、ほぼ同じ時代に都市となり同じ時代に廃墟となったジュルファール遺跡及びその出土品の比較検討が新たな課題となった。

## 第7章 コールカルバ(Khor Kalba)町跡

### 調査目的

コールカルバ町跡はオマーン湾岸のイスラーム時代後期の町跡遺跡である。北緯25°01'東経56°21'に位置する。コールカルバ町跡はオマーン湾岸に沿う平地にある。アラブ首長国連邦とオマーンの国境に近い地域である。1994年の踏査でイスラーム時代後期の町跡と推定したが、地表面には陶器片も少なく、発掘調査は行わなかった。2001年、周辺の住宅開発が進み、町跡を含む地域にまで住宅が建設される予定となり、シャルジャ博物館のサバは町跡を遺跡として周辺の住宅地から保護することを望んだ。2002年1月15日、サバ、イッサ、佐々木はコールカルバに行き、海岸に建つ古いモスクの内陸側を中心とした地域を遺跡として保護する範囲と決めた。

そのため、この遺跡推定範囲に建物跡やどのような層位があるのか、建物跡があればいつの時代かを調べるため、2003年3～4月に広範囲にトレンチ調査を実施した。このような経緯で発掘をしたが、研究の主目的は古い時代の遺跡を解釈するための比較資料を入手することにあった。

### 調査経緯

2003年3月10日、日本発。12日、シャルジャ博物館で調査準備。13日、トレンチを2カ所設定。15日、6時30分、パキスタン人作業員16人、日本人4人で発掘開始、12時30分終了。16日、トレンチ2本を継続発掘。Fortから250mほど西に設定したトレンチには数枚の砂層が水平堆積するが、建物遺構は未発見。土器片が僅かであるが出土する。17日、古いモスクのミヒラブを基点とし、西側にトレンチを3カ所設定する。西側

に200mの点から10m西、2m北の長さ10m、幅2mトレンチ、同様に西側に400m、550mの点から長さ10m幅2mのトレンチを設定する。新たに設定した3カ所のトレンチ発掘を始める。400m部分のトレンチで南北方向に薄い板を2列に立て、板石で蓋をした墓が発見された。狭い石囲い内に人骨が残る。Fortから250mほど西に設定したトレンチ発掘は終了する。18日、古いモスクミヒラブを基点として400m西側の点から北側に2カ所、南側に1カ所、長さ10m幅2mのトレンチを設定する。発掘はまだ始めない。古いモスク近くの海岸の海水面は午前9時頃、潮が満ちて高い。その面を仮に海拔0mとして、テント前の電柱横に石を置き、その面を0.97mとする。19日、古いモスクの近くの海岸で満潮に近い状態の海水面を海拔0mとして、トレンチの地表面を測定する。1mよりも低い部分が大部分である。最近廃墟になった町跡の地表面がもっとも高いが、それでも1m前後である。もっとも高い部分はFortの壁周辺で3mほどとなる。壁の崩れ土が堆積しているためである。20日、トレンチの発掘。出土品の整理。アメリカがイラクを攻撃。21日、一時雨。22日、一時雨。トレンチ継続発掘。砂地の面に土器片が散布するが、砂面下からは土器片が出土しない。Fortに隣接するトレンチの上層から比較的多くの土器片が出土する。23日、朝一時小雨。トレンチ発掘を続けるが、砂地の壁が崩れる部分が多く、出土品はない。24日、一時小雨。トレンチ発掘継続。25日、古モスクから西に400m、北に100mの地区に40×30mの発掘区域5C07,08,09,17,18,19,27,28,29,37,38,39を設定し、発掘を始める。地表面は周辺よりも数十cmほど高くなり、壁材料の珊瑚やビーチストーンの小片が高くなる部分に見える。土器片も周辺地域より多い。基礎石積み漆喰泥壁の家があったと推定できる。少し高くなる部分の外側の砂を10cmほど取ると、水平に堆積した白い粉状砂面が現れる。この発掘区域をHouseと呼ぶ。26日、Houseの発掘を続ける。漆喰を含む粉状白土（砂）の面が砂地上に広がる。この面上で小振りの石が数個まとまる部分がある。壁部分と推定できる。地表面に見える石は珊瑚とビーチストーンであり、いずれも小さな破片となる。壁基礎に使用したと推定できる。Houseの発掘区域外南側には数件の家跡がある。セメントとコンクリートブロックを使った家跡である。コンクリート使用の家よりはやや古いHouseを発掘している。数片の中国陶磁器と小さな施釉陶器片、やや破片数が多い土器が採集されるが、全体の数量は少ない。出土品は18～19世紀頃のものである。墓の発掘も続ける。Khor Kalbaに住む23才男性（アイルランドの大学医学部留学中）が祖父からこの地域のことを聞いて伝えてくれた情報。「ラーブRa'abとは彼らを指すTribe名である。町名はKhor Kalbaである。町にcity wallがあった。東側の海岸にはcity wallがない。南と西、北の三方にcity wallがあった。南側のcity wallは古モスクから西に延びる。百年か百五十年ほど前にchicken pox水疱瘡が流行り、百人ほどの子供が死んだ。その墓が今発掘しているものらしい。」小さな子供墓であることと符号する。27日、前日と同じ場所を継続発掘する。裁判所勤務の若者が言う情報。「発掘している場所はMuslla al-Aidという名前、祈りの場である。Aid al-Fitarでラマダン後と、Aid al-AdhaでDho al-Kida後に使用する。現在、石堀で囲った墓地予定地は子供用である。大人の男と女の墓地はさらに南側にある。」29日、Houseの発掘。砂地の上に漆喰と砂を混ぜた白色粉状土が広がる。数十cmの砂に覆われた部分と、地表面に現れる部分がある。この粉状土の下は厚く、家跡の重なりはないようである。Fortのトレンチで、石積み井戸跡、竈跡を発見。パン焼き竈は内径22cmで小型である。竈の上面は113cmで下面は74cmである。竈上面と同じ面に小さな炭片や魚骨片、貝殻片が散らばり、生活面であったことが分かる。その面より上の堆積層に同じようなものが含まれ、パン焼き竈が使用された当時の堆積層であると推定できる。30日、Houseと墓の発掘を継続。31日、Houseと墓の発掘を継続。Houseの平面図を1/100で描

き始める。4月1日、Houseと墓の発掘を継続。2日、Houseの発掘。砂で薄く覆われた壁基礎がいくつか現れ、長方形の室がいくつか確定できた。家外と思われる白色粉状土の上に円形に赤く焼けた跡が残り、炉跡または竈跡と推定できる。3日、暑く風が強い。東南隅で竈が出土する。パン焼き竈ではなく、羊などの動物肉を焼く竈のようである。5日、Gulf Newsに発掘記事が載る。カルバ図書館に勤める現地人の情報。「30年ほど前まで、コールカルバはZaabi族の人々が150軒ほど住んでいた。西方向にある農園に夏移動し、冬は暖かい海岸の町に住んだ。天然痘または水疱瘡が流行り、町の南に患者を隔離した。多くの子供が死んだ。」6日、Houseの発掘。砂で覆われた部分の発掘を継続。漆喰混じり土の床面が広がるが、壁がはっきりしない。基礎と推定できる面と床面は同じ平面にある。壁の立ち上がりは残らない。東南部に掘立柱の穴が並んで発見される。7日、Houseの壁を検出する作業と平面図作成を続ける。全景写真撮影。8日、House現場調査の最終日。写真撮影と平面実測。墓トレンチと400mトレンチの埋め戻し。発掘現場撤収。最高気温37度でやや汗ばむ。9日、作業員はFortに隣接する深いトレンチと墓トレンチを埋め戻しする。シャルジャ考古学博物館に英語と日本語の日誌・報告、写真を提出。機材、出土品を博物館に置く。4月10日帰国。

### コールカルバ町跡の地勢と位置

北緯25°01'東経56°21'に位置する。アラブ首長国連邦シャルジャ首長国コールカルバは1976年地図によると、カルバの南に当たる地域の海岸はコールカルバKhawr KalbbaまたはコールザーブKhawr Zaabと呼ばれ、クリークが海岸と接する北側海岸に沿って、南北500m東西300mほどの町ザーブZaabがあった。それ以前の町の状態は不明瞭であるが、旧住民の話では同じ地域に住居があったという。この町は調査時点で居住する人がいない廃墟となっているので町跡と呼ぶ。この地図の町を1970年代町と呼ぶことにする。1970年代町跡内の南部にFortがあり、Fortの出入り口は東側すなわち海側にある。現在、旧住民は新居住地区に移住して町跡は廃墟となり、ほとんどの建物は撤去されているが、一部は古い町を知る遺産として保存されている。

町跡は東側がすぐ砂浜海岸になり、南から延びてきたクリークの出口部が東南側となる。南側に大クリークが延びて、1.5kmほど南で3本の支流に分かれる。町跡の西側部には浅いクリークが南から北に小支流として入り込む。南方向に延びる大クリークは2本に分かれて、ほぼ並行して南に延びる。大クリーク2本の支流に沿って、今でもマングローブが広範囲に茂る。町跡の南西側は東西と南をクリークに挟まれた幅1km弱、長さ1km強ほどの狭い平坦地が広がり、墓地として使用されたと旧住民がいう。南方向に延びる大クリーク2本支流はさらに南に長く延び、オマーン国境付近まで続いている。Zaabの海岸にある町跡に農耕地は少ないが、町跡内とその周囲に僅かだが農耕地のあったことが、現在ナツメヤシの茂る範囲から推定できる。

町跡のある海岸から岩山が連なる麓まで4kmほどである。1km強の部分に小クリークが入り込み、1970年代はマングローブが茂っていた。そこから岩山麓までの2.5kmほどは海拔5~6mから30mの緩やかな傾斜地となる。1970年代地図には町跡から西に2kmから2km弱ほどの範囲が農耕地と記されている。海拔は8mから18mの範囲である。山麓の水を利用したナツメヤシ等の畑がそれ以前からあったと推定できる。灌漑施設を利用したことも考えられるが、それよりもこの海拔面で水が湧いた可能性が高いと思う。海岸の町Zaabに冬期間住んで漁業に従事し、夏期間は農耕地に居住地を水平移動したことが現地人の話から推定できる。ナツメヤシの収穫時期も移動原因の要因であったろう。



地形や植生、居住域から、漁業と農業が主産業であり、マングローブも利用したと推定できる。マングローブは燃料、炭、家や船の建材になり、クリークではマングローブで育つ魚介物も採取されたであろう。

Zaab周辺には、町跡から南3km、西3km強の山裾の地点にアルガイルAlghaylがあり、この集落は古い町と言われている。アルガイルの1.5kmほど南から岩山が連なり、その地域は現在オマーン国となる。

Fortから南南西250mの地点に古い単室のモスクがあり、現在はラウンドアバウトの中に保存される。放置されているのではなく、数年おきほどに外壁が修復されており、礼拝の場として利用する人もいる。海岸から数十mの場所に独立して建っていたが、現在は南側に道路を隔てて隣接する大きな新モスクが建つ。町跡からは離れた独立して建つモスクであったが、現在は古モスクの南側にも建物が見られる。2003年3月18日の満潮に近い状態の海面を0mとすると、2つのモスクが建つ平坦面は1.4mほどとなる。Fortの壁崩れ部地表面は3mほどの高さになるが、その他の1970年代町跡地域は1mから1.5mほどの高さの平坦地となる。1970年代町跡の南西部の地表面の高さは古モスク西側の200m地点で0.34m、400m地点で0.57m、550m地点で0.78mである。

### 遺跡の状況

古いモスクから西側550mほどの範囲の地表面に土器片が散らばる。古モスクから西方向に引いた東西線を軸線にすると、その南側は100mほどで土器片がほとんど見えなくなる。北側は200mほどの範囲に土器片が散らばる。それより北側は撤去した住居廃材等があり、土器片の散布は不明瞭である。

1994年踏査時点の筆者の観察記録は次のようであった。「古い小さな白いモスクがコールカルバの港の近くにある。モスクの南西部、すなわち廃墟となったコールカルバ町の南部に平坦な地が広がる。平坦地は、東が海とクリーク、南西が小さなクリーク、北が最近廃墟となった古いコールカルバ町に囲まれている。地表面は平坦で海拔2~3mである。家の泥壁の痕跡が、200m四方の範囲に見える。18世紀以降の陶磁器、とくに19~20世紀の破片が地表面に散乱している。青釉下黒彩陶器、刻線文土器、それに少数の中国染付を発見した。」しかし、2003年調査時点では泥壁家跡が地表面に見えない。ブルドーザー等によって地表面が変化したらしいことが原因のようである。南西の小クリーク支流と呼んだ部分は埋め立てで平坦な陸地になり、区画割りされて道路と住居が建設済みである。土器片の散布する範囲は1994年踏査時点の観察よりも広がるようである。

### トレンチ

地表面で土器片が見られる範囲内及び土器片の散布が少なくなる境界の地域の計7カ所に10m×2mのトレンチを設定した。このうち、Fort西側のトレンチは長さを30mに延長し、墓が発掘されたトレンチは10m×7mに拡張し、Houseの推定場所は40×30mの発掘区域とした。地表面の高さは30~80cmで、-90cm前後で砂と小砂利が固まり岩のようになる。-110cmで水が湧いた砂地の地点がある。

### 層位

細かな貝殻片を含む砂層が主となり、間に数枚の薄い貝殻片層がある。水平堆積あるいは緩やかに傾斜する。数枚の貝層の下方に小砂利層が堆積する。小砂利層は東の海岸寄りが高くなる。Fort隣接トレンチを除くと、貝層や小砂利層、及びその下層からは土器片などの人工物が出土せず、上から掘り込んだ墓以外の遺構はない。貝層と小砂利層は自然堆積層である。

Fort隣接トレンチは生活面を含む生活に伴う層位が十数枚堆積しているのを確認した。掘り下げた範囲で

は貝層と砂層がほぼ交互に堆積しているのが見られる。いずれの層も貝殻と魚骨、土器片が含まれ生活層である。発掘した厚さ3mほどの堆積は15層に分かれる。

### 遺構

地元の言い伝えでは、Houseを発掘した付近は年に数回人々が集まって使用する特別な祈りの場であった。ただし、それが具体的にどの場所であるかを特定することは難しく、発掘したHouseの地点ではないことはわかる。現在は囲いだけで天井がない広場が町の西北方向にあり、町の人々が集まる特別な祈りの場として使われている。

地表面の大部分で建物跡は見えない。最近のセメントを使用した家跡は地表面に見えるものがある。泥壁建物跡は5C区で発掘したが、これは地表面に一部の崩れた壁土が見えたことから存在が確認できた。この建物の建つ砂地面と同じ面を掘り下げると砂層となり、また室内床砂を50cmほど掘り下げても同じような砂層となり、下層に遺構はない。他トレンチでも砂地を掘り下げたが、Fort隣接トレンチを除いて、砂層内に建物跡は見つからなかった。居住地は限られていたことがわかる。

古モスク西側200mの5E99区で、板石囲い墓、板石覆い墓、粘土敷墓の3形態の墓が11基発見された。古モスクの数百m西南部は以前墓であったと現地人が言う。発掘した墓は100～150年ほど前に水疱瘡または天然痘で死んだ百人もの子供を埋葬したものであるという現地人の記憶に対応するものと推定できる。板石囲い墓は平面が長さ190～200cm、幅30～35cmほどの長方形で、砂地を小砂利層まで掘って両側に高さ35cmほどの自然の板状石を組み合わせて立て、遺体を伸ばした状態で埋葬し、上を板状石で覆う。長径はほぼ南北方向を向き、墓1,2,3は北側に頭骨が見える。板状石の大きさは35×25、厚さ5cmほどで、不整形に割ったままの状態である。板状石で囲まれた内側は170～180×20～25cm、高さ30cmほどである。底石もない簡単な箱式石棺ともいえる。この形態の墓を簡略化した板石覆い墓は、3枚の板石を遺体の上に置いたものがある。この墓には乳児の骨があった。粘土敷き墓は、焼かれていない粘土質土を平面長方形に砂上に置く。この下の一部を探ると骨はなく、上に骨は見えないから、墓ではない可能性もある。ただし、小さな穴に骨を埋めた場合は下に残る可能性がある。板状石組み合わせで遺体を覆う方式が基本である。

泥レンガ壁家と推定できる家跡は地表面で数軒推定でき、そのうちの1軒を発掘した。砂地の上に漆喰と砂を混ぜた白色粉状土が広がる。数十cmの砂に覆われた部分と、地表面に現れている部分がある。壁基礎部分には珊瑚やビーチストーンの小さな塊が含まれる部分がある。すでに削平された部分が多く、床面と壁基礎面が同じ高さとなる部分が多い。床面と周囲の砂面を掘り下げても砂の堆積のみで、砂層内に家跡の重なりは見られない。しかし、泥壁家の面を覆うように高くなる面に柱跡が並び、夏家と推定できる。泥壁家が先に造られ、柱跡家は後に造られたと推定できるが、同じ居住者が使用したのであろう。

家跡の平面形は狭い部屋が2列ないし3列、南北方向に並ぶようである。壁厚さは50cm前後のようである。間取りは平面が長方形で、室内幅1.9m、室内長さ5mほどの部屋が並ぶようすが確認できた。西側室内の床は漆喰混じり土、東側室内の床は砂地である。西側が居室、東側が壁囲い内の屋根無し部分である可能性がある。

部屋の内外に炉跡が残る。家外の西北側と西側、東南側、及び室内北側に径30～40cmほどの円形または楕円形の赤く焼けた部分や黒灰及び白灰が薄く堆積する炉跡がある。4カ所の炉跡とも当時の地表面に掘り込んだ痕跡は見られない。

砂地の室内床面に、ビニール袋20×20×15cmほどの量の魚骨が重なって水平堆積していた。いずれもほぼ同じ大きさの骨である。魚の種類は1種類の可能性がある。黒く焦げたあるいは焼けた魚骨が大部分である。この場所で何度も魚を焼き、食べ残しの骨を放置し、その上で新たに魚を焼いたために放置した骨が焦げたという可能性がある。また、近くの場所で魚を焼き、焦げた骨をこの場所に捨てた可能性もある。

東南部隅で竈または貯水施設が発見された。漆喰泥が砂面上に薄く自然堆積する面に造られたと推定できる。表面は白く硬い漆喰で塗られており、指跡が表面に残り、内部に詰めた石が見える部分がある。動物肉等を焼きあるいは蒸し焼きにする竈または貯水施設と推定できる。壁上部は壊れていることが取れた石の痕跡から分かる。当時の地表面から21cmで底となる。底部はほぼ平坦で、漆喰塗りである。当時の地表面から9cm上まで残るが、それよりも高かったことは確実である。底面から30cm上まで残り、その高さで内径71cm、外径120cmである。内面底部の径は53cmで底部が狭くなり、底部はほぼ平坦となる。円形となる壁から南外側に張り出し状の部分があり、狭い通路状あるいはトンネル状になっていたように見える。竈の場合は通風口あるいは燃料を入れる穴の可能性がある。貯水施設の場合は水が流れ込む口になるだろう。この遺構のある部分は家周辺でもっとも低い。ここから西側のpitsのある面は傾斜して高くなる。この面と同じ面に泥壁の痕跡があるから、泥壁家を壊して傾斜した面が造られ、pits家と竈または貯水施設が造られたことが分かる。遺構内部には砂混じりの灰が底まで堆積していた。小さく割れた数点の土器片、巻貝2点、小さな動物骨1片、小さな炭片が数点出土した。漆喰面に熱を受けた痕跡がないから、内部で火を燃したことは否定でき、貯水施設の可能性が高いようである。

東北方向に2m離れた地点の砂層で、大きな棒状の石が割れた状態で出土する。調理用の石棒pounding stoneのようである。全面が良く焼けて赤くなっている。

Fortのトレンチで、石積み井戸跡とパン焼き竈を発見した。井戸壁は薄い板状石を水平に積む。トレンチ東側・Fort側から14.90mを中心としてトレンチ北側壁で発見された。薄い板状石を水平に円筒状に積み重ね、内径は55cm、壁厚さは19cmほど、外径92cmである。第4層層の厚い貝層の面から掘り込んでおり、当時の地表面から150cmの深さまで発掘した。

パン焼き竈はトレンチ東側すなわちFort側から2.50m離れたトレンチ南側壁で発見された。内径22cmの小型竈である。厚さ8cmほどの漆喰と砂を混ぜた淡ピンク粉状土で円筒状の形を作り、壁内部に石や土器片を補強材として入れる。竈の上面は113cmで下面は74cmである。竈上面と同じ面すなわち第10層の貝層には小さな炭片や魚骨片、貝殻片が散らばり、この面も生活面であったことが分かる。第10層の厚さは10～20cmほどであり、パン焼き竈が使用された当時の生活堆積層である。

## 出土品

土器片、施釉陶器片、貝殻片、魚骨・動物骨・鳥骨片が主な出土品である。出土地はFort隣接トレンチとHouse発掘区の2カ所に分けられる。ほぼ同じ組み合わせの出土品であり、同じ地域の同じ時代の特徴を示すと判断できる。

Fort隣接トレンチからの出土品。中国染付が3片出土した。17世紀の中国福建省染付碗、及び18～19世紀の染付碗鉢である。ヨーロッパの鉢、イランのストーンペイスト素地の染付鉢の小破片がいずれも1片ずつ出土した。Houseからも18～19世紀の中国染付皿片が出土した。施釉陶器は青色・淡青釉下黒彩文陶器、黄釉陶器、緑釉陶器、褐釉陶器が主である。土器は刻線文土器、彩文土器、無文土器が出土した。刻線文土

器は表面が白化粧土され、素地は淡ピンクから黄色である。文様の種類は幾何文や波状文、突き刺し列点文である。ジュルファール遺跡から出土した刻線文土器とは種類と素地が異なるもので、時代が新しいことがわかる。彩文土器はジュルファール遺跡から出土した彩文土器と類似しているが、時代は新しいものであろう。白化粧土した上に赤色彩色したものと、化粧土なしで彩色したものがある。素地は粒混じりの赤色土である。無文土器はジュルファール遺跡から出土した種類と同様の素地を使用している。赤色粗質と淡ピンクの2種類の素地がある。産地の違いを示すのであろう。こうした土器の組み合わせ傾向はジュルファール遺跡出土の土器とほぼ同じものである。継続して生産されていたものを基本的な生活様式が同様であったために使用したのであろう。

土器片を円盤状にして中央に孔を空けた土製品がある。紡錘車であろうか。

Fortに隣接するトレンチから出土した貝、魚骨、鳥骨、動物骨は食用残滓であったと推定できるが、その他のトレンチからの出土品は生活層が未発見であるから自然のものである可能性が高い。House地区から出土した貝は2枚貝が多く、食料残滓であると推定できる。これは自然堆積したトレンチから出土した貝の組み合わせと異なる。

トレンチから出土した陶磁器・土器は段ボール3箱をシャルジャ博物館に持ち帰った。しかし、分類が終わった出土品の一部は現地に埋めた。Fort出土品の一部（土器片、貝殻片）及びHouse以外のトレンチ出土の貝殻片は、古モスクから西に400mのポイント下1mほどに段ボール1箱内にビニール袋十数袋を入れて埋めた。House出土の貝殻の一部はビニール袋2袋に入れて、Fortトレンチの石積み井戸内に埋めた。

### 町跡と出土品等から景観復元

17世紀から20世紀のオマーン湾岸地域の生活を知る資料が発見された。生活空間の一部が復元でき、人々がそこで使用した生活用具としての陶磁器、食用とした貝殻や魚骨、鳥骨、山羊・羊骨の残滓から、生活様式の復元と他遺跡と比較することが可能となった。

こうした資料から推定できる生活を聞き取りや現在も残る風習も加えて復元してみよう。町は海側を除く三方が防御用の泥壁で囲われていた。泥壁内には密集して泥壁家と椰子枝を利用した家が建っていた。海岸は砂浜で、家が砂浜のすぐ近くまで建っていた。砂浜にはいくつかの漁船が陸揚げされていたが、多くの漁船は海岸近くの海に停泊していた。海岸には港施設などはなく、砂浜をそのまま港として利用していた。投げ網や地引き網を使った漁業が主であった。捕獲した近海もの魚は大小にかかわらず食料となった。鯛は砂地に干してラクダの餌や農耕地の肥料となった。壁で囲われた町の外にも少数の家が建っていた。発掘した家はそうした家の一つだった。泥壁で囲った敷地内の片側に細長い泥壁家を建て、隣に椰子枝で囲った家を建てた。泥壁家は狭い部屋で、漆喰泥床には絨毯を敷いていたかもしれない。泥壁家の壁内には海岸から採集した小さな珊瑚塊を入れて補強している。泥は近くの山から採取した石灰と粘土を混ぜたものである。屋根は平らで、近くのマングローブ林から切り出した短い曲がった木材を並べ、その上にナツメヤシ枝葉を敷き、泥を塗ったのだろう。木材にはナツメヤシの幹も使用した。

庭や農耕地（畑）に植えていたナツメヤシの枝を並べて壁とした家は、壁の角や中間にやや太い棒を砂地に突き刺した。その痕跡が柱穴跡として発掘されている。暑い季節の夜は風通しの良いこの家で寝たのだろう。あるいは屋根のない台上に寝ていたかもしれない。家外には焚き火の跡が残り、土鍋で調理し、コーヒーを湧かし、魚を焼いて食べた。パン焼き竈も近くにあったのだろう。ナツメヤシ枝家の近くには、

やや低い場所に浅い据え置きの貯水施設がある。砂地に石を置き、漆喰で塗り固めた水溜である。冬には一時的に降雨があり、雨水が流れ込んで溜まったが、いつもは水をロバで運んでいたのだろう。この水で食事を作り、洗濯し、時には羊や山羊、ラクダに水を与えたのだろうか。

季節によって居住地を変えていた。季節によって居住地を変えるのはこの地域では一般的なことで、海岸と山麓のオアシスを水平移動する場合と、山裾から山上に垂直移動する場合があった。この町は主要な生産活動が便利に行えるよう、海岸と数キロ離れた農耕地との間を季節的に短距離の水平移動をしていた。冬は主に海岸で網を使って魚を捕り、夏はナツメヤシの茂る農耕地に移動して45～50度近くまで昇る気温のなかでも風塔を利用し涼を取りながらデーツを収穫したのだろう。羊や山羊の飼育も盛んで、ヨーグルトやチーズも作った。食料は薄焼きパンやデーツが主となり、山羊肉よりは魚を食べることが多かった。魚は塩漬けや乾燥した保存食も含まれていた。

近隣の部族と交易をしたが、領地争いなどの対立や抗争もたびたびあったと思われる。病気が流行し多くの人々が死亡することもあった。コールカルバは百軒から二百軒ほどの部族で、オマーン湾岸周辺では一般的な規模の町であったろう。周辺の山麓には水が湧き、小さな村も点在していた。そうした地域の政治的結合については考古学資料が語る部分は少ない。

オマーンやイランで生産した施釉陶器を定期市などで購入し、日常生活用品として使用した。中国の染付碗皿も数は少ないが使っていた。椰子の枝葉で作った籠も一般的だったろうが、腐食したため発掘では出土しない。こうした生活用品はこの地方ではどこでも見られるものであったろう。ここで見られた生活様式はさらに遡る14～16世紀の遺跡景観復元に利用することが可能となろう。

## 第8章 ビスナBithnah町跡とオアラAwhala町跡

### ビスナ調査の経緯と目的

ビスナBithnahは海岸の町フジェイラFujairahから北西13kmのハジャル山脈内にあり、フジェイラと山脈内の町マサフィMasafiを結ぶ山脈内道路の中間に位置する。ビスナは古いFortが残り、町も古い時代から続いていることが推測できる町であった。筆者の1987年踏査でFort周辺の地表面にイスラーム陶器片が落ちていることを確認していた。Ann Benoist(French archaeological Mission in the U.A.E., CNRS)が実施したイスラーム時代以前pre-IslamicのBithnah遺跡発掘が2001年と2003年の春に行われ、発掘目的である鉄器時代Ⅱ期の土器と共にイスラーム陶器片も出土した。Ann Benoist及びAhmed Al-Shamsi, Salah Ali Hassan (フジェイラ博物館 Department of Antiquities and national Heritage of Fujairah) の許可のもとに、2003年8月、出土品観察をフジェイラ博物館で行った。本稿はその報告である。

P. Corboud (Swiss-Liechtenstein foundation for archaeological research abroad) はビスナ及び付近の遺跡踏査と発掘を1987年から1994年に実施した。筆者は表面採集土器等をフジェイラ博物館でスイス人が整理中に観察したが、その中にイスラーム陶器は含まれていなかった。今回のビスナ出土イスラーム時代陶器は、筆者が行ったアラブ首長国連邦オマーン湾岸に沿う1994年イスラーム時代遺跡踏査の資料、及びその後のルリーヤ砦、コールファッカン砦、コールカルバ町跡発掘資料と比較すると、山間地域の特徴を知る資料となる。

## ビスナ出土品紹介

Bithnah発掘陶磁器のうちからイスラーム時代陶器片を分類紹介する。出土品の大部分は無釉土器片である。壺瓶鉢クッキングポット類が多く、胴部片が多い。素地の色で分けると2種類になる。1つは大きな砂粒混じりの粗い紅色あるいは赤褐色の素地で、小型品には大きな砂粒の混じらないものもある。ほとんどが無文であるが、赤色の単純線で文様を描いた彩文土器もある。彩文は直接器表面に描くものが多いが、灰白色スリップを施した上に描くものもある。スリップのない土器は表面が赤色か黒色になるものが多い。2つめの素地は砂粒が少なく淡紅色で、瓶壺が多く、器表面に波状文や直線文を刻むことが多い。表面は灰白色スリップを施したものが一般的であるが、新しいものはスリップがないものが多い。

無文無釉土器の胴部片が出土品の大部分を占め、文様が描かれた土器や施釉陶器の量は少ない。そのため、文様のある土器や施釉陶器を発掘地点順に紹介する。発掘地点はBithnah 24, 44, 50の3地点である。

Bithnah 24出土の陶器。472,478緑釉下黒色彩陶器鉢、黄色素地。15世紀、イランまたは中央アジア。471緑釉陶器鉢、淡紅色素地。15-17世紀、イラン。389褐釉陶器鉢、灰色赤色素地。釉はほとんど剥げ落ちている。16-19世紀。378,382,403透明淡黄釉下緑色黒色彩陶器鉢、黄色素地、軟質素地。18-19世紀、イランか。UF310黄釉下刻線文陶器碗、黄色素地、18-19世紀。刻線文土器瓶、黄色素地。刻線文土器瓶、淡紅色素地。赤褐色彩文土器瓶、淡紅色素地。506透明釉下白化粧土上緑彩陶器鉢、淡紅色素地、硬質素地、底部。473黒釉陶器壺、黒色素地。口縁部に段あり、東南アジア産か。UF307刻線文土器瓶、黄色素地。381赤色彩文土器瓶、砂粒混じり紅色素地、注口付。479刻線文土器瓶、黄色素地。灰白色スリップ上に簡単な3本線単位の連続刻線文。胴部で屈曲し、文様は胴部上半部のみにある。17-19世紀。537土器クッキングポット、砂粒混じり赤色素地。表面にスリップなし。口縁部下横方向に薄い三角形の把手を貼り付ける。16-19世紀。

Bithnah 24 & 44出土の陶器。釉下赤色彩陶器鉢、黄色素地、釉は禿げ落ちている。灰白スリップ上赤色彩文土器瓶、紅色素地。刻線文土器瓶、黄色素地。

Bithnah 44出土の陶器。388,450緑釉陶器鉢、黄色素地。口縁部段あり、15世紀、イラン。UF110緑釉陶器鉢、黄色素地、15-16世紀、イラン。黄褐釉下灰白色スリップ上刻線文陶器鉢、淡紅色素地。470白濁釉（白色スリップ）上緑色黒色彩陶器鉢、紅色素地、硬質、外面は無釉でスリップなし、11-12世紀、イランまたは中央アジア。UF123淡緑釉下灰白色スリップ陶器鉢、紅色素地。UF129淡緑釉下灰白色スリップ上刻線文陶器鉢、淡紅色素地。スグラヒアト。441,449釉下白化粧土陶器鉢、淡紅色素地。口縁部。釉が剥げ落ちているため、緑彩があったか不明である。449黄褐釉下白化粧土上刻線文陶器鉢、淡紅色素地、硬質素地、外面は無釉でスリップなし、12-13世紀、イラン。UF112緑釉陶器鉢、黄色素地、18-19世紀。土器瓶、淡紅色素地。灰白色スリップ上赤色彩文土器瓶、砂粒混じり赤色素地、15-19世紀。刻線文土器大壺、砂粒混じり赤黒色素地。UF115灰褐釉陶器鉢、灰色素地。UF126緑褐釉陶器瓶、黄色淡紅色素地、16-19世紀。UF104緑褐釉陶器瓶、灰色素地、17-19世紀。440褐釉陶器鉢、紅色素地。軟質陶器。16-19世紀。445灰白色スリップ上刻線文土器瓶、黄色素地。細い刻線文で細かな文様を描く。357土器クッキングポット、赤色黒色素地。スリップなし。赤色彩文を口縁部は横方向、胴部は4本線を単位にして縦方向に描く。UF100土器クッキングポット、砂粒混じり黒色素地。スリップなし。赤色彩文を縦方向に4本線単位で描く。355土器クッキングポット、砂粒混じり赤色黒色素地。スリップなし。赤色彩文を口縁部は横方向に、胴部は縦方向に3本線または4本線を単位に描く。胴部上部の四方に孔付き把手がある。362土器クッキングポット、砂粒混

じり黒色素地。表面黒色。スリップなし。胴部上部に把手を貼り付ける。把手は凸レンズconvex lens状で両側に傾斜して下がり、左側が長い。217土器クッキングポットか、口縁部下縦方向に貼付文。外面に煤が付く。鉄器時代か。368,391土器クッキングポット、砂粒混じり赤色素地。スリップなし。口縁部下にやや中央部が上になり盛り上がる、小さな把手を貼り付ける。15-16世紀か。UF302a刻線文土器瓶、淡紅色素地、硬質素地、4片が同じ、灰白色スリップ上に点列状文。UF302b刻線文土器瓶、黄色素地、軟質素地1片、複線の乱雑な刻線文。UF302c刻線文土器瓶、黄色素地、硬質素地、直線状文と波状文。UF302d刻線文土器大瓶、砂粒混じり紅色素地、灰白色スリップが少し見える、頸部と胴部の境部分。UF302e土器内面に小さな点状窪みがある淡紅色素地、瓶か。446,500土器大壺、砂粒混じり赤色黒色素地。446口縁部、500底部。ただし、同じ固体ではない。鉄器時代か。UF125刻線文土器大壺、赤褐色素地。胴部外側面に横方向凸帯状文があり、その上に刻線で×の連続文。鉄器時代の土器か。UF110土器刻線文瓶。黄色素地。淡紅色素地。灰白色スリップ上に刻線文。

Bithnah 50出土の陶器。UF141a緑釉陶器碗、黄色素地、硬質素地、18-19世紀。UF141b透明黄釉下赤色彩文陶器鉢、黄色素地、硬質、18-19世紀。UF141c緑釉陶器鉢、灰色素地、灰色素地の一部は赤色となる、硬質、16-19世紀。UF141d緑褐釉陶器鉢、灰色に赤色が混じる素地、UF141c,dは釉と素地の色が異なるが、同じ種類である。赤色彩文土器瓶/クッキングポット、赤色素地、砂粒混じり素地、スリップなし、2片。土器クッキングポット、赤色素地、赤色砂粒混じり素地、スリップなし、把手付、1片。刻線文土器瓶、淡紅色素地、スリップなし。UF142a緑釉陶器碗、黄色素地、軟質素地、緑釉の一部に赤褐色が混じる、18-19世紀。UF142b内面黄釉・外面黄釉下赤釉彩陶器鉢、黄色素地、軟質素地、補修孔1つ、18-19世紀。UF142c黄釉下赤色緑色彩陶器碗、黄色素地、軟質素地、18-19世紀。UF142d内面緑釉・外面褐釉陶器鉢、黄色素地、素地はやや硬質、内面緑釉には赤褐色が混じる、17-19世紀。UF142e,f褐釉陶器鉢、黄色素地、素地はやや硬質、UF142dと同じタイプであるが、内外面ともに褐釉、17-19世紀。UF142g,h褐釉陶器瓶鉢、灰色素地、一部に淡紅色が混じる、硬質素地、褐釉には粒状の混じりがある、16-19世紀。UF142i,j灰白色スリップ上刷毛状文様器瓶、淡紅色素地、硬質、文様は素地に刻まれたのではなく厚いスリップ上のみに同じ道具で複数筋状文と波状文を描く、16-19世紀。UF142k彩文土器瓶、赤色黒色素地、砂粒混じり素地、灰白色スリップ上に縦方向の単純な赤色彩文、15-19世紀。UF142l,m彩文土器クッキングポット、赤色素地、砂粒混じり素地、外側口縁下に貼付の小さな把手あり、斜め方向に複数の線で彩文、15-19世紀。408,532灰緑釉陶器灰色赤色素地鉢、407赤褐釉陶器灰色赤色素地鉢、口縁部片補修孔1。396,409,539褐釉陶器灰色赤色素地鉢、17-19世紀。褐釉陶器はクンジュKunj wareと呼ばれて一括されることがある。しかし、褐釉及び緑釉が混じり、褐釉も様々な発色があり、素地は硬質のものと軟質のものがあり、赤色と灰色に発色しているため、同じ名称で一括することはできない。ただし、焼成条件が異なると同じ産地でも釉と素地の色に変化するため、釉と素地の色で産地分類することは難しい。産地はオマーンやイエメンの各地にあると推定できるため、クンジュと呼ぶことは適切でない。UF102緑褐釉陶器鉢、灰赤色素地。素地は硬質。540土器クッキングポット、砂粒混じり赤色素地。表面は黒色。胴部上部に把手を貼り付ける。把手は凸レンズconvex lens状で両側が下がるが右側が長い。

上記の他にやや大きな破片の施釉陶器や彩文土器等があることはAnnレポートからわかるが、Ann紹介品はいずれも博物館所蔵棚で発見できなかった。

## ビスナ出土陶器のイスラーム時代の状況

ビスナはWadi Hamの谷が1kmほどに広がった地点にある町で、農園の広がる場所である。フジェイラとマサフィを結び、山脈を越える交通の要所である。銅鉱石も周辺から産出したことがcopper mining sitesやsmelting ovens [Corboud et al 1988, p.22]からわかる。ただし、鉄器時代の採鉱miningと期待されていたBithnah 54のcopper melting ovensをD. Pottsが試掘し、charcoalsを採集して14C年代測定を行った。その結果はcal AD894-937/0.31とcal AD940-1010.0.69で、9-11世紀と判断された[Ploquin and Ohnenstetter 2003, p.8]。イスラーム時代の陶器が出土したビスナ発掘地点は24, 44, 50の3地点である。この地点はすでにP. CorboudがWadi Ham東側テラスで1990年に発見したもので、Bithnah 24 (fortified building) とBithnah 44, 50, 48 (集落or住居)と名付けられ、CorboudはBithnah 44で4カ所の試掘を行った[Corboud et al, 1994]。2002年及び2003年にAnn BenoistがBithnah 24, 44, 50の3地点を発掘した[Benoist et al, 2003]。Bithnah 44と50は現在のBithnah町及びWadi Hamの東側にあり、小さな谷で隔てられている。

Bithnah 44は50 x 70m、Bithnah 50は100 x 80mほどの広さがあり、イスラーム時代の墓が多数あり、ともに周囲に農園がある。44地点ではtempleと推定された建物跡Building B[Corboud et al, 1994; Benoist et al, 2003]から鉄器時代Ⅱ期(1100-600BC)の土器が出土した。鉄器時代の土器が多いようであるが、例えばbuilding Bに追加したroom P54の出土品は十数点が鉄器時代で、2片が最近のものという[Benoist et al, 2003 p.14]。Building Bの周囲にも石積み家跡が見え、Houses A,C,D,F,Jと名付けられた。また家跡発掘後にさらにHouses J,Kが発見された。House Aは2部屋と囲い庭をもち、イスラーム時代と推定された。床面上と崩落層から石製道具、ガラス・バングル片、イスラーム時代と鉄器時代の土器が混じって出土した。石壁は厚く、両面に石が積まれている。床は小石を10cmほど敷き、その上を土で固めている。この家下を発掘すると鉄器時代の層があった。House FはHouse Aに接した西側にあり、方形の1部屋である。石壁は薄く、片面だけに積まれる。家の内外から鉄器時代とイスラーム時代の土器が発見されたが、イスラーム時代土器は家外よりも家内からが多かった。House Cは方形の1部屋で、石壁は両面積みで厚く、幅80-100cmである。床は土を固めており、その上を崩落した石が厚く堆積し、その層をイスラーム時代の墓が掘っている。この層は遺物量が多い居住層で覆われ、16世紀頃と推定できる完全な瓶も出土している(筆者未見)。House Cの床面及びHouses A,F内から赤色黒色素地土器が多く出土している。House Cの下でHouse Jが発見された。鉄器時代の小さな土器片2点が泥レンガmud brick床面から出土したが、House Jの時代はイスラーム時代か鉄器時代か不明である。House Dは方形の1部屋で、石壁は両面積みで厚く、床は土を固めている。鉄器時代の土器片が多少あるが、最近のpotsherdも1片出土している。House KもJと同じ泥レンガ床であり、出土土器から鉄器時代Ⅱ期と判明したため、Jも鉄器時代のようなものである。

Bithnah 50地点では多くの家壁跡が地表面に見え、全域から鉄器時代とイスラーム時代の遺物を含む多量の遺物が発見された。鉄器時代のStructure Hと時代不明のHouse Iが発掘された。Wall Gは高さ1.4m残る両面積み石壁で、Wadiの水を溜める小ダムである。関連する遺物はイスラーム時代である。

Bithnah24地点では鉄器時代Ⅱ期のfortressが発見された。イスラーム時代の遺構は不明である。

## ビスナ出土イスラーム時代陶器の特徴

### 無釉の土器

それぞれの地点から出土した陶器は、ほとんどが土器である。土器は素地と器表面の色で2種類に分け



られる。(1)赤色/黒色素地の土器、(2)灰黄色/黄白色の器表面の土器である。いずれもイスラーム時代の全般にわたってこの地域で見られる土器である。時代によって器形と文様に変化するが、同じ土器産地あるいは種類の系統であることが理解できる。詳細な編年はまだ確立していないが、ジュルファール遺跡やその前後の遺跡調査から、おおよその年代が推定できるようになった。土器産地はアラブ首長国連邦やオマーンの各地にあることがすでに知られており、とくに赤色/黒色素地土器の産地はワディハキールWadi Haqirやムサンダム半島などの各地にあるため、産地を特定することは難しい。一部の研究者はJulfarタイプと呼ぶが、ジュルファール遺跡では土器を生産しておらず、しかもジュルファール遺跡は14-16世紀が中心であるため、その後に作られた赤色/黒色素地土器をJulfarタイプと呼ぶことは不適切である。

(1)赤色あるいは灰黒色が混じった色の素地の土器は、砂粒が混じる粗いinclusionsの素地が多い。素地の色及び焼成状態から、表面が赤色になるものと黒色になるものがある。灰白色スリップをかけたものが少量ある。無文土器が多いが、赤色彩文土器も僅かにある。14世紀はスリップなしの彩文土器が種であるが、15世紀以降はスリップを掛けた上に彩文する土器が多くなる。器種は壺瓶クッキングポットが主である。

(2) 灰黄色/黄白色の器表面の土器は、表面に灰白色スリップを施し、刻線文で装飾する土器である。軟質の黄色素地と、器壁が薄く硬い淡紅色素地がある。器壁が薄い素地の土器は、黄色素地から淡紅色素地へと変化する傾向があり、文様も複雑なものから単純で粗雑な文様に変化する。

#### 施釉の陶器

土器と比較すると施釉陶器の出土量はきわめて少ない。イスラーム時代以前の施釉陶器はない。白濁釉(白色スリップ)上に緑色と黒色で彩文した陶器鉢片が11-12世紀頃の製品。黄褐釉の下に白色スリップを施し、スリップ上を刻線で文様を描いた陶器鉢が12-13世紀頃で古いものである。緑釉下黒彩陶器鉢、緑釉鉢が15世紀頃の製品であり、この頃から後の時代の施釉陶器がいくつか見られる。18-19世紀頃には施釉陶器がやや多くなり、緑釉陶器、褐釉陶器、淡黄色陶器、赤色釉陶器がある。中国陶磁器は出土していない。

Bithnahには鉄器時代Ⅱ期(1100-600BC)に集落があるが、その後の時代の集落痕跡すなわち陶磁器はイスラーム時代まで未発見である。イスラーム時代前期の出土品は未発見である。イスラーム時代中期頃の陶磁器は少し発見されているので、集落の存在が推定できる。イスラーム時代後期あるいは17世紀以降の土器は多いようであり、集落もその頃から現在に至るようである。

海岸に沿う遺跡出土品と比較すると、コールカルバKhor KalbaやコールファッカンKhorfakkan遺跡から出土したものの一部が少量出土している。中国陶磁器が出土していないことは、山間の遺跡の特徴になる可能性もあるが、これから採集されるであろうと思う。ヨーロッパ陶器が出土していないことは20世紀以前に発掘地点の集落が廃絶されたことを示すのであろう。

#### 文献

Benoist, Bernard, Ploquin, Ohnenstetter, Saint-Genез, Schiettecatte 2003, French Archaeological Mission in Fujairah 2001: First campaign at Bithnah, CNRS, Maison de l'Orient, Lyon.

Benoist, Bernard, Hamel, Skorupka 2003, Second Archaeological Mission at Bithnah: Preliminary report, CNRS, Lyon.

Corboud, Hapka, Im-Obersteg 1988, Archaeological survey of Fujairah 1(1987): Preliminary report on the first campaign of the Archaeological survey of Fujairah (United Arab Emirates). Swiss-Liechtenstein Foundation for Archaeological Research Abroad, Bern, Vaduz, Geneva and Neuchatel.

Corboud, Castella, Hapka, IM Obersteg, 1994, Archaeological survey of Fujairah 3(1993): Preliminary report on the 1993 campaign of the Archaeological survey of Fujairah (United Arab Emirates). Swiss-Liechtenstein Foundation for Archaeological Research Abroad,

Bern, Vaduz, Geneva and Neuchatel.

Ploquin and Ohnenstetter 2003, *Paleometallurgy*, 6-9. (in Benoist, Bernard, Ploquin, Ohnenstetter, Saint-Genez, Schiettecatte 2003, *French Archaeological Mission in Fujairah 2001: First campaign at Bithnah*, CNRS, Maison de l'Orient, Lyon).

### オワラ、オウハラ、アーワラAwhala (Wahala, Ohala)町跡

2003年8月、オワラのイスラーム時代の集落を踏査する。フジェイラ首長国最南部の山麓部ワディに沿う、海岸から10kmほど離れた町である。コールカルバの西南にあたり、現在はオマーン国境に近い山間の町である。オワラではすでにオーストラリア[Potts 1996]とフランス[Petrie 1998]の調査隊が鉄器時代の遺跡調査を実施している。ワディ段丘上にある壊れかけたFortをフジェイラ首長国博物館が修復中である。20世紀まで使用されていたFort平面図を示す。Fortの周囲に鉄器時代の石積み壁が地表面に見える。石積み壁家跡も地表面に見える。ピスナで地表面に見える石壁家と同じ構造である。鉄器時代から最近の家まで同じ面に壁部分が見えるため、発掘して壁の年代を決定する必要がある。

Fort及びその周辺で最近のゴミからいくつかの陶磁器を採集する。2003年8月の採集品。いずれも地表面に落ちていた陶磁器を選別して採集した。新しい時代のものである。磁器。白磁コーヒーカップ、金色彩で椰子木が描かれる、20世紀。白磁コーヒーカップ、青色彩と赤色彩がある、20世紀。白磁皿、20世紀。染付鉢、手描きで草花文、20世紀か。染付、内面蛇の目釉剥ぎ、高台下部無釉、19-20世紀。磁器はいずれも中国製か。白濁釉上緑色黒色彩文皿、20世紀、ヨーロッパ製か。淡緑釉下青黒色彩陶器鉢、淡紅色素地。土器壺、外面器表面はスリップで黒色、内面はスリップなし、外面黒色スリップ上に赤黒色彩文、口縁部は横方向に塗り、口縁下方は斜め線を描く、砂粒混じり赤色素地、一部は黒色素地となる。土器刻線文瓶。1片のみ灰白色スリップ上に刻線文、紅色素地。5片はスリップなし、紅色素地。1片はスリップなし、黄色色素地。小片だが、点列文と波状文、点列文が見える。土器大瓶、黒色大砂粒混じり黄色色素地、外面器表面は刻線文上に黒色スリップ、内面はスリップなし。

#### 文献

Petrie, C., 1998, The Iron age fortification of Husn Awhala (Fujairah, U.A.E.), *Arabian archaeology and epigraphy*, 9:246-260.

Potts, D.T., Weeks, L., Magee, P., Thomson, E., Smart, P., 1996, Husn Awhala: A late prehistoric settlement in southern Fujairah, *Arabian archaeology and epigraphy*, 7:214-239.

## 第9章 フジェイラFujairah町跡

### 目的と調査経過

フジェイラは現在、オマーン湾岸北部のアラブ首長国連邦フジェイラ首長国の都市である。20世紀後半に入った頃、旧フジェイラ町はフジェイラ砦（北緯25°08'01"東経56°20'00"）に隣接する南側及び東側にあった。現在のフジェイラ町は南側に新たに作られた。旧町跡地点はイスラーム時代の町跡として以前から継続していた可能性があるため、2004年4月24日、フジェイラ国立博物館長アハマッド・アルカリファ・アルシャムシ Ahmad al-Khalifa al-Shamshi、博物館考古学者サラアハリハッサン Salah Ali M.Hassan、Fort修復責任者アムリックシン Amrik Singhの協力を得て、アブドルカデエル Abdul Kaderとパキスタン人作業員12人及び日本人でトレンチ発掘調査を始めた。同年5月9日、フジェイラ町跡第1次発掘調査を終了した。10日からトレンチ1, 2の埋め戻しを行い、トレンチ3, 4は掘り上げたまま次回の発掘を待つこととした。

## 地勢と環境

20世紀後半のフジェイラは近代都市に生まれ変わり、開発による自然地形の変更改変が著しい。しかし、アラブ首長国連邦でもっとも古い等高線の入った1976年の地図を見ると、旧地形を復元することが可能である。この時点ですでに扇状地の中央部を海に向かう中央道路が完成し、扇状地を放射状に延びる道路も数本が完成している。しかし、完成済みの近代的建物は少なく、近代的道路が完成する以前の地勢を地図から読み取ることができる。

ワディハムWadi Hamはフジェイラ首長国最大の澗川で、東側のオマーン湾に向かったなだらかに広がる扇状地を作る。澗川の北側にあるフジェイラでは、1976年地図では海岸線から幅1kmほどに耕作地が扇状地裾野の扇形に沿って長く延び、内陸側の耕作地境は10mの等高線とほぼ重なる。澗川の南側も含めて扇状地地下水を利用した農耕が行われたことがわかる。

フジェイラ町跡は扇状地内の北側部分の山裾に位置し、海岸から西側に1.8kmから2.0kmほどの範囲にある。町跡の広がりや東西200m、南北200mほどで、現在の地表面標高は10～10.5mほどである。海岸側から広がる農耕地と接する地域である。町跡の北側にフジェイラ砦Fortがそびえる。砦は周囲より10～12mほど盛り上がった小さな岩山上に築かれる。砦の西北1kmまでは農耕地であるが、それより西北側は岩肌が露わな山地となる。砦東北部に町跡のモスクがあり、その北側近くに農耕地に囲まれた町跡居住者の墓地がある。

## 遺跡の状況

フジェイラ砦の修復は2003年に完了し、2004年は砦の東南側の町跡と耕作地境に残る首長旧宅及び隣の首長家族の建物の一部も復元修復された。砦南側に広がる最近の一般住宅の建物跡はほとんどが崩れた泥小丘状となり、遺跡を訪れた10年ほどの間にかなり崩壊が進んでいる。

最近の一般住宅の敷地は泥レンガ壁で区画されている。10×20m～15×30mほどの大きさの敷地が一般住居では多いようである。敷地内の角部に平屋の居住用家が建てられる。家の平面形は長方形で外側が6.3×3.5mほどで、室内の片側に泥壁で仕切られた小さな部屋がある場合が多い。壁の厚さが片側で45cmほどあるので、室内の大きさは5.5×2.5mほどで面積は14㎡となる。現在日本の狭小ワンルームマンションよりも小さな部屋である。低い壁で仕切られた小さな部屋はトイレであろう。

地表面上に泥壁が残る家跡は壁基礎にワディの河原石である丸みのある黒色石を数段敷き並べ、その上に日干泥レンガを積み上げている。石の大きさは15～30cmほどである。積み石と泥レンガともに内外両表面は泥が塗られる。泥レンガは小砂利を含む現地の泥(粘土)で作られる。泥レンガの大きさは12×14×30cmである。泥レンガは小口面を外と内にむけて積み、その上下は泥レンガの長い面を外にむけて積む。片側に泥レンガを横方向にして積むと、壁の厚さは45cmほどとなる。泥レンガのつなぎの目土も同じ種類の泥を用いている。いずれの泥にも小砂利が含まれているが、自然堆積していた小砂利を含む泥をそのまま使用したためであろう。崩れた家の泥が風によって吹き飛び、小砂利のみが堆積して薄い小砂利層を形成している。

一般住宅は平屋で、向き合う両側の壁の上方が三角形となり、切り妻の屋根となる。近隣地域の家は多くが平屋根であるため、フジェイラ町跡の家の特徴となる。ただし、以前はラッセルカイマの一部に同様の形態の家があったことも知られており、限られた地域の伝統的な建物である可能性がある。壁の高さは

1.6～1.8mまでが4面とも同じであり、両側の三角形はその上に1mほど積み上がる。三角形壁の中央には明かり取りと通風の小さな窓が開く。屋根中央部に架けた梁材の両側にナツメヤシの軸や葉が葺かれる。1990年代初めまでは屋根部分が残る家跡もあったが、2004年には屋根が残る家がなく、壁の泥レンガもほとんどが溶け落ちたり崩壊したりしている。

## トレンチ

第1次発掘調査で町跡内にトレンチ4カ所を設定した。トレンチ1、2、3、4である。

### トレンチ1

砦南側となる町跡内の家跡と家跡の間に30m×5mの南北方向にトレンチ1を設定した。トレンチ1の南側点は北緯25度07分54秒、東経56度20分00秒である。この付近では北緯の1秒は約30.80m、東経の1秒は約28.01mである。トレンチ1は最近の家跡の外側部に当たり、トレンチの東西両側外と南側外に家跡壁が残る。地表面は標高10.60mである。トレンチの西側面で断面図を作成した。地表面に残る家跡とその居住者の堆積層を第1層とする。その下の20～30cmで家跡の石基礎部と泥レンガの境部の面が発見されたが、その面から家跡の建つ砂利層上面までを第2層とする。その下は小砂利層が堆積し、第3層とする。第3層からも土器片が少ないけれども出土する。第4層は粘土層で数片の土器片が出土した。第5層は黒砂層で、サブトレンチを入れたが、その下は掘り下げていない。

第1層。トレンチ地表面の下には白色や灰色の灰を多く含む小砂利混じり泥が堆積していた。焼けて赤黒くなった地点もいくつかあり、炉が築かれた場所であることがわかる。土器煮炊き用壺cooking potが白灰上に置かれた状態で発見されたが、多くの土器は小片となって堆積していた。

第2層。地表面下45cmから55cmで食用残滓であるハマグリ殻が集中して廃棄された場所があった。すぐ南に建つ家跡House 1の居住者の廃棄品であろう。小砂利と貝殻、土器片、灰は第1層と同様にどの部分の堆積にも見られ、山羊/羊の骨も出土する。北側には粘土が広がって堆積した部分があった。砂利層の上に粘土が堆積した部分があり、長径1mほどの範囲に丸みのある石が並んでいた。砂利層を掘り下げて築かれた水溜穴Basin (water tank)と推定でき、2つが並んでいる。東側をBasin 1、西側をBasin 2とした。いずれも砂利層に穴を掘り、壁部分に丸みのある小石を1列並べ、Basin 1の場合は5～6段の小石積み上げが残り、粘土を目土としている。小石積み上げは6～7段であったと推定できる。内側壁表面は粘土を塗っている。底部もほぼ水平に粘土を貼り付けている。内部の堆積土から土器片、施釉陶器片、骨片、貝殻片等が出土したが、その出土品の状態は2層堆積土と類似している。

Basin 1は平面形が楕円形で、長軸外径105cm、長軸内径80cm、短軸外径75cm、短軸内径45cmである。残存する壁上部の粘土には石が積まれていた痕跡が残り、その痕跡部分を推定した底までの推定深さは65cmである。層堆積土と類似している。Basin 2は平面形が長方形で、長軸外径110cm、長軸内径82cm、短軸外径77cm、短軸内径48cmである。底までの残存部の深さは40cmで、さらに1列の石段があったことが推定できるから推定深さは50cmほどである。

南側でも石積み基礎の上にわずかに泥レンガの痕跡が残る家跡House 1が発見された。石積み面の上で測定した標高は10.16m、10.34m、10.33m、10.42mの高さであった。石積みは2段見られ、その厚さは30cmほどである。石積みの面は第3層砂利層の上面である。家跡内の堆積土は黒灰と小砂利が混じる泥である。

北側から10m部分範囲の第3層砂利層を掘り下げた。ワディの自然堆積層である可能性が高いが、砂利

層内から僅かだが土器片が出土した。生活層ではないので、土器片は堆積した砂利とともにワディを流れてきた可能性がある。第4層の粘土層には生活の痕跡が見られなかった。北側6m部分範囲のみの第4層粘土層を掘り下げた。数片の土器片が出土した。第5層は砂利層である。第5層を下砂利層、第3層を上砂利層と便宜的に呼ぶこととする。第5層からも数片の土器片が出土したが、生活の痕跡が見られないので、砂利とともにワディの上流から流れてきたと推定できる。土器壺片の他に、褐釉陶器碗の小片が出土したため、第5層を含めてそれより上の堆積層は数百年以内に形成されたと推定できる。第6層は粘土層である。粘土層上面に小石が並んで堆積していたが、壁面や家基礎とは推定できず、自然堆積と判断した。第7層は細かな黒砂の層である。幅30cmほどのサブトレンチを少し掘り下げたが、黒砂層の下は掘り下げない。第7層も自然堆積の可能性が高いと思われるが、確認はできない。

発掘した層は比較的新しい時代に堆積した可能性が高いため、さらに下層を掘り下げないとより古い生活の痕跡がないことを断定できない。

#### トレンチ2

トレンチ2は砦に近い部分に設定した。5×2mの範囲を掘り下げた。北緯25度08分00秒、東経56度20分01秒である。地表面の高さは11.26mである。地表面には泥が堆積し、その下に小砂利層があり、粘土層も水平堆積している。上部を第1層として土器片を採集した。下部も3枚の薄い粘土層と小砂利層が交互に堆積しており、これを第2層として土器片等を採集した。全体にわたって土器片が発見された。その下は再び小砂利層となり、北側部分3mほどを10cmほど掘り下げた。土器片は出土していないが、トレンチ1と比較すると文化層と推定できる。

第2層の数枚の粘土層には白灰と赤く焼けた部分があり、生活面上にあった炉の痕跡とわかる。その他の薄い水平堆積する粘土層も生活面であった可能性が高い。さらに下層は未発掘である。トレンチの西側面で断面図を作成した。

#### トレンチ3

トレンチ3はモスクの東南側に設定した。10×2mの範囲を掘り下げた。北緯25度08分01秒、東経56度20分02秒である。地表面の高さは11.17mである。北側では表面に砂利を含む層が薄く堆積する。その下に厚さ10cmほどの粘土層が何枚もほぼ水平堆積し、その下は砂利層である。粘土堆積は水平堆積部分が多く、生活層と思えるが、泥レンガの崩れた堆積の可能性もある。粘土内からは僅かだが土器片が出土する。粘土層の下の砂利層は割れた石を含み、土器片が混じる。砂利層には黒色灰が見られ、炉があることがわかる。砂利層を少し掘り下げて、トレンチ3の発掘を止めた。

南側では表土の直下に石積み壁が発見された。丸みのある石を2列並べて壁とする。石積み2段が残存している。石積みの目土は粘土である。壁幅は30cmほどである。壁基礎は北側の表土面にある砂利層の上に築かれており、この砂利層は厚く堆積した何枚かの粘土層の上に堆積しているから、比較的新しい家跡である。トレンチの西側面で断面図を作成した。

#### トレンチ4

トレンチ4はトレンチ1の東北側に設定した。周辺部は現在も家跡が残るがトレンチ部分は更地となっている。5×10mの範囲を掘り下げた。表土を10cmほど下げるといくつか焼けて赤く硬くなった炉が発見された。白色灰の下に紅色に焼けた円形焼土が残る場合もある。発掘区域全体に灰と焼土が点在している。

東側に残存する家の敷地内の炉と推定できる。2004年の第1次発掘調査では、この面で発掘を終了した。

## 出土品

出土品の数量は都市遺跡の発掘と比べれば少量である。土器、施釉陶器、中国染付、青銅製品などが出土した。

土器は煮炊き用壺が主となる赤黒色素地が最多で、瓶が主となる刻線文が入るやや硬質の黄色素地が次に多い。赤黒色素地の土器には煮炊き用壺、蓋、水柱（把手付瓶）、壺があり、赤色彩文が施されるものがある。黄色素地の土器は胴部で鋭く曲がる形が一般的である。

施釉陶器はイラン産と推定しているやや緑色かかった透明釉下に彩文がある陶器、オマーン産と推定している褐釉陶器、ヨーロッパ産の施釉陶器、中国の染付がある。20世紀及び19世紀の陶磁器が主に出土している。施釉彩文陶器は鉢、碗が主で、壺もあり、軟質の黄色素地である。褐釉陶器は鉢、碗、瓶があり、硬質の赤色素地である。ヨーロッパ産陶器もある。中国陶磁器は染付と白磁、最近の上絵磁器である。

この他に、トレンチ4第1層からイラン産のstone pasteの透明釉下コバルト藍彩陶器（染付）鉢片が出土している。

## 町跡と出土品等から復元したフジェイラ町跡

オマーン湾岸北部では北からDibba, Bidya, Khorfakkan, Kalbaにポルトガル砦が築かれたことが知られている。Bidyaは古いオマーン型式のモスクの近くに、Khorfakkanは我々の発掘している海岸部の地域にあると推定できる。DibbaとKalbaはまだ築かれたであろう場所が特定できない。フジェイラはコールファックンとカルバの間にある町であるが、ポルトガル砦は作られなかった。16世紀頃には町としての機能を果たしていなかったのではないかと推定できる。

ワディハム扇状地の先端部に農耕地が広がり、農耕地に沿ってフジェイラの砦と集落、墓地が作られていた。墓地は集落の北側にある。砦の東側すぐ下方にモスクがある。砦の東南側に首長の住宅がある。一般住居は砦の南側にある。一般住居は南北200m、東西200mほどの範囲に広がる。首長の住宅はそれより東に50mほど飛び出す位置にある。最近まで残る家跡とその敷地から推定すると、100×100mの範囲に10軒ほど建ち、小岩がある場所や家跡が見られない場所もあるから、30～40軒ほどの家が同時に建っていたと推定できる。1家族が5～8人とすると200人前後の部族であったと推定できる。生活は農業と漁業、家畜放牧に基本をおいていたのであろう。海で魚を採り、真珠を採取し、船で交易を行い、農耕地でナツメヤシや野菜を栽培し、羊や山羊を飼うのが、他の集落と同じように生活の基本であったと思われる。

砦のみ周辺より高い小岩山上に築かれている。砦の築かれた小岩山の西側には他に3つの小岩山が並ぶ。東側の砦のある岩山は22.8m、西側の岩山はそれぞれ20.5m、24.2m、20.0mである。砦の外側基礎は18.5mほどの面となる。修復前には砦中庭に岩山頂上部が僅かに現れていた。砦の外観は入り口部の他に塔が4つあるが、そのうち3つは円形で1つは方形である。

出土品の年代は19～20世紀が大部分である。20世紀後半までフジェイラ町があった場所であるからきわめて妥当である。14世紀から16世紀にアラブ首長国連邦で一般的に発見される陶磁器は出土しない。この時代には発掘区域に町跡がなかったと推定できる。17世紀から18世紀の陶磁器はきわめて僅かな数量が出土している。扇状地上の集落は規模の小さなもので、大規模な町や継続的な町は海岸部かワディ内部の山間部にあったと推定できる。ワディ先端部に位置するフジェイラ町跡は19世紀以前、規模の小さな居住地

であったと推定できる。

町跡から海岸部にかけて扇状地先端部に広がる農耕地を利用した居住者が、フジェイラ町跡住民であったか、その他の山間部近くの集落に居住した人々であったか。そうした問題に答えるためには、フジェイラ町跡周辺地域の分布調査と遺跡発見及び発掘調査も必要となるが、周辺遺跡は近代都市形成によってすでに壊滅したと思われる。修復保存中のフジェイラ町跡の発掘調査とその成果は、この地域の歴史情報を知る資料を得るための基本となる。第2次発掘調査の課題は、トレンチ3の拡大発掘と、トレンチ4を3～4mほど掘り下げて下層の状態を知ることである。

## 第10章 ディバ

ディバDIBBA, Diba, Daba, Doba, Dvbo はオマーン湾の西北隅のくびれ部湾内に位置する港町で、ムサンダム半島の付け根にあたり、断崖絶壁が続くホルムズ海峡まで大きな町は存在しない。パキスタンやインドとの交易、ペルシア湾に出入りする船舶の寄港地としてディバは重要な位置を占める。ディバ湾岸にはポルトガル砦があった。三つに分かれた城壁に囲まれる家々が並び、城壁外にナツメ椰子樹園が描かれ、中央に方形石作り小城があり、壁は二重で上を歩ける強固な壁でつながる四隅の塔に大砲が配置されるという[P.B. de Resende]。司令官の住む区域に加えて、教会、倉庫、井戸があるとドゥ・カルディは図を読み取っている[de Cardi, Doe 1971]。豊かな生活と富の存在あるいは支配を想像させる図である。この図と同じような城壁が存在していたことをウィルキンソンは指摘している[Wilkinson 1964]。しかし、現状でポルトガル砦の確認はできない。

1994年の踏査で宋代青磁や14世紀の中国青磁を発見したが、その後は数カ所で比較的新しい陶磁器を採集する程度であった。2004年12月、中国の青磁や染付が散布する遺跡を踏査した。1994年踏査で陶磁器片が散乱するマウンドを見つけた地点に接するワディ内の農園のなかにある。2004年時点では畑となるが、地表面に陶磁器片が散布している。位置はN25,36,37, E56,15,45である。中国の青磁や染付、ミャンマー青磁などを表面採集した。地元農民は以前マウンドがあったが、削平されたという。すでに遺構が破壊されて残らない可能性があるが、試掘を行う予定である。

海岸に沿って警察署があり、その裏に砦Fortと呼ばれる小丘がある。石積み階段の痕跡が残り、地表面には14世紀の中国陶磁器から最近までの陶磁器片が散らばっている。砦の北側には現在のマーケットがあり、その付近からも近世の陶磁器が家建築工事のたびに採集されている。砦から徒歩数分の距離でシャルジャ博物館によって2004年にヘレニズム期の墓が発掘され、墓に隣接した部分でも住居跡が発掘され、18～20世紀の陶磁器が出土した。1片であるが、14世紀の中国竜泉窯青磁蓮弁文碗も出土している。

ディバは古い港町として有名であるが、考古学調査の成果は少ない。オマーン、フジェイラ、シャルジャの3国が狭いワディ内の町を分け調査しにくいこと、20世紀末から大規模な住宅地開発が行われたため遺跡が消滅したことがその理由である。古い家の建て替えて遺跡が発見されることがあり、シャルジャ領内では遺跡保護に積極的である。調査予定の農園内遺跡は現在シャルジャ首長国領である。

文献

de Cardi, B. & Doe, D. B., 1971, *Archaeological Survey in the Northern Trucial States, East and West*, 21-3,4; 225-289

P.B. de Resende, *El Livro do Estado da India Oriental* [British Museum Sloane MS.197, fol.149-150.

Wilkinson, J.C., 1964, *A Sketch of the Historical Geography of the Trucial Oman down to the Beginning of the 16th Century*, *Geographical Journal*, CXXX-3; 337-349.

## 第11章 オマーン湾岸北部遺跡の陶磁器

### 調査の現状

オマーン湾岸のイスラーム時代遺跡として著名な港町はソハールであったが、フランス人モニク・ケルブランが1980年代に現在海岸に建つソハール城塞内部を発掘すると城塞より古い時代の遺構が発見され、中国染付や竜泉窯青磁が出土した。ソハールはアラインと結ぶ貿易ルートのオマーン湾岸の拠点港町であり、発掘調査が実施された意義は大きい。オマーン湾岸北部はペルシア湾に入るホルムズ海峡に近い地域であり、その遺跡の歴史的な位置や意義を知るにはペルシア湾岸遺跡と比較検討することが必要である。しかし、1990年代前半まではオマーン湾岸で僅かな先史時代の墓を主とする発掘調査が行われていたに過ぎず、イスラーム時代の調査は我々の調査を除くと、現在でもフジェイラ博物館がコールファッカン北部ビドヤに残るビドヤモスク壁外の一部をトレンチ調査しただけである。オマーン湾岸イスラーム時代遺跡は本論で述べた遺跡以外に比較検討する資料がまだきわめて少ない。2001年暮、石油パイプライン設置に伴う工事でいくつかの陶磁器散布地が発見されたと聞くが未発表である。おそらく多くは石や粘土の遺構を伴わない18世紀以降のキャンプサイトと推測できる。詳細な分布調査がまだ必要な地域である。

### オマーン湾岸北部の陶磁器調査状況

オマーン湾岸北部アラブ首長国連邦内でハレイラ島ササン朝遺跡と同時代の陶磁器が採集される遺跡は少ない。ディバDibbaで1994年に工事中に発見された墓から出土したパルティア・ササン朝の緑釉陶器瓶があり、フジェイラ博物館が所蔵している。2004年にSeminar for Arabian Studiesのロンドン研究会でフジェイラ博物館のサラールによって報告された。シャルジャ博物館に所蔵される緑釉陶器瓶は2004年にディバで発掘された資料であり、未報告である。Kalbaの墓と推定されている地点から1990年代にカール・フィリップスC.Philipsが採集した緑釉陶器片はササン朝時代と推定できるが、2004年大英博物館で開かれたworkshopで検討したが、未発表資料である。オマーン湾岸のオマーン国ソハールからは海岸近くにオマーン政府考古局が1990年代にトレンチを入れた部分からササン朝青釉陶器が出土しており、ソハール城塞跡内に展示されていた。オマーン湾岸北部沿岸の遺跡からさらに出土することが期待できるが、現在は遺跡数が少ない。ペルシア湾岸のハレイラ島で発見されたウマイヤ朝陶器はオマーン湾岸ではまだ採集していない。ハレイラ島アッバース朝遺跡と同時代の陶磁器もオマーン湾岸では未発見である。ディバでアッバース朝陶器の可能性のある数片の陶器を1994年に採集したのみである。

12～13世紀と推定されているスグラフィアト（多彩釉刻線文陶器）は数カ所の遺跡から採集できた。カルバではワディ汎濫原や農園内の数カ所から採集したが、陶磁器を使用した遺構は未発見である。ルリーヤ砦からは多彩釉刻線文陶器が発掘されており、中国陶磁器とともに出土することから、13世紀後半の年代推定基準となる資料である。コールファッカン砦からも多彩釉刻線文陶器が数片出土している。これらはいずれも刻線文陶器のなかでは後半から終末にかけての資料である。



13世紀後半から14世紀前半頃の陶磁器は出土遺跡数が増加する。竜泉窯青磁碗や盤が採集できる遺跡はディバの各地点にもある。13世紀末を中心とするイスラーム陶磁器の種類と組み合わせはルリーヤ砦の出土品が基準資料として利用できる。中国竜泉窯青磁や白磁の年代がかなり限られることから、同時に使用されていたイスラーム施釉陶器の年代も限定して推定することができる。遺跡の状態からも限られた居住年代と推定でき、共に出土したイスラーム陶器の年代も同時期と推定できる。イスラーム陶器の緑釉陶器、黄釉陶器、黄釉緑色茶色彩陶器が主に出土し、それらの年代と型式をより正確に知ることができるようになったのは発掘の成果である。アラビア半島で出土することが珍しいミナイ陶器も小片が数点出土している。施釉陶器でもっとも多いのはイランの緑釉陶器及び青釉陶器であり、鉢碗が主である。次はイエメンの黄釉陶器で鉢碗が主である。青釉・緑釉陶器と黄釉陶器はいずれもわずかだが瓶もある。青釉陶器には釉下黒彩文が描かれるもの、釉下刻線文様があるものがある。黄釉陶器には釉上に褐色と緑色で彩文されるものがある。その他は少量だが、イランの多彩釉白化粧土上刻線文陶器（スグラヒアット）、透明釉下彩画陶器や白濁釉陶器、色絵陶器（ミナイ）がある。中国陶磁器の数量はイスラーム陶器よりも少ないがけっして希なものではない。土器あるいは無釉土器は廃棄量をもっとも多い。色絵陶器は人物文ではなく様式化された草花文あるいは抽象的な文様で13世紀前半と推定されるが、13世紀後半まで作られた可能性を示している。無釉土器は多くが壺や瓶である。フィルター付瓶は2片のみ出土し、エジプトでは一般的であったフィルターがペルシア湾岸やオマーン湾岸では一般的でないことをこの遺跡でも確認できる。

14世紀後半から16世紀の遺跡と出土品はペルシア湾岸では多く発見されるが、オマーン湾岸では少ない。ディバでは、1994年に私たちが表面採集した竜泉窯の青磁盤片、2004年にシャルジャ博物館イッサが発掘した竜泉窯の青磁蓮弁文碗片が数少ない14世紀の中国青磁である。2004年末のディバ農園内遺跡踏査で中国青磁、染付、ミャンマー青磁を採集し、海岸のFortでも同じ種類の陶磁器片を採集している。遺跡の分布がかなり多いと言って良い採集状況である。コールファッカン砦遺跡出土品は15世紀を中心とする中国青磁碗と染付、ミャンマーの青磁盤が目立つものであるが、大部分の陶磁器片は18～20世紀のものであった。清代の染付、色絵磁器は多く発見される。中国染付は碗、カップ、皿、中国色絵は碗、小碗、カップがある。イスラーム施釉陶器は多いが、その種類はジュルファール遺跡出土品などと異なり、明らかに時代差がある。褐釉陶器や緑釉陶器、土器、彩文土器もある。他にヨーロッパ施釉陶器も出土する。

コールファッカン町跡遺跡から14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が出土し、16～17世紀の陶磁器は少ないが、上層では18世紀から継続的に陶磁器が出土している。コールファッカン町跡第3層赤色土壁の家並みで使われた中国青磁、染付、ミャンマー青磁、タイ青磁、ベトナム灰釉陶器、イランの緑釉陶器、白濁釉陶器、オマーンの褐釉陶器などは、ジュルファール遺跡出土品と類似する物が多い。しかし、白濁釉陶器は少なく、ジュルファール遺跡の後半部の出土品すなわち15世紀の上層出土品と並行する時代が主である。両遺跡の出土品比較から研究が進むことが期待できる。16～17世紀の陶磁器は遺跡廃絶に伴うため少ないが、18世紀から継続的に陶磁器が出土する。

ビスナ遺跡出土の陶磁器は土器が大部分を占めている。土器は素地と器表面の色で2種類に分けられ、赤色/黒色素地の土器と灰黄色/黄白色の器表面の土器である。いずれもイスラーム時代の全般にわたってこの地域で見られる土器である。イスラーム時代以前の施釉陶器は見られない。11～12世紀頃の白濁釉上緑・黒彩文陶器鉢、12～13世紀頃の黄褐釉下白色スリップ刻線文陶器鉢、15世紀頃の緑釉下黒彩陶器鉢、緑

釉鉢もあるが、この頃から後の時代の施釉陶器がいくつか見られ、18～19世紀頃には施釉陶器がやや多くなり、緑釉陶器、褐釉陶器、淡黄色陶器、赤色釉陶器がある。同時期の中国陶磁器はまだ出土していない。ビスナやオワラはワディ内の山間部の町であるため、港町遺跡と比較して特徴を知る資料となる。

コールカルバ町遺跡出土の施釉陶器はイランの青色・淡青釉下黒彩文陶器、黄釉陶器、緑釉陶器、オマーンの褐釉陶器が主で、土器は刻線文土器、彩文土器、無文土器である。イランの刻線文土器は表面が白化粧土され、素地は淡ピンクから黄色である。いずれも18～19世紀を主とする資料と推定できる。ムサンダム半島周辺で作られた土器には彩文土器と無文土器があり、壺瓶や煮沸用具がある。

フジェイラ遺跡出土の土器は赤黒色素地が最多で煮炊き用壺cooking potが主となり、蓋、水注(把手付瓶)、壺があり、赤色彩文が施されるものがある。次に多い黄色素地の土器は胴部で鋭く曲がる瓶が主で、刻線文が入りやや硬質である。施釉陶器の多くはイラン産と推定されるが、産地や窯跡の研究はまだない。やや緑色かかった透明釉下に青・褐色彩文が施される陶器が多く、鉢、碗が主で壺もあり、軟質の黄色素地である。オマーン産と推定できる褐釉陶器は鉢、碗、瓶で硬質赤色素地である。ヨーロッパ産の施釉陶器、中国の染付、白磁、色絵もある。イラン産透明釉下コバルト藍彩陶器鉢も出土している。18～19世紀の陶磁器が多い。

#### ペルシア湾岸・オマーン湾岸の遺跡出土イスラーム陶器

イスラーム陶器はすでに100年ほどの研究の歴史がある。イスラーム陶器研究のうえで重要な役割を果たした遺跡はサマラであった。サマラの発掘成果から20世紀前半に前期イスラーム陶器の編年が作られ、中期イスラーム陶器の編年と概念はイラン高原の遺跡から採集された陶器から20世紀中頃～後半に作られた。しかし、その後に遺跡から発掘された多くの陶器は、イスラーム陶器の概念からかなり異なる様相を呈していることが判明してきた。だが、博物館の収集と展示は以前の研究水準で展開していた。さらに後期イスラーム陶器については研究が遅れた。前期と中期が美術的に優れており、その後は衰退したという誤った認識が広がっていたからである。イスラーム陶器研究と海上貿易史研究のためにペルシア湾岸とオマーン湾岸の遺跡を発掘し、遺跡出土のイスラーム陶器の姿を描く。

遺跡出土品の特徴は使用した場所がわかり、同時に使用した陶器の組み合わせが分かることである。イスラーム陶器の流通や年代を研究する資料としてペルシア湾岸遺跡出土陶器の歴史的価値は高い。しかし、小片で塩分が多く表面がかせて、美術品としての価値は低い。イスラーム陶器概説本にまったく紹介されない陶器がペルシア湾岸の遺跡から多く出土し、概説本改訂が必要である。13世紀後半以降の遺跡出土品は日本の博物館に所蔵されていないものがあるが、生活用品として使われていた。実際に生活で用いたイスラーム陶器の実態を紹介し、7世紀から19世紀に至るペルシア湾岸の遺跡から出土した陶器を考える。

#### ヘレニズム～パルティア朝の陶器

ヘレニズム時代の施釉陶器は小片が表面採集されているが、まとまった資料はディバの2カ所の墓から発見されている。フジェイラ博物館が所蔵する1994年に工事で発見された墓から出土した緑釉陶器瓶は紀元前後のパルティア朝の資料である。2004年にSeminar for Arabian Studiesのロンドン研究会でフジェイラ博物館のサラーが報告した。シャルジャ博物館が所蔵する2004年に工事で発見された墓から出土した緑釉陶器瓶は紀元後1世紀に限定される資料と推定でき重要である。

紀元前後100年以内の年代が推定されているエドゥール遺跡や、紀元前3世紀から紀元後4世紀までと

推定されているムレイハ遺跡から出土する緑釉陶器碗や瓶は、いずれも交易拠点都市から出土したメソポタミアの施釉陶器である。

### ササン朝～ウマイア朝の陶器

Kalbaの墓と推定されている地点から1990年代にカール・フィリップスC.Philipsが採集した緑釉陶器片はササン朝時代と推定でき、2004年大英博物館で開かれたササン～初期イスラーム陶器のworkshopで検討したが、未発表資料である。オマーン湾岸のオマーン国ソハールからは海岸近くにオマーン政府考古局が1990年代にトレンチを入れた部分からササン朝青釉陶器が出土しており、ソハール城塞跡内に展示されていた。オマーン湾岸北部沿岸の遺跡からさらに出土することが期待できるが、現在は遺跡数が少ない。

ササン朝からウマイア朝時代とくに6～7世紀の陶器はどのようなものか、ハレイラ島の遺跡出土品から考える。ハレイラ遺跡では4地域を発掘し、A地域とB地域は9～10世紀の施釉陶器が主となり、C地域は14～16世紀の施釉陶器が主で中国や東南アジアの陶磁器も出土した。島最南端のD地域は6～7世紀の青釉陶器が出土し、ここで取り上げる。島は南北に細長い8kmの低い砂丘で、地表面はほぼ平坦で遺構の痕跡が表面には見えない。2本の砂丘があり、内側砂丘の上に遺跡が残る。島の南部および南東部の海岸線では砂が流れ、岩が露出している。島内に植物は少ない。

D地域はササン朝からウマイア朝、6～7世紀頃の住居跡と貝塚が広がり、F1・M2・M3の3地点を発掘した。D地域3地点の出土品はほぼ同時代の製品である。メソポタミアの施釉陶器や現地産の土器が多く、施釉陶器は碗と瓶が主なもので、土器は壺や鍋が多い。D地区F1地点の3号住居跡は火災を受け、小さな1部屋から50個体ほどと推定できる壺や瓶の小片が焼土とともに出土した。素地分類から少なくとも15カ所の産地に分類できると推定できた。小さな1部屋に同時に保管されていた壺や瓶の産地がこれほど分かれるのは貿易港遺跡であるからだろう。ササン・ウマイア朝時代のハレイラD地域ではメソポタミア産の緑釉陶器と無釉土器、及びその他の地域の無釉土器が使用されており、図2に一部を示した。緑釉陶器と、スタンプ文やハニコム文のある大型陶器壺が特徴的な製品である。いずれもメソポタミアで作られたと推定できる。

エドゥール遺跡やムレイハ遺跡から出土する緑釉陶器碗は、ハレイラD地域出土緑釉陶器碗と類似性が強い型式である。同型式が数百年に渡って作られたとは受け入れがたいが、ハレイラ島南部の居住期間が数百年に渡り、しかも同型式の緑釉陶器碗が長期にわたって使われたと考えるのも難しい。D地区居住期間が100年か150年以内とすれば、6世紀後半から7世紀末という年代が妥当であろうと考えている。もっとも遅い年代を示すと思われるMound 3の堆積層は7層に分類できたが、その第1層から中国銭が出土した。すなわち8世紀頃までD地域が存続したと推定でき、Mound 3の終末年代は中国銭よりもさらに遅れる可能性もある。Mound 3第6層から中国褐釉壺の耳部片が出土し、褐釉陶器壺底部片はF1地点からも出土している。A地域やB地域に見られるアッバース朝陶器が1点も出土しないことから、ハレイラ島D地区の終末年代がハレイラ島A地区及びB地区より前であることは明らかである。

ペルシア湾岸のハレイラ島で発見されたウマイア朝陶器はオマーン湾岸ではまだ採集していない。

### アッバース朝の陶器

アッバース朝陶器はサマラ出土品で理解されているが、サマラ出土品はサマラが栄えた9世紀のみでなくその前後の陶磁器も含まれている。発掘された出土陶磁器は8～10世紀及び11～15世紀が主となる。アッバ

ース朝のカリフは836年から56年間、サマラを首都とした。ヘルツフェルトは1911年から1914年にかけてサマラを発掘し、都市遺跡調査のもっとも古い例の一つとなり、1925年のサーレ報告はイスラーム陶器研究の金字塔となった。サマラの時代はイスラームの特徴を備えた陶器が生まれ、輸入した白磁や青磁などの陶磁器はこの時代のイスラーム陶器に影響を与えた。サマラ出土品をサマラ産と言う人は多いが、多くは南メソポタミアで作られ繁栄した都市サマラに運び込まれたと筆者は考えている。

サマラ出土品を実測した筆者はアッバース朝陶器を次のように分類した[佐々木 1995]。緑釉型文陶器、黄釉型文陶器、白濁釉陶器、藍釉陶器、青釉陶器、青緑釉陶器、黄褐釉陶器、白濁釉上コバルト藍彩陶器、白濁釉上コバルト藍彩・銅緑彩陶器、白濁釉上銅緑彩陶器、白化粧土上透明釉上銅緑彩陶器、白濁釉上黄色(金色)または濃い黄色ラスター彩陶器、白濁釉上内面黄色(金色)および外面赤色ラスター彩陶器、白濁釉上黄色(金色)、濃い黄色および赤色ラスター彩陶器、白濁釉上赤色および黄色／緑色ラスター彩陶器、白濁釉上赤色および黄色／赤色ラスター彩陶器、白濁釉上ルビー赤色ラスター彩陶器、白濁釉上黄緑色ラスターに緑色と赤色散らしラスター彩陶器、白濁釉上多彩陶器、白濁釉上多彩刻線文陶器、白化粧土上緑彩刻線文陶器、白化粧土上透明釉上多彩陶器、白化粧土上透明釉上多彩刻線文陶器、施釉タイル、黄釉上銅緑彩陶器、黄釉上銅緑彩・マンガン紫彩陶器、黄釉上黒彩陶器、黄褐釉下刻線文陶器、緑釉陶器、緑釉上マンガン黒彩陶器、緑釉上黒彩陶器、緑釉下刻線文陶器、透明釉下青彩・黒彩陶器、透明釉下青彩・緑彩・マンガン褐彩・黒彩陶器、透明釉上黒彩陶器、青釉下黒彩陶器、青釉陶器、金赤色ラスター彩フリット陶器、無釉土器。この他に中国から輸入された白磁、青磁、透明白釉上緑彩陶器、白化粧土上透明白釉上緑彩陶器、長沙窯褐彩陶器がある。型文陶器がサマラ遷都以前からあり、中国白磁の影響で器形を変化させた白濁釉陶器が流行し、多彩の彩絵陶器が生まれる。白濁釉陶器碗と白磁碗の器形の類似点等が指摘できる。長沙窯の瓶と同じ技法・器形の黄褐釉陶器瓶もある。イスラーム黄釉陶器が唐代黄釉陶器と関連するように、東西世界で類似する技術や器形は多い。

アール遺跡の出土陶磁器は9世紀の青釉陶器と白濁釉陶器、11世紀の青釉陶器、白濁釉陶器、多彩釉陶器が主である。第1次調査で発見された遺物は二つのグループに分けられる。建物が発見された面の上に狭い範囲で居住平面が発見され、新しい時代の遺物を含む層であった。9世紀と11世紀の陶磁器が混じたため種類が多く、中国白磁碗は11～12世紀である。刻線文多彩釉陶器が10%ほどあり、11世紀以降である。単色釉陶器と多彩釉陶器があるが、ラスター彩陶器はない。第2次調査では、種類が少なく9世紀の単一時期の陶磁器が出土した。中国長沙窯陶器碗も9世紀であり、イスラーム陶器は単色釉のみでラスター彩陶器も含まれるが、多彩釉刻線文陶器や多彩釉陶器は出土しない。9世紀と10世紀の施釉陶器を分類することができた。

ハレイラ遺跡A地域とB地域から9～10世紀の陶器が出土した。島中央部のA地区砂丘は上部が平坦で島内最高地点となる。砂丘上は短期間連続的に居住されていた。出土品は一般的な生活用品ではない。大量の貝殻やラスター彩陶器、白濁釉陶器からみると、単なる漁民の野营地ではなく、軍隊の居留地と推定している。地表面の砂は風によって吹き飛ばされ、貝殻と陶器片等が地表面と地表砂内に集中している。砂丘周辺からはほとんど採集品がなく、周辺に遺構が存在する可能性はきわめて少ない。砂丘の北側は途切れるが、南側はしだいに低く狭くなって伸びる。ハレイラ島の中央から南部にあたる低い地域には16世紀以前の遺構がない。砂丘の北側では採集した遺物もほとんどない。島南端から1.2km北にあたる南方のB地

域に大きな低いマウンドがあり、これが砂丘と同じアッパース朝時代の隣合わせとなる遺跡で4km以上離れている。この間にアッパース朝時代の遺跡はなく、部分的に12世紀、15～16世紀、17世紀に断続的に居住された遺跡の存在が地表面で採集された陶磁器片から推定できる。A地域砂丘上は特殊な短期滞在型遺跡である。

ジュメイラ遺跡から9～10世紀及び18世紀頃の陶器が出土し、遺跡がアッパース朝の単純遺跡でなく、時代の異なる建物跡で構成される複合遺跡であることが判明した。しかし、アッパース朝期建物壁をそのまま後に利用した部分がある。陶磁器は施釉陶磁器と無釉土器があり、前期施釉陶器の多くはメソポタミア産であり、後期施釉陶器はイラン産が多く、中国染付やミャンマー青磁が含まれる。無釉土器は量が多く、産地は不明なものが多い。いくつかはアラビア半島産で、イラン産の土器も見られる。町並み配置と隊商施設が判明した遺跡である。

シラーフ遺跡出土の白濁釉青彩・緑彩陶器の素地には、メソポタミア産類似のものと異なるものがある。類似のものはメソポタミア産あるいはスーサ産であろう。異なるものは粗い鉱物を含み、産地が問題となる。シラーフ産の可能性とメソポタミア産の可能性がある。これまでシラーフでは無釉土器のみを生産していたというのが一般的な説で、窯跡を発掘したホワイトハウスや現地見学した佐々木も施釉陶器は生産されなかったと推測している。シラーフ産であれば生産と流通の歴史が変更されることになり、歴史的意義も再考しなければならない。メソポタミア産であれば生産技術と白濁釉青・緑彩陶器の年代が問題になる。

9世紀のアーリ出土ラスター彩陶器、10世紀のサマラ出土ラスター彩陶器、ハレイラ出土青・緑彩陶器、シラーフ出土白濁釉青彩・緑彩陶器の素地薄片を作成し比較した。その結果、シラーフ遺跡出土品は9世紀の白濁釉陶器よりも時代が遅れるメソポタミア産である可能性が高いと推定できた。

### 13世紀のスグラヒアト

多彩釉刻線文陶器は9世紀からメソポタミア産がサマラやシラーフで使用されているが、12～13世紀にはイラン各地で硬質紅色素地の製品が一般化する。コールファッカン砦遺跡から多彩釉刻線文陶器が採集されたが、隣接するコールファッカン町跡からは未発見である。カルバではワディ汎濫原や農園内から採集されたが、それを使用した遺構は未発見である。ルリーヤ砦から出土した多彩釉白化粧土上刻線文陶器は共に出土する中国陶磁器やイスラーム陶器から年代が13世紀後半であると推定できる。ルリーヤ砦出土品は緑釉と黄釉の2種類があり、単純化した型式となっている。

### 13世紀の色絵

ルリーヤ砦から色絵陶器（ミナイ）が少数ながら出土している。ミナイは小片3点で様式化された草花文あるいは抽象的な文様のものであり、この型式は13世紀前半と推定されることが多いが、ミナイの年代をより下げて考える出土資料となりうる。

### 13世紀後半の陶器

ルリーヤ砦から出土した中国の白磁・青磁・褐釉陶器はいずれも13世紀末を中心とする年代であり、遺跡の状態からも限られた居住年代と推定でき、共に出土したイスラーム陶器の年代も同時期と推定できる。施釉陶器でもっとも多いのは緑釉陶器及び青釉陶器であり、鉢碗が主である。次は黄釉陶器で鉢碗が主である。青釉・緑釉陶器も黄釉陶器もわずかだが瓶もある。青釉陶器には釉下黒彩文が描かれるもの、釉下

刻線文様があるものがある。黄釉陶器には釉上に褐色と緑色で彩文されるものがある。その他は少量だが、多彩釉白化粧土上刻線文陶器（スグラヒアット）、透明釉下彩画陶器や白濁釉陶器、色絵陶器（ミナイ）がある。フィルター付土器瓶は2片のみ出土し、ペルシア湾岸付近ではフィルターが一般的でないことを示している。13世紀末頃のイラン青釉陶器とイエメン黄釉陶器の様相を具体的に捉えることができた。

#### 14世紀後半から15世紀前半の青釉下黒彩陶器と透明釉緑彩陶器

ジュルファール遺跡はペルシア湾岸の拠点の港町で、14世紀中頃から居住が始まり、発掘地点は15世紀中頃までの住居が発掘された。7層に分けられた層位から数トンの陶磁器片が出土した。1・2層の主要な出土品は、イランの青緑釉陶器、白濁釉陶器、土器、中国の染付と青磁、ミャンマーの青磁、現地産の土器と彩文土器である。3層はミャンマー青磁が増え、4・5層になると中国染付とミャンマー青磁がきわめて少なくなる。中国青磁、イラン緑釉陶器、白濁釉陶器、現地産土器が主となる。6層はイランの白濁釉陶器が多くなり、元時代や明時代前半の青磁、染付、白磁が出土した。7層は中国青磁とイランの緑釉陶器、白濁釉陶器、現地産土器が主となり、6層とほぼ類似している。東南アジア各地の施釉陶器やパキスタン、イエメンなどアジア各地の土器等も出土している。

出土した層の年代から青釉陶器、青釉下黒彩陶器、透明釉下彩画陶器の年代研究も進み、その代表的な資料は紹介した[佐々木 1999]。ジュルファール遺跡出土品からイランや中央アジアで作られた青釉下黒彩陶器の年代が判明する。

#### 15世紀の陶器

コールファッカン町跡遺跡は海岸に位置し、南側に急峻な岩山がそびえ、北側は湾内の砂浜、西側は山麓の農園、東側に砦がある。15世紀が中心となる第3層には赤色土壁の家並みがあり、家跡周囲には厚い灰砂層が堆積し、当時の土器や貝殻、魚骨が含まれている。ジュルファール遺跡の上層と対応する出土品が見られる。コールファッカン町跡出土品は白濁釉陶器、白濁釉褐彩陶器、緑釉陶器、褐釉陶器、透明釉下彩文陶器などがある。14～15世紀の中国青磁や染付、ミャンマー青磁が出土し、数量は少ないがタイやベトナムの陶磁器もある。

ジュルファール遺跡の出土品は14世紀後半から15世紀前半を主としており、ペルシア湾とオマーン湾の地域の基準資料となる。すでに紹介した資料があるので、本稿では取り扱わない。

#### 16世紀から18世紀頃の陶器

コールファッカン砦遺跡は港と町跡を見下ろす海拔50mの小山頂上に築かれ、15世紀の中国青磁碗やミャンマー青磁盤も出土したが、大部分の陶磁器片は18～20世紀であった。中国染付は明代製品が未発見で、清代の染付、色絵磁器は多く発見される。中国染付は碗、カップ、皿、中国色絵は碗、小碗、カップがある。イスラーム施釉陶器は多いが、その種類はジュルファール遺跡出土品とは異なり、コールファッカン町跡の15世紀よりも時代が下るものである。褐釉陶器や緑釉陶器、土器、彩文土器もある。他にヨーロッパ施釉陶器も出土する。

ピソナ遺跡はハジャール山脈内にある町跡で、ワディが1kmほど広がり農園が広がる。出土した陶磁器は土器が大部分である。土器は素地と器表面の色で2種類に分けられ、赤色/黒色素地の土器と灰黄色/黄白色の器表面の土器である。いずれもイスラーム時代の全般にわたってこの地域で見られる土器である。イスラーム時代以前の施釉陶器はない。11～12世紀頃の白濁釉上緑・黒彩文陶器鉢、12～13世紀頃の黄褐釉下

白色スリッパ刻線文陶器鉢、15世紀頃の緑釉下黒彩陶器鉢、緑釉鉢もあるが、この頃から後の時代の施釉陶器がいくつか見られ、18～19世紀頃には施釉陶器がやや多くなり、緑釉陶器、褐釉陶器、淡黄色陶器、赤色釉陶器がある。中国陶磁器は出土していない。

### 19世紀頃の陶器

コールカルバ町遺跡は砂浜海岸とクリークに沿っている。町跡に農耕地は少ないが、町跡内とその周囲に僅かだが農耕地のあったことが、現在ナツメヤシの茂る範囲から推定できる。町跡のある海岸から岩山が連なる麓まで4kmほどで、麓から2.5kmほどは緩やかな傾斜地の農耕地であった。出土した施釉陶器は青色・淡青釉下黒彩文陶器、黄釉陶器、緑釉陶器、褐釉陶器が主で、土器は刻線文土器、彩文土器、無文土器である。刻線文土器は表面が白化粧土され、素地は淡ピンクから黄色である。18～20世紀と推定できる陶磁器である。

フジェイラ遺跡は扇状地内の北側部分に位置し、海岸から2.0kmほどにあり、海岸から広がる農耕地と接する。土器は赤黒色素地が最多で煮炊き用壺が主となり、蓋、水注（把手付瓶）、壺があり、赤色彩文が施されるものがある。次に多い黄色素地の土器は胴部で鋭く曲がる瓶が主で、刻線文が入りやや硬質である。施釉陶器はイラン産と推定され、やや緑色かかった透明釉下に青・褐色彩文が施される陶器で、鉢、碗が主で壺もあり、軟質の黄色素地である。オマーン産と推定できる褐釉陶器は鉢、碗、瓶で硬質赤色素地である。ヨーロッパ産の施釉陶器、中国の染付、白磁、色絵もある。イラン産透明釉下コバルト藍彩陶器鉢も出土している。18～19世紀の陶磁器が多い。

ハムリヤ遺跡はペルシア湾の海岸に沿う5mほどの低い砂丘上にあり、背後は低湿地となる。海岸には炭化したマングローブの痕跡が残り、以前はマングローブの茂る海岸であったと推定できる。砂丘上は砂地で、疎らに草が生えている。砂地の地表面には貝殻片と土器片が散乱する場所がところどころに見られる。砂地面に土器鍋、土器壺、褐（緑）釉陶器、緑釉陶器、黄釉陶器、透明釉下彩画陶器などが見られる。ハムリヤ出土の緑釉陶器はコールカルバ出土品と同じ種類で、ジュルファール遺跡出土の緑釉陶器と異なる種類である。陶磁器の年代は18～19世紀頃を中心とするようである。

### ペルシア湾岸・オマーン湾岸遺跡出土のイスラーム陶器

アラビア半島ムサンダム半島の両側に広がるペルシア湾とオマーン湾を中心に古代・中世の遺跡を発掘し、生活用品であった陶磁器を資料化した。イスラーム陶器の年代をそれ自体から直接に推定できる資料は現在のところ少なく、型式研究が進行中である。同時に出土する中国陶磁器の年代研究がイスラーム陶器年代研究よりも進んでいるため、中国陶磁器から遺跡の層位年代を推定し、年代推定ができた層位から出土したイスラーム陶器の年代を推定するという方法を筆者はとっている。使用期間や伝世等の問題があるため、数カ所以上の遺跡から出土した資料を検討する必要があるが、大量に出土する生活用品の年代は層位から推定しても問題は少ないだろう。これまでに発掘した遺跡出土の陶磁器を並べると、イスラーム陶器が変化していく様相が見えてくる。遺跡から出土したイスラーム陶器の地域的研究はイスラーム陶器概説書の書き換えを迫っている。

施釉陶器はメソポタミア産からイラン産に変化し、さらにイラン周辺で作ったものも含まれるようになる。量が多い土器はイランやアラビア半島で作られ、インドやイエメンなど周辺地域の土器もわずかだが搬入されている。イスラーム時代遺跡からは中国陶磁器が発見され、15世紀以降は東南アジア陶磁器もか

なりの量が含まれる。数量は少ないが中央アジアの施釉陶器、イエメン、パキスタンの土器も見られる。イエメンの施釉陶器は13世紀後半頃に限られ、エジプトの施釉陶器は出土しない。各遺跡で共通する陶磁器が出土しているが、詳細に見ると出土する陶磁器の種類や組み合わせは遺跡ごとに特徴や変化が見られる。各遺跡出土のイスラーム陶器を研究資料とする意義はここにある。

これまでに発見し発掘した遺跡と出土品の状態は、考古学資料から見る地域史を描く基礎的資料となる。アラビア半島オマーン湾岸のイスラーム時代遺跡の踏査と発掘によって、遺跡と出土品を関係付けて考える資料が得られ始めた。この地域には地表面から町跡と分かる遺跡がきわめて少なく、大部分は20世紀後半の町と同じ部分に古い町跡が埋もれている可能性が大きい。20世紀末から大規模に都市建設が行われた地域では古い町跡は完全に消滅したと思われる。そうした古い町跡の発掘は我々がコールファッカン、コールカルバ、フジェイラなどで小さなトレンチを入ただけであるが、いずれも地表面に近い浅い部分に遺跡がある。イスラーム陶器の研究にはさまざまな課題があり、地域的広がり、年代研究、生活内の組み合わせ状態、あるいは産地研究などがある。出土した陶磁器を遺跡のなかで考える、陶磁器が生活のなかで使用された状態を復元するのが、筆者のイスラーム陶器研究の方法である。取り上げた遺跡出土資料を中心にジュルファール遺跡などのペルシア湾岸の遺跡出土資料と比較検討することも実施中である。

なお、ペルシア湾岸及びオマーン湾岸を中心に周辺地域を含め、イスラーム陶器及び同時に出土する陶磁器を扱った筆者文献には次のものがある。ただし、単独の遺跡出土品を扱った論文はそれぞれの住居を検討した章に文献を掲げたので、ここでは省いている。佐々木達夫、野上建紀、佐々木花江「ミャンマー窯跡踏査と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』27:147-246, 2004年。佐々木達夫, 2004『ペルシア湾と紅海の都市遺跡比較から見る古代海上貿易史研究』科学研究費成果報告書。佐々木達夫、吉良文男、佐々木花江「ミャンマー陶磁の発見」『貿易陶磁研究』23:106-123, 2003年。Sasaki, T. & Sasaki, H., Southeast Asian Ceramic Trade to the Arabian gulf in the Islamic Period, "Archaeology of the United Arab Emirates" Trident Press, London, 253-262, 2003年。佐々木達夫, 佐々木花江「アラビア半島に広がるミャンマー青磁の発見」『金沢大学考古学紀要』26:1-11, 2002年。Sasaki, H. & Sasaki, T., Myanmar green ware—the kiln sites and trade to the Indian Ocean in the 15-16 centuries, "Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa", 26:12-15, 2002年。佐々木花江、佐々木達夫「緬甸青瓷, 其窯跡及在15至16世紀中向印度洋地区的出口貿易」『古陶磁科学技術国際討論会論文集』5, 上海科学技術文献出版社, 589-597, 2002年。佐々木達夫「西アジアの陶磁」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会, 301-309, 2002年。佐々木達夫「遺跡出土の破片が語るイスラーム陶器の変遷と流通」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会, 310, 2002年。Sasaki T. & Sasaki H., South east Asian Ceramic Trade to the Arabian Gulf in the Islamic Period, "First International Conference on the Archaeology of the UAE" 66-67, 2001年。佐々木達夫『陶磁器、海をゆく』増進会出版社, 1999年。杉村棟、佐々木達夫「中央アジアの陶磁器」『シルクロード学研究』7:5-18, 1999年。杉村棟、佐々木達夫「カザフスタン・オトラル遺跡陶器調査報告」『シルクロード学研究』7:46-53, 1999年。佐々木達夫、野上建紀「トルクメニスタン出土陶器調査報告」『シルクロード学研究』7:104-145, 1999年。佐々木達夫「物の記述--内側と外側--」『美術史におけるアルケオロジーの諸相』（平成9-10年度科学研究費基盤研究成果報告書）25-35, 1999年。佐々木達夫、酒寄淳史、楠寛輝、酒井中「画像処理法による陶磁器素地の定量化と産地推定」『金沢大学考古学紀要』24:209-223, 1998年。Sasaki, T., West Asian Archaeological Conferences, 1997-98 held at Kanazawa, Oxford, London and Sydney, 『金沢大学考古学紀要』



24:243-252,1998年。佐々木達夫「海を通して交流した古代文明」『季刊河川レビュー』102: 38-44,1998年。佐々木達夫「ペルシア湾岸貿易の今と昔」『こだま』124:2-3,1997年。佐々木達夫「アラビア半島の中世港湾都市遺跡出土品の調査研究 2」『第26回三菱財団事業報告書』287-288,1996年。Sasaki,T., Ninomiya,S., Aboshi,M., Koezuka,T., Shirahata,H., Yamasaki,K., Technical studies on the ceramics from the archaeological sites in West Asia, Science and Technology of ancient ceramics 3, proceedings of the international symposium(ISAC'95), Shanghai research society of science and technology of ancient ceramics, 267-273, 1995年。佐々木達夫「東西アジアの技術交流史研究」『三島海雲記念財団研究報告書』三島海雲記念財団,118-121,1995年。佐々木達夫「物が語るインド洋の交流」『文明と環境10巻 海と文明』朝倉書店,109-130, 1995年。佐々木達夫、肥塚隆保、二宮修治、白幡浩志、山崎一雄、佐々木花江「イエメン・ヘイリッジ出土陶磁器の科学的研究」『金沢大学考古学紀要』22:186-200,1995年。佐々木達夫「アラビア半島の中世港湾都市遺跡出土品の調査研究」『第25回三菱財団事業報告書』275-277,1995年。佐々木達夫「湾岸出土の陶磁器とその背景」『インド考古研究』16: 44-46, 1994年。Sasaki, T., Trade Patterns of Zhejiang Ware found in West Asia, New light on Chinese Yue and Longquan Wares, Centre of Asian Studies, The University of Hong Kong, 322-332, 1994年。Yamasaki,K., Ninomiya,S., Aboshi,M., Osawa,M., Sasaki,T., Provenance Studies of Sherds Excavated from Archaeological Sites, New light on Chinese Yue and Longquan Wares, Centre of Asian Studies, The University of Hong Kong, 333-335, 1994。佐々木達夫「西アジアの陶器と彩釉タイル」『金沢大学考古学紀要』20号,111-123, 1993年。佐々木達夫「西アジアの遺跡から出土する陶磁器の歴史的な意味」『ユネスコ・シルクロード 海洋ルート調査, 奈良国際シンポジウム '91報告書』ナラ・シルクロード博記念国際交流財団, 132-137, 1993年。Sasaki, T., The Historical Significance of Ceramics Excavated from Archaeological Sites in West Asia, UNESCO Maritime Route of Silk Roads; Nara Symposium '91, The Nara International Foundation, March, 134-139, 1993年。佐々木達夫「イスラームの陶器と彩釉タイル」『陶説』482, 28-34, 1993年。佐々木達夫、西田泰民、富沢威、小泉好延「アラビア海沿岸出土陶磁器の元素分析」『東洋陶磁』20・21: 195-209, 1993年。佐々木達夫「イスラームの白釉は錫釉か」『陶説』488: 15-19, 1993年。佐々木達夫「インド洋の中世陶磁貿易が語る生活」『上智アジア学』11: 87-117, 1993年。佐々木達夫「中国陶磁器」『アル=フスタート遺跡』早稲田大学出版部, 第1分冊,280-285, 第2分冊, 435-487,500-509, 1992年。佐々木達夫、肥塚隆保、二宮修治、網干守、大沢真澄、山崎一雄「ペルシア湾岸出土の陶片の材質と産地」『日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集』18-19, 1992年。佐々木達夫「模倣ラスタール・リュートを奏でる人物図皿」『陶説』473:29-32,1992年。Sasaki,T., Koezuka,T., Ninomiya,S., Osawa,M., Yamasaki,K., Excavations of Archaeological sites in Bahrain and the United Arab Emirates and Technical Studies on the Excavated Sherds, "Science and Technology of Ancient Ceramics", Shanghai Research Society of Science and Technology of Ancient Ceramics. 230-234, 1992年。佐々木達夫「イスラームの陶器と彩釉タイル」『イスラームのタイル』INAX BOOKLET Vol.11 No.4, 65-69, 1992年。佐々木達夫「舶載遺物の考古学」『アジアのなかの日本史(III海上の道)』東京大学出版会, 173-210,1992年。Sasaki, T., Ceramics found from the Archaeological sites in West Asia(西アジアの遺跡から出土する陶磁器の歴史的な意味), UNESCO Maritime Route of Silk Roads; Nara Symposium '91(ユネスコ・シルクロード海洋ルート調査:奈良国際シンポジウム '91), 29, 1991年。佐々木達夫「アラビア湾へ運ばれた陶磁器」『陶説』448, 15-19,1990年。佐々木達夫「中世のアジアにおける中国陶磁貿易の調査研究(3)」『三菱財団事業報告書・昭和63年度』276-277, 1989年。佐々

木達夫「エジプトで中国陶磁器が出土する意味」『考古学と民族誌』六興出版,227-250,1989年。Sasaki, T., Trade Ceramics from the Coast of the Indian Ocean. I, Journal of East-West Maritime Relations, Vol.1, 117-16, 1989年。佐々木達夫「北イエメンに中世海上貿易を求めて」『白水』12, 107-115, 1988年。佐々木達夫「モルデューに中世陶磁を求めて」『陶説』425, 29-33, 1988年。佐々木達夫「中世のアジアにおける中国陶磁貿易の調査研究(2)」『三菱財団事業報告書・昭和62年度』254-256, 1988年。佐々木達夫「中世インド洋の海上貿易」『弥生』17, 18-23, 1987年。佐々木達夫「シナイからアスワンへ」『陶説』416, 15-19, 1987年。佐々木達夫「英国の博物館所蔵の遺跡出土中国陶磁器」『金沢大学文学部論集史学科篇』6, 1-24, 1986年。佐々木達夫「リュートを奏でるラスター彩人物文皿」『白水』11, 38-40, 1986年。佐々木達夫「フスタート遺跡出土の中国陶磁器-1985年-」『貿易陶磁研究』6, 99-103, 1986年。佐々木達夫「遺跡出土陶磁器の研究」『日本考古学論集 4』吉川弘文館, 103-150, 1986年。佐々木達夫『元明時代窯業史研究』吉川弘文館, 1985年。佐々木達夫「出土陶磁器が示す生活感覚」『歴史と人物』141, 68-75, 1983年。佐々木達夫「カイロで中国陶磁を掘る」『陶説』365, 19-23, 1983年。佐々木達夫「福州にイスラム陶器を訪ねる」『陶説』353, 11-14, 1982年。佐々木達夫「東アジア出土のイスラム陶器」『金沢大学法文学部論集史学篇』27, 1-18, 1980年。

文献

佐々木達夫, 1995, 1911-1913年発掘のサマラ出土陶磁器分類『金沢大学考古学紀要』22:75-165.

佐々木達夫, 1999, イスラムの染付『東洋陶磁』28:43-54.

## 第12章 出土品を使用した町や家の検討

### 課題と研究方法

遺跡を発掘すると出土品の大部分を占めるのが陶磁器片である。その出土陶磁器片を主な研究資料とする筆者の研究目的の一つは、物を使った場所のなかで物を考えることにある。どのような人々がどこで何に使用したかを知ることができれば、物をより深く理解する手がかりが得られる。生活の場あるいは生活空間と出土資料を切り離さず、遺跡の中で生活を復元しながら物の性質や特徴を捉える。そのためには出土資料の生産地や年代を研究することが不可欠となり、陶磁器の質や描かれた文様、形や大きさ等を調べることに時間を割かなければならない。そのうえで文様の意味を知る研究や生活の復元が可能となる。基礎的資料整理の部分が研究時間の大部分を占めることになる。考古学資料としての物の研究は、復元した生活空間のなかで考える方法と、遺跡と切り離して物そのものを考える方法があると言える。遺跡あるいは生活空間のなかで物を考えるのは現地調査を重視する筆者の研究方法である。後者の研究方法は博物館や美術館がすでに所蔵している作品などを主な研究資料とする方法で、一般的に多くの美術史研究者や陶磁器研究者が実施している。実際にはこの2つの研究方法、すなわち物を生活のなかで考える方法と、過去に使用された場所を考えずに物をモノとして扱う研究方法の両方が取り入れられ、その研究成果は相互に関連している。別の異なる研究方法として切り離すことは本来難しいことであるが、通常は一方の研究方法が採用されている[佐々木花江、佐々木達夫 2004]。

ここでは、居住の場あるいは生活空間、生活地景観や気候風土植生を含めた環境のなかで物のあり方を考えるために、考古学資料としての陶磁器が出土した居住空間あるいはその歴史的景観についてふれる。

陶磁器を使用した場所に関しては、陶磁器を資料化するために発掘した遺跡の状態を調べることが基本となる。人々が集まって居住した遺跡は都市や村と呼ばれる。これまでに筆者がアラビア半島で発掘した居住遺跡を分類するとおおよそ次のようになる。都市は9～10世紀のジュメイラ遺跡、14～15世紀のジュルファール遺跡、15世紀のコールファッカン遺跡。町は4～5世紀のハレイラ遺跡D地区、9～11世紀のアーリ遺跡、16～19世紀のコールファッカン遺跡、18～19世紀のコールカルバ遺跡。村または一時的居住地は9～10世紀のハレイラ遺跡A地区、18～19世紀のハムリヤ遺跡。特殊な居住地として、ルリーヤ砦やコールファッカン砦。この他に海岸沿い砂丘上で見られる野营地と呼ぶような一時的な居住地もある。真珠採取の船が停泊し海岸で定期的にキャンプした跡等と推定できる場所である。

こうした筆者の発掘調査した遺跡に加えて、歴史的に関連した都市遺跡のサマラ、シラーフ、バンボール等も筆者が調査論文を刊行しているので比較資料として参考にする。サマラ遺跡に関する筆者の文献には次のものがある。佐々木達夫「かりそめの都サーマッラー」『文化遺産』6:18-21,1998年。佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂「サーレ著 サマラの陶器(4)」『金沢大学考古学紀要』24:224-242,1998年。佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂「サマラの陶器(3)」『金沢大学考古学紀要』23:223-247,1996年。佐々木達夫「1911-1913年発掘のサマラ出土陶磁器分類」『金沢大学考古学紀要』22:75-165,1995年。佐々木達夫、大瀧敏夫、波頭桂、松崎亜砂子「サーレ著サマラの陶器(2)」『金沢大学考古学紀要』22:201-236,1995年。佐々木達夫、大瀧敏夫、松崎亜砂子、波頭桂、中本寛「(訳)サーレ著 サマラの陶器(1)」『金沢大学考古学紀要』21:173-192,1994年。佐々木達夫「初期イスラーム陶器の年代」『東洋陶磁学会会報』15,1-3頁,1991年。

シラーフ遺跡の出土品も取り上げている筆者文献には次のものがある。佐々木達夫、佐々木花江「唐代外銷白瓷影響的斯蘭白陶」『中国古代白瓷国際学術検討会論文稿』上海博物館,368-369,2002年。佐々木花江、佐々木達夫「ペルシア湾北岸遺跡と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』26:27-47,2002年。佐々木達夫、佐々木花江「アッバース朝白濁釉陶器に与えた中国白磁碗の影響」『金沢大学考古学紀要』26:64-75,2002年。バンボール遺跡に関する筆者文献には次のものがある。佐々木達夫「バンボール出土の中国陶磁器と海上貿易」『シルクロード美術論集』吉川弘文館,225-258,1987年。

筆者が発掘調査した遺跡を分類すると、都市、町、村、一時的居住地、及び特殊な居住地となる。ただし、都市や村落の区別は一部分の発掘成果と地表面から観察した遺跡規模から推定したもので、厳格な基準やデジタル化できる資料はない。遺跡を分類するうえではいくつもの問題点がある。遺跡の性質や生活基盤を考慮して居住者で分類する支配者・権力者や商人、漁民、農民、牧畜民というような区分は可能であろうか。地域や時代の異なる生活空間を、同じ名称で分類することは可能であろうか。様々な出土品の組み合わせと居住空間を統合した生活様式という基準で遺跡を分類あるいは系統化することは可能であろうか。発掘した面積は遺跡内の小面積であり、その周辺に未発掘の広い空間が広がる可能性が大きい。それが生活空間と呼べる範囲であるかどうかをどのようにして判断したらいいのだろうか。その範囲とは地表面から見えない地面下の未発掘地についてのことである。

遺跡内居住者の居住面積や人口を推測するのは紀元前のあるいは先史時代の遺跡でしばしば行われるが、紀元後の遺跡で面積や人口を遺跡から推定することは希である。最近の時代の遺跡ほど人口推定がされないのは、推定方法の不確かさが原因であり、推定値が有意義な意味を持たないことがよりはっきりと推定されるからである。遺跡そのものを認識するのが難しいこともある。石作り壁や日干レンガ壁の家跡は発

見が容易であるが、砂地上あるいは砂漠にテント等で生活していた人々の痕跡を発掘で検証することは難しいことである。一般には、砂地上に僅かな土器片や貝殻片が散らばる地点を、居住遺跡と判断することになる。ハムリヤ遺跡もその例であるが、漁民や真珠採取民の一時的な仮小屋があった場所かもしれない。遺跡を認知すること自体が難しい場合、遺跡の範囲を推定することはさらに困難になる。

狭い範囲の調査成果を全体の中に位置づけて評価することは、全体が分からないから難しい。しかし現状で必要な研究方法は一部から全体を推定復元することである。狭い範囲の調査や一部分発掘の結果から、広い範囲と推定できる生活空間や当時の景観を考える方法にはどのようなものがあるか。生活空間とは居住区、農耕地、放牧地、狩猟地、漁労地などを指すと思う。ジュルファール遺跡の例をとると、遺跡周辺は満ち潮時に海水で覆われるため島になったと推定復元できる。このような海岸に沿う島と本土との関係も考慮することが必要である。水や食料、あるいは安全を確保するために本土に後背地が存在した可能性が大きい。従来の遺跡観よりは広い範囲が生活圏として考えられる。景観はこれらの総合的な情報となり、遺跡解釈に重要な役割をはたすのであろう。

では遺跡と同時代の生活空間あるいは景観を復元するにはどうすればいいだろうか。私たちの手に資料としてあるのは、一部分の発掘成果、聞き取り等で推測できる少し前の時代の様相、現代の気候風土や地理的環境、わずかに推定された歴史的な気温や植物相などである。アラビア半島ペルシア湾岸やオマーン湾岸の場合は植民地から独立した1970年代以後に、現代的な地図が作製されたにすぎない。遺跡と同じ時代の資料はほとんど無いに等しいのが現状である。居住区では建築遺構、井戸や竈、道路など生活関連遺構、墓などが発掘されることが多い。建築遺構から特定の建築や技法、平面形態あるいは立体的復元を建築史研究者が行っている。しかし個別の建物だけでなく、発掘された僅かな遺構すなわち建物基礎部平面形から生活空間や景観を復元するにはどのような方法があるだろうか。現地調査を重視する筆者に必要な方法がこれである。

土器生産、銅鉄生産、玉生産などの手工業生産の痕跡が残る遺跡がある。その痕跡は生産が都市内で行われたか、村で行われたかを知る手がかりとなる。生産と流通の問題は、消費遺跡から出土する陶磁器を研究資料として成果を挙げている分野の一つである。遠隔地貿易と近距離流通、遺跡の種類や状態による出土品の相違、流通ルートと時代的変遷、流通から見る生産地の盛衰、地域圏を越えた文明圏の交流、等がすでに遺跡出土品を用いて検討されている。こうした流通資料を生活空間のなかで解釈評価することが筆者の研究方法の一つとなっている。

農耕地は現代の状態は現地調査で分かるが、以前の状態を考古学資料から知ることはきわめて難しい。農耕地を推測するために灌漑施設の痕跡を利用することは可能であるが、一般的には土器などの年代推定資料を伴わない灌漑施設の年代を知ること自体が難しい。広大な地域の発掘も必要となるが、水準の高い発掘調査を短時間で行うことは無理であろう。遺跡と同時代の放牧地、狩猟地、漁労地、あるいは真珠採取地等を知ることは現在の研究では難しい。しかし、時代を特定することは難しいが、現在の地表面や景観から以前の農耕地や漁労地の存在を推定することは可能である。

こうした状況を前提として、そのなかで生活空間を復元する方法を開発し、そのなかで出土資料を歴史的に位置づけて解釈することになる。無い物ねだりでなく、理論のみに頼ることなく、現状で研究成果を挙げることができる実行可能な研究方法の模索とも言える。方法の一つはすでに指摘されているような多

くの研究分野の研究成果の総合化を進めることである。学際的研究、学際融合的研究、複合領域研究、総合的研究、包括的研究、等々と呼ばれる方法である。同じ研究資料を考古学、文献、地理、建築、美術、民俗、技術、科学分析、等々の専門分野の方法で検討し、様々な異なる研究方法と視点から得られた種々の成果を包括的に検証することである。同じ資料を検討する場合と異なる資料を検討する場合があるが、いずれの場合も異なる研究方法の成果を統合して研究資料を解釈する方法である。その具体的な検討を遺跡ごとに行い、その成果をまとめるのが研究課題となる。

### 周辺環境を知る資料

鉱業について。オマーン地域はマガンと呼ばれた頃から銅生産の中心地として知られる。ラッセルカイマやフジェイラ領内のハジャル山脈内には銅生産に伴うスラグが落ちている場所が各地にある。その年代については土器などが伴わないため、不明瞭であることが多い。フジェイラ首長国ピソナで1988年に鉄器時代と期待された銅鉱石採掘及び精錬炉が発見された[Corboud et al 1988]。ピソナはWadi Hamの谷が1kmほど広がった地点にあり、最近まで農業が盛んな地域として知られていた。フジェイラとマサフィを結び、山脈を越える交通の要所である。フジェイラから西北に13kmほどの地域であり、海岸地帯の町と関連が深いと推定できる。銅鉱石も周辺から産出したことがcopper mining sitesやsmelting ovensの存在からわかる。ただし、鉄器時代の採鉱miningと期待されていたBithnah 54地点のcopper melting ovensをD. Pottsが試掘し、charcoalsを採集して14C datingを行ったところ、cal AD894-937/0.31とcal AD940-1010.0.69が得られ、9-11世紀と判断された[Benoist et al 2003]。フジェイラ首長国南部のオワラAwhalaでも銅精錬遺跡が発見され、site no.41採集のスラグに含まれていた炭化物の14C測定で、cal AD1308-1358/0.09, cal AD1381-1528/0.76, cal AD1552-1633/0.15という値が得られた[Potts 1996]。一般には先史考古学者によって青銅器時代、鉄器時代の銅精錬遺跡が期待されているが、測定値は14世紀及び17世紀というイスラーム時代の年代である。

### 物を使用した住居の概要

イスラーム時代の都市構造や住居形態は、固定的なイメージで広域的に普遍化して概観されやすい。東西貿易による文化交流が盛んな地域であるアラビア湾岸のバハレンやアラブ首長国連邦で発掘した住居跡の形態や配置を検討し、その歴史的な特質を地域の生活基盤や他地域の同時代都市と比較した。部分的住居の基礎部だけを資料にしても、生活にもとづく共通性をもつ街区の住居復元が可能であり、気候風土と生業、伝統社会にもとづく生活形態が各地に存在すること、住居の材質構造面積等の外観的形態は生活様式に付随することを推測した。

典型的なイスラーム時代の都市や住居形態は、停滞的で外壁に囲われた密集空間内の迷路的細街路と中庭のある住居であると20世紀中頃から理解された。現在は地域の伝統的特質や多様性を無視した歴史的概観は不十分という批判もあり、新たな理論や定義が模索されている。これまで政治・軍事的大都市の景観や平面的復元、諸制度検討、宗教的影響、都市モデルや理論化、さらに街区の構造、職業的居住者層の配置等に関しては多くの研究蓄積があるが、発掘資料と直接関連する住居の形態と生活に係わる歴史的研究成果は乏しい。さらに、地域的基層文化を反映する伝統的都市や小都市、村落の歴史研究になると見るべき成果がない。文献的建築史的研究資料に恵まれないからであろう。地域の比較を具体的実証的に行いやすい考古学の成果も住居研究に取り入れる必要がある。

ペルシア湾やオマーン湾の地域では初期イスラーム都市・村落の構造や特質の研究が少なく、当時の文

献も地上に残存する都市跡や建築跡もなく、都市・村落内の住居構造や配置等に関しての地域研究は今後の課題である。しかし、同時代レバントやメソポタミアの宮殿跡や今も眼にできる石造大型建造物に関しては、建築史学者や考古学者による長年の研究成果が既にあり、同時代他地域の都市の発掘例もある。他地域の都市研究成果を直接利用できないが、当該地域の部分的な住居跡発掘による住居材質や構造、街区や都市の景観的風景を推定するうえで参考になる。

筆者は、東西海上貿易で栄えた文化交流のネットワークの結節点といえる港湾都市遺跡であっても、それぞれの地に地域性風土性にもとづく生活様式が存在し、住居の資材や外観的形態は生活様式に付随すると考えている。そこで、発掘した住居跡の基礎部分を資料に用い、その歴史的な特質を当該地域の伝統的社会基盤となる産業や地勢面から推定し、さらに他地域の同時代都市や地域性、風土、居住基盤を加味して比較する視点から、筆者がすでに提出した仮説を検証したい。

### ペルシア湾岸紀元前住居の検討

筆者が主な研究対象とする紀元後の住居を歴史的に位置づけるため、同じ地域における紀元前の住居を概観する。発掘例は多くないが、その中のいくつかを紹介する。

ムウェイラ Muweilah 遺跡 [Magee et al. 2001]。アラブ首長国連邦シャルジャ首長国のシャルジャ近郊にある鉄器時代Ⅱ期(1300-300BC)の住居。1994年から発掘が実施された。現状は砂漠の砂に覆われているが、幅1mほどで外側に石・内側にpisé積み壁が楕円形状に集落外縁を巡ると推定され、その内側の4.5ヘクタールが居住区と推定され、現在はその一部が発掘中である。住居は砂漠の砂上に築かれている。住居は日干レンガpisé(壁部分で型作られる未焼成泥レンガ)で壁が築かれ、長方形の室が連続する。この一般の住居が全体に広がるように見えるが、その他に神殿と推定された独立した大きな複数室の大建物がある。この大建物は中央に10×12mという一般住居より大きな室内床面に石製円柱跡が残り、政治的・経済的な支配者の存在を示す。円柱は5列残るが両側は壁に接するので、一般の室の4倍の幅となる。すなわち、2.5～3.5mほどの室幅あるいは天井梁幅が一般住居及び大室の場合でも最大幅となることを示す。平均で3mのようである。大建物の中央室は砂地床だが、周囲の細い室は床にpiséが敷かれる。住居からは生活を示す貯蔵壺、cooking場、grinding石、date press or Madbasaマドバッサ、土器片、炭などが発見されている。Lime-plaster生産の跡と推定されたpitと火を燃した場所もある。周辺には灌漑水路の痕跡があるが、その近くで僅かに採集された土器片は鉄器時代もあるが、最近のものもあり、年代を知る手がかりが無い。

ムレイハ Mleiha 遺跡。アラブ首長国連邦シャルジャ首長国の内陸部、山裾の平原にある紀元前後の都市。紀元後4世紀頃には廃墟となった。Fort、住居跡、墓が大規模に発掘されている。1993～94年に発掘された住居はB.C.2～1A.D.と推定されている[Sabah 2001]。4層に分かれる層位発掘で4時期に分類できる住居群が現れた。未焼成泥レンガ壁の住居で、長方形単室の家から中庭をもつ複数室の集合する家に変化し、家の周りに付属する家、工房、台所、井戸や炉などがあつた。生活の様相が復元できた遺跡である。

エドール Ed-Dur。アラブ首長国連邦ウンマルクワイン首長国の海岸砂丘内にある紀元後1世紀の都市。墓や神殿などが発見され、古代の幻の町オマナの候補地として有名になった。しかし、一般の人々の住居構造は不明瞭である。

### ペルシア湾岸・オマーン湾岸発掘住居の検討

アラビア湾岸で筆者が発掘した初期イスラーム時代の住居跡には、アーリ遺跡及びハレイラ遺跡がある。

オマーン湾岸で筆者が発掘したイスラーム時代の住居跡は本稿ですでに紹介したが、その他の遺跡についても他で報告している[佐々木達夫 1994]。住居の存続時代は出土した遺物から推測する。それぞれの遺跡の性質と住居の特徴、地域や遺跡による住居構造の相違を主な検討課題にする。発掘面積が狭いため、ここでは都市あるいは村落全域を扱うことができない。居住者の職業や階層による居住形態の差異が都市内部にあると想像されるが、発掘面積が狭いうえに住居基礎の一部が地下に残存する状態から居住者の性格を推定することは困難である。しかし、発掘された隣接住居の形態と建築資材が類似しており、部分的発掘区域が含まれる街区の住居形態の類似度は高いと推定できる。住居1軒の部分的発掘でも居住街区内の一般的住居推定復元と他地域住居との相互比較が可能になる。こうした仮説を設定し、残存する住居の痕跡の一部から、住居平面と配置、室内形態、床面積、出入口構造や幅、方向・方位、床や床下および壁下部の構造と材質、住居に伴う炉やマドバサなどの施設と配置などを主な整理検討事項にする。また、発掘した建物群が同時に建っていたかどうかは、街区の景観を知るうえで重要である。建物の同時性を抽出するのは難しいことであるが、出土品の年代から同時性を推測することが多い。筆者は併せて建物の建つ面から同時性や増築、改築などの検討も発掘調査中に現地で行った。

### アーリ遺跡

アーリ遺跡はバハレン島北部平坦地で1988年と1989年に発掘した9～10世紀の村落遺跡である[Sasaki 1990]。第1次発掘では20×25m、第2次発掘では20×35mの範囲を掘り、ともに9世紀の住居を発見した。住居床面は海拔10mから11mの間にある。

1988年の第1次発掘調査で上下の層を発見し、9世紀と推定できる上層第1層の連続する数軒の住居を発掘した。発掘区中央部は住居基礎部分が残るが、周辺は僅かな石が砂地に転がるだけで、点線で部分的住居配置を推定した。中央部分7-9,P-R発掘区の住居House 1は、小石泥積み太壁に交差する数本の壁を基本にして、2×3mあるいはそれ以下の小部屋を作る。いずれの壁も泥と小石を混ぜて作られ、平均的壁厚は40cmであり、壁基礎の一部に漆喰プラスター塗が残る。室内外の壁に漆喰プラスターが見られる部分もある。床面に貝が敷かれた部屋があり、その部屋の一部に灰が広がる。室内壁際に焼土の炉が並ぶ部屋がある。太い壁を挟む両側に別家族が住む例は都市に多いが、建物内の分割状況は不明瞭である。House 1東側に幅2.2mほどの通りがあり、住居House 2が通りに面している。両住居間の通りはなつめ椰子の実からジュースを造る施設マドバサで南側が塞がれるから私道である。マドバサ前の南空間は炊事場で埋土器炉1と焼土炉2がある。壁基礎残存率は悪いが、かなり密集した住居群・街区を推定できる(アーリ遺跡1988年発掘住居配置図)。

上層の堆積土中には、一部に床のような面が残り、年代の新しい遺構が存在した可能性を示すが、壁は残存しない。第1次発掘出土の施釉陶器は9世紀イラク産青緑釉陶器が多いが、中国の11世紀白磁碗も1片ある。発掘された住居は9世紀に所属し、その上に11～12世紀の建物があったと推測できる。第1層の出土品には2時期の遺物が混在している。

1989年の第2次調査では、第1次調査区から東に80m離れた低い台地の上を発掘した。6軒ないし7軒の家を発掘し、3時期以上に分類できた。出土品からみる年代では、それぞれの築造年代は近く、いずれも9世紀代で、同時使用の時期が推定できる。建物の建つ面の比較でいくつかの時期に分類できることが判明している。こうしたことから、アーリ第2次発掘住居跡の配置は住居間の空間を埋める形で住居が建

設されていることがわかる。

第1期：House 1,2,3のほぼ同時建設。第2期：House 1の南側にHouse 4の建設。第3期：House 5の建設。第4期：House 4の増築部分としてHouse 6の建設、およびHouse 5の壁増築。第5期：House 6とHouse 5の壁増築。以上の建設過程は建物の建つ面および堆積層の比較から判明した。この配置と堆積層をみると、House 4とHouse 5の間に3mほどの通りがある。北側のHouse 1とHouse 4、南側のHouse 3とHouse 5の間には通りはない（アーリ遺跡1989年発掘住居配置図）。

この地区の住居はわずかな期間に増築されたが、家族構成の変化、すなわち多妻制や子供数の増加、兄弟夫婦の別室住居などと関連するかもしれない。その場合、炉や炊事施設が住居のどこに配置されるかは生活様式や家族構成を推測する手掛かりになる。住居の廃棄後は生活用具残片が少量残る。House 3の2×1.2mの室内(2.4m<sup>2</sup>) 床上に円盤状石臼上下部分が破損状態で発見された。この室の外壁に沿う部分26,27V区に炊事施設が造られ、埋設大甕、長方形石組炉、長方形織物状床敷が配置される。炊事施設西側には石組炉と廃棄された陶器や土器片が散乱している。炊事施設東北側にはマドバサ（デーツ汁生産施設dates press）があり、同施設北側壁は住居囲い壁のようである。その場合、House 5の外壁はHouse 3の居住者に付属することになる。House 3の居室が4.9×2.6m室(12.7m<sup>2</sup>) と2×1.2m室(2.4m<sup>2</sup>) の2室であるか、壁を共有しない別棟東側室も同じ居住者の住居かは不明瞭である。1軒の住居に同時使用炊事施設は1カ所、居室は食事室と寝室も兼ね、中庭式住居はないと推定できる。アーリ住居跡室内最大幅は4.3mである。これは平坦な屋根を支える木材の長さの制約によると推測できる。室は東西方向に長いが、街路との関係かもしれない。この地域は冬に厳しい西北風が吹くが、入口方向は不統一が目立ち、東西南北のいずれの方向もある。入口部にドアソケットが残り、敷居部分は漆喰プラスター塗部が数カ所残る。

アーリ居住者の基盤的生業は農業であろう。発掘区域の南側には長さ数十mのシスターン（水溜）跡が残り、住居跡に伴う可能性がある。現在も廃墟地に隣接してデーツ畑があり、周辺に町がある。

なおアーリ遺跡の調査報告や出土陶磁器分析などには次の筆者文献がある。Sasaki,T.,Shirahata H. and Yamasaki,K., Lead Isotope Ratios of the White Glazes of the Sherds Excavated at A'Ali, an Archaeological Site in Bahrain, Proceedings of the Japan Academy, 70, Series B:1-3,1994年。Sasaki, T., Uchida, Koezuka, Ninomiya, Shirahata, Sasaki and Yamasaki, Technical Studies on the White-glazed Shards Excavated from A'Ali in Bahrain, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21:126-136, 1994年。Sasaki,T., Uchida,T., Koezuka,T., Ninomiya,S., Osawa,M., Yamasaki,K., Technical Studies on the White-glazed Sherds Excavated from the Archaeological Site, A'Ali in Bahrain, Proceedings of the Japan Academy, 69, Series B; 35-38, 1993年。佐々木達夫、内田哲男、肥塚隆保、二宮修治、大沢真澄、白幡浩志、山崎一雄「バハレン島アーリ遺跡出土の白釉陶片の科学的研究」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』50-51, 1993年。Sasaki, T., Excavation at A'Ali -1988/89-, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, Vol.20, 111-129, 1990年。

#### ハレイラ島砂丘遺跡

ハレイラ島は長さ8km、幅1km前後で、岸に沿うように伸びる島である。アラブ首長国連邦ラッセルカイマ首長国のアラビア湾の出口付近、山並みが切り立つムサンダム半島の西側に位置する。島のほぼ全域が砂で覆われ、ラグーンに沿う東側海岸線の南半分は波打ち際だけ岩が露出する。1994年に発掘した砂丘上遺跡の最高地点は12.25mである。



砂丘上部の平坦面に、長さ60m、幅2mの南北トレンチを設定し、炉跡、灰、同種類の大量貝殻集中堆積、陶磁器片、ガラス片、少量の大中小の魚骨、数点のビーズなどを発見した。出土品や炉跡等の遺構は、掘り下げた範囲内では地表面とその直下で発見したが、柱跡や石やサンゴを使った建物基礎、レンガ壁、ピットはなかった。東西トレンチでは砂丘の西側からの形成と人々の居住、砂丘の削平を明らかにできた（ハレイラ砂丘上遺跡セクション図）。

砂丘上平坦部は島の最高地点で、海原と平原を完全に見渡せる。砂丘上平坦部に構造的な家屋存在の痕跡はない。砂面に作られた炉は何カ所かに残り、同種類の大量貝殻といくつかの魚背骨が炉の灰の上と中に混じる。大量の貝殻が炉の灰中に残ることは、多くの人々が滞在中に貝を魚とともに主要食料にしたことを示す。人々の継続的な居住を示す動物骨や鳥骨は出土しない。富裕な商人が居住した地域なら発見されるコインも出土しない。9世紀のメソポタミアのラスター彩陶器や多くの白釉陶器、青緑釉陶器が出土する。東西世界の長距離貿易を示す9～10世紀の中国陶磁器は出土しない。石臼は1点が平坦面南部の地表面で発見されたに過ぎない。外面に煤が付着した調理用土器鍋の破片が出土するが、その数はわずかである。無釉土器の大きな壺や瓶の破片はわずかな量である。無釉土器の素地は類似している。9～10世紀の装飾品はない。以上の理由から、砂丘上平坦部は、9～10世紀のアッパース朝時代のイランやオマーン向け軍隊が一時的に滞在した場所と推定できる[Sasaki 1995]。

#### ハレイラ島南端平坦地遺跡

島東南端の低い平らな地域は7～8世紀ころに廃墟になった。1995年の発掘で長さ30m、幅20mの調査区域がラムス町漁港対岸に沿って設定された。地表面にはわずかな陶磁器片が見られ、遺構の存在を示すものはなく、海拔は2mである。第1層の灰混じり砂層は貝殻、魚骨、陶磁器片などのゴミを含む。灰と炉は地表下すぐから発見された。青緑釉陶器は壺、瓶、鉢が主な器種で、素地は厚く、粗いクリーム黄色である。土器は黒色、紅色、黄色素地が混じる。動物骨と鳥骨はきわめて少ない。

3軒の住居を発見し、いずれも部分を発掘した（ハレイラ平坦地遺跡1995年発掘住居配置図）。壁基礎部分に石積泥詰壁を用いるのは他地域の住居と類似するが、アーリ遺跡より大きな石を用いている。室内面積も広く、壁は直線的で室形態も方形に近い。室内床面下に小石を敷き並べるのは、他の発掘資料に例が少ない。壁の方向は類似し、住居の配置は規則的に見え、街路の存在を推定させる。House 1の壁は幅45cmほどで、炉が集中する台所施設部分は、住居間の私道に面する。壁際の床面に平坦な大石が残り、壺等を置いた場と推定できる。一部壁面に漆喰プラスタが残る。House 2も類似の構造で、増築したようである。House 3は火災にあった漆喰プラスタ塗床の一部が発見された。

なおハレイラ遺跡の調査報告や出土陶磁器に関する筆者文献には次のものがある。佐々木花江、佐々木達夫「ササン朝後期ハレイラ島出土陶器の産地」『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』36-49,2001年。佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘—1998年—」『金沢大学考古学紀要』25:118-169,2000年。佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘調査—1998年度—」『第6回西アジア発掘調査報告会・報告集』109-113,1999年。Tatsuo Sasaki & Hanae Sasaki, 1997 Excavations at Jazirat Al-Hulaylah, Ras Al-Khaimah, U.A.E., *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 24:99-196,1998年。佐々木達夫、酒井中、楠寛輝「画像処理法によるハレイラ遺跡火災倉庫出土陶器の産地推定」『日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集』162-163,1998年。佐々木達夫「ハレイラ（速報：1997年度の発掘成果）」『日本西アジア考古学会通信』

3:9,1998年。佐々木達夫「湾岸の交易都市－ハレイラ遺跡－」『平成8年度・古代オリエント世界を掘る(第4回西アジア発掘調査報告会)』古代オリエント博物館,84-90,1998年。佐々木達夫「湾岸の交易都市－ハレイラ遺跡－」『第4回西アジア発掘調査報告会』古代オリエント博物館,36-37,1997年。佐々木達夫「湾岸の交易都市遺跡の調査(1995年)」『平成7年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究』クバプロ,45-52,1997年。Sasaki, T.,1995 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Ras al-Khaimah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:37-178,1996年。Sasaki, T., Umayyad and Abbasid finds from the 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:179-222,1996年。佐々木達夫「ラッスルハイマ・ハレイラ遺跡の発掘調査」『UAE』22:19-21,1996年。佐々木達夫「アラビア湾岸の交易拠点ハレイラ島」『日本中東学会ニューズレター』61:11,1996年。Sasaki, T., 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 22:1-74,1995年。佐々木達夫「湾岸の交易都市遺跡の調査－1994年－」『平成6年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究』クバプロ,52-58,1996年。

#### ルリーヤ砦遺跡

ルリーヤ砦には13世紀後半から14世紀前半に使用された石積み壁の小さな方形室が並ぶ家がある。ルリーヤ町跡にも同じ石積み壁の大小の家が並び、14世紀から数世紀の間使用されている。ルリーヤ遺跡に関する筆者の文献には次のものがある。佐々木達夫「ルリーヤ砦出土13世紀末の陶磁器組合せ」『日本西アジア考古学会第9回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、45-48,2004年。佐々木達夫、佐々木花江「ルリーヤ砦の構造と出土品」『平成13年度第9回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、55-57,2002年。佐々木達夫、佐々木花江「オマーン湾岸のルリーヤ砦」『平成12年度第8回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、92-96,2002年。Sasaki T. & Sasaki H.,Excavations at Luluiyah Fort, Sharjah, U.A.E.,“Tribulus”11-1:10-16,2001年。佐々木達夫、佐々木花江「イスラーム時代の交易を探る：シャルジャ首長国、ルリーヤ遺跡の第1・2次発掘調査」『西アジア考古学通信』10:5-6,2001年。佐々木花江、佐々木達夫「アラビア半島シャルジャ首長国のルリーヤ砦」『第7回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』70-78,2000年。

#### コールファッカン遺跡

コールファッカン遺跡の第3層住居は15世紀が中心である。壁は赤色土を上塗りし、壁内部は砂の部分と赤色土の部分がある。一部に石を詰めているが、ほとんどは石を使用していない。18～20世紀の家跡は石積み壁の家である。コールファッカンについての筆者文献には次のものがある。佐々木達夫「災害 歴史事実を未来へ」『北陸中日新聞』2005年2月6日(朝刊文化欄)。佐々木達夫「災害が作る遺跡」『金大考古』47:8-9,2005年。佐々木達夫「世界の発掘調査 アラブ首長国連邦」『文化遺産の世界』15:22-23,2004年。佐々木達夫、佐々木花江「オマーン湾岸のコールファッカン砦」『平成14年度今よみがえる古代オリエント・第10回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、86-90,2003年。

#### コールカルバ遺跡

コールカルバ遺跡の19～20世紀の家は石積み壁と泥壁がある。コールカルバ遺跡についての筆者文献には次のものがある。佐々木達夫、佐々木花江「シャルジャ首長国のコールカルバ町跡—17～19世紀の漁村—」『平成15年度今よみがえる古代オリエント・第11回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、72-77,2004年。佐々木花江、佐々木達夫「物を使用した場所の検討—コールカルバ町跡の景観復元

—』『第10回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』69-80,2003年。

### フジェイラ遺跡

フジェイラ遺跡は18～20世紀の家跡が判明している。基礎部に小さな石を積むが上部構造は泥レンガを積み上げた壁の小さな長方形プランの家である。この地域では珍しい切り妻型式の屋根構造である。フジェイラ遺跡についての筆者文献には次のものがある。佐々木達夫、佐々木花江「フジェイラ首長国のフジェイラ町跡—16～19世紀の地方町跡—」『平成16年度今よみがえる古代オリエント・第12回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、92-96,2005年。

筆者が調査した9～10世紀のアッバース朝都市遺跡であるジュメイラ遺跡、14世紀後半から15世紀前半を中心とした都市遺跡であるジュルファール遺跡の建築遺構についての説明は、本稿では割愛する。ジュメイラ遺跡に関する筆者文献には次のものがある。佐々木花江、佐々木達夫「ジュメイラ遺跡2002年」『第9回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』85-95,2002年。ジュルファール遺跡に関する調査報告と出土陶磁器についての筆者文献には次のものがある。佐々木達夫「イスラームの染付」『東洋陶磁』28:43-54,1999年。佐々木達夫、佐々木花江「ペルシア湾岸出土の中国銭」『出土銭貨』9:112-116,1998年。佐々木達夫「14世紀の染付と釉裏紅はどのように出土するか」『榎崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、467-477,1998年。佐々木達夫「交易都市の発掘」『季刊考古学』61:60-63,1997年。Sasaki, T., Sasaki, H., 1993 Excavations at Julfar, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 1-106, 1994年。Sasaki, T., Sasaki, H., 1993 Excavations at Julfar, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 1-106, 1994年。Sasaki T., Koezuka, Ninomiya, Aboshi, Osawa, Uchida, Sasaki H. and Yamasaki, Technical Studies on the Ceramics Excavated from Julfar in Ras Al-Khaimah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 107-125, 1994年。佐々木達夫「アラビア湾のイスラーム港湾都市ジュルファール遺跡を掘る」『平成5年度西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究』クバプロ, 41-49, 1994年。佐々木達夫「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20号, 1-44, 1993年。Sasaki, T., Excavations at Julfar in 1992 season, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 20: 45-49, 1993年。Sasaki, T., and Sasaki, H., Japanese Excavations at Julfar—1988, 1989, 1990 and 1991 Seasons—, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, Vol.22, 105-120, 1992年。Sasaki, T., Vietnamese, Thai, Chinese, Iraqi and Iranian Ceramics from the 1988 Sounding at Julfar, Al-Rafidan, XII: 205-220, 1991年。佐々木達夫「海のシルクロード遺跡ジュルファール」『文明発祥の地からのメッセージ』クバプロ, 202-212, 1990年。佐々木達夫「海の道」『アジアの古代文明を探る—歴史と水の流れ—』クバプロ, 96-107, 1995年。

### 小結

筆者が発掘した住居がイスラーム都市・村落かどうかは、住居構造から知る手掛かりがない。モスクやミヒラブの痕跡は未発見である。発掘された遺構が主研究資料であるから、都市内の人間関係や制度、組織等は検討の視野から外れる。地中に残った住居のプラン、床面積や室形態、出入口構造や幅、方向・方位、床や床下および壁下部の構造と材質が発掘資料で検討可能な項目になる。壁構造を材質から分類すると泥壁、石積壁、泥繋ぎ石積壁、下方は石積で上方は泥壁などになる。泥レンガは未発見である。高さは残存する地中の痕跡から知ることができない。壁幅はほぼ同じで、城砦や大型住居を示さない。住居配置は空き地に新築、増築する例、規則的な住居配置が推測できる例の両者がある。同時代でも、地域による違いが見られ、また同地域でも居住者の違いによる住居構造の違いが推測できる。住居に伴う施設と配置

も重要な検討項目になる。発掘面積が狭いから街区は不明だが、住居近くに街路が存在するかどうかは推定できる。道路の曲がり具合や幅、袋小路の存在等は不明瞭である。

こうした検討から、市壁内にモスク、マドラサ、スークなどの公共施設を配し、袋小路をもつ細街路に囲まれた中庭をもつ個人住居をイメージすることは難しい。発掘区域が狭いことも原因の一つだが、家を囲む外壁が不明瞭であること、あるいは中庭の存在が疑わしいこと、家と家の間隔が迷路状の狭い通りでないこと等が、その主要な理由である。都市を発掘した遺跡で捉えたとすれば、空間的密集度の高い土地利用の活発な場所を指すから、アラビア湾岸の空間的余裕が多い地域では、大都市的住居構成の潜在的な要求がないと思われる。

### 周辺地域や大都市住居跡比較資料

サウジアラビアのアル・ラバダ巡礼隊商都市遺跡はメディナの南東200kmに位置する。巡礼道路中で最重要のクーファとメッカを結ぶ Darb Zubaydah に沿う 9 世紀の隊商都市で、1979 年より大規模に発掘された [Saad bin Abd al-Aziz al-Rashid 1980,1986]。砂漠に築かれた多くの巡礼隊商都市は簡単な施設のようなのだが、ラバダは大規模施設をもち、ヨルダンやイラク等の初期イスラーム都市の影響を受けたと推定されている。東西 850m, 南北 500m の範囲に建築が広がり、モスクやフォートなどの定型化した大型建築は石積厚壁であり、繋ぎに泥を用いる。

中庭と 13 室をもつフォート(パレス) Site A、厚い石壁で外周を囲む住居群 Site B も発見された。Site B はアル・ラバダの典型的住居と推定されており、それぞれの部屋は狭く、壁は薄く、室内壁は漆喰プラスターで塗られる。写真で判断すると石積泥繋ぎ壁である。外周壁の外側に沿って土器オープンが発見されている。Site D は住居群とスークの混じる地区で、住居配置は整然としており、計画性が感じられ、壁基礎は石積でその上は日干レンガを用い、壁に漆喰プラスターが塗られる。平均的室は 3x2m で、床にプラスターも発見されている。Site H の独立したフォート形式の厚い 2 m 石積外壁建築内部に中庭があり、すべての部屋が中庭に面する。Site H の日干レンガ作り壁の住居群の間には直交する狭い道路がある。Site 401 の広大な住居群は厚い石壁内 69x57m に整然と作られ、防御的都市の形態を示し、各規格の住居入口は通りに面し、平均的室の大きさは 3x3m で、壁は基礎部が石積で上方が厚さ 55cm の泥レンガである。床は漆喰プラスター貼りか固い粘土面のままである。

アル・ラバダ住居は、立ち並ぶ狭い住居群内に中庭付住居や迷路的小路は見られず、壁基礎は石積で上方は泥レンガ、あるいは下から泥レンガを積み、部分的に漆喰プラスターを壁や床に塗る・貼る状態が復元できる。

アッバース朝 9 世紀政治都市の研究は 20 世紀初頭から行われ、クーファ、バスラ、バクダード、サーマッラー等の都市プランや制度が論じられている。このうちサーマッラーは広大な地域に点在する大宮殿やジャーミーが建築として研究され、都市形態の復元研究が進み、発掘調査も 1911 年以來、最近に到るまで行われている [Herzfeld 1948; Creswell 1940; Rogers 1970; Northedge 1985,1987,1990]。筆者も出土陶磁器を再分類し、出土品と生活の場の建築との関連性に興味をもっている [佐々木 1995]。ただし、サーマッラーは主要研究対象建築が宮殿等であり、大都市の豪壮建築プランとアラビア湾岸地方小都市住居跡を直接比較することは関連性が薄く難しい。一般住居の主要材料は日干泥レンガと pisé(壁部分で型作られる未焼成泥レンガ)である。重要建造物には焼成レンガを用い、彫刻や型文様のあるストッコで飾る。壁画の存在も知られる。1989

年発掘カディシヤ区トレンチ9世紀層では、焼成レンガ(34×34×16cm)が床に敷かれた部分、下部が焼成レンガで上部がpisé、下部が焼成レンガで上部が泥レンガの壁が発見された[Northedge 1990]。

カタールのムルワブ都市遺跡はアラビア湾岸のアッパース朝住居群である[Hardy-Guilbert 1980, 1984]。9世紀メソポタミア陶器を出土する住居は、石積壁構造である。クウェートのファイラカ島でもアッパース朝住居群の配置が地表面調査されているが[Kennet 1991]、住居は点在している。ウマイア朝都市遺跡の大型石造宮殿建築や宗教建築の構造や形態調査は進んでいる。その一つキルバトアルマフジアルは大型石造建築でストッコ彫刻や壁画で飾られる[Hamilton 1959]。8世紀後半にイスラーム化された東アフリカ沿岸交易都市シャンガ遺跡の住居形態は、9世紀から土着固有文化に外来文化が影響し、長方形掘立柱建築から石積壁方形建築へ変化し、プラスター床が確認できる建築もある[Hoton 1991]。

### アラビア湾岸の住居跡の特徴

同時代の近隣地域で調査された住居、隊商都市、メソポタミア、レバント等の大都市の宮殿や住居、および初期イスラーム建築の影響を受けた東アフリカ沿岸都市建築と比較して、アラビア湾岸住居の特殊性が推測できる。われわれが発掘したアラビア湾岸住居は、当時の当地域の一般的な都市や村落の住居形態を反映していると想像できる。その形態は、これまで研究の多いメソポタミア等の大都市建築や首都の宮殿建築と大きく異なる。人口密度の希薄な村落型住居を密集型都市型住居の邸宅研究と対照して構造や配置を考えることに問題があるのは、一般的庶民住居と宮殿建築構造の壁の厚さや高さ、室面積等を比較しても意味がないのと同様である。筆者が発掘した遺跡はいずれも政治的中心としての都城ではない。この点で宮殿建築や大型宗教的施設の建築史研究成果を比較資料に用いることは不適切である。イスラーム都市を中国やインドなど他地域都市と比較して明確化しようという試みもあるが、遠隔他地域との差異が存在するのは当然である。考古学研究方法の資料と成果を中心に地域ごとに分類整理する手法が本稿では基本になる。

アラビア湾岸の夏高温多湿で雨量零の気候風土、生態系と生業の関わり、地域の地質や歴史的伝統等で、居住形態を解釈することが必要がある。住居建築資材は石、土、木が用いられるが、地域的および地域内の差異がある。メソポタミアのように泥と水が材料の地域は日干泥レンガが主で、石材は遠隔地から運ぶので一般住居では使用しない。焼成レンガは日干泥レンガより固く雨に強いが燃料がいる。強固な壁には石材が必要で、一般住居や周壁内の住居は日干泥レンガで十分に生活できる。壁基礎と上部は別素材を用いることも多い。最近までラッセルカイマ首長国ではオアシス地域に泥壁家、ワディ内に石壁家が一般的であった。細長い室と平屋根が多いのは、屋根材として使用できる丸太・半裁木材の長さが主要因となる。雨量がやや多いオマーン湾岸住居の屋根は傾斜構造をもつが、地質、雨量や風向、夏の暑さ、冬の寒さなど気候条件で家の材質と構造も変わる。廃棄石造建築の石材は新築の建設資材として外し運ばれる。ハレイラ島南端平坦地住居の壁が極端なほど残存状況が悪いのはこのためであろう。焼成レンガはアーリ、ハレイラともに使用されない。燃料が少ないこと、基礎部に小石泥積を用いれば上部壁は日干泥レンガで十分に耐えることが理由であろう。日干レンガ文化圏はアジア全域に広がり、利用条件を階層的に解釈もできる。

沿海岸の砂島ハレイラの対岸は、肥沃ではない後背地サバハ（高潮時冠水地）とワディ出口のわずかな石混じり扇状地であり、遮るように山並が続き、ワディが山並みに切り込む土地である。自然地理的環境

からみれば、ハレイラ砂丘上は軍事・防衛に係わる居住地で、建造物痕跡は未発見で天幕等の可能性が大きい。軍事的居住区は短期間に限られるのが一般的であるが、砂丘上遺跡はこれに当てはまる。ハレイラ島南端平坦地住居は漁業を生業とし交易に従事した人々の居住地であろう。後世の状態から推定すると海岸線の拠点的都市・村落にペルシア人が居住し、オアシスや内陸のアラブ民族と交易したと想像することも可能だが、確定することはできない。ハレイラ島からは貝や魚骨が大量に出土することと比較し、羊や山羊、鳥の骨が出土しないことから、生業的基盤は漁業であろう。交易路上の要地に拠点的居住区が形成され、交通路の変化に伴う盛衰があることは一般的であるが、平坦地遺跡はこれに当てはまる。バハレン島の水の湧く平坦地域に築かれたアーリは、農業を生業にした人々の居住地と推測できる。水の存在が農村居住区成立の基盤となり、居住区は継続されるのが一般的であるが、アーリはこれに当てはまる。

生活様式は家族構成と関連をもつが、発掘資料は家族構成を語らない。予言者ムハンマドの時代は、ゆるい家族の絆や無制限な多妻制が生活様式であり、女性の地位や権利は低かったという指摘は多い。20世紀中頃までの当地域の家族構成と大家族指向の生活様式もこれに類するものである。しかし、貧富の差と家族数は対応しないから、住居内の室数や配置、面積から家族数を割り出すのは困難であり、住居構造と家族構成を関連させて発掘された住居を説明することができない。

ハレイラ遺跡の10km南方のジュルファール遺跡では、14世紀中頃に中庭も外壁も持たない細長い日干泥レンガ壁住居が発見され、14世紀後半の層位からは典型的伝統的イメージのイスラーム住居を想起させる外壁内に中庭をもつ日干泥レンガ／泥積壁住居が発掘された[Sasaki 1993]。数十メートル離れてモスクまたは墓廟が発見され[Sasaki 1994]、500m離れた地にジャーミー(金曜モスク)と推測できる焼成レンガ建築が存在する[King 1992]。ジャーミーの存在はスークやハンマーム等の施設とともにイスラーム都市を規定する条件であると、20世紀初頭からマルセス等によって指摘されているという[私市 1991]。同時にモスク以外の施設はイスラーム以前から存在していたことも明らかになっている。

では、8・9世紀の発掘された住居群はモスクなどの宗教施設なしに、イスラーム都市あるいは村落と判断できるのだろうか。宗教や文化としてのイスラームという概念で都市ばかりでなく個人住居も分類できるだろうか。断片的発掘資料を適切に解釈するための背景となる都市や地域の社会構成や産業経済等は明瞭でない。イスラーム法の建築規定によって都市建設と形態、都市生活も影響されていたという考えもある[Hakim 1986,1990]。この考えは20世紀前半から引き継がれたもので、イスラーム法の発展とともに建築の原則は住居や道路に反映し、準法律的な性質をもつようになり、時代の要請に応じて変化するという。気候と社会、文化、技術が類似した形態を生み、10世紀には成熟したイスラーム都市を作るが、前代からの継承と修正があるという。

イスラーム都市と呼べる理念や規則が存在すれば、発掘された住居形態からもその存在を推測することが可能になる。しかし、発掘された建築資材や住居平面を見ても、イスラーム地域の統一的形態を推測させる雰囲気は漂っていない。都市が程度の差こそあれ規則的で街区を形成するのはどの地域にも見られ、袋小路と中庭もイスラーム以前から類似した形態を各地で見ることができ、発掘された住居跡に地域の文化的連続性があることを推測できる。ただし、ハキームは既にこの点を指摘し、地域性と伝統を発展させ特徴つける都市の原理を提唱しているため、ハキーム理論に対する反論にはならない。当該時代に都市の宗教として成立したというイスラームが、当該地域住民の宗教かどうかを発掘資料で知ることはできない。

イスラームという宗教が特殊な住居形態を規定しなければ、住居の形態や外観は環境、地域的伝統、気候風土、建築資材といった地域固有文化との関連が強くなり、一般には多様性や地域的変化をもつと推測することができる。アラビア半島アラビア湾岸住居をタイプ分類することが、普遍性と個別性を混在させる都市や村落を歴史的地理的に捉える基本的操作になるだろう。考古学資料のレベルでイスラーム都市という概念はイスラーム地域の都市という程度の意味しか持たないことになる。

夏期高温を避けるため、冬雨農耕のため、海岸と山裾、山裾と山岳地域との季節的水平、季節的垂直移動はエアコンディショナーがコンクリート室内を冷やす社会変革期まで一般的であった。草木壁住居、天幕住居、泥壁住居、石壁住居という差異さえ、季節的か定住的かという居住方法を示さない。季節的定住生活という居住形態がこの地域の20世紀中頃まで続いた特徴であった。出土品は盛んな東西海上貿易の存在を示し、遺跡が広範な交易ネットワークで他地域と結びつくことを示すにも係わらず、気候風土産業の継続性を考えると地域内の海岸と山地の高低ないし南北移動がより強く生活形態を規定していたと推測できる。季節的定住ないし移動は都市と農村の連続性と共通性を生み出している。

外壁に囲われた密集空間内の迷路的細街路と中庭付住居というイスラーム都市イメージは、イスラーム地域外でも各地に存在している。しかも、傍観者的他者にとっての迷路的空間も、居住者にとっては当然のことながら既知の明白な空間である。アーリに街区で区画された敷地はなく、空き地に順次建築し、中庭はなく、室内面積は狭い。強固な都市プランにもとづいて住居が建築されたとは見えない。しかし、空き地の住居建設を都市建設の無計画性を示すともいえない。街区や街路の建設と、街区内の住居配置の密集化の直接的関連性はないのだろう。ハレイラ島南端平坦部は街区があるように見えるが、発掘面積が狭く不明瞭である。発掘された隣接住居の形態と建築資材は類似しており、部分的発掘区域が含まれる街区の住居形態類似度は高い。1軒の住居の部分的発掘は居住区内の一般的住居推定復元を可能にする。現代都市を見ても、街区は類似度の高い住居で構成されることが一般的である。

住居跡に伴う年代の出土品に、地元産と推定できる製品に混じりかなりの比率を占める広域流通他地域産の陶磁器がある。貿易、とくに海上交通貿易による地域間交流が空間的広がりをもつ生活様式の類似性に与えた影響を考慮することは重要である。人々の移動は基層文化の上に共通要素を生みだし、高度で洗練された住居ほど地域性を失い普遍化する傾向がある。広域交易ネットワークで結ばれた港湾都市は地域的伝統から自由になれる可能性が高い。にもかかわらず、地域的差異が住居構造や配置に存在している。伝統的住居の残存から推定すると、海岸地帯の一般的住居は気候風土から掘立柱椰子葉壁および干泥レンガ積壁の比較的簡単な構造であり、ワディ内の住居は手近にある材料の関係から石積壁の簡単な構造である。特定の地域に、人々はいかに住むかを苦慮しながら楽しんでいたのだろう。その際に地域を特徴付ける気候風土や地質、地域的伝統や技術がもつ意味は大きなものであったろう。イスラーム化以前のアラビア湾岸固有文化の伝統的住居跡との比較も必要であるが、住居発掘の例はすでに取り上げた遺跡などであり、参考資料となる遺跡数は少ない。

気候風土が類似する西アジア地域の都市や住居に共通する雰囲気が漂うことを否定できないが、イスラームという言葉で片づけることのできない地域的な違いが住居構造に見られる。地域内の都市と農村の自然地理的環境や形態的検討を行うことが地域性を裏づけることになるが、当該時期の地域考古学研究は今後の課題である。

## 住居跡に一般的に残存する施設の検討

住居に付設される施設で、発掘によって発見されることが多いものは次のようである。出入口。台所。炉や竈。マドッバサ。井戸。水タンク。灌漑飲料水路。

マドッバサdate press or Madbasaはナツメヤシからシロップを造る施設である。マドッバサはカラートバハレンQala'at al-BahrainでB.C.2千年期中頃と推定された出土例がある[Højlund 1990]。シャルジャ首長国にある鉄器時代Ⅱ期(1300-300BC)のムウェイラMuweilah遺跡からも出土している[Magee et al. 2001]。長期間にわたる地域の基本的な食料施設である。アーリ遺跡、ジュルファール遺跡、コールファッカン砦遺跡などでもマドッバサは発見されている。

炉や竈fireplaces。構造的な炉か、焚き火の跡だけのような炉か。構造的なものは、石組み炉、粘土炉、石と粘土の組み合わせ炉、土器を使った炉がある。使用目的で分けると、煮炊き用、パン焼き用tannours、その他の用途。設置された場所で分けると、室内、室外となる。室外の場合は中庭、家壁外側に接したところ、壁から少し離れたところ、台所施設内がある。コールカルバ遺跡、ルリーヤ砦遺跡、アーリ遺跡、ハレイラ遺跡、ジュルファール遺跡、ジュメイラ遺跡、コールファッカン砦遺跡、コールファッカン町跡遺跡、ハムリヤ遺跡など、すべての遺跡から発見される生活必需施設である。

灌漑飲料水路。灌漑用水路falajは砂に埋もれているため、地下の場合は見えないため発見が難しい。水路の年代を知る手がかりは無い場合が多いので、対象としている遺跡と関連する施設かどうか不明瞭である。しかし、水路の痕跡が一部で発見されれば、農業の存在が推定でき、飲料水にも使用されたと想像することができる。

出土資料すなわち現在まで腐食しないで残ったものは希なものである。出土する物の背景には出土しない大量の物があつたに違いない。多くの物資は遺跡に残らないのが当然である。残った僅かなものを研究することが一般的である。出土しない物を研究する、あるいは出土しない物の存在を推定することは難しい。出土品を使用した研究の他に、物を次の2つの見方から検討することも可能である。1. 遺跡から出土しないけれども、関連した物が存在することによって、存在していたことを推定することが可能である。2. 関連した物も存在しないけれども、景観復元から生活様式を考えると当然存在が予想出来る物もある。都市生活と農村生活の違いも生活用品の違いを生み出したであろう。パン焼き竈があればその生産に関する一連の農業道具の存在が推定できる。生産や生活の基盤は工業、商業、農業、牧畜、漁業などが挙げられる。商業では、取引の貨幣、物資運搬用の船、ラクダ、荷車などの存在が推定できる。こうした物は貨幣を除くと出土することはきわめて希である。漁業では船や網があつたろう。遺跡から出土しなくてもその存在が推定できるものがあり、住居を考えるうえで参考とすることができる。

## 結論

本論の目的の一つは筆者が発掘したペルシア湾とオマーン湾の住居資料を主に用い、地域性風土性に基づく生活様式が各地に存在し、住居資材や外観的形態は生活様式に付随するという仮説[佐々木 1997]を検証することであった。他の目的は生活空間を周辺環境のなかで考え、生活のなかで使用された生活用具としての陶磁器を生活の中に位置づけることであった。周辺環境を知ることは遺跡が存在する現在の地理的風土的な環境から遺跡が活動していた頃の環境を推測することである。農耕地や灌漑施設の推定復元も生活状況を知るのに欠かせない情報となる。遺跡から出土する魚骨、動物骨、植物残存物、石製道具や竈など



は食生活を復元するうえで重要であり、食生活と関連することが多い陶磁器の用途等を考えるうえでも果たす役割は大きい。

ペルシア湾とオマーン湾のイスラーム時代住居構造と配置等の考古学資料例の特徴が明らかになり、共通要素を強調すれば、広域圏に類似の景観形態を有する住居が存在したといえる。しかし、住居の建築素材、平面形態、配置、床の状態等の細部をみれば、歴史的固有文化に基づく、あるいはそれが固有文化を形作る地域性を見ることができる。それぞれの地に地域性風土性に基づく生活様式が存在しており、住居の資材や外観的形態は生活様式に付随すると考える筆者の作業仮説は妥当であったと思われる。ただ、イスラーム法の建築原則が住居や道路に反映し、気候と社会、文化、技術が類似した形態を生み、時代の要請に応じて変化するというハキームの考え等を否定することはできない。住居構造や配置の決定要因が単数であるとは考えられないから、より重要な要因を抽出する分析が今後さらに必要である。また、他遺跡の発掘による詳細な形態の解明、共通性と差異の指摘、それを基にした広域圏内の多角的比較検討が、この地域の住居・都市研究の基本的条件の一つになろう。都市や住居の変容に関しては、時代的な変化をたどれる発掘資料がまだ少なく、やっと具体的な研究課題になりつつあるのが現状といえる。

#### 文献

- Benoist, Bernard, Ploquin, Ohnenstetter, Saint-Genез, Schiettecatte 2003, French Archaeological Mission in Fujairah 2001: First campaign at Bithnah, CNRS, Maison de l'Orient, Lyon.
- Beshim Selim Hakim, 1986, Arabic-Islamic Cities: Building and planning principles, London. ハキーム (佐藤次高監訳), 1990, 『イスラーム都市: アラブのまちづくり原理』第三書館.
- Corboud, Hapka, Im-Obersteg 1988, Archaeological survey of Fujairah 1(1987). Preliminary report on the first campaign of the Archaeological survey of Fujairah (United Arab Emirates). Swiss-Liechtenstein Foundation for Archaeological Research Abroad, Bern, Vaduz, Geneva and Neuchatel.
- Creswell, K.A.C., 1932-40, Early Muslim Architecture, 2 vols., Oxford.
- Hamilton, R.W., 1959, Khirbat al Mafiar, an Arabian mansion in the Jordan valley, Oxford.
- Hardy-Guilbert., 1980, Recherché sure la Period islamique au Qatar, Mission archeologique francaise a qatar, tome 1; 111-127 (English summery, 183-186)
- Hardy-Guilbert., 1984, Fouilles Archeologiques a Murwab, Qatar, Arabie orientale, Mesopotamie et Iran Meridional de l'Age du Fer au debut du la periode islamique, ed. Resherche sur les Civilisations, Paris, 169-188.
- 羽田正, 1991, イスラーム都市論の解体『イスラーム都市研究』(羽田正・三浦徹編)東京大学出版会, 1-12.
- Herzfeld, E., 1948, Ausgrabungen von Samarra IV, Geschichte der Stadt Samarra, Hamburg.
- Højlund, F., 1990, Date honey production in Dilmun in the 2nd millennium B.C.: Steps in the technological evolution of the Madbasa, Paléorient, 16:77-87.
- Hoton, M., 1991, Primitive Islam and architecture in East Africa, Muqamas, 8: 103-116.
- 板垣雄三・後藤明編, 1993, 『イスラームの都市性』日本学術振興会.
- Kennet, D., 1991, Excavations at al-Qusur, Failaka, Kuwait, Proceedings of the Society for Arabian Studies, 21: 97-111.
- King, G.R.D., 1992, Excavations of the British team at Julfar, Ras al-Khaimah, United Arab Emirates: Interim Report on the third season, Proceedings of the Society for Arabian Studies, 22: 47-54.
- 私市正年, 1991, アラブ(1) マグレブ, 羽田正・三浦徹編『イスラーム都市研究』東京大学出版会, 13-77.
- Magee, P., Thompson, E., Mackay, A., Kottaras, P., and Weeks, L., 2002, Further evidence of desert settlement complexity: report on the 2001 excavations at the Iron Age site of Muweilah, Emirates of Sharjah, United Arab Emirates, Arabian archaeology and epigraphy, 13-2:133-156.
- 宮治美江子, 1993, アラブ・イスラーム世界の女性と現代, 板垣・後藤編『イスラームの都市性』日本学術振興会, 173-193.
- Northedge, A., 1985, Planning Samarra, Iraq, 47: 109-128.
- Northedge, A. and Falkner, R., 1987, The 1986 survey season at Samarra, Iraq, 49: 143-174.
- Northedge, A., Wilkinson, T.J. and Falkner, R., 1990, Survey and excavations at Samarra 1989, Iraq, 52: 121-147.

- Potts D.T., Weeks L., Magee P., Thomson E., Smart P., 1996, Husn Awahala: a late prehistoric settlement in southern Fujairah, *Arabian Archaeology and Epigraphy*, 7-2:214-237.
- Rogers, J.M., 1970, Samarra: a study in Medieval town-planning, A. Hourani & S.M. Stern eds., *The Islamic City*, Oxford
- Saad bin Abd al-Aziz al-Rashid, 1980, Darb Zubaydah: pilgrim road from Kufa to Mecca, *Riyadh University Libraries*
- Saad bin Abd al-Aziz al-Rashid, 1986, Al-Rabadhah, King Saud University.
- Sabah A. Jasim, 2001, Excavations at Mleiha 1993-94, *Arabian archaeology and epigraphy*, 12:103-135.
- Sasaki, T., 1990, Excavations at A'Ali - 1988/89, *Proceedings of the Society for Arabian Studies*, 20: 111-129.
- 佐々木達夫, 1990, 海のシルクロード遺跡ジュルファール『文明発祥の地からのメッセージ』 202-212, クバプロ.
- 佐々木達夫, 1993, アラビア湾の港湾都市遺跡『金沢大学考古学紀要』 20: 1-44.
- Sasaki, T., 1993, Excavations at Julfar in 1992 season, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 20: 45-49.
- Sasaki, T., 1994, 1993 Excavations at Julfar, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 21: 1-106.
- Sasaki, T., 1995, 1994 Excavations at Jazirat Al-Hulaylah, Ras al-Khaimah, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 22: 1-74.
- 佐々木達夫, 1994, アラビア半島アデン湾, オマーン湾のイスラーム遺跡踏査『ラーフィダーン』 15:136-141.
- 佐々木達夫, 1995, 1911-1913年発掘のサマラ出土陶磁器分類『金沢大学考古学紀要』 22: 75-165.
- 佐々木達夫, 1997, ウマイヤ・アッバス朝のアラビア湾岸住居『住の考古学』同成社, 244-257.
- 佐々木花江、佐々木達夫, 2004, 遺跡から復元する中世の港町『第11回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』 79-86.

### 第13章 古地図に印されたオマーン湾岸の港町

#### 遺跡と関連する地図について

港町遺跡研究の資料として扱ったアラビア半島オマーン湾岸のディバ、コールファッカン、カルバ、コールカルバ、フジェイラを描かれた古地図から検討する。最近の遺跡コールカルバは古地図に印されていない。使用した地図はシャルジャ首長国首長PhD. Sultan Bin Muhammad Al-Qasimiが収集し1999年に刊行した地図集（第2版）であり、初版は1996年に刊行された[Sultan 1996, 1999]。

地図集に手書き図はなく、すべて印刷図である。実際に航海していた船乗りは詳しい手書き地図をもっていたと推定できるが、そうした情報が地図として印刷され配布されたのは18世紀以降のようであり、現在の地理的知識に当てはめると正確さに欠けるものが多い。アラビア、トルコ、イランなどを中心として描かれた広い地域地図が多いが、そのなかでペルシア湾岸ホルムズ海峡付近に印された町を点検した。世界地図にこの地域が描かれることはあるが、点検した部分のみの狭い地域地図はなかった。16世紀頃の地図が19世紀になってもそのまま写されていることもわかる。16～17世紀頃の地図も当時の地図作製者が検討をせずに他の地図を写していることもわかる。異なる印刷所の地図でも、ほとんど同じ内容のものがあるのはそのためである。すでに無いはずの町の名前が印される、あるはずの町の名前が印されない等の古い情報が書き換えされずに写され残るなかで、新しいデータを多く取り入れて作られた地図もある。こうした地図が当時の情報を知りたい私たちの欲しいものである。古地図はいくつかの系統に分類することができた。

検討した地図は紀元後2世紀プトレマイオス地図の複製1478-1508年地図が最古であり、その後の1493, 1511, 1513, 1522-35, 1522-35, 1522-35年の地図にもArabia Felixと記される程度で参考となる地名は見られない。1522-41年の地図にはペルシア湾岸に16の地名が記されるが、発掘した遺跡や検討している地名に比定できるものはない。1540年の地図にも参考地名はない。1548年のベニス地図からペルシア湾及びオマーン

湾で発掘や検討している遺跡の参考となる当時の地名が現れる。16世紀のポルトガルの航海情報が書き込まれた地図と判断できるが、それでも地名と場所は正確と言えない。1561年のベニス地図はディバ、コールファッカン、ソハールなどが記され、より詳細な地図である。続いて1570年代以降はオランダもアントワープやアムステルダムで参考の地名が記された地図を作る。1653-1654年のパリ地図も詳細な地図である。1714年のオランダ地図は17世紀にオランダが調査した成果を反映させた地図で、アムステルダムやライデンで印刷された。1718年の1728年のイスタンブール地図はアラビア語で記された地図である。

印刷された地域世界の地図に記された情報は保守的であり、航海者がもっていたに違いない詳細な新情報を記していない。多くは16世紀地図の作り直しが多い。18世紀以降は海図を含む地図の精度が上がり、オランダ、フランス、イギリスで印刷された。18世紀前半のデンマーク調査は新たな地名を付け加えた。19世紀前半のイギリス調査はより正確なペルシア湾地形を描き、19世紀後半には現在の地形と同じ程度の精度になった。現在のカタールはバハレンと並ぶ島として描かれ、半島として描かれたのは1831年地図からである。その後の1852年、1853年図はまだ島として印刷しており、19世紀後半から半島として描くことが一般化した。

### ディバ

ディバは比較的多くの地図に記される。表記法は比較的類似している。Dobaと記されるのは1561, 1570, 1570, 1580, 1600, 1610, 1634, 1640, 1646, 1650, 1652, 1652, 1654, 1654, 1654, 1650-1658, 1660, 1662, 1669, 1670, 1670, 1679, 1679, 1679, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680-1700, 1681, 1684, 1690, 1695, 1700, 1700, 1700, 1705, 1710, 1717, 1719, 1720, 1723, 1726, 1730, 1730, 1740, 1740, 1744, 1779, 1788, 1792, 12th May 1794, 1822, June 1822年に印刷された地図である。Dabaと記されるのは1760, 1770, 1770, 1823年に印刷された地図である。Dobbaと記されるのは1765, 1772, 1772, 1772 or 1774, 14th July 1814, 1815, 1817, 1820-1830, 1834年印刷地図である。Dibaと記されるのは1794年印刷地図である。Debbeと記されるのは1804年印刷地図である。Debaと記されるのは1817, 1832, 1834年印刷地図である。Dibbahと記されるのは1843, 1843, 1851, 1851, 1851年印刷地図である。Debbaと記されるのは1850印刷地図である。Dibbaと記されるのは1851, 1858, 1860年印刷地図である。

### コールファッカン

コールファッカンが古地図に記されるのは1561年図である。OrfacanとしてSoarの北側に印され、18世紀末までOrfacanという表記が使われるが、19世紀以降は使われない。35種類の表記法が採られるが、最近一般的なKhor Fakkan, Khorfakkan, Khorfakanという表記は古地図のなかに見られない。Orfacanと記されるのは1561, 1570, 1570, 1580, 1596, 1616, 1626, 1628, 1634, 1646, 1650, 1652, 1651 or 1654, 1654, 1654, 1654, 1660, 1669, 1670, 1670, 1679, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680, 1680-1700, 1681, 1684, 1690, 1695, 1700, 1700, 1705, 1705, 1705, 1710, 1710, 1714, 1714, 1714, 1714, 1715, 1720, 1720, 1730, 1730-1740, 1740, 1740, 1750, 1792年印刷地図である。

Corfacamと記されるのは1596, 1616年印刷地図である。Orfancaと記されるのは1600年印刷地図である。Orfacaと記されるのは1640年印刷地図である。Churfacanと記されるのは1650年印刷地図である。Orfacnと記されるのは1652年印刷地図である。Corfacdoと記されるのは1650-1658年印刷地図である。Corfacaoと記されるのは1662年印刷地図である。Kurfakanと記されるのは1679, 1679年印刷地図である。Corfacaと記されるの

は1680年印刷地図である。Gorfocanと記されるのは1690年印刷地図である。Corfacと記されるのは1700, 1723, 1726年印刷地図である。Orfazanoと記されるのは1714年印刷地図である。Karfakanと記されるのは1717年印刷地図である。Orfacanoと記されるのは1730, 1730, 1730年印刷地図である。Kurfekianと記されるのは1730, 1779, 1780, 1780, 1780, 1780, 1788, 1794, 12th May 1794, 1794, 12th May 1799, 1804, 1822, June 1822年印刷地図である。Gulfenと記されるのは1740年印刷地図である。Kibgekianと記されるのは1755年印刷地図である。Kursakianと記されるのは1760年印刷地図である。Chorfakanと記されるのは1765, 1772, 1772, 1772-1774, 1820-1830, 1823, 1831, 1831, 1853年印刷地図である。Curfekianと記されるのは1780年印刷地図である。Kourfekianと記されるのは1787-1788である。Chorfekianと記されるのは1794, 1807, 1815年印刷地図である。Ourfekianと記されるのは1804である。Kunekianと記されるのは14th July 1814, 1817, 1830, 1840, 1850年印刷地図である。Kinekianと記されるのは1816, 1820-1830年印刷地図である。Chorfakenと記されるのは1817年印刷地図である。Khorfakanと記されるのは1832, 1834, 1835, 1858, 1860年印刷地図である。Ghorfakanと記されるのは1840年印刷地図である。Khorefacaunと記されるのは1843, 1851年印刷地図である。Khorfakaunと記されるのは1850年印刷地図である。Khorfacaunと記されるのは1850年印刷地図である。Khorefakaunと記されるのは1851, 1860年印刷地図である。Kurwnと記されるのは1851年印刷地図である。Khor Fakanと記されるのは1860年印刷地図である。

1860年頃のロンドン印刷Persian Gulf地図は海の深さを数字で記し、その数字は航海ルートを引きいたのと同様に見える。コールファッカンの拡大図があり、東北から南西に航海ルートがあり、私たちが発掘していたエム・ゴバーナの海岸に達する。さらに発掘調査した砦北側の海岸にルートが延び、さらに東側の島までルートが延びている。この図からもコールファッカンの町跡が19世紀にも町であり、港町であったことが証明できる。

## カルバ

カルバは古地図では不明瞭である。16世紀から18世紀中頃までペルシア湾岸のジュルファールのある位置の海岸にCalbaと印されるのが一般的であるが、あきらかに場所が違う。1548年の地図がその最初であるが、この地図が地点を誤り、その後の地図が同じ位置に印したと推測できる。位置を誤ったのでなければ、カルバはペルシア湾からオマーン湾側に18世紀中頃に移動したと推測できる。現在のカルバの位置に18世紀後半からKalbeと記され、19世紀中頃からKulba, Kalbah, Kulbahの表記が使われる。コールファッカンの南にCalataと記された町があり、これがカルバを示した可能性はある。現在一般的なKalbaという表記は古地図に見られない。

## 19世紀以降に登場する町

現在著名な町や遺跡周辺に関連する町、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、アジュマン、ハムリヤ、ラッセルカイマ、シャーム、フジェイラなどはいずれも19世紀になって初めて地図に名前が現れる。1831年地図にSharja, Ras el Khima、1832年地図にAbothubbee, Debai, Sharga, Ras el Khymaが記される。1840年地図にFejira、1851年地図にShamm、1860年地図にAymaun, Shaumがいずれも初めて登場する。フジェイラを流れるワディハムは1858年地図に記される。

## 地図に記された歴史資料

### 航海ルート

地図に描かれた航海ルートを見る。海の深さを数字で地図に示したものは、航海ルートをより具体的に数字で示した図といえる。ペルシア湾全体の海の深さが記された地図は1832年に印刷された「Reduzirte Karte vom Persischen Golf」、1860年頃にロンドンで印刷された「Persian Gulf」である。1832年図よりも1860年図のほうがペルシア湾内の全域に深さが記入されている。沿岸に沿うルートとイラン側とアラビア半島側を横断するルートが密集して描かれている。オマーン湾はアラビア半島側とイラン側の沿岸航路がルートであり、横断するルートは記されていない。海が深いから深さを記入する必要はない。

地図に航海ルートが線で描かれることは希であるが、1865年の地図2枚にルートが記される。いずれもRoyal Geographical Societyのために印刷されている。ペルシア湾全体の航海ルート図「Map of Arabia shewing the routes of W.G. Palgrave Esq. In 1862-3」[Sultan Bin Muhammad Al-Qasimi, The Gulf in Historic Maps 1493-1931"1996]に示された港を今の国名で記すとイラクBasra, イランBushire, Charak, Lingar, Bander Abbas, アラビア半島側の港はサウジアラビアMoharrik, カタールWokrah, アラブ首長国連邦Sharjah, オマーン湾岸ではオマーンTajirah, Sohar, Sib, Maskatである。ペルシア湾横断ルートはCharakとWokrah, LingarとSharja, Bunder AbbasとSharjaである。19世紀後半には大型船舶がイラン側の深い海を東西に走り、ペルシア湾横断は南北ルートを利用している。他の1枚のペルシア湾の西側部分航海ルート図「Map of Part of Arabia showing the route of Lieut. Col. Pelly」[Sultan Bin Muhammad Al-Qasimi, The Gulf in Historic Maps 1493-1931"1996.]には今のクウェート南のサウジアラビアMalah, イランBushire, バハレン西側を通過してサウジアラビアOkairを結ぶルートが記されている。同じ年に印刷された地図でBushireの他はルートと港がずれている。ルートや港が当時の代表的なものか、どのくらい時代を遡ることが出来るかを検討するための他の地図はないが、主要なルートの一つを示し、他に港はいくつもあったと推測できる。

### 景観

地図に描かれた町の配置や建物の景観を見る。オマーン湾岸の遺跡を直接に復元する資料は地図にないが、ペルシア湾岸の港や町の図がいくつかある。1760地図にはホルムズ島と周辺の海が描かれる。島には北端に砦、その南に町が描かれ、山並みの南側にもいくつかの建物が描かれる。島の東側には多くの帆をもつヨーロッパの大型帆船、西側と南側には三角帆のペルシア湾の船が描かれる。1774地図にはブシェール全域の平面図と海から見た側面図が描かれている。平面図には半島部と周辺地域が描かれ、半島先端にある町は湾内に面する側の一部を除いて市壁で囲われている。市壁のない部分は港である。半島内陸部側の市壁には門が2つあり、陸地側とつながる。町先端部市壁外の海岸には港マークがある。町から離れた半島反対側には砦がある。町の近くの湾内には村がある。側面図は海から見た市壁に囲われた町内建物が描かれている。1832地図には海の深さが記入されたペルシア湾図の周囲に、海から見た山並みや島が描かれ、それぞれの場所の海岸景観の特徴がわかる。1871年印刷の「オマーンとペルシア湾図」にはマスカットの港を海から見た図が描かれている。両側の岩上に砦、その間に町の建物、そしてその前の海に大型帆船が停泊している。

こうした海から見た景観は、最近の港町と類似する部分が多い。遺跡復元の参考資料となるが、オマーン湾岸で発掘した遺跡は町規模が小さいか、あるいは時代が古いので、市壁や港の状態が異なることも理

解できる。

森林が記載されるのは19世紀からである。1831地図：SharjaとRas el Khimaの間の地域はLower sandy coast with trees。1831地図：SharjaとRas el Khimaの間の地域はLower sandy coast with trees。シャルジャからラッセルカイマの間は海岸砂浜にマングローブが茂っていたことがわかる。現在はほとんどの地域で海岸のマングローブが枯れてしまったが、ハムリヤ砂浜海岸には化石化した痕跡が残り、ジュルファール遺跡海岸には発掘中に流れてきた苗木が根付いていた。ハレイラのクリーク内の小さな島全体が緑で覆われ、カルバでは都市開発によって1990年頃に枯れ始めた痕跡が残る。オマーン国境のコールカルバは今もクリークに沿って広い範囲にマングローブが茂っている。

### 地図から見る遺跡

今回検討した地図は当時の西洋人のうち学者や知識人が見ることができたイランからエジプトに至る地域世界の地図である。当時の最先端知識人の地理観は、このようなやや歪んだ地形図と簡単な地名の記された地図から得られたものであった。ペルシア湾・オマーン湾岸に居住した現地の人々は、こうした地図よりも詳しい地形や景観を当然知っていたに違いない。当時の人々が見馴れていた山陰や島の形状についての情報は今に残らない。私たちが地図に見るのは歴史的地形・景観である。しかも発掘した遺跡周辺に限られた地図はなく、当時の地域世界地図の一部にペルシア湾が含まれる程度の地図がほぼすべてを占めている。簡単な地図の中に詳しい情報を見ることはできないが、発掘した遺跡や小さな町は広い範囲を描いた地図に簡単に記載されている。地名の変遷が検討した主な成果となるが、景観復元のためのいくつかの参考資料を得ることができたのは成果である。

### 文献

- Dostal, W., 1983, The Traditional Architecture of Ras al-Khaimah (North), (Beihefte zum Tubinger Atlas des Vorderen Orients: Reihe B, Geisteswiss. Nr.54), Reichert.
- Fenelon, K.G., 1969, The Trucial States: A brief Economic Survey, Middle East Economic and Social Monographs, Bayrut.
- Longworth Dames M., ed., 1918, The book of Duarte Barbosa, London, The Hakkuyt Society, 2nd Series 44, 73-74.
- Official Report, 1958, The Tribes of the Trucial States. Dubai-Sharjah.
- Sultan Bin Muhammad Al-Qasimi, 1996, The Gulf in Historic Maps 1493-1931.
- Sultan Bin Muhammad Al-Qasimi, 1999, The Gulf in Historic Maps 1478-1861.
- Sasaki, T., and Sasaki, H., Japanese Excavations at Julfar—1988, 1989, 1990 and 1991 Seasons —, Proceedings of the Seminar for Arabian Studies, Vol.22, 105-120, 1992年.
- 佐々木達夫「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20号,1-44, 1993年.
- Sasaki, T., Excavations at Julfar in 1992 season, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 20; 45-49, 1993年.
- Sasaki, T., Sasaki, H., 1993 Excavations at Julfar, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 21: 1-106, 1994年.
- Sasaki, T., 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 22:1-74, 1995年.
- Sasaki, T., 1995 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Ras al-Khaimah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:37-178, 1996年.
- Sasaki, T., Umayyad and Abbasid finds from the 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23:179-222, 1996年.
- Tatsuo Sasaki & Hanae Sasaki, 1997 Excavations at Jazirat Al-Hulaylah, Ras Al-Khaimah, U.A.E., Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 24:99-196, 1998年.
- 佐々木達夫「14世紀の染付と釉裏紅はどのように出土するか」『楢崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、467-477, 1998年
- 佐々木達夫、佐々木花江「ペルシア湾岸出土の中国銭」『出土銭貨』9: 112-116, 1998年.
- 佐々木達夫「イスラームの染付」『東洋陶磁』28:43-54, 1999年.
- 佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘—1998年—」『金沢大学考古学紀要』25:118-169, 2000年.

佐々木花江、佐々木達夫「ササン朝後期ハレイラ島出土陶器の産地」『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』36-49,2001年。

佐々木花江、佐々木達夫「物を使用した場所の検討—コールカルバ町跡の景観復元—」『第10回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』69-80,2003年。

## 第14章 オマーン湾岸の港町景観復元

### 中世近世港町の地勢と環境

ペルシア湾やオマーン湾は新石器時代から海の道として利用され、現在でも海岸に漁村と貿易港町が連なっている。海岸にある町跡は漁村や港町であったに違いない。遺跡発掘を進めているコールファッカンやコールカルバから港町遺跡としての景観を復元してみよう。この地域の古代中世港町を遺跡から考えることは古文書の少なさを補うが、発掘された遺跡もまだ少なく、遺跡そのものから港町のあり方を検討することが難しい。当該地域は古文書がなく港施設も残らず、他地域と同じ研究方法はとれないという条件も付いている。

伝統的な生活は自然環境に対応していたと思う。筆者がペルシア湾とオマーン湾の調査に入った1980年代後半は近代化が進行し、同時に古い町や伝統的環境も残存していた。地形は海岸地域、平坦地・平原、山、砂漠の4つに分かれる。海岸地域と山は気候がわずかだが異なり、夏の暑さに堪える生活風土が築かれていた。海岸地域は夏と冬の季節があり、夏は高温多湿、冬は比較的涼しく少量の雨が降る。夏の北西風は暑さをしのぐためにウィンド塔で利用され、冬は南西風を避け寒さから逃れた。海岸地域は漁民農民が住み人口が多い。平坦地は高温乾燥で冬少量の雨が降り、山際から水を引き、オアシスがあり、農民が住む。ただし海岸地域では夏に山際平坦地への季節的水平移動、山からは夏に平坦地へ垂直の季節移動が一般的であった。冬は海岸地域へ移動し漁業、山へ戻り農業が行われた。夏は暑く冬は涼しく雨が降る山上は農業に適している。山と砂漠の間には移動路と放牧地が続いている。砂漠は放牧民が利用するが人口は少ない。山々は石灰岩からなり、褶曲の岩肌が露出している。ムサンダム半島から南に続く山脈が地形と気候に影響を与え、山に冬雨が降り、山上の台地上あるいは段々畑状の平坦部で冬雨農耕を可能とする。ワディの谷は深く、河床には大小の丸みある石が厚く堆積し農業はできず、わずかに放牧地として利用された。山地と海岸の間は平坦地となり、平坦地の山際は水位が低く井戸を掘ると水が湧き、最近まで灌漑によるナツメヤシ畑が広範囲に見られた。

1958年の報告には現在のアラブ首長国連邦とくにラッセルカイマの範囲に17の部族が住んでいたという[Official Report, 1958]。1960年代の人口比率は海岸地域が54%、山地が25%、平坦地・オアシスが18%、砂漠が2%と推測された[Fenelon 1969, Dostal 1983]。1968年のラッセルカイマ首長国人口は24,387で、17部族で割ると1400人となり、実際にはこれより多い部族すなわち小さな村もあったであろう。千人ほどの人々が住む町は大きい町であったと言って良いだろう。周辺地域より規模が大きいジュルファール居住者は数千人、最盛期は1万人以上に達したと推定しても良いのだろう。ジュルファールの場合は単独部族の構成ではなく、港町特有の各地から来た人々が混在する町であったと想像できる。コールファッカンは千人に近い規模の町跡、コールカルバは数百人の町跡と推定できる。

## 最近廃墟となった港町

堤防や棧橋、護岸工事の痕跡があれば、考古学の発掘で具体的に港町が検討できるが、そうした施設が無い場合は遺跡が港町かどうか判然としない。海岸と内陸の遺跡を比較しても、町の構造や発掘された住居跡は類似し、港町と農村の区別もできない。海岸の遺跡に漁民が住んだのは当然だが、港町に商人や漁民が住んでも、商人や漁民、農民の生活様式や生活用具を出土品で見分けられない。同じ町に住む人々が農業、漁業、牧畜あるいは一部の人が手工業や商業に従事するのは一般的なことで、発掘された遺跡はその出土資料から港町であることを主張しないのである。

資料は狭い部分の詳細な発掘成果、聞き取り等で推測した少し前の様子、現代の気候風土・地勢・地形である。アラビア半島ペルシア湾岸にもポルトガルが築いた砦絵図があるが、現代的な等高線地図は1970年代以降となる。遺跡と同時代の研究資料は部分発掘成果に限られている。その成果を全体像の中で評価したいが全体像が霞んで見えず、広範囲であった生活空間や過去の生活環境景観は復元しにくい。石作り壁や日干レンガ壁の家跡は発見が容易だが、砂地や砂漠に生活した人々の痕跡を検証するのは難しい。生活砂地が風によって移動し、地表面に残された土器片などは同じ場所に沈むから遺跡そのものの認識さえ難しい。居住区では住居、井戸や竈、道路など生活関連遺構が発掘され、壁材や建築技法、住居の性格、平面形態などから建築が立体的に復元され、個別の建築を総合して生活空間や景観を復元する。最近の農耕地の広がりにも変化が見られるから、以前の農耕地も範囲や状態が変化していたに違いない。遺跡と同時代の放牧地、狩猟地、漁労地を知るのも難しいが、現在の地表面や景観から時代を特定しない農耕地や漁労地の範囲推定は可能である。生活空間は居住区、農耕地、放牧地、狩猟地、漁労地を含み、出土資料も解釈して生活景観を復元することになる。

コールファッカン町跡は北が湾の砂浜、南は急峻な岩山、西は山麓平坦地の農圃、東は砦が築かれる山となる。漁船の停泊に適した静かな湾と防御に適した岩山に囲まれる。20世紀末まで町があり、14～15世紀の中国青磁や染付、15世紀のミャンマー青磁が出土し、16世紀初ポルトガル来航以前からの港町である。16世紀の出土品はきわめて少なく、ポルトガルが砦を建設した頃、旧住民は殺され家や農圃は破壊され、僅かに生き延びた人々は山に逃げたと想像できる。馬や農産品も失われ、他地域との貿易そのものも消失したのだろう。その後再び現地人によって再建され、地域の歴史の変遷と貿易状況が具体的な出土品で復元できる。人々は漁業、真珠採取、農業、牧畜、貿易などで生活していたのだろう。発掘で具体的な証拠は発見できないが、想像を交え自然と地勢から生活を推定することが可能である。以前は真珠採取と貿易が生計だったと地元民がいう。20世紀までは夏は真珠を採り、冬にインド方面を含めて貿易に従事した生活が続いた。季節で生活が変化するのもアラビアの一般的な港町の様相であったろう。町を見下ろす急峻な山上の平坦地にある畑は冬雨による小麦栽培を示し、近海漁業やデーツ、野菜類の農業も生活を支えたであろう。真珠は最近まったく採取されないのだから、以前のオマーン湾岸に位置するコールファッカンの真珠採取状態は不明である。産業は時代で変化するが、基本的な生活は継続的であろう。出土したアジア各地の陶磁器から遠隔地貿易が推定でき、海上貿易を担った人々の生活の場が発掘した遺跡で、人々が使用した陶磁器片が貿易と生活の様相を今に伝える。貿易、真珠採取、漁業は船を使用し、船は海岸近くの海か砂浜に停泊した。数十年前の写真を見ると、海岸に堤防や護岸工事がなく砂浜が広がっている。護岸工事と堤防、港施設の建設は20世紀後半からであった。



コールカルバ町跡はクリークが海岸と接する地に南北500m東西300mに広がる。町内南部の岬出入り口は東の砂浜海岸にあり、南に大クリークが延び、マングローブが茂る。町跡の南西には墓地があり、町跡内に農耕地は少ない。海岸から岩山が連なる麓まで4kmあり、1970年代地図には町跡から西に2kmから幅2kmが農耕地と記されている。山麓の水を利用したナツメヤシ畑がそれ以前からあったと推定できる。海岸の町に冬居住して漁業に従事し、夏は農耕地に居住地を水平移動したと元住民がいう。ナツメヤシの収穫時期も移動要因となっていた。地形や植生、居住域から漁業と農業が主産業であったと推定できる。町は海側を除く三方が泥壁の市壁で囲われていたが、海岸側には市壁がなく砂浜まで家が建っていた。砂浜に漁船が陸揚げされたが、多くは海岸近くの海に停泊していた。海岸に港施設はなく、自然の砂浜を利用していた。漁業は投げ網や地引き網で、捕獲した近海魚は食料となり、鯛は砂地に干してラクダの餌や農耕地の肥料となった。壁で囲われた町の外にも少数の家が建っていた。泥壁で囲った敷地内の片側に冬用の細長い泥壁家を建て、隣に夏用の椰子枝で囲った家を建てた。泥壁内に海岸で採集した小さな珊瑚塊を入れ補強している。泥は近くの山の石灰と粘土を混ぜている。屋根は平らで、近くで採取した短い曲がったマングローブを並べ、その上にナツメヤシ枝葉を敷いて泥を塗る。木材にはナツメヤシの幹も使用した。庭や農耕地に植えていたナツメヤシ枝を切って立て並べた壁の家は、壁の角や中間にやや太い棒を砂地に突き刺し、その痕跡が柱穴跡として残る。暑い季節の夜は風通しが良い家で寝た。家外に残る焚き火跡は土鍋で調理し、コーヒーを湧かし、魚を焼いた跡であり、パン焼き竈や貯水施設も家外にある。冬には一時的に降雨があり水が溜まるが、いつもは人々やロバが水を運んだ。この水で食事を作り、洗濯し、羊や山羊、ラクダに水を与えた。主要な生産活動のため、海岸部と数キロ離れた農耕地との間を移動した。それは短距離の季節的水平移動である。冬は海岸で網を使って魚を捕り、夏はナツメヤシの茂る農耕地で高温のなかでデーツを収穫した。羊や山羊の飼育も盛んで、ヨーグルトやチーズも作った。食料はパンやデーツが主で、山羊肉より魚を多く食べた。魚は塩漬けや乾燥した保存食も含まれる。近隣の部族と交易し、対立や抗争もあり、病気も流行し、生存が困難な時期もあった。百軒から二百軒の家族が作る部族で、オマーン湾岸周辺では一般的な規模の町であった。周辺の山麓により小さな村も点在していた。

### 港町景観の復元

20世紀後半から大型船着岸等のため岸壁施設が整備されたが、取り上げた港町はそれ以前の帆船や小形漁船の時代である。アラビア半島のペルシア湾岸やオマーン湾岸の港町遺跡には港湾施設が発見できない。最近廃墟となった港町から見れば、他地域とくに地中海に残るような石作り施設はなかったことがわかる。海岸の町跡を港町と言っているのは、最近まで続いた港町のあり方との比較からであり、遺跡の出土品や建物跡の状態から港町と推定しているのではない。考古学資料のみからは港町の機能や居住した商人の活動、施設や商取引を研究することができない。マスカットの城壁に囲まれる港入り口施設はイギリスが作ったものであり、アラビア半島の伝統的施設ではない。

ペルシア湾の町は砂浜に沿って平坦地に住居が建ち並ぶ姿が復元できる。町の平面形は海側が直線状となり陸側が半円形状となるが、島の場合は長楕円形状となる。砂浜は船を水から揚げ荷揚げ荷積みを利用する場所であり、砂浜の前海の状態を分類すると港や港町を理解しやすい。船が停泊する砂浜前海は、島状の砂丘の内海側、クリークと海が接するクリーク内の砂浜、湾内砂浜、外洋の直線的砂浜と分けられる。島とクリーク沿いは外界からの防御という面で同じ程度である。周囲の自然環境で分けると、農耕地がな

い孤立した島で農耕地がない場合と、町の周囲に農耕地がある場合がある。遠隔地交易の比重が高い港町は安全のため島に立地する場合が多く、農耕地が少なく、町の継続性が短く、現在は廃墟となっている。町の規模によって立地条件が異なる。大規模港町はジュルファールのような限られた期間の立地となるが、海岸に点在する小さな町は、それぞれの町が立地する自然条件の違いで港の姿が変わり、居住期間は長いことが多い。

ペルシア湾側のハレイラやジュルファール、すなわち6世紀から15世紀の港町は島状の内海側にある。港湾施設を作らず自然地形を利用している。コールファカンは14世紀から続く港町で湾内に立地し、波静かな入り江と港湾に船が停泊できる条件が整う。コールカルバは17世紀から20世紀の港町で海岸に沿うクリーク内に立地し、ドバイと同じ立地条件であり、ドバイは現在もその立地を継続してクリーク及び海岸砂浜に近代的港施設を築いている。ラッセルカイマはジュルファールの南側にある砂丘上の町で、ジュルファールと同じく内海のクリーク内に港があり、現在は内海側が護岸工事されて近代的港施設となる。ハムリヤは砂丘上の町跡で港はクリークを利用した内海であったと思われる。

港町の景観は、ジュルファールやハレイラのような町周囲に農耕地がないA型と、コールファッカやコールカルバのように周囲に農業地があるB型に分類できる。A型は短期間に栄えるが継続せずに町が廃墟となる。外に対する貿易港町である。ただし、19世紀初のドバイには町外に農耕地があり、A型にも農耕地があった可能性がある。B型は長期間にわたり町が継続される自然地的条件があり、居住者が農耕生活をする港町で、今も各地に見られる漁業中心の港町の形態である。内湾に面するB1型と外洋に面するB2型に分かれる。B1型のコールファッカは通年居住遺跡で遠隔地貿易を行い、B2型のコールカルバは季節的居住遺跡で沿岸漁業を行うようである。

遺跡の立地状態から港・船停泊の位置を推定する。砂浜は荷揚げ荷積みする場所、船を水から揚げる場所であり、砂浜前の海の状態は港町の景観を分類する要因となる。町跡周辺に農耕地が推定できる場合は○、周辺に推定できない場合は×とした。ただし、数キロの範囲を考えた場合には農耕地が推定でき、日常生活圏のなかに農耕地がまったくないのは例外的であろう。人の住むところでは井戸を掘り、水を畑に撒き、農村漁村あるいは港町だろうと羊・山羊を飼うのが一般的であったろう。

表 港の立地と遺跡の環境

遺跡	分類	年代世紀	島・クリーク・内海 の砂浜	湾内砂浜	直線的砂浜	農耕地
ハレイラD	A	6~7	○ (岩肌もある)			×
ジュメイラ	B2	9~10			○	○
ジュルファール	A	14~15	○			×
コールファッカ	B1	14~20		○		○
ラッセルカイマ	B1	17~20	○			○
シャルジャ	B1	18~20	○			?
ハムリヤ	A	16~20	○			?
コールカルバ	B1	18~20	○			○
ドバイ	A	19~20	○			○

ペルシア湾岸・オマーン湾岸のアラビア半島側の中世近世港町景観は、城市壁で囲まれる中国の港町あるいは地中海の石作り港施設と異なる面が特徴となろう。アラビア半島砂漠地帯の港町には船着場はあつ

たが波打ち際の港湾施設は無かった。港町であったと推定した理由は20世紀後半に入る頃までの港町との類似性からであり、建物跡や出土品から港町であったと推定することは難しい。この地域における城壁を巡らした港町は16世紀初ポルトガルの砦建設に始まり、その姿はバハレンやホルムズ島に見ることができ。さらに近代的な防御付港湾施設はイギリスが建設したイランのプーシェフル軍港にみられる。しかし、こうした16世紀から18世紀にかけて登場した防御的港町はアラビア半島のペルシア湾岸・オマーン湾岸の伝統的港町の姿とは異なるものであった。

当該地域の船から見える港町の色は青白黄青である。砂漠が多いアラビア半島ペルシア湾の港町は青い海に白い砂浜があり、黄色の住居が建ち並び、背景は岩肌を露わにした山並みと青空である。山岳地域が間近となるアラビア半島オマーン湾の港町もこれと類似している。ただしコールファッカンには建物が紅色と例外的で港町の色は青白紅青である。海から見る港町の輪郭は低く長く延びた台形である。住居は平屋または2階建て、町の輪郭は海からわずかに盛り上がる程度である。現存する古いモスクはいずれも平屋だから、モスクでさえ町中の住居群に溶け込んでいる。町の手側は市壁もなく砂浜に家が建っており、開放的である。町の背後は防御のため市壁で囲われるが高さは住居と同じ程度である。

船は町の前の海に停泊する。船が停泊する場所は砂浜、外洋に面する直線的な砂浜、湾内、クリーク内の岸辺であるが、ジュルファールの場合には湾・クリーク内の波静かな砂浜岸辺に停泊した。ハレイラDは砂浜の他に岩肌が露出した部分もあったが、海の状態は波静かなクリーク内岸辺という点でジュルファールと同じである。いずれの町にも船が接岸する恒久的な施設はなかった。島または島状となる場所の内海側に町が立地し、町内に農耕地はない。ジュルファールやコールファッカンは通年居住の大きな町で夏は真珠採取で賑わい、冬はインド洋貿易の拠点港として人口は周辺地域の町よりも多かった。拠点港周辺の小さな港町は遠隔地貿易港ではなく漁港であり、農業と暑さの関連で季節的に居住する町であり、現在の地勢と景観から類推しても漁労用の小船が停泊するのに適した港町であった。

#### 文献

- Dostal, W., 1983, *The Traditional Architecture of Ras al-Khaimah (North)*, (Beihefte zum Tubinger Atlas des Vorderen Orients: Reihe B, Geisteswiss. Nr.54), Reichert.
- Fenelon, K.G., 1969, *The Trucial States: A brief Economic Survey*, Middle East Economic and Social Monographs, Bayrut.
- Longworth Dames M., ed., 1918, *The book of Duarte Barbosa*, London, The Hakkuyt Society, 2nd Series 44, 73-74.
- Official Report, 1958, *The Tribes of the Trucial States*. Dubai-Sharjah.
- Sultan Bin Muhammad Al-Qasimi, 1999, *The Gulf in Historic Maps 1478-1861*.
- Sasaki, T., and Sasaki, H., *Japanese Excavations at Julfar—1988, 1989, 1990 and 1991 Seasons —*, *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, Vol.22, 105-120, 1992年.
- 佐々木達夫「アラビア湾の港湾都市遺跡」『金沢大学考古学紀要』20号,1-44, 1993年.
- Sasaki, T., *Excavations at Julfar in 1992 season*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 20; 45-49, 1993年.
- Sasaki, T., Sasaki, H., 1993 *Excavations at Julfar*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 21: 1-106, 1994年.
- Sasaki, T., 1994 *Excavations at Jazirat al-Hulaylah*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 22:1-74, 1995年.
- Sasaki, T., 1995 *Excavations at Jazirat al-Hulaylah, Ras al-Khaimah*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 23:37-178, 1996年.
- Sasaki, T., *Umayyad and Abbasid finds from the 1994 Excavations at Jazirat al-Hulaylah*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 23:179-222, 1996年.
- Tatsuo Sasaki & Hanae Sasaki, 1997 *Excavations at Jazirat Al-Hulaylah, Ras Al-Khaimah, U.A.E.*, *Bulletin of Archaeology*, The University of Kanazawa, 24:99-196, 1998年.
- 佐々木達夫「14世紀の染付と釉裏紅はどのように出土するか」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、467-477, 1998年.

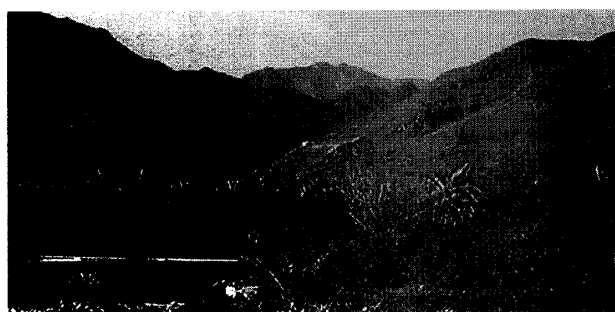
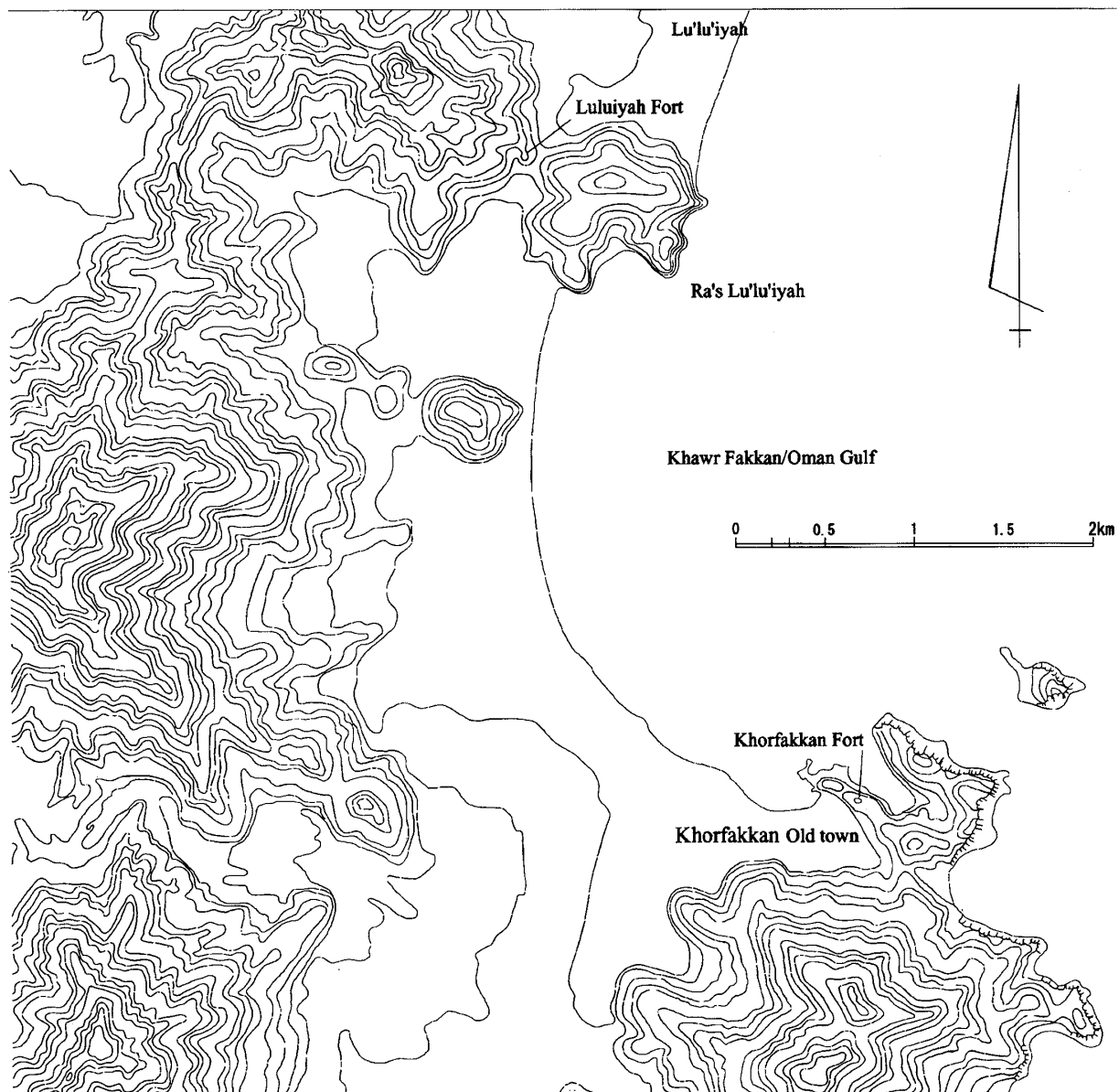
- 佐々木達夫、佐々木花江「ペルシア湾岸出土の中国銭」『出土銭貨』9:112-116,1998年。  
 佐々木達夫「イスラームの染付」『東洋陶磁』28:43-54,1999年。  
 佐々木達夫、佐々木花江「ハレイラ島の発掘—1998年—」『金沢大学考古学紀要』25:118-169,2000年。  
 佐々木花江、佐々木達夫「ササン朝後期ハレイラ島出土陶器の産地」『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』36-49,2001年。  
 佐々木花江、佐々木達夫「物を使用した場所の検討—コールカルバ町跡の景観復元—」『第10回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』69-80,2003年。

## 補記

本研究は海上貿易史、東西文化交流史、ペルシア湾・オマーン湾交易史、イスラーム地域史、生活の場としての住居変遷史、地域生活様式、港町などの筆者の研究テーマを扱っている。海上を木造帆船で貿易品や生活物資を運び、物の動きが文化の交流を促し、ペルシア湾やオマーン湾の沿岸でも各地から運ばれた交易品を用いた生活があった。この地域の歴史を探ることは特色がある地勢や気候風土のなかで具体的な生活史を知ることになり、イスラーム地域史研究の一つとなる。その生活で使用した物を遺跡から発掘すると生活の中でどのように用いたかを知る手がかりが得られ、住居構造や居住方法の変遷は物と生活の関係を知る基礎情報となる。生活の場である遺跡と出土した生活物資は、地域や時代の特徴を伝える地域生活様式を復元する資料となる。生活様式の復元は地域文化史の基礎資料である。そうした地元の生活を支える漁労の場は世界に開かれた港町となり、物や情報を運ぶ海と陸の道の結節点であった。港町遺跡は海上貿易史研究の場となり、文化交流の研究を行う基礎資料は港町遺跡の発掘で収集することができる。

狭い地域内の歴史の変遷を遺跡の発掘から探ると同時に、同じ時代における他地域の生活用品の使用や技術交流の実態を出土資料から具体的に描く。泥にまみれ時間がかかるが曲がり角の先の空き地の地下1mに何が埋もれているかを話題とするような町内会的調査方法をとる。ペルシア湾岸とオマーン湾岸の遺跡を研究対象としたのは、20世紀後半においてこの地域の発掘や調査が政治的にも難しく未知の世界であったためだが、同じ目的をもった研究がほとんど行われておらず発掘によって新たな事実を発見する楽しみが大きいことも継続している理由なのだろう。他の地域でも見られる貿易品や港町という世界共通の場を扱うことから、ローカルな地域史に取り組むことがグローバルな世界史との関わりをもつことにもなる。各地から運ばれた陶磁器はグローバルな物の動きを具体的に示す考古学資料であり、ペルシア湾やオマーン湾の他に筆者は日本・中国・東南アジア地域でも同じテーマで研究を行っており、その成果を比較検討することは比較文化史と言えらるだろうと思う。

本稿に割り当てられた本誌の分量は発掘報告としては少ないため、発掘した遺跡の概要を知るために必要な図や写真を中心に図版を選択した。遺跡や遺構の細部に関する図面や写真、及び各遺跡の大量で多種類にわたる出土品の紹介については次稿に譲ることとなった。2005年3月刊行予定筆者の2つの論文に遺跡出土品の一部を掲載している。ペルシア湾岸・オマーン湾岸の代表的なイスラーム陶器変遷については『東洋陶磁』34号、ルリーヤ砦出土のイスラーム施釉陶器については『西アジア考古学』7号に写真と図を掲載している。

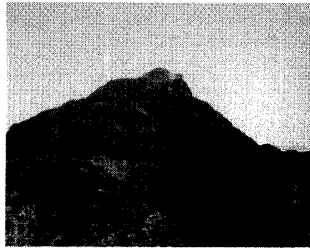


Luluiyah Fort from Luluiyah coast taken 2 January 2001

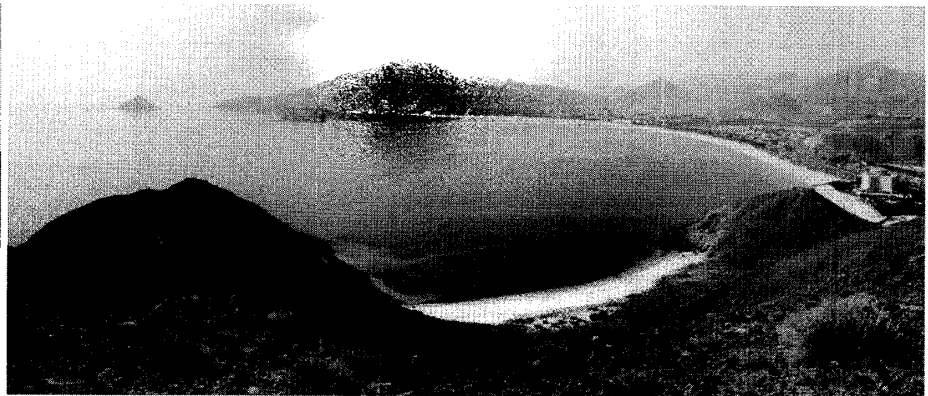


Khorfakkan bay from Khorfakkan Fort, taken 1994.

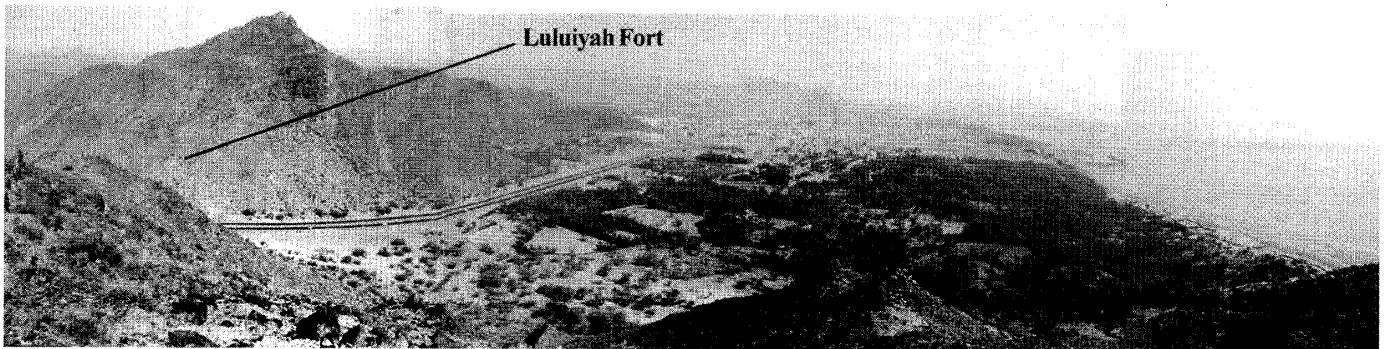
**Figure 3** Map of KhorFakkan showing the location of Khorfakkan Fort, Khorfakkan old town site and Luluiyah Fort. This map was made by using the 1976 map, some photos kept in the Department of Port and Customs at Khorfakkan, our survey in 1994 and 1995, and information from local people. The coastline has changed largely especially in the area of port and some mountains were cut and flattened. This map was drawn in 2001.



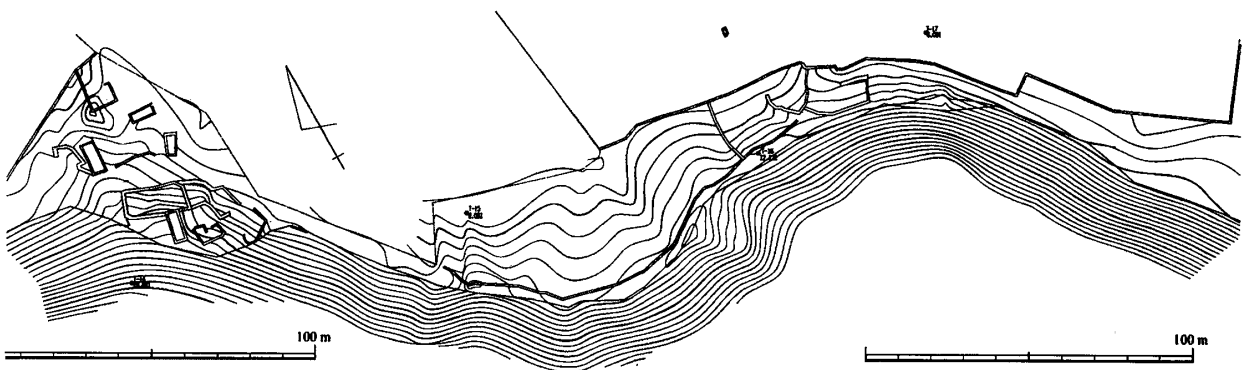
152m high mountain, where view of Khawr Fakkan in South and Luluiyah in North was taken. This photo was taken from Luluiyah fort.



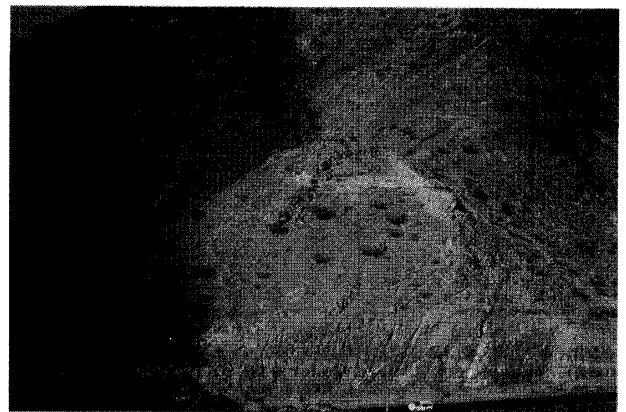
View of Khawr Fakkan from 152m high mountain, to the south



View of Luluiyah and Luluiyah fort from 152m high mountain, to the north

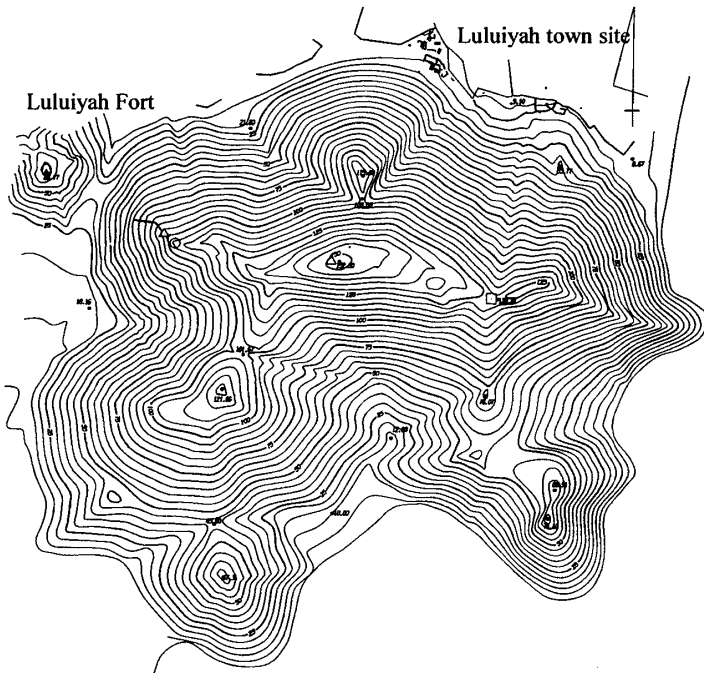


Plan of house area, Luluiyah.

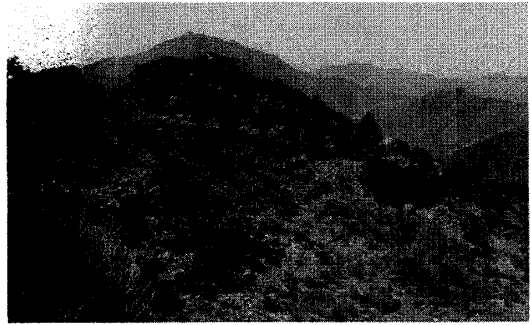


Luluiyah Fort from Tower A(152m). 25 April 2000(left).  
Luluiyah Fort from Tower B(104m), 1 January 2001(right).

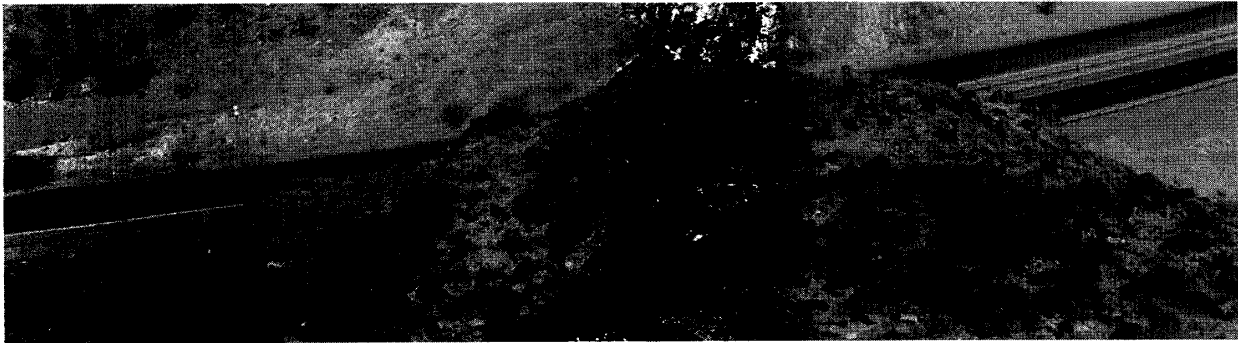
Figure 4 View of Luluiyah Fort and house area.



152m Mountain of Luluiyah showing Luluiyah Fort, Luluiya town site and towers..



Tower A located on the top of the 152m mountain near Ras Luluiyah.



Stone construction B, located west side of the 152m mountain or just below the Tower B(104m).



Tower B(104m) and stone room for honey near Tower B.



Figure 5 Stone constructions, 152m mountain.



Stone construction A, located east side of the 152m mountain.

Tower B(104m) and partition stone wall located west side of the 152m mountain, or in front of the Luluyah Fort.

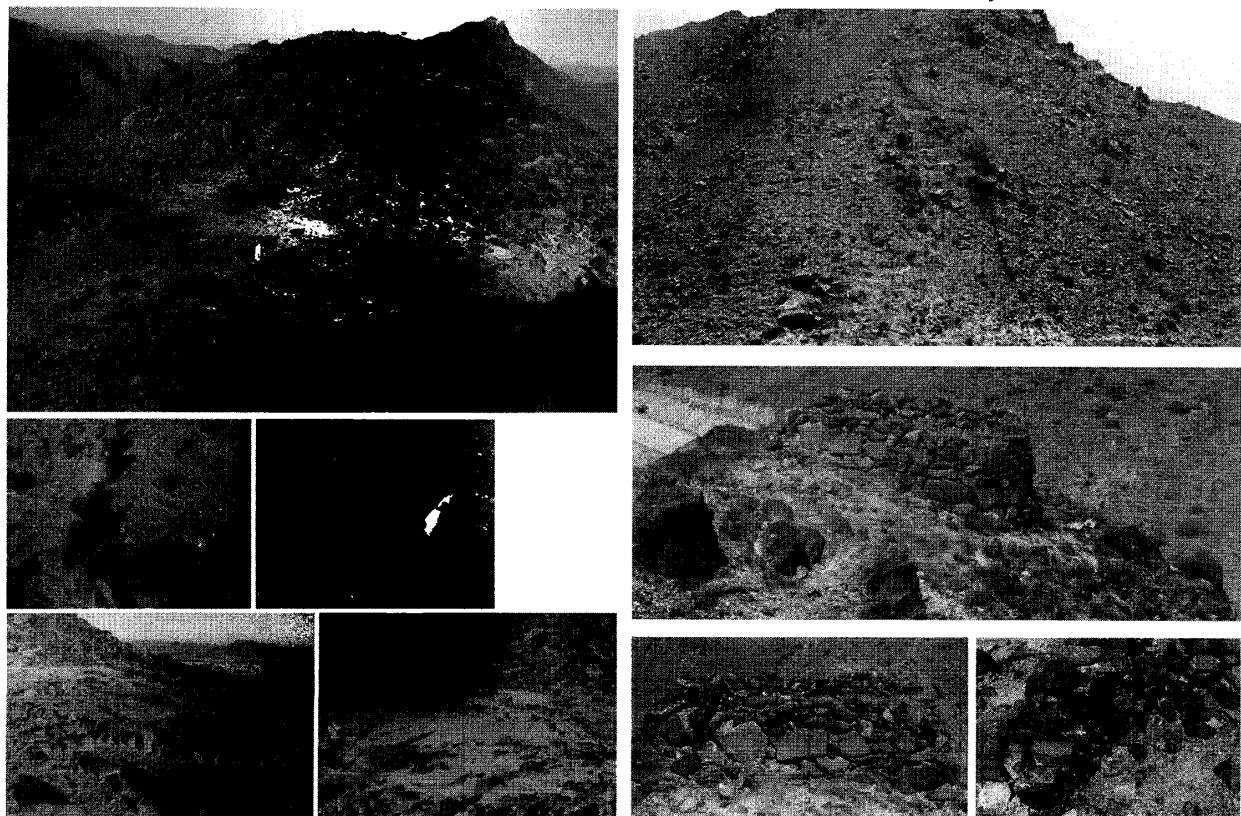
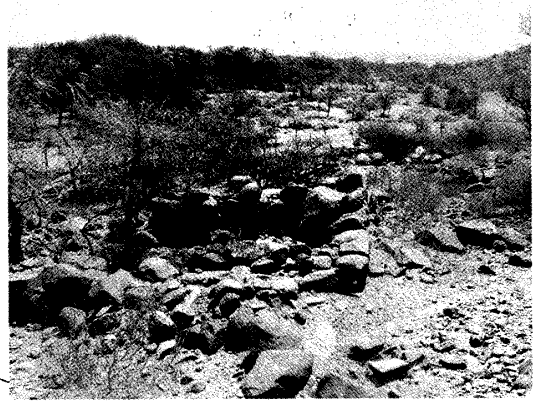
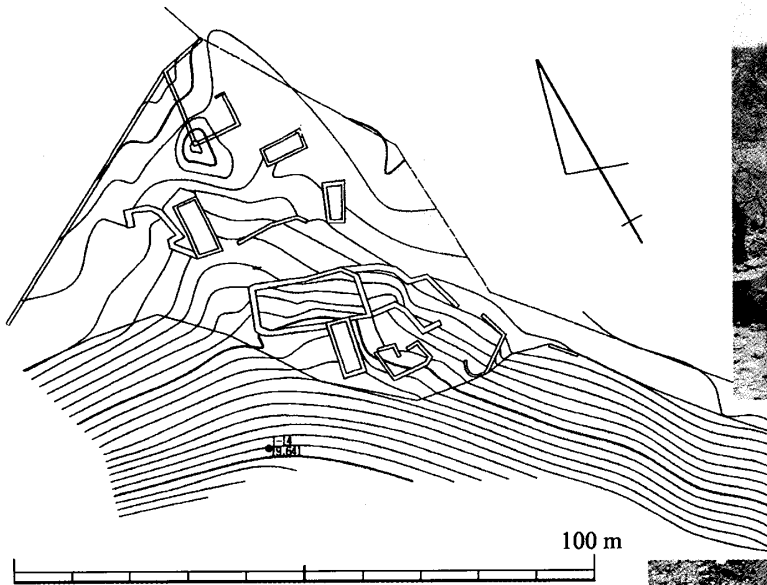


Figure 6 Stone constructions, 152m mountain.





Stone-wall House, Luluiyah House area

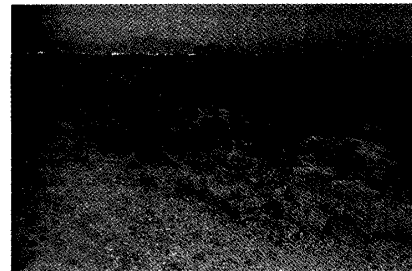
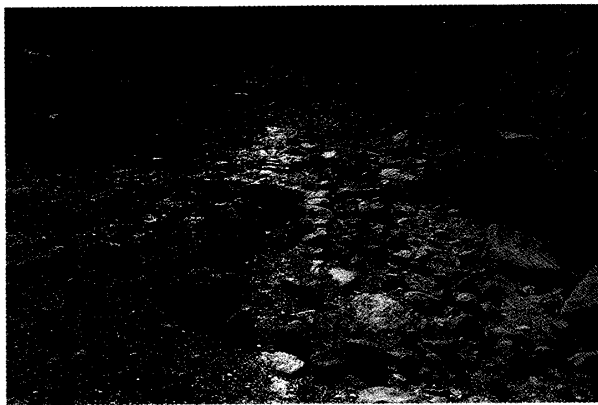


Figure 7 Stone-wall Houses at Luluiyah house area.

Luluyah Fort.  
Left; from south.  
Right; from east.

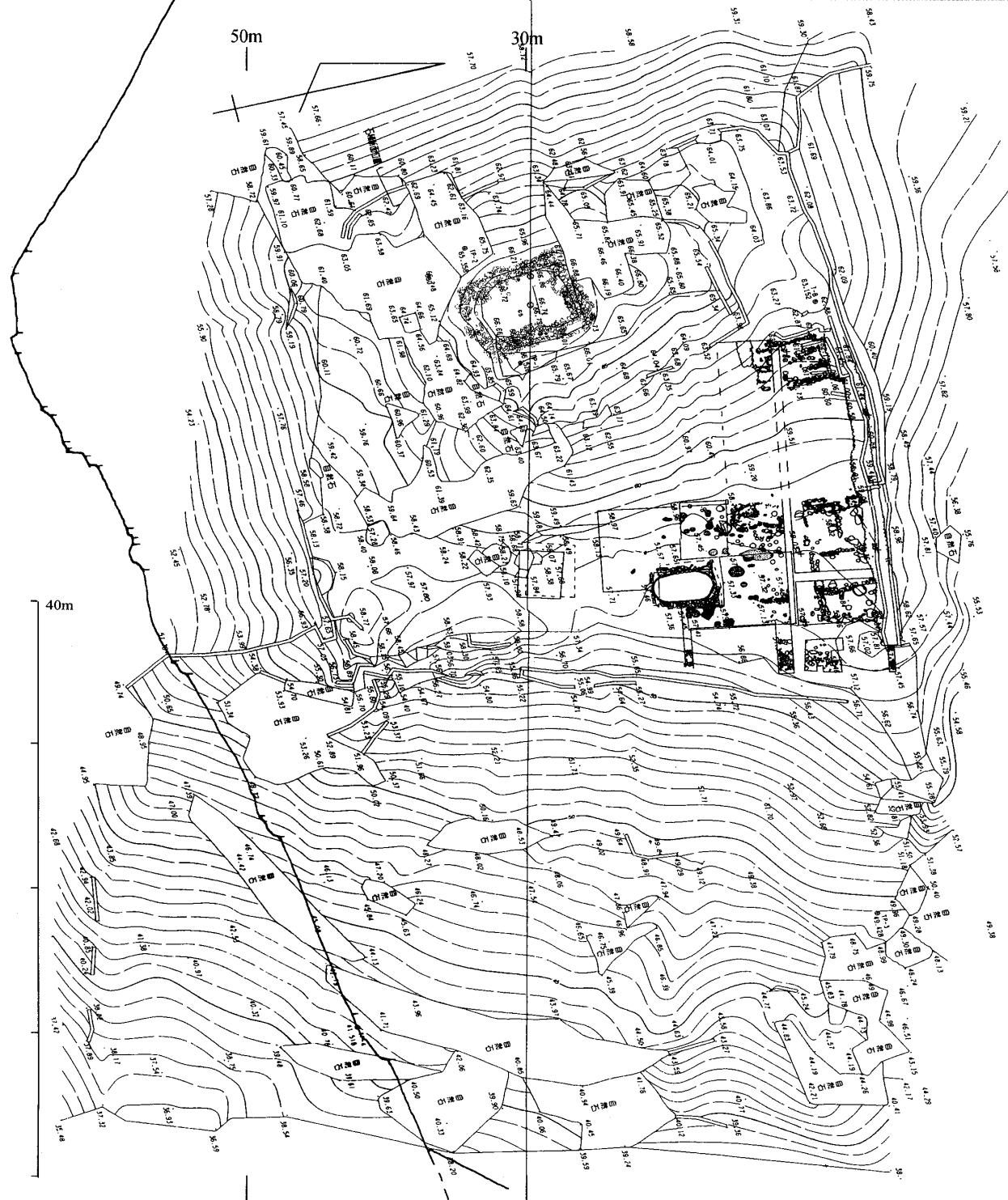
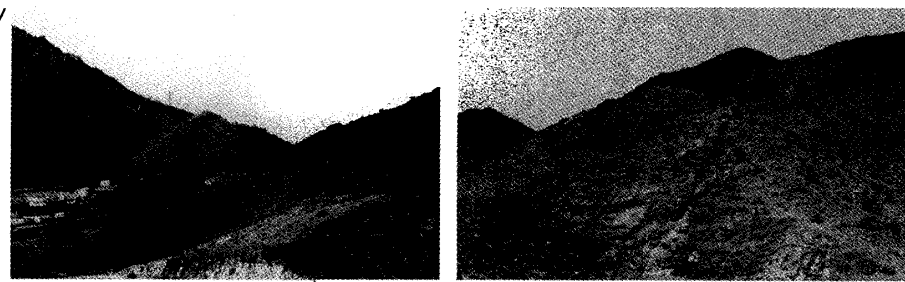
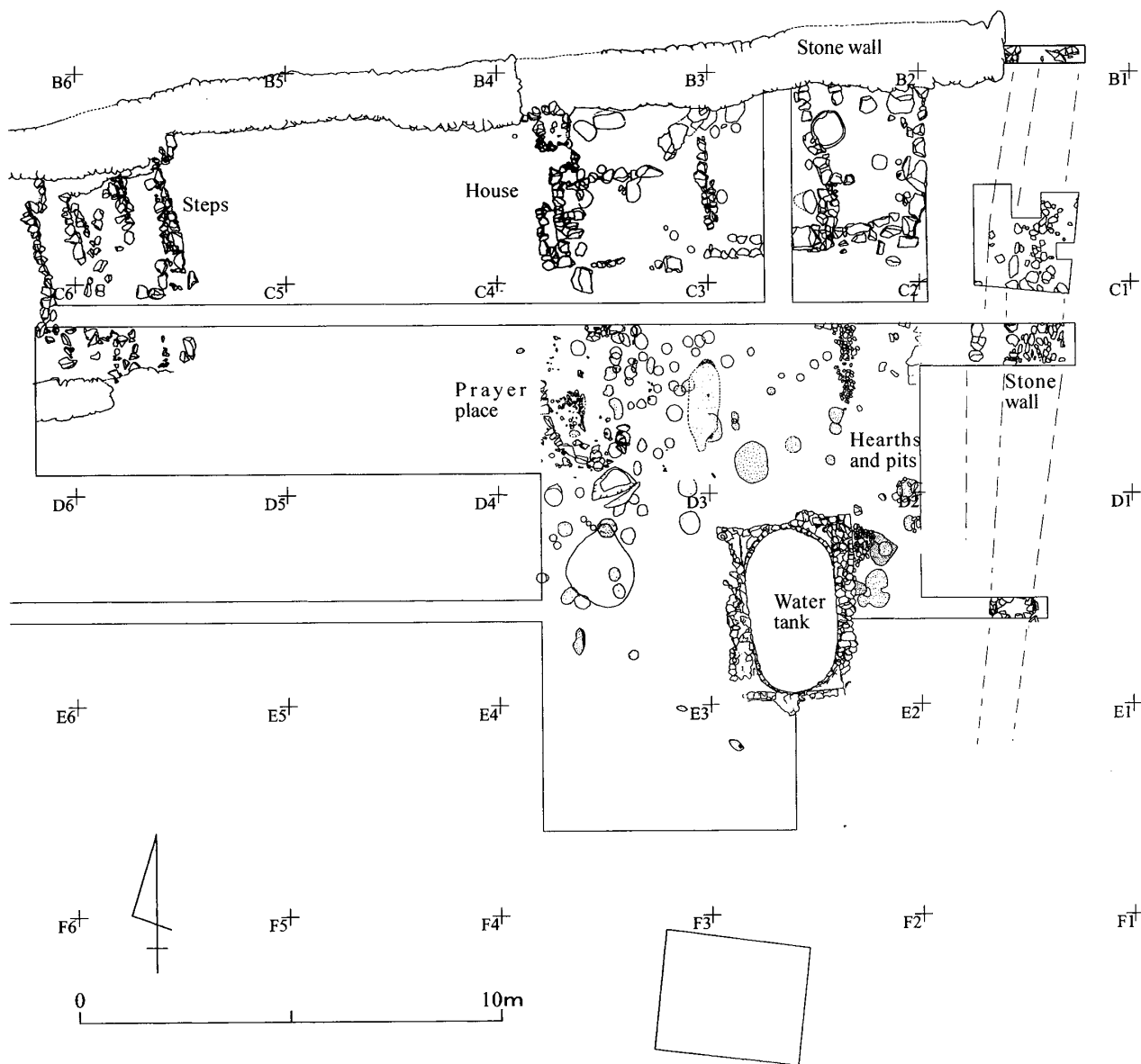


Figure 8 Plan and section of Luluyah Fort.



Plan of House and water tank terrace, Luluyah Fort.



House and water tank terrace, Luluyah Fort, from north-east.

Figure 9 House and water tank terrace, Luluyah Fort, from north-east.

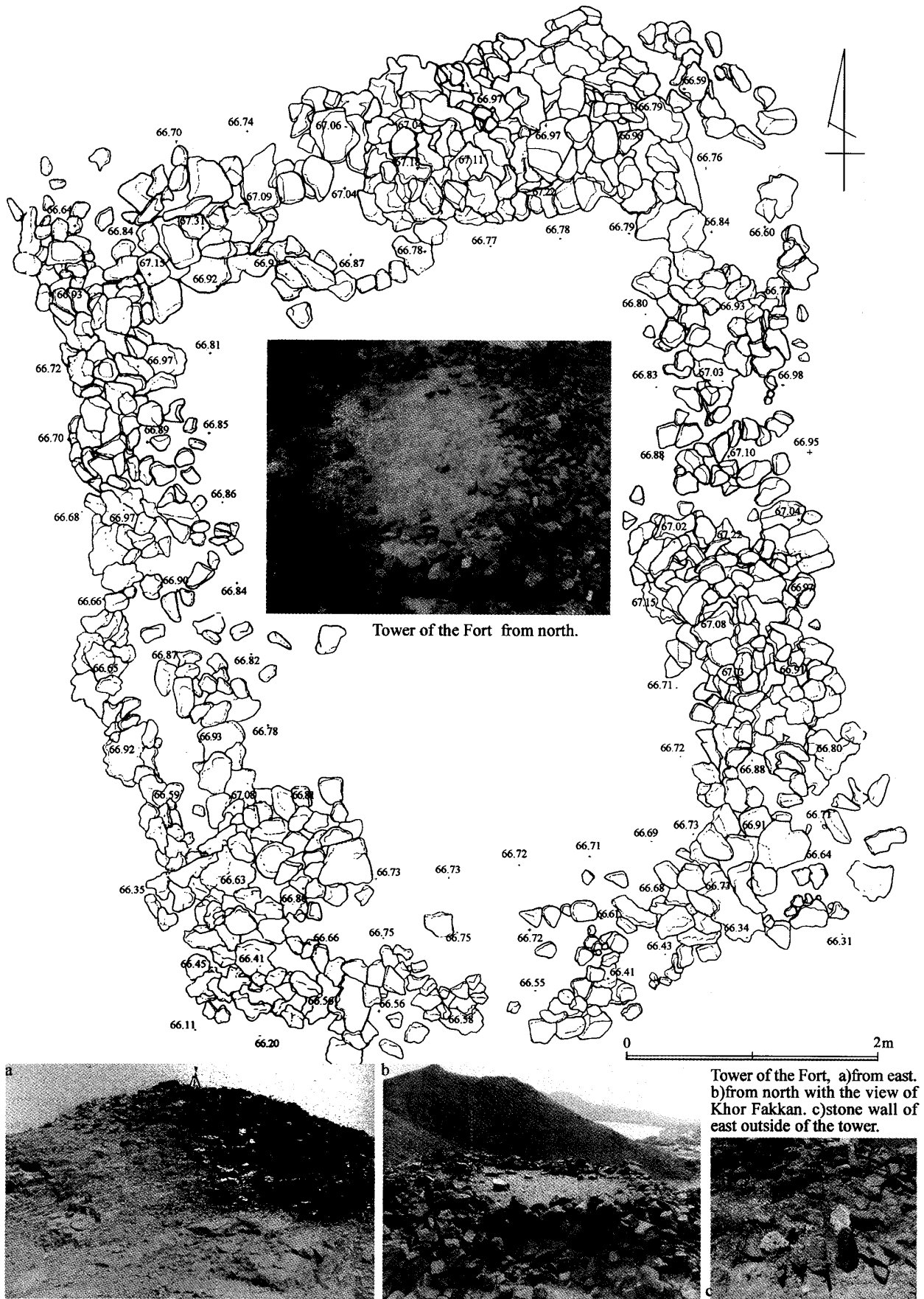
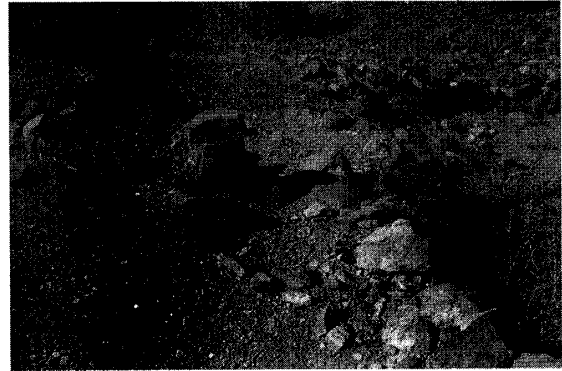
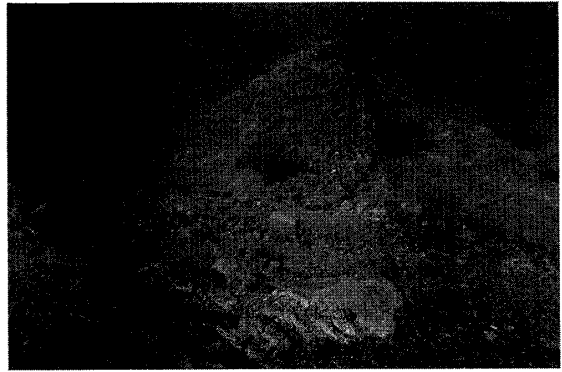
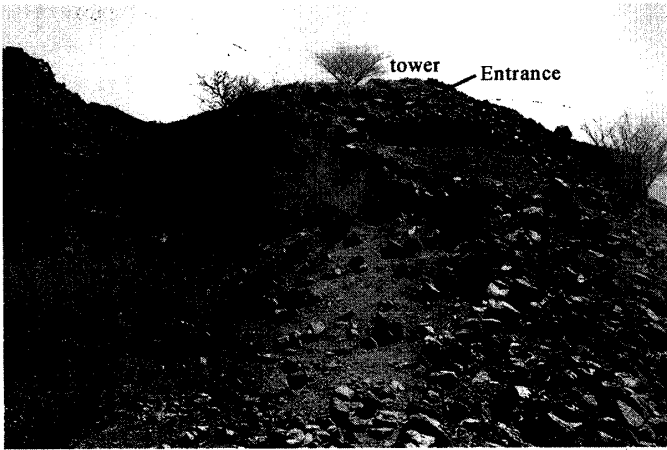
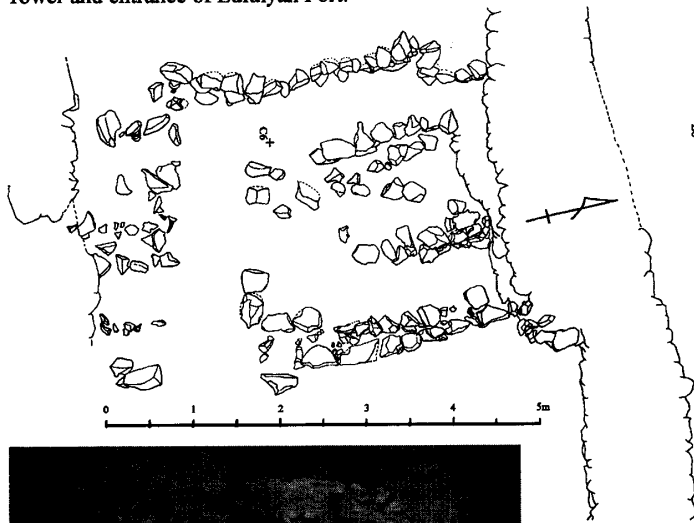


Figure 10 Plan of the tower of Luluiyah Fort.



Entrance of Luluiyah Fort, located north-west corner of the Fort.

Tower and entrance of Luluiyah Fort.



Plan of the steps.



Stone walls around the tower, from north.

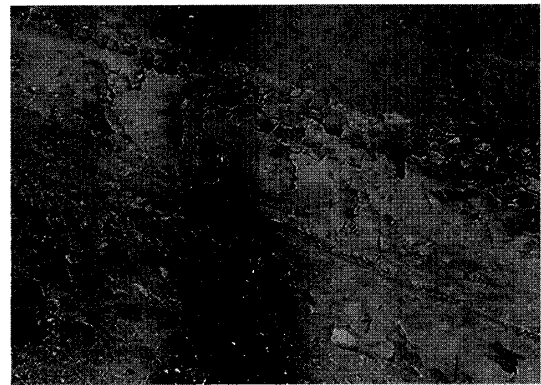
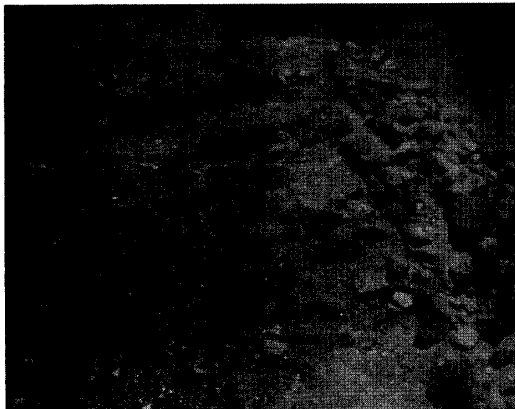


Figure 11 Tower, entrance of the Fort, and stepped passway beside the enclosure stone wall of north side of the Fort.

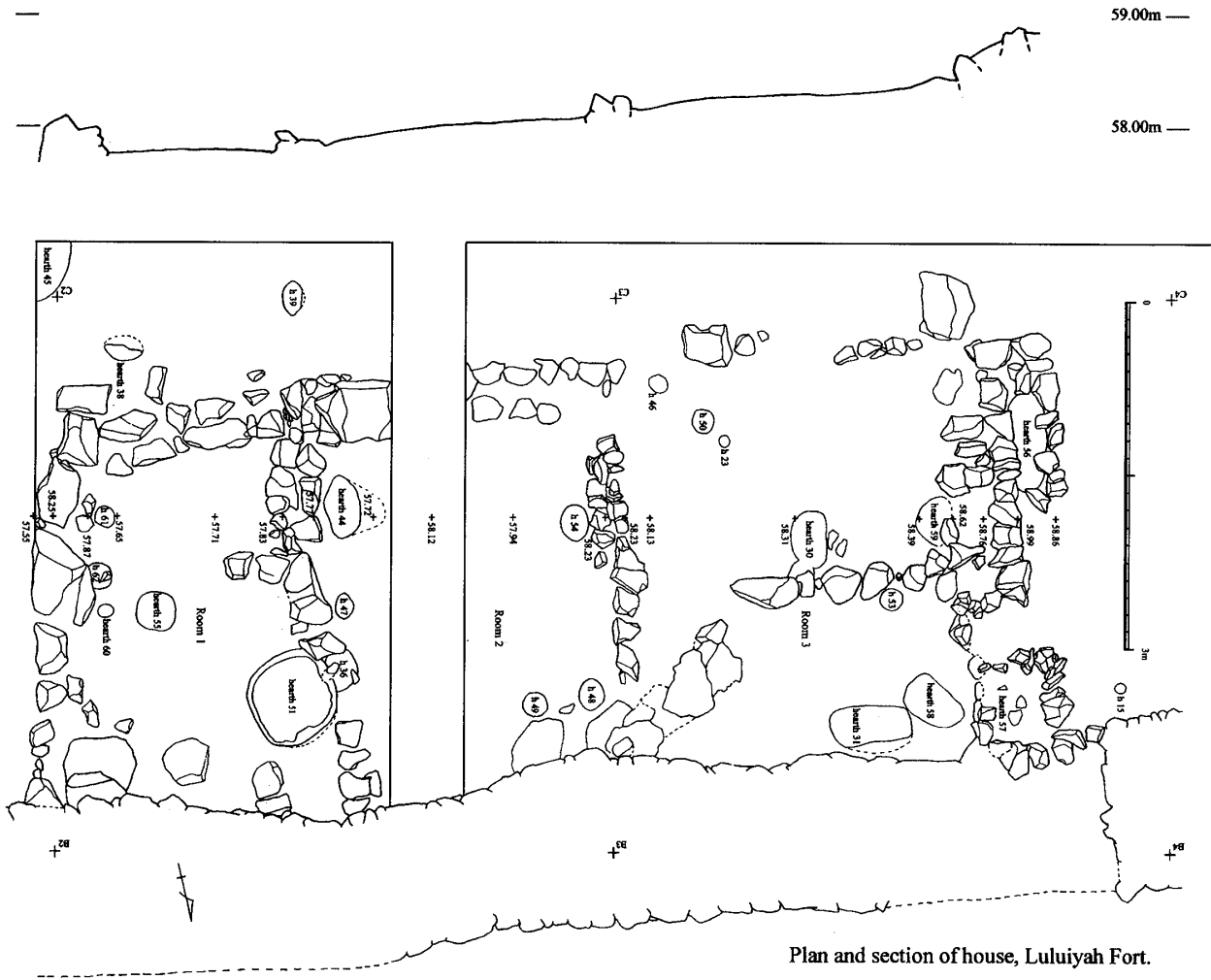


Figure 12 House of Luluiyah Fort.

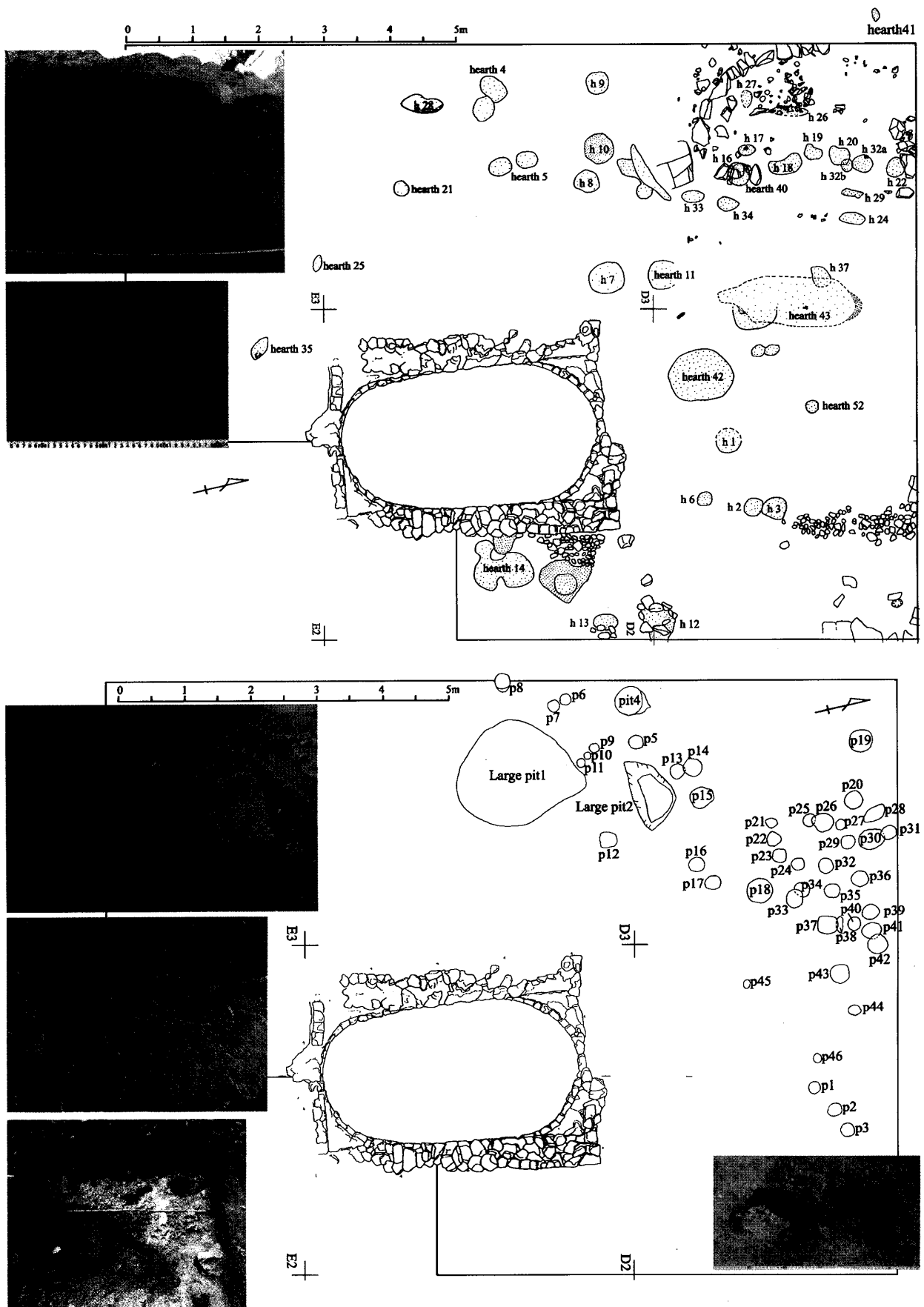


Figure 13 Plan of Pits and hearths, Luluyah Fort.

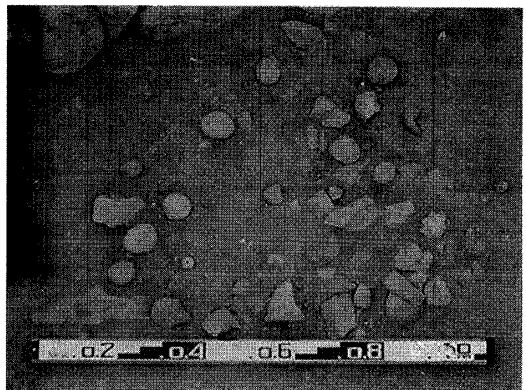
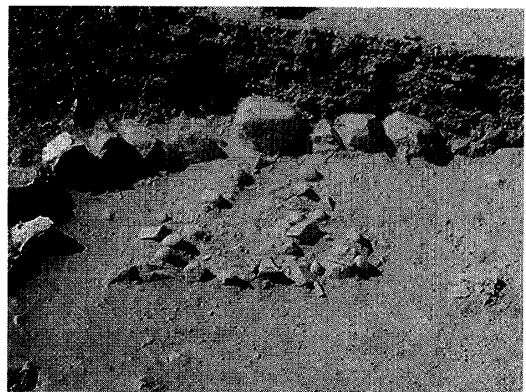
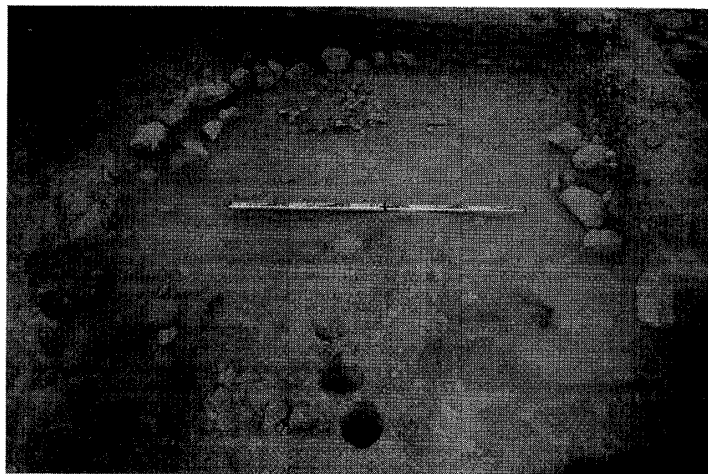
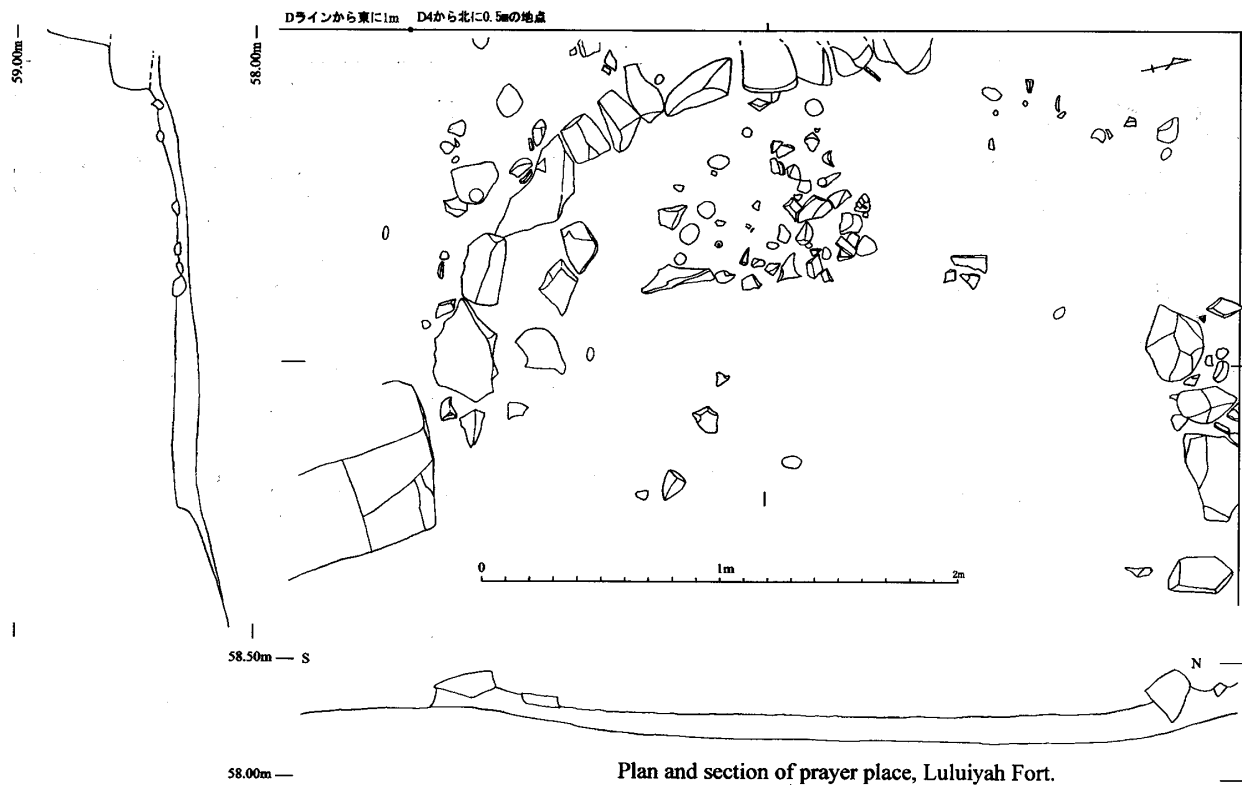


Figure 14 Prayer place of Luluyah Fort.



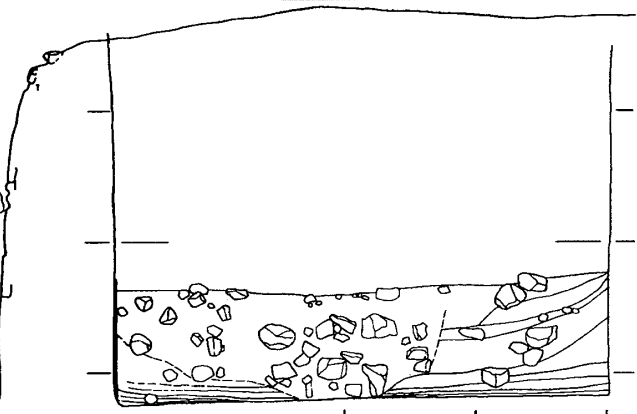
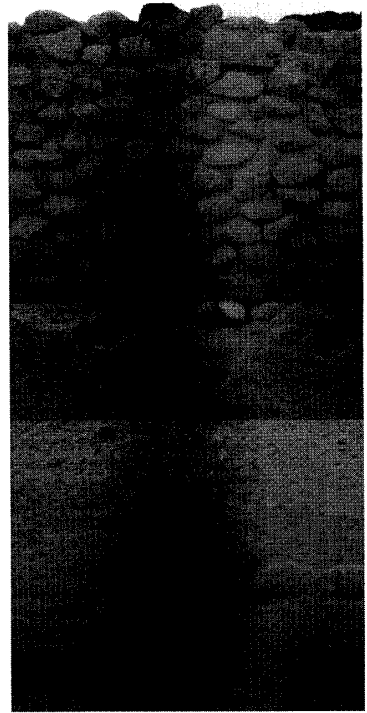
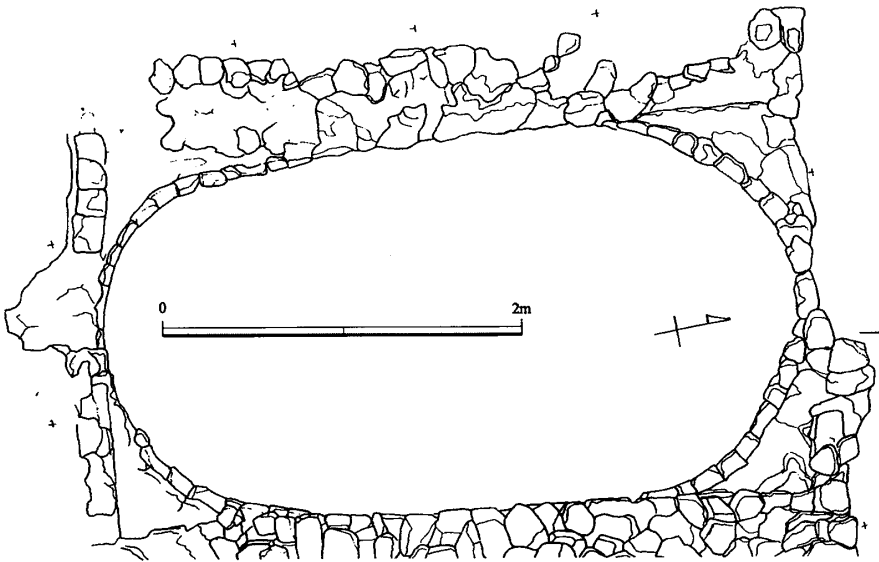
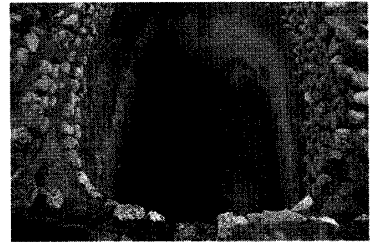
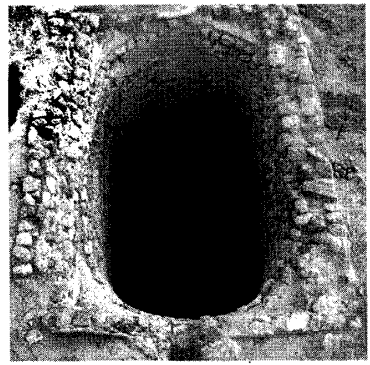
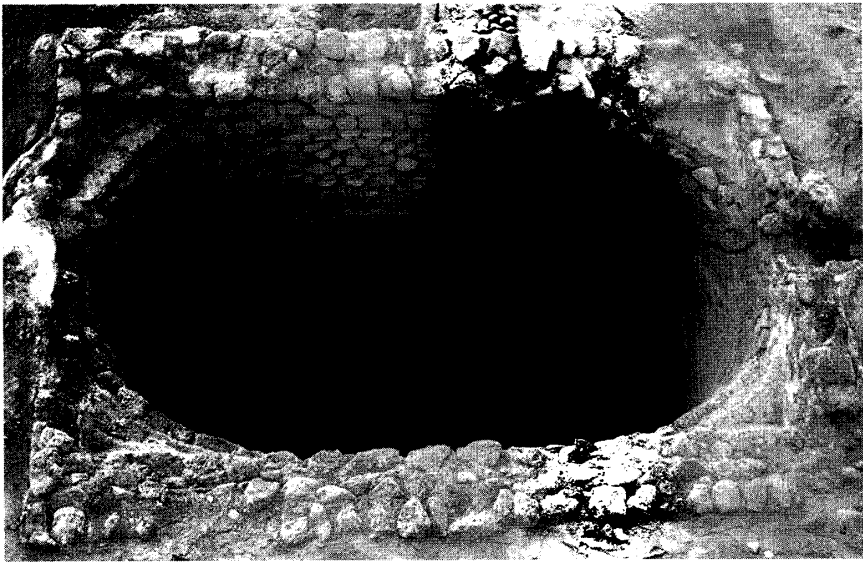
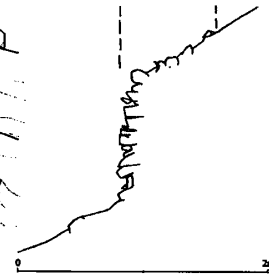
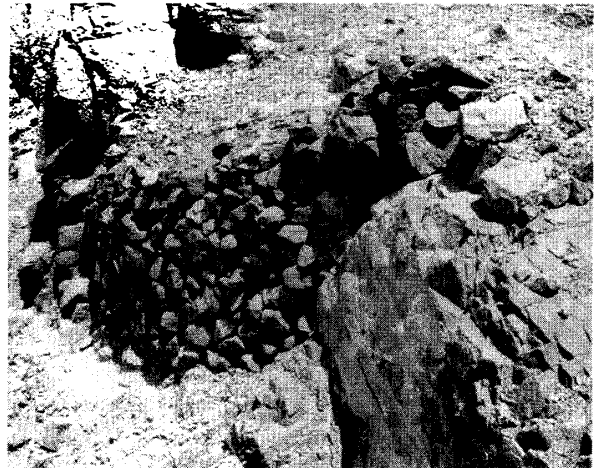
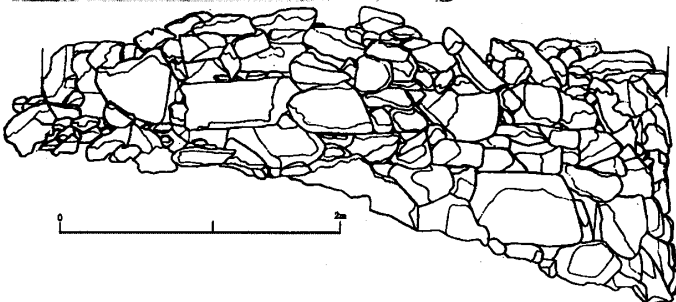
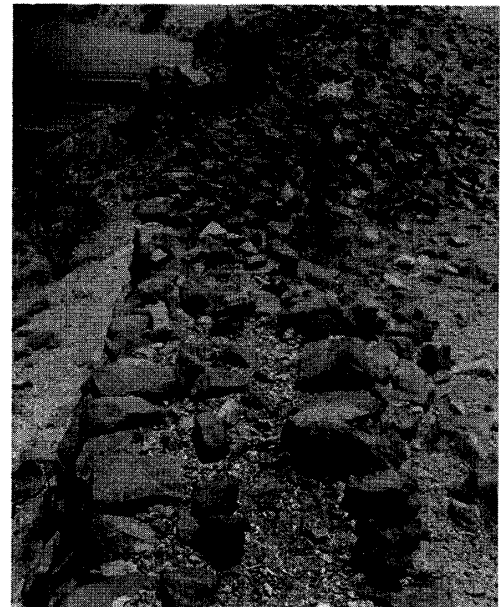
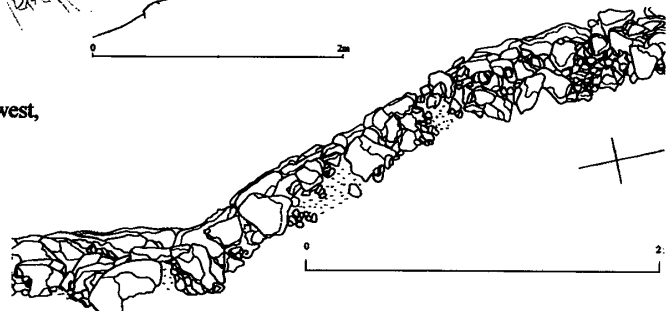


Figure 15 Water tank, Luluiyah Fort



Enclousre stone wall of west side of the Fort left photo: from west, right photo: from south



Enclousre stone wall of north side of the Fort left: from west beside the steps, right: from north outside

Figure 16 Enclousure stone walls, Luluiyah Fort.

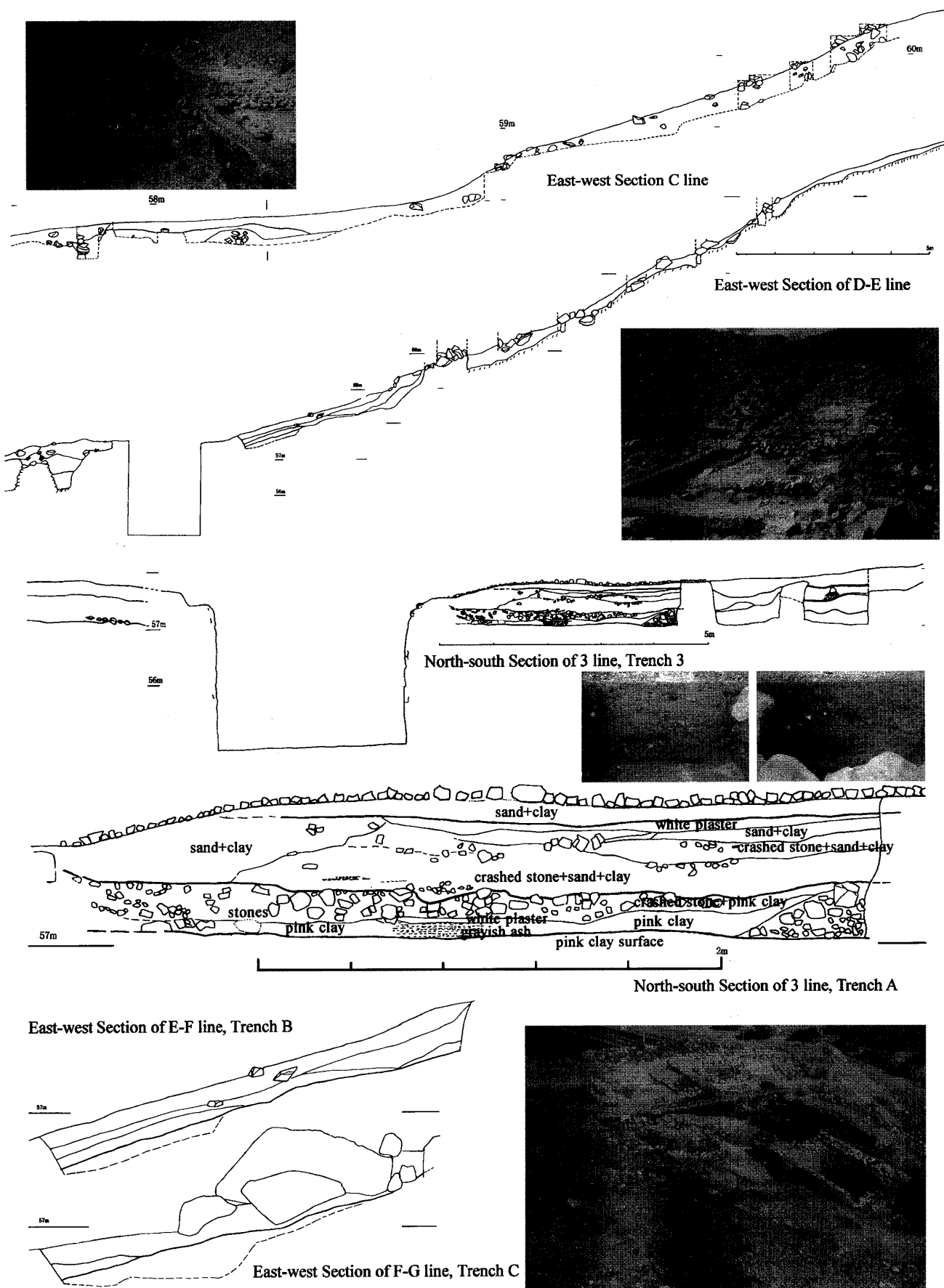
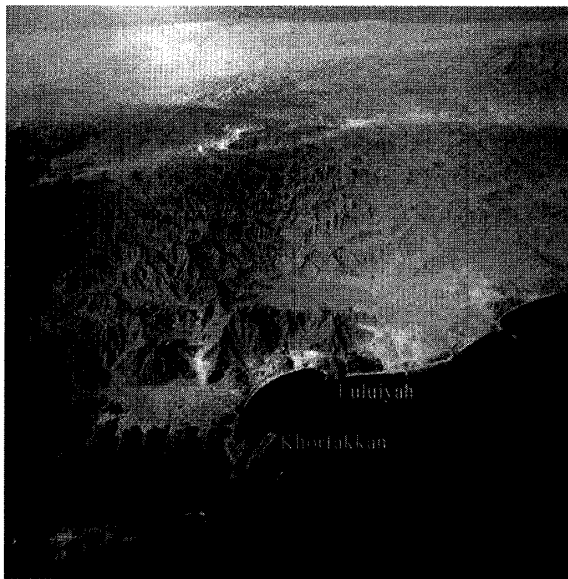
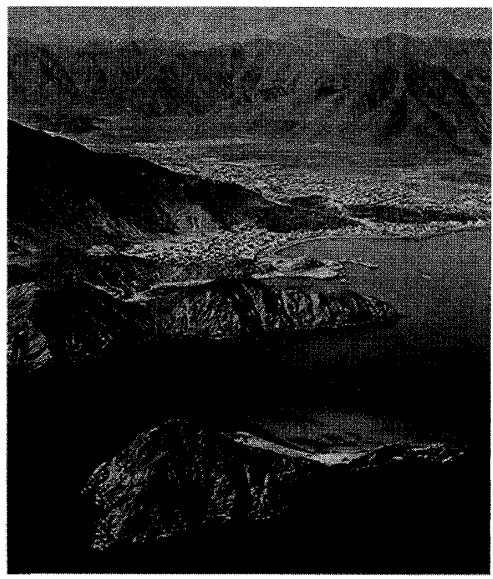


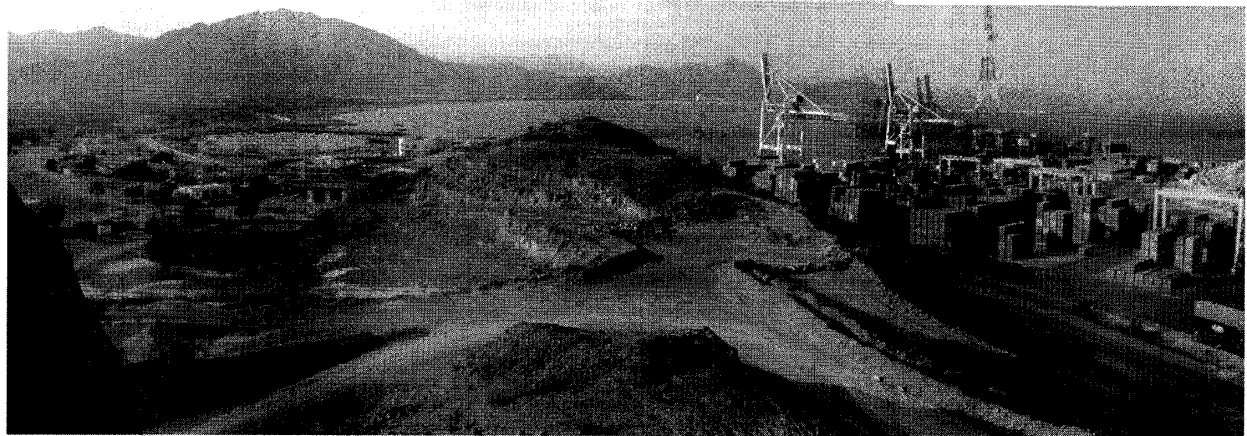
Figure 17 Sections of Luluyah Fort.



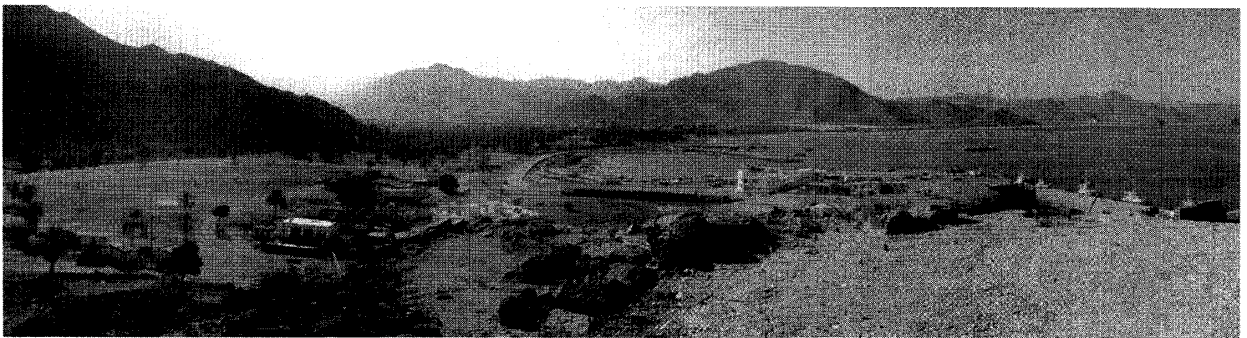
Luluyah fort and Khorfakkan fort are situated on either side of Khorfakkan bay (This photo was probably taken after 1980).



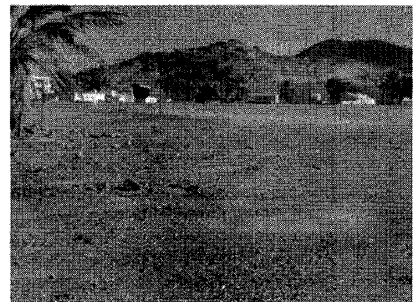
Air view of Khorfakkan city from east. Fort is located left side of the bay (This photo was probably taken around 1975).



Views of Khorfakkan fort in 2002 from south.



Views of old city site(left) and Khwar Fakkan bay(right) from the central tower of Khorfakkan fort. 2002.



Khorfakkan fort, looking from south-east and north-east. December 2001.  
Figure 18 Khorfakkan Fort and town site.

Khorfakkan fort, looking from south-west or old town site. Dec.2001.

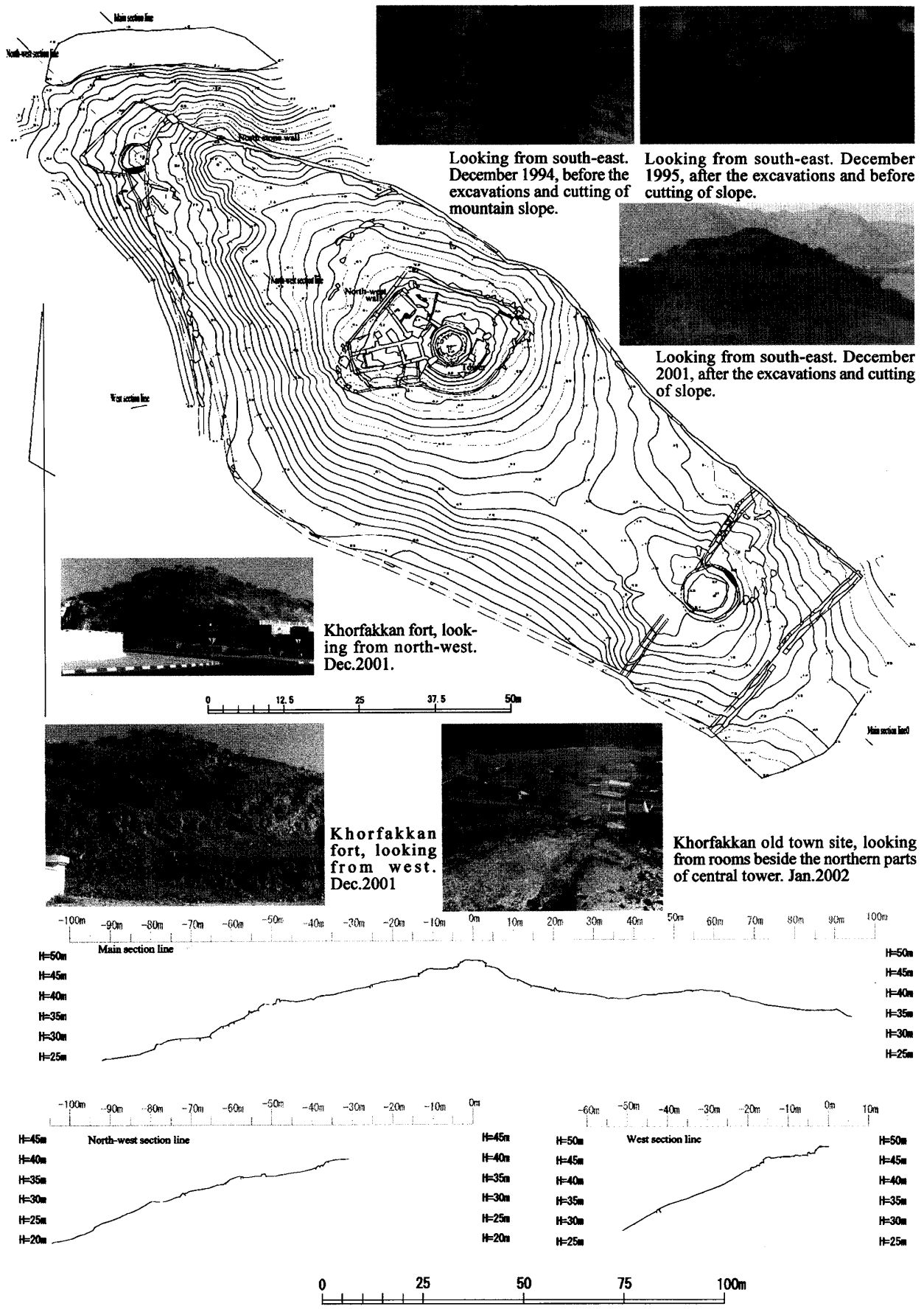
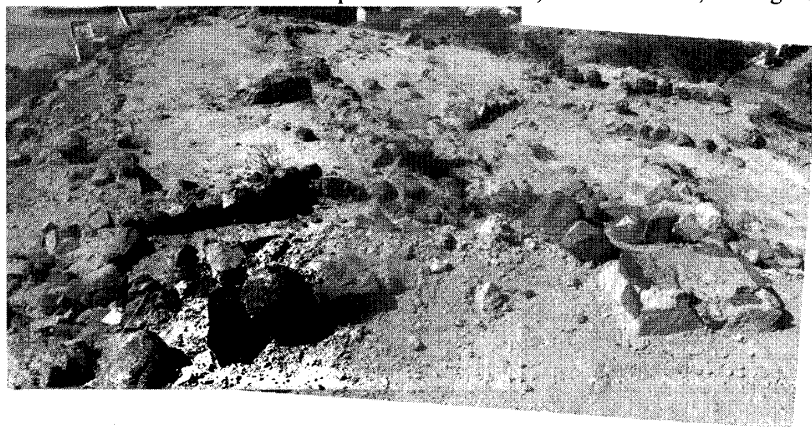
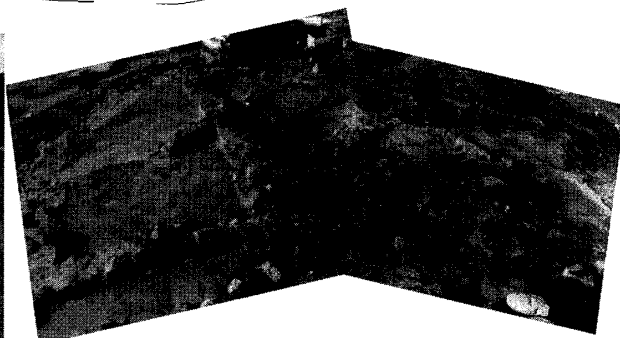


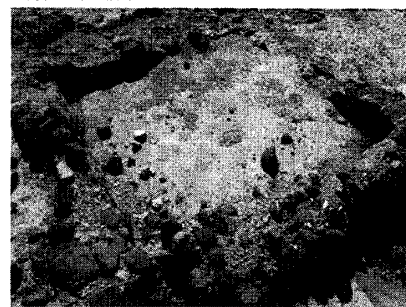
Figure 19 Plan and section of Khorfakkan Fort.



Rooms located beside the northern parts of central tower, Khorfakkan fort, looking from west. Dec.1995

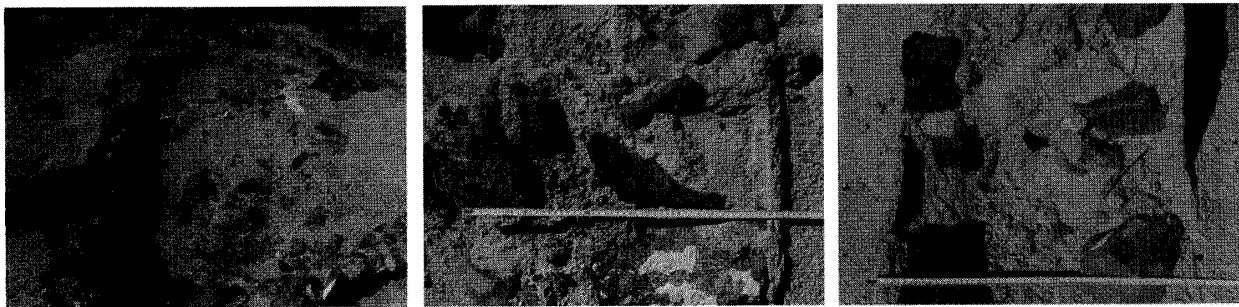
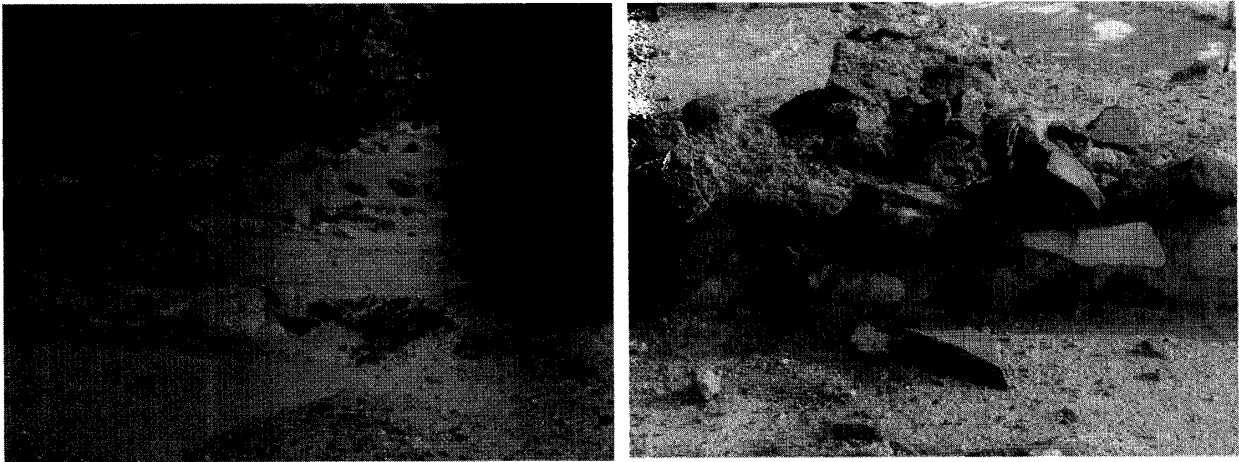


Rooms located beside the northern parts of main tower, Khorfakkan fort, looking from the tower. Dec.2001

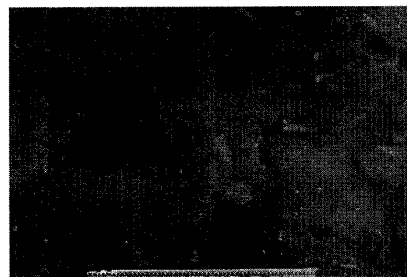
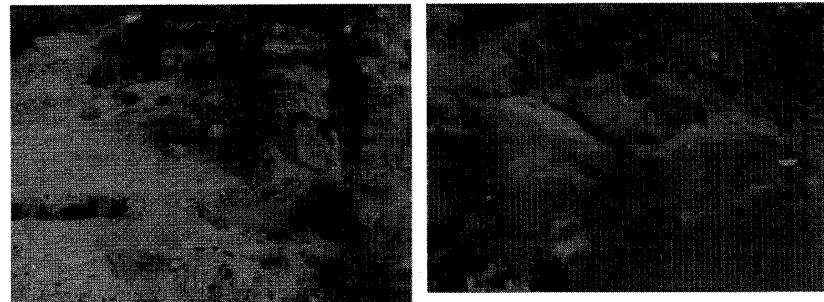
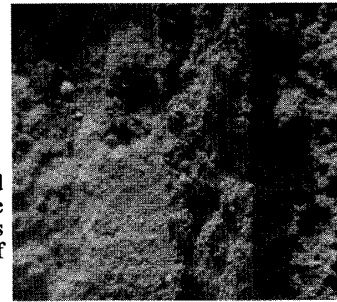


Room from north. Jan.2002

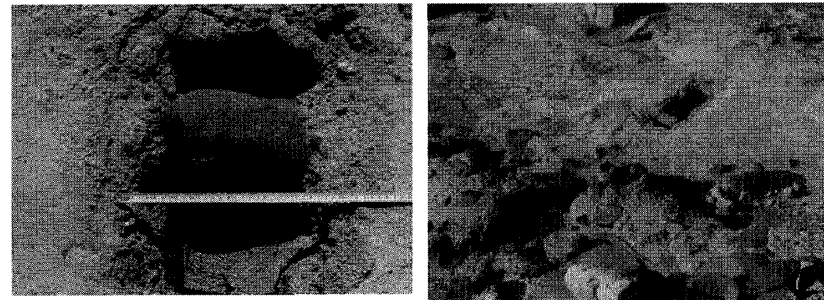
Figure 20 Plan of central tower and rooms, Khorfakkan Fort.



Wall of Rooms, Khorfakkan fort. Stones were piled up with pink mud mortar including small white smashed shell and white lime. Surface of walls was plastered by the same mud mortar with thickness of 2-3cm.

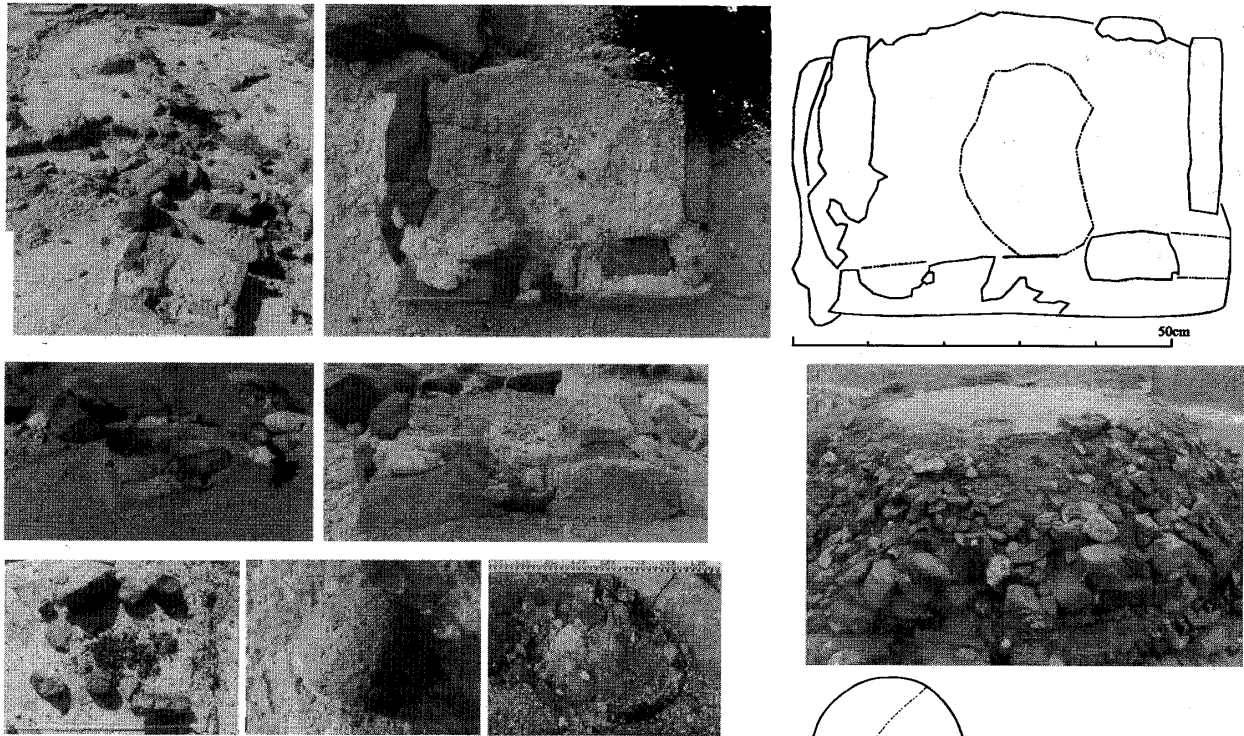


Hearth beside ditch.

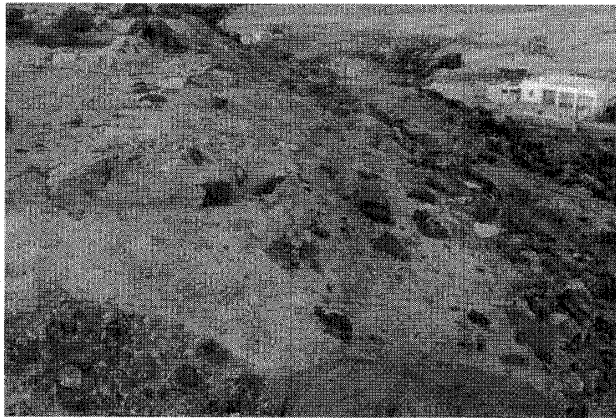
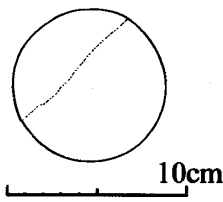


A ditch or underdrain covered by stones and mud mortar outside or beside Kitchen. 13cm Width at the bottom and ? cm length.

Figure 21 Room walls and underdrain, Khorfakkan fort.



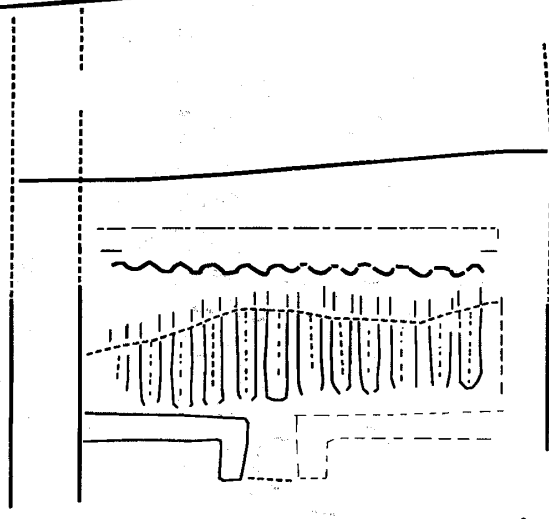
Iron cannonball, diameter 8.4cm, collected outside of enclosure wall, Khorfakkan fort.



Date press, from east. Dec.2001



Date press or Madbassa, from south. Dec.1995



Date press or Madbassa, from south. Dec.2001

Figure 22 Military establishment and Date press, Khorfakkan fort.





Stone wall, foundation of central tower and rooms, from north-east.



Central tower of Khor Fakkan Fort, from north-west or beside rooms.



Floor of central tower, Khorfakkan fort, looking from west.



Base of south-east tower and central tower beyond south-east tower, Khorfakkan fort, looking from north-east.

Base of north-west tower at the corner of north-west stone wall, Khorfakkan fort, looking from north-west.



North-west tower and stone wall of west side of Khorfakkan fort, looking from north-west.

Figure 23 Towers and stone walled foundations, Khorfakkan fort.

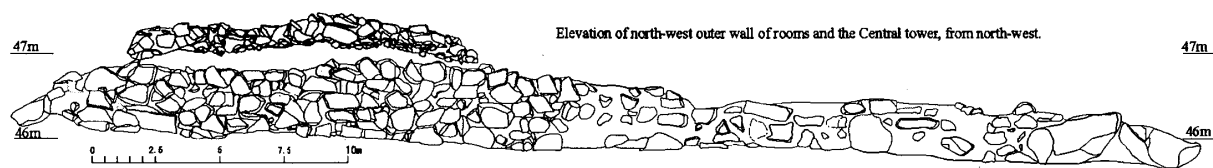
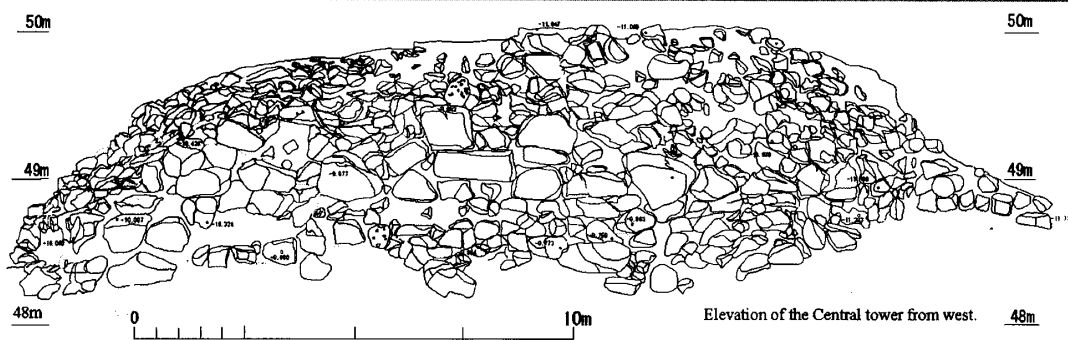
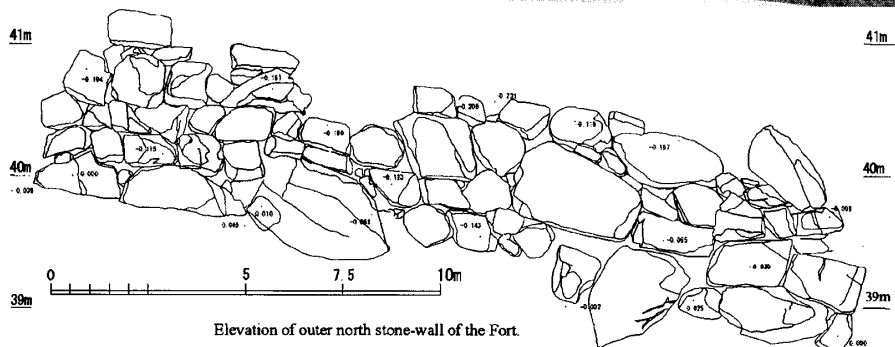
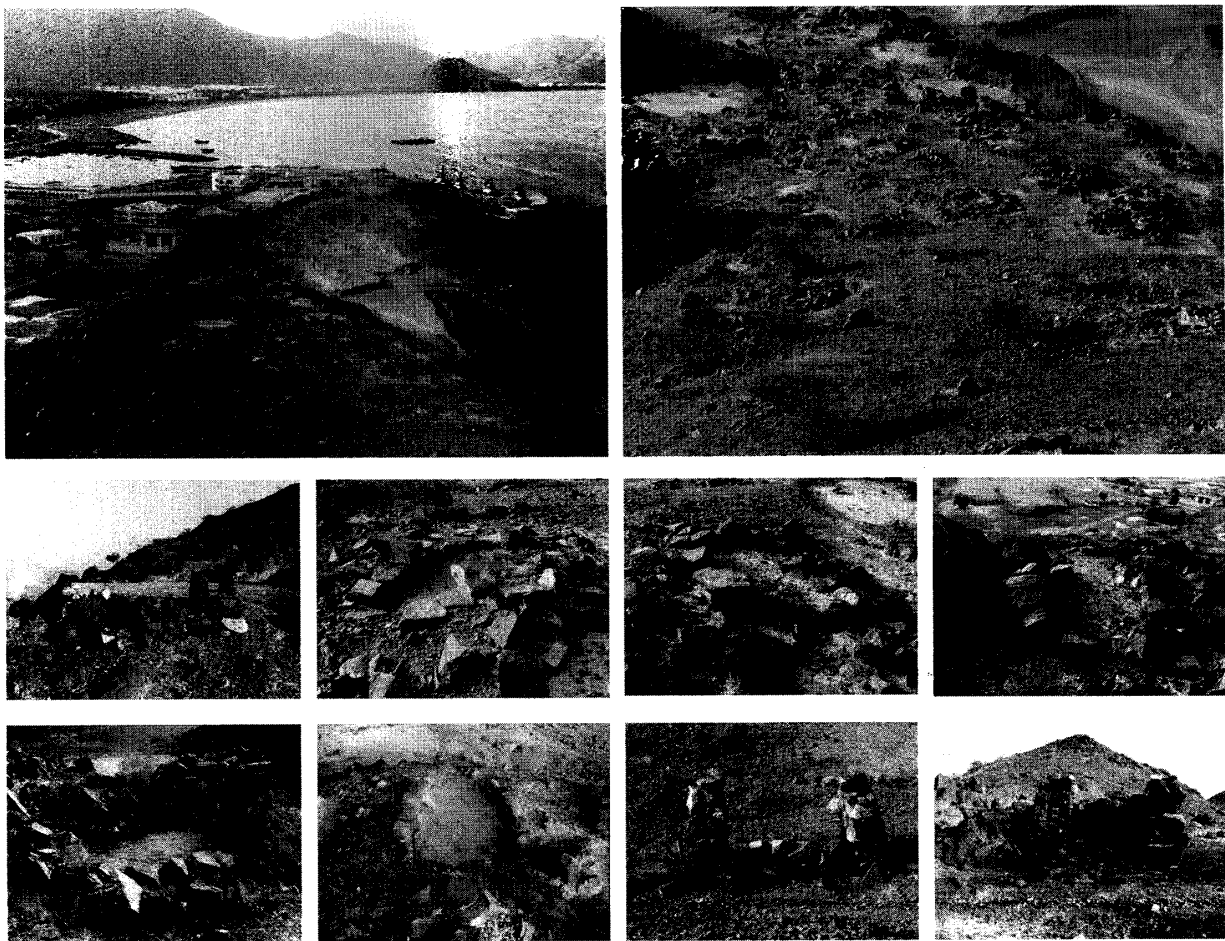
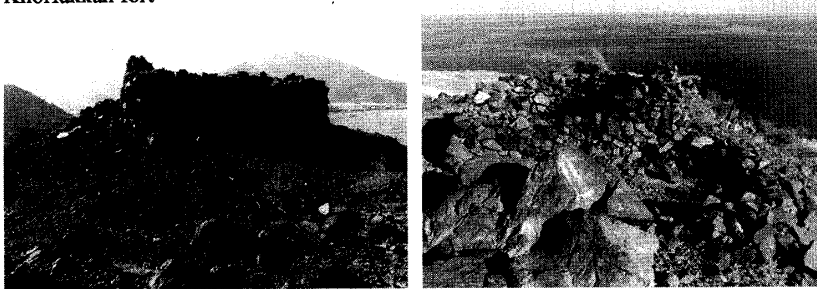


Figure 24 Enclosing stone walls, Khorfakkan fort.



Grave yard and stone constructed tombs on the gentle slope, which inclined to south, between 59m and 64m peaks, south side of Khorfakkan fort



Watch tower on the top of 99m mountain locate south of Khorfakkan fort. Rectangular plan of 4x3.5m, wall thickness 0.7m.



Watch tower locates west direction of Khorfakkan fort. Enclosure on the slope of mountain between watch tower and Khorfakkan fort. Wheat had been cultivated in winter.

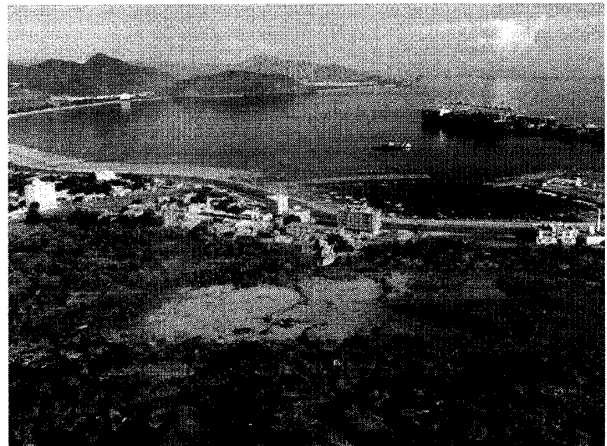


Figure 25 Grave yard, watch tower and farms on the mountain, near Khorfakkan fort.



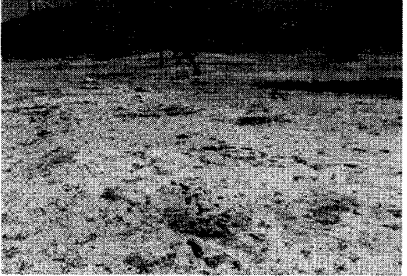
Khorfakkan old town site and fort from south-east. Dec.2001.



Khorfakkan old town site and fort from south-west. Dec.2001.



Views of Khorfakkan old town site from east or fort. Western parts of old town still remained but eastern parts of buildings already removed. Dec.1994.

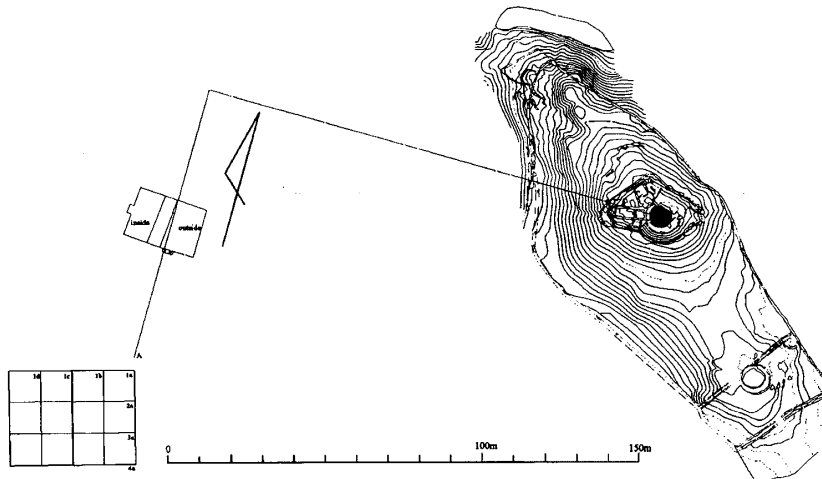


Khorfakkan old town site from west. Foundations of recently removed houses are seen. Dec.1994.



After trench research, we took recently deposited surface soil by machine at Khorfakkan old town site. Dec.2003.

Figure 26 Khorfakkan old town site



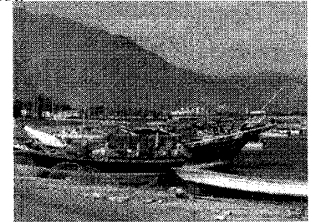
Location of Excavated area, Khorfakkan town site.



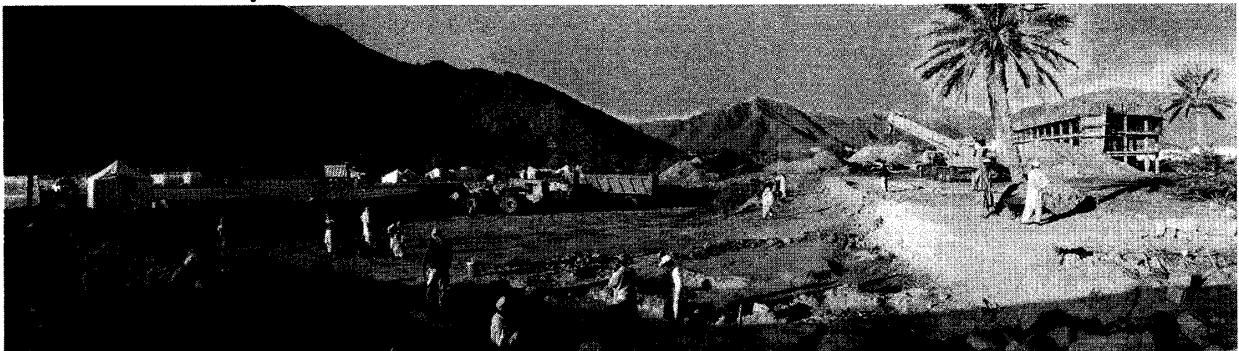
Enclosing sotne wall, east side of Khor Fakkan Fort.



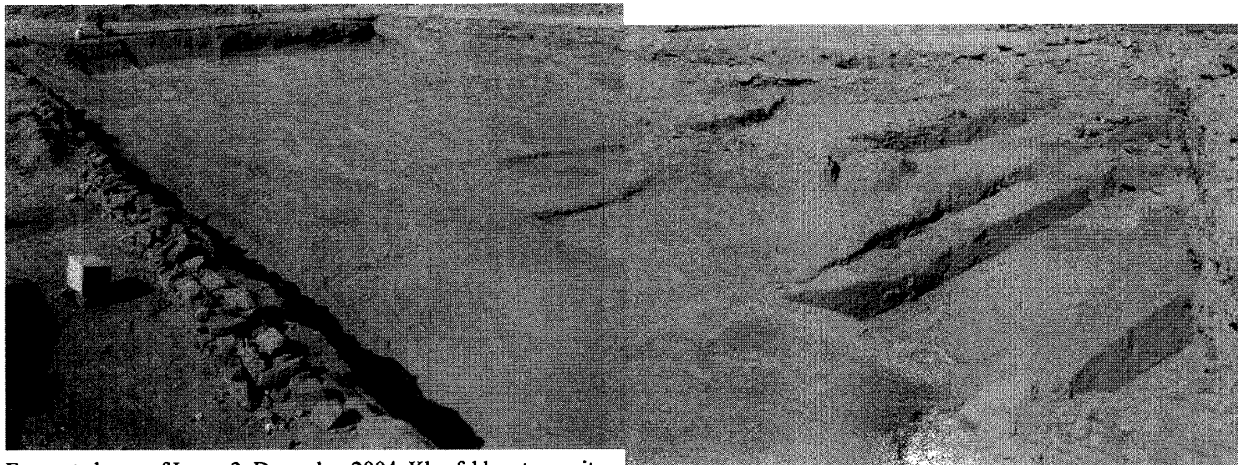
Air view of Khorfakkan bay.



Ships at Khorfakkan bay.

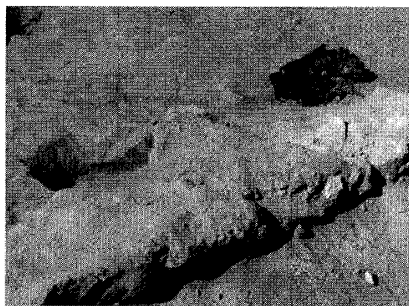
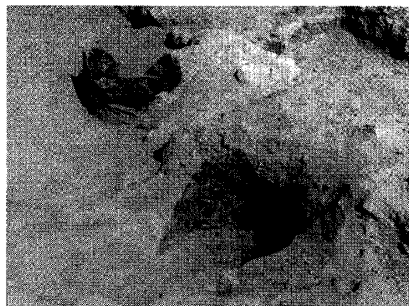
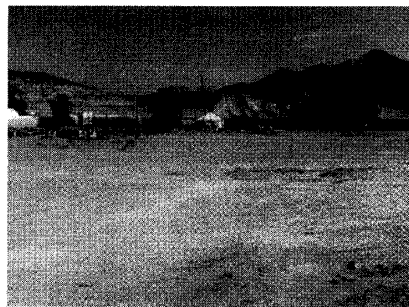


Excavation of December 2004, Khorfakkan town site.

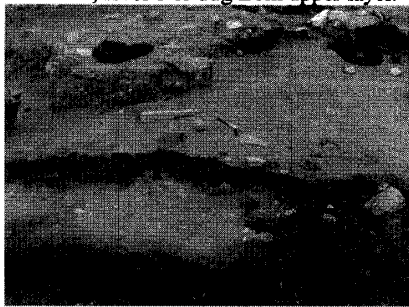


Excavated area of Layer 3, December 2004, Khorfakkan town site.

Figure 27 Location of Excavated area.



Tannur or oven for baking bread made by drum can, level 1 or dug from upper layer.



Outside of Stones of Level 2 and excavating gray layer Level 2.

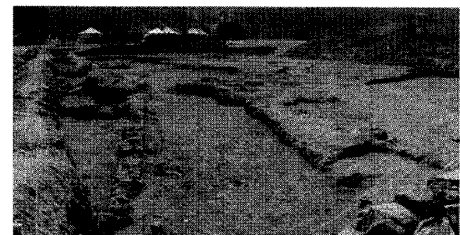
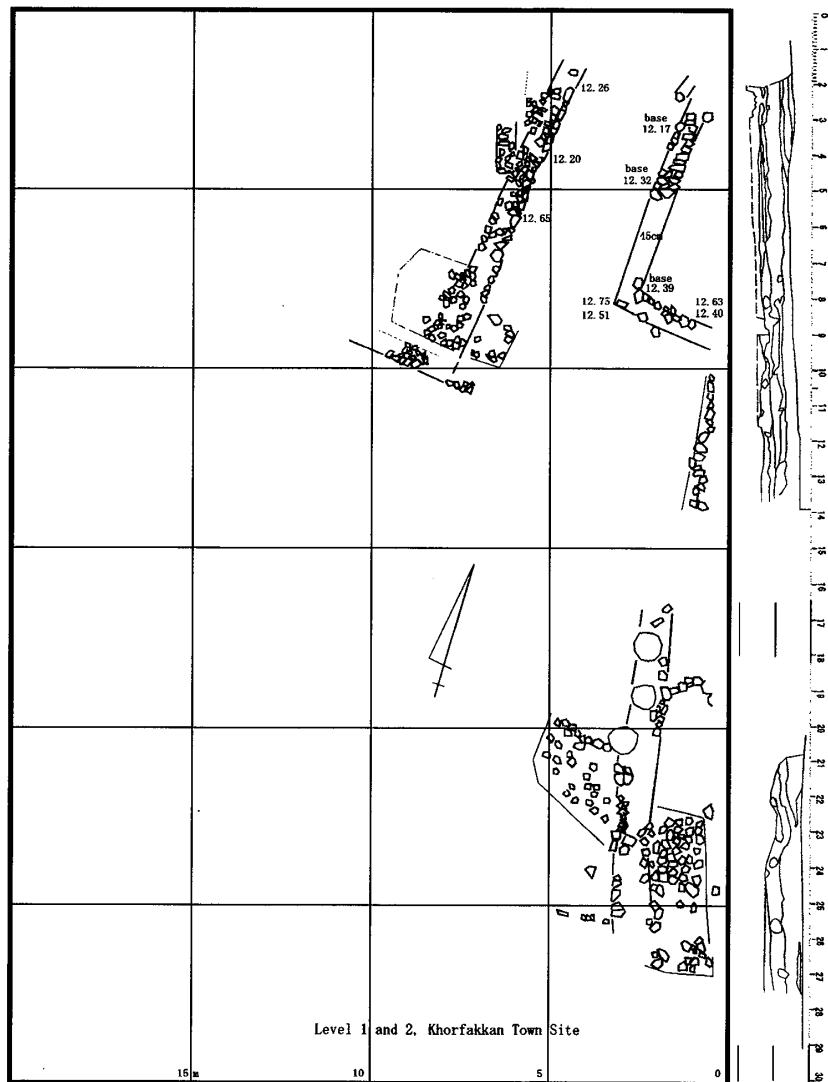
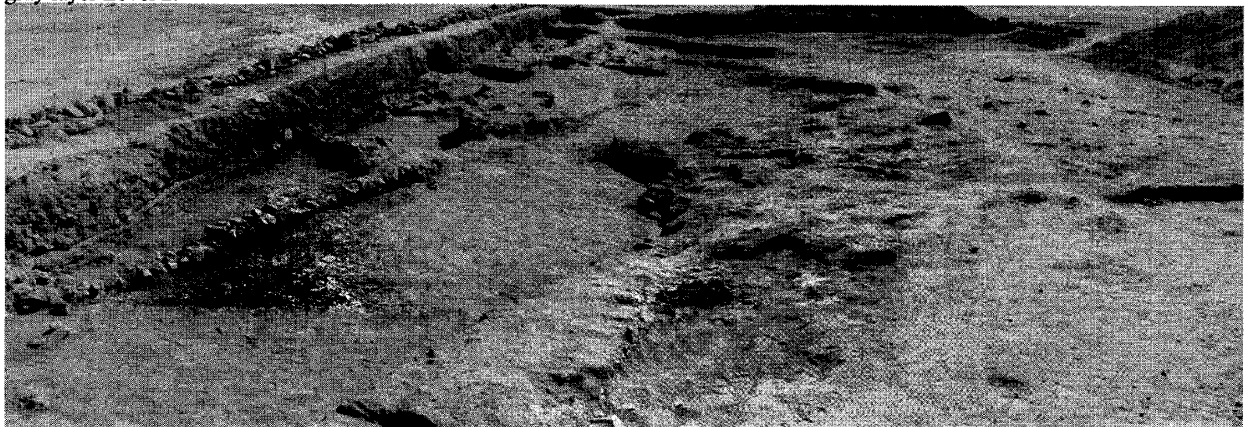
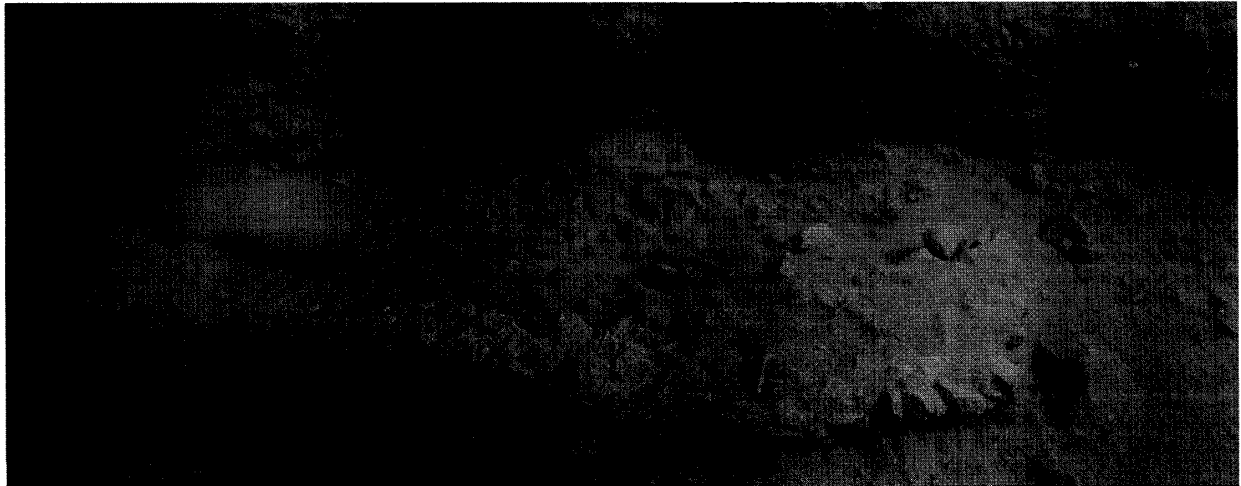
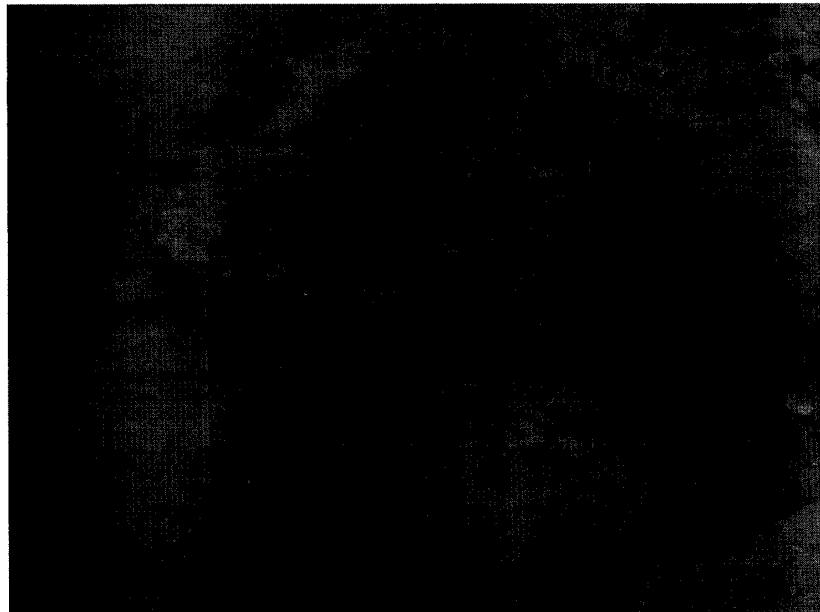


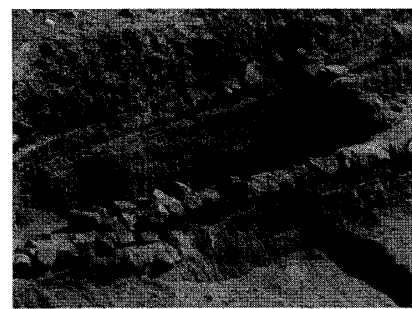
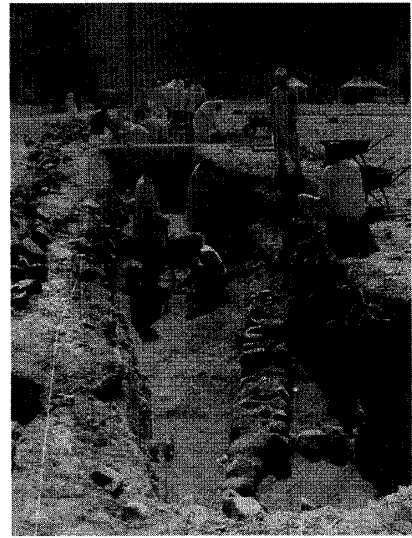
Figure 28 Level 2 of Khorfakkan town site



East house of Level 1 and stones of Level 2.



East house of Level 1 and stones of Level 2.



Ruined house at Khorfakkan.

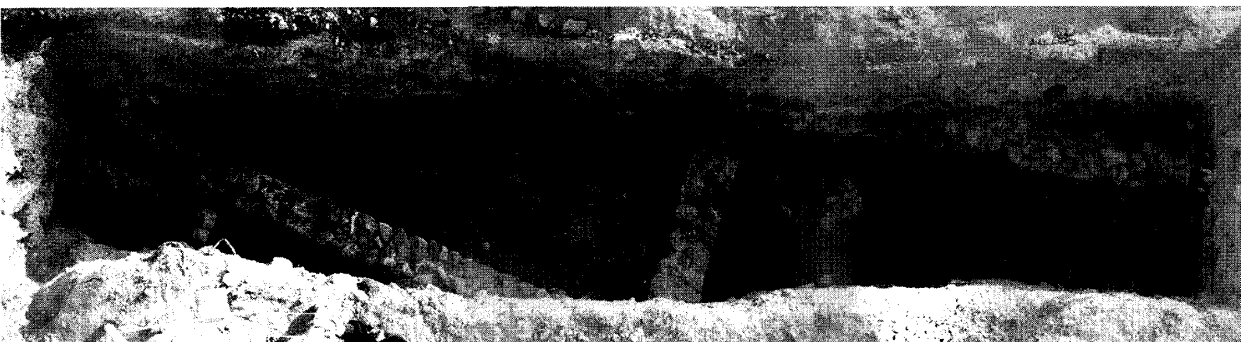
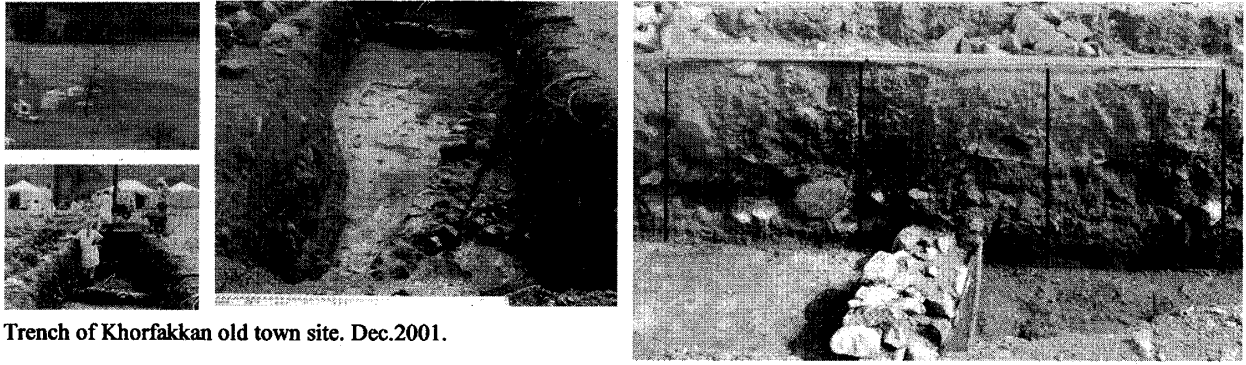
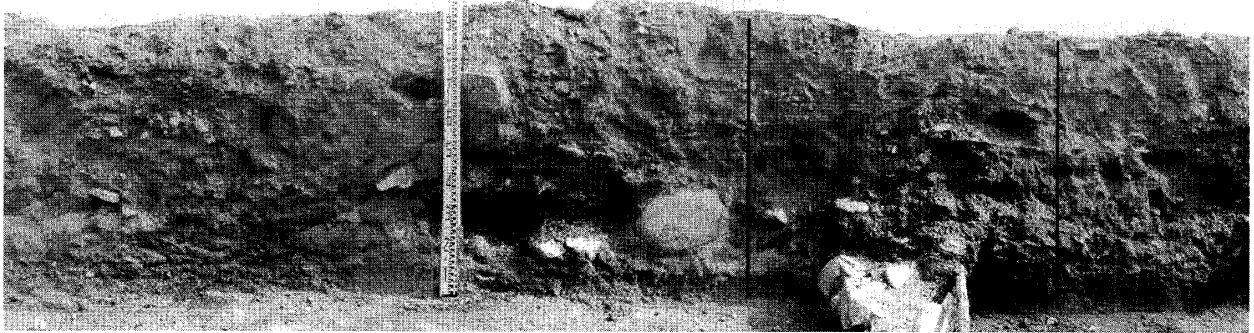


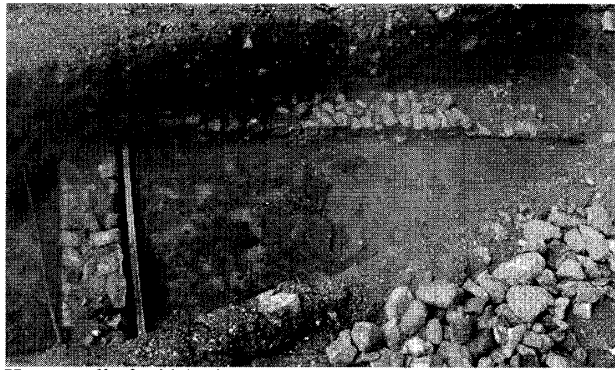
Figure 29 Level 2 of Khorfakkan town site



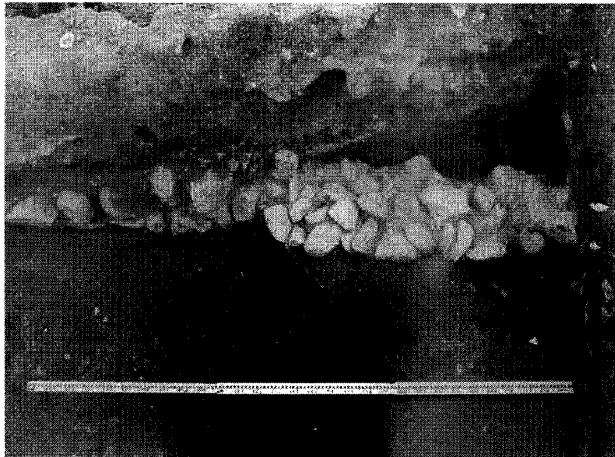
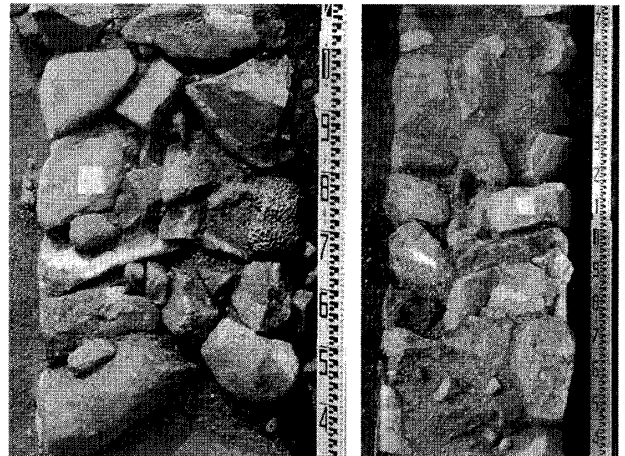
Trench of Khorfakkan old town site. Dec.2001.



Section of trench, grid 1a, surface and level 1



House wall of grid 1a, level 1.



Blackened hearth and grinding stone found outside of House wall, grid 1a, level 1.

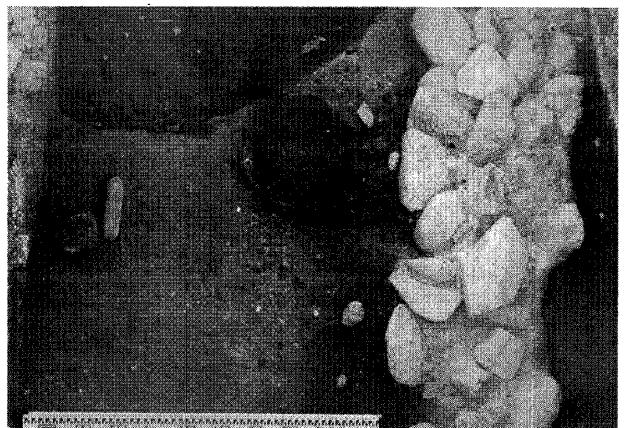


Figure 30 First season's soundings at the Khorfakkan old town site. North-south direction 40m trench was set in Dec.2001. Section was drawn on the east side of trench wall. Blue point or standing scale shows the point from 10m south from point A(A is 150m west and 90m south from central tower of Khorfakkan fort). Level 1 is remaining stone walls and floors, house of the early half of 20th century. Level 2 is rubbish just under the house foundation of level 1. Level 2 belong to the first half of 20th century or earlier.



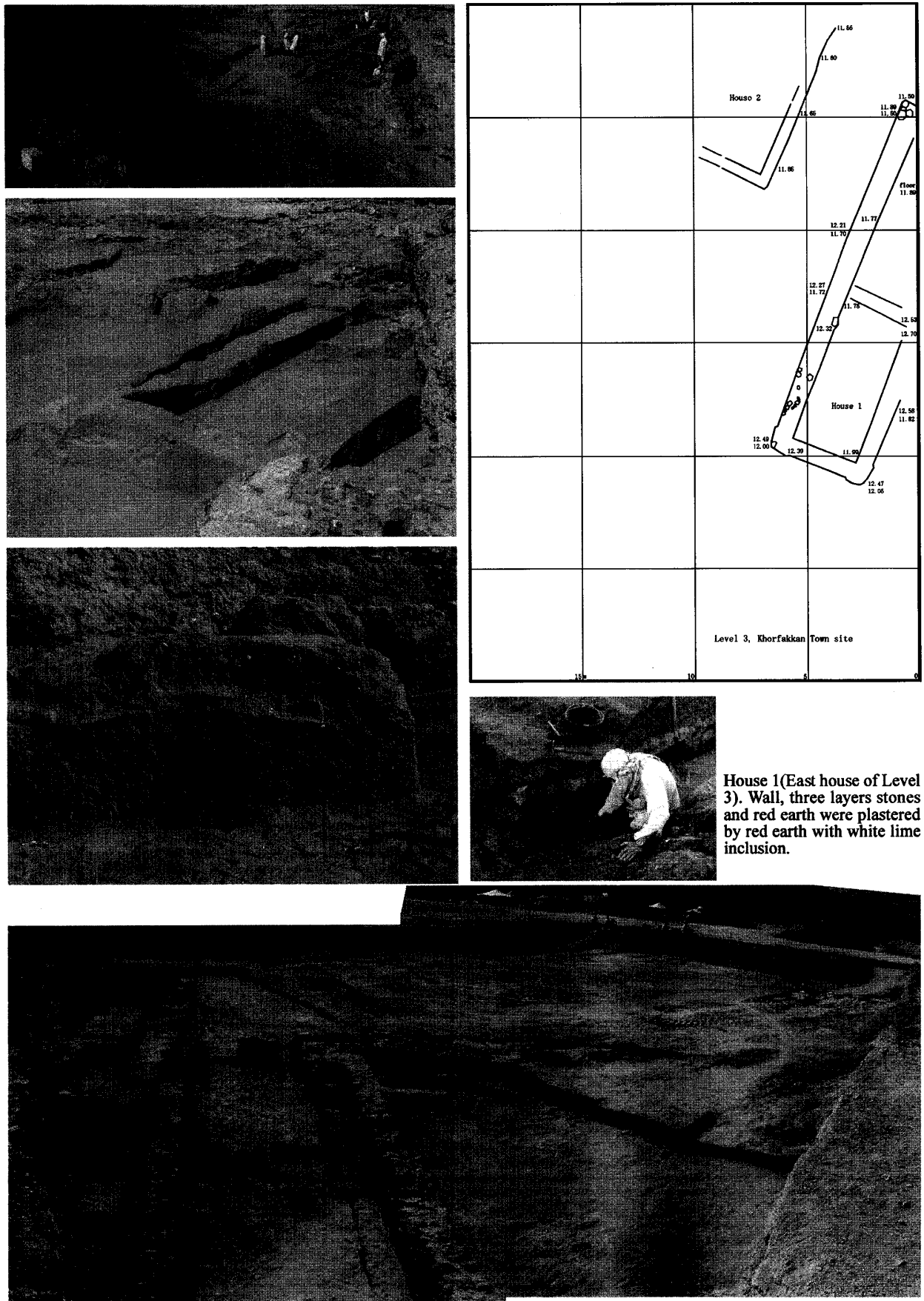
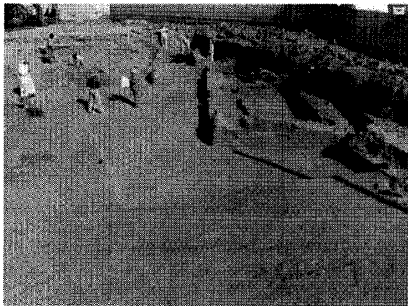
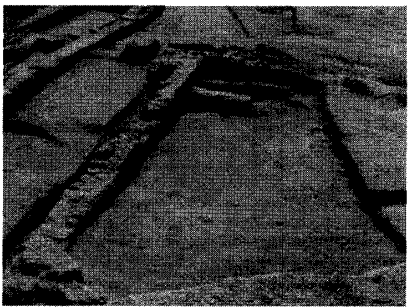
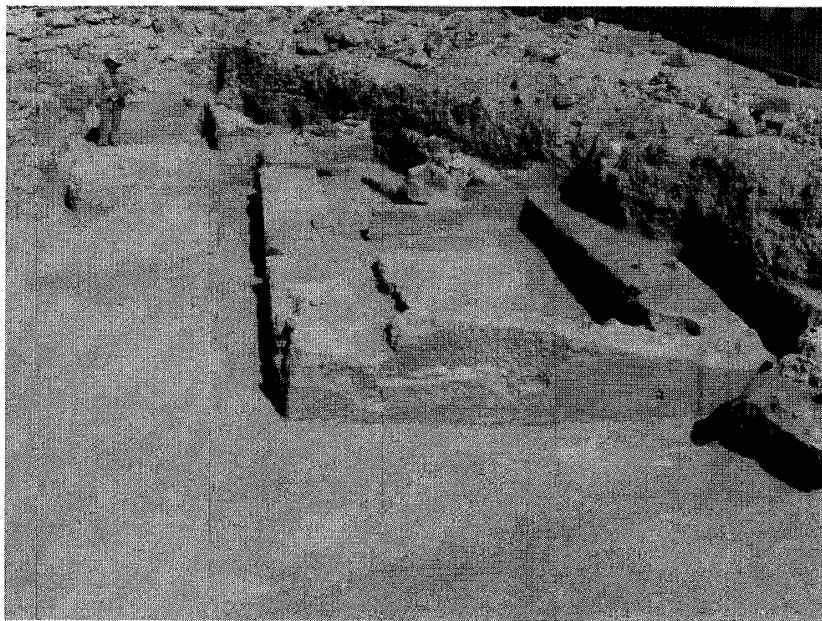


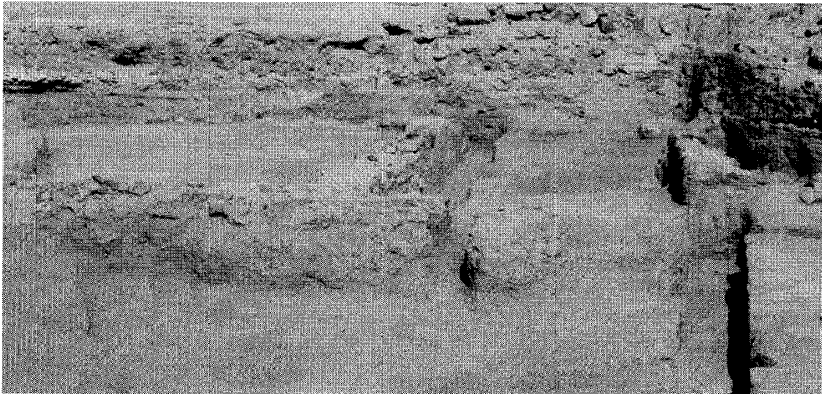
Figure 31 Houses 1 and 2. Level 3 of Khorfakkan town site.



House 1 of Level 3, Khorfakkan town site



House 2 of Level 3, Khorfakkan town site



Deposit of street between Houses 1 and 2. Gray layer is Level 2, Khorfakkan town site



Excavations of House 1, Khorfakkan town site

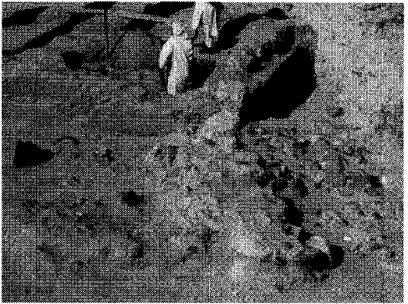


Figure 32 Houses 1 and 2 of Level 3, Stones of Level 2, Khorfakkan town site

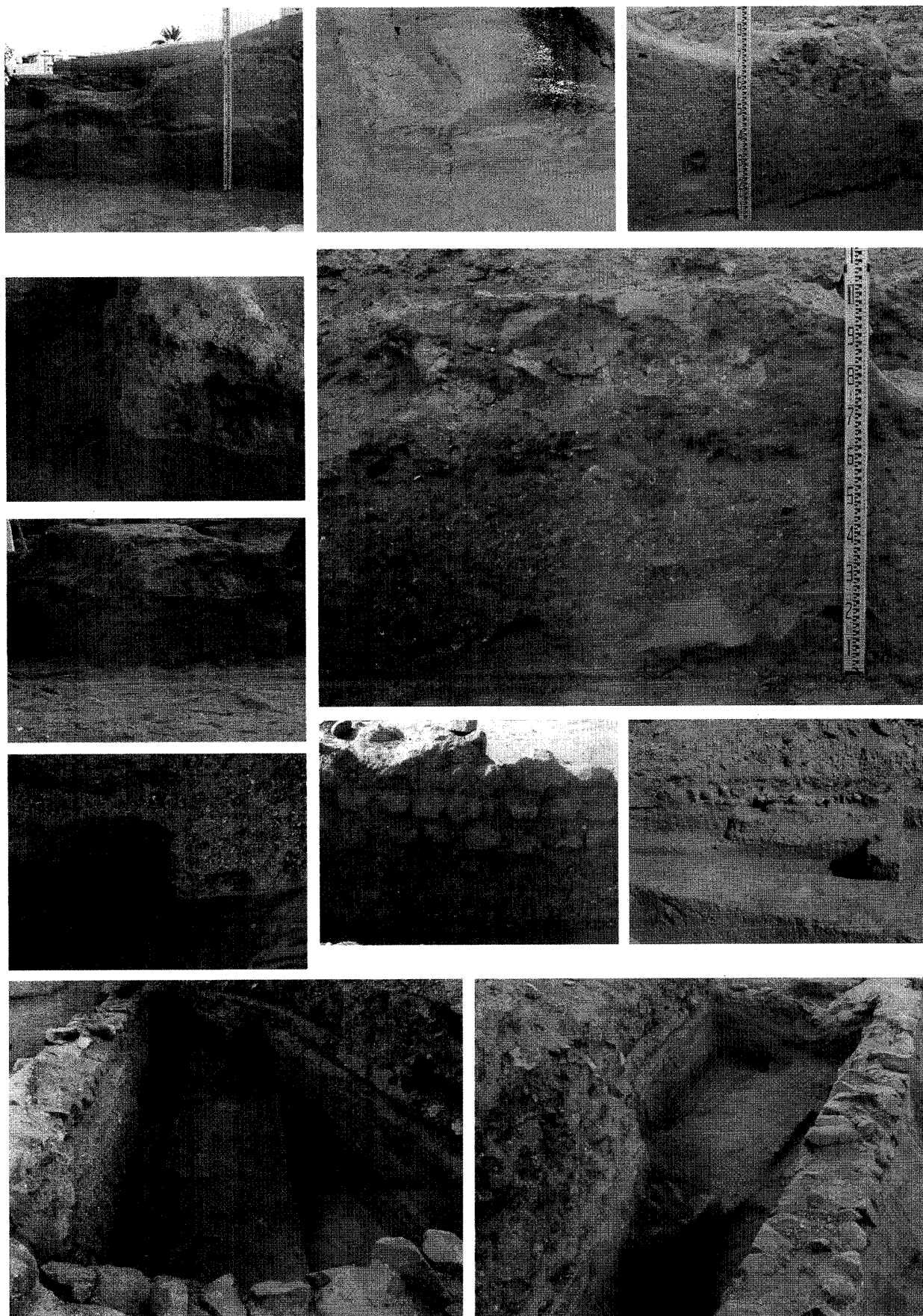


Figure 33 House 1, Level 3, Khorfakkan town site

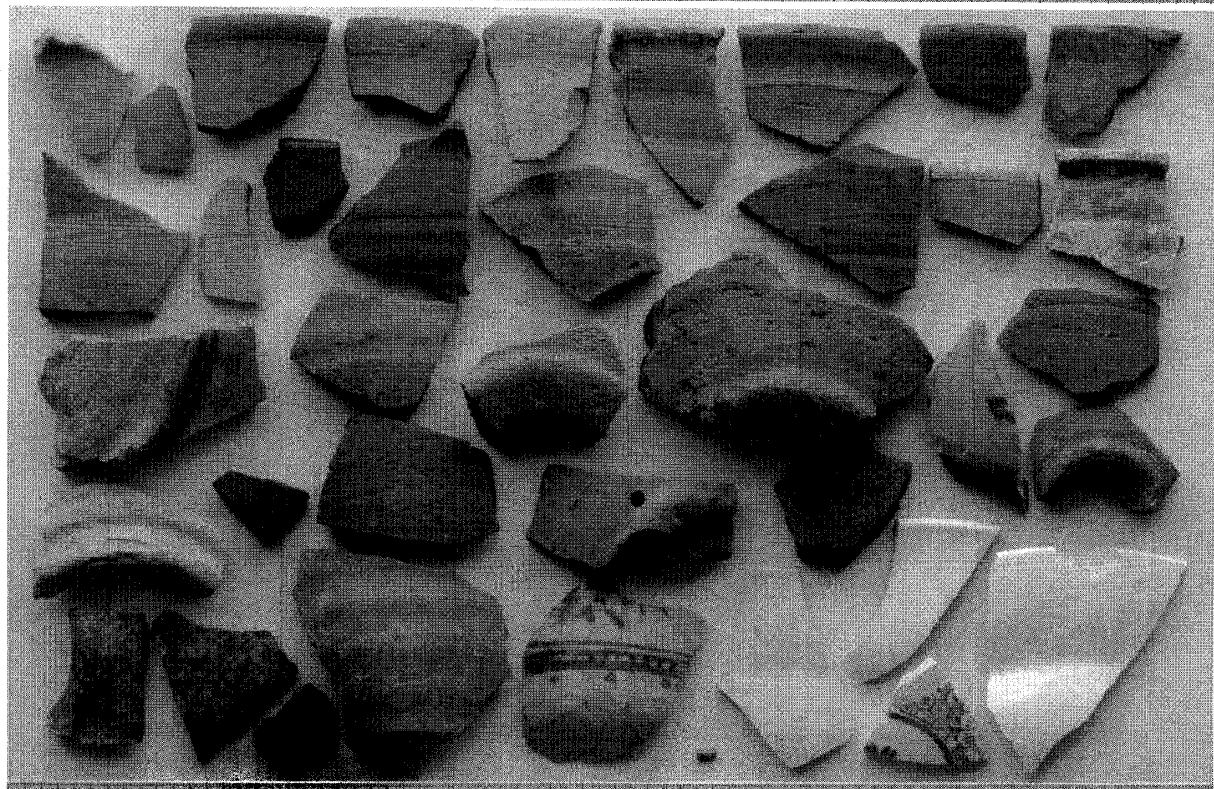
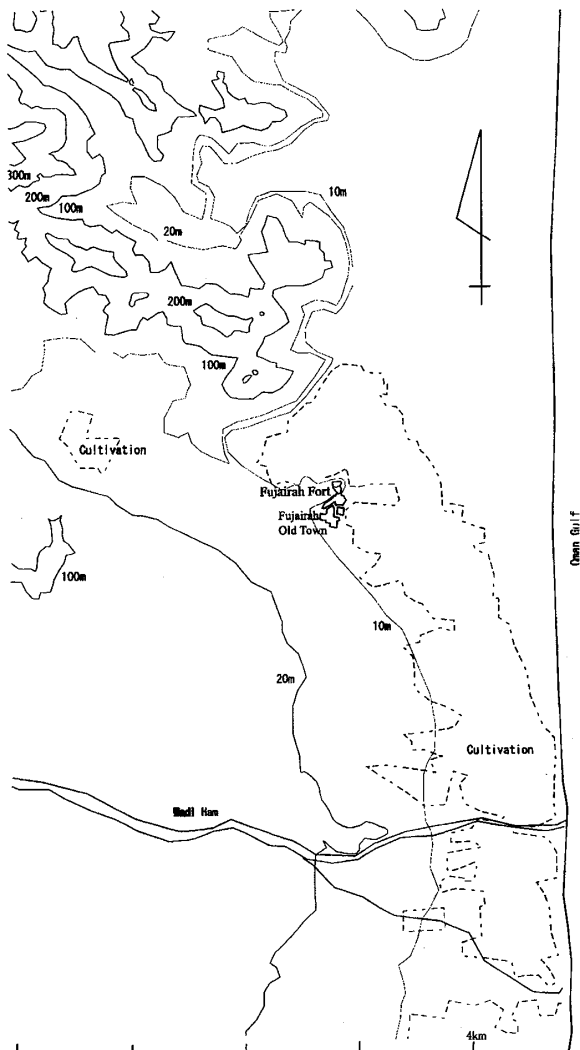


Figure 34 Samples of glazed ware from surface and level 1, north-south trench, Khorfakkan old town site. Jan.2002.

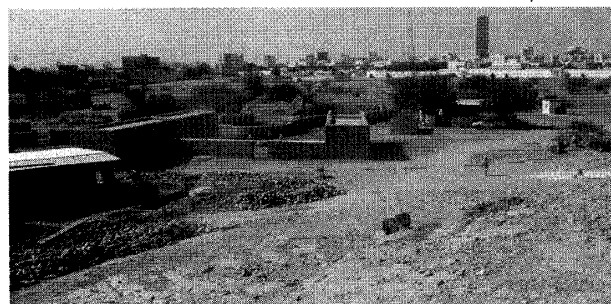
Chinese green ware dish(1) of 15th century and bowl(2). Thailand or Myanmar green ware dish(3) and bowl(4). Myanmar green ware dish(5) of 15th century. Green glazed ware large bowls(6-19) of Iran or Pakistan made. Color of glaze changes from green to blue and manganese purple dots. Light color of green glaze is later than dark color green glaze. Each bowl has same type of mouth. Blue glazed ware bowl(23-24). Yellow glaze ware bowl(28-29). Brown glaze ware jar or vase(30-32). Over-glaze green and black painted bowl(34) with stonepaste fabric of Iran made. Porcelain printed ware dishes(35,37) and bowl(36). Blue painted on opaque white glaze plate(38). Pink coral bead(39). Etc. Ceramics are dated from 15th century to 20th century.



Fujairah Emirate, UAE, showing related archaeological points with Fujairah old town site.



Fujairah old town site, from Fujairah Fort. 25 March 1994.



Fujairah old town site. Trenches 1 2 and 4, looking from Fujairah Fort. 2004.



Figure 35 Location of Fujairah old town site and its geographical features.

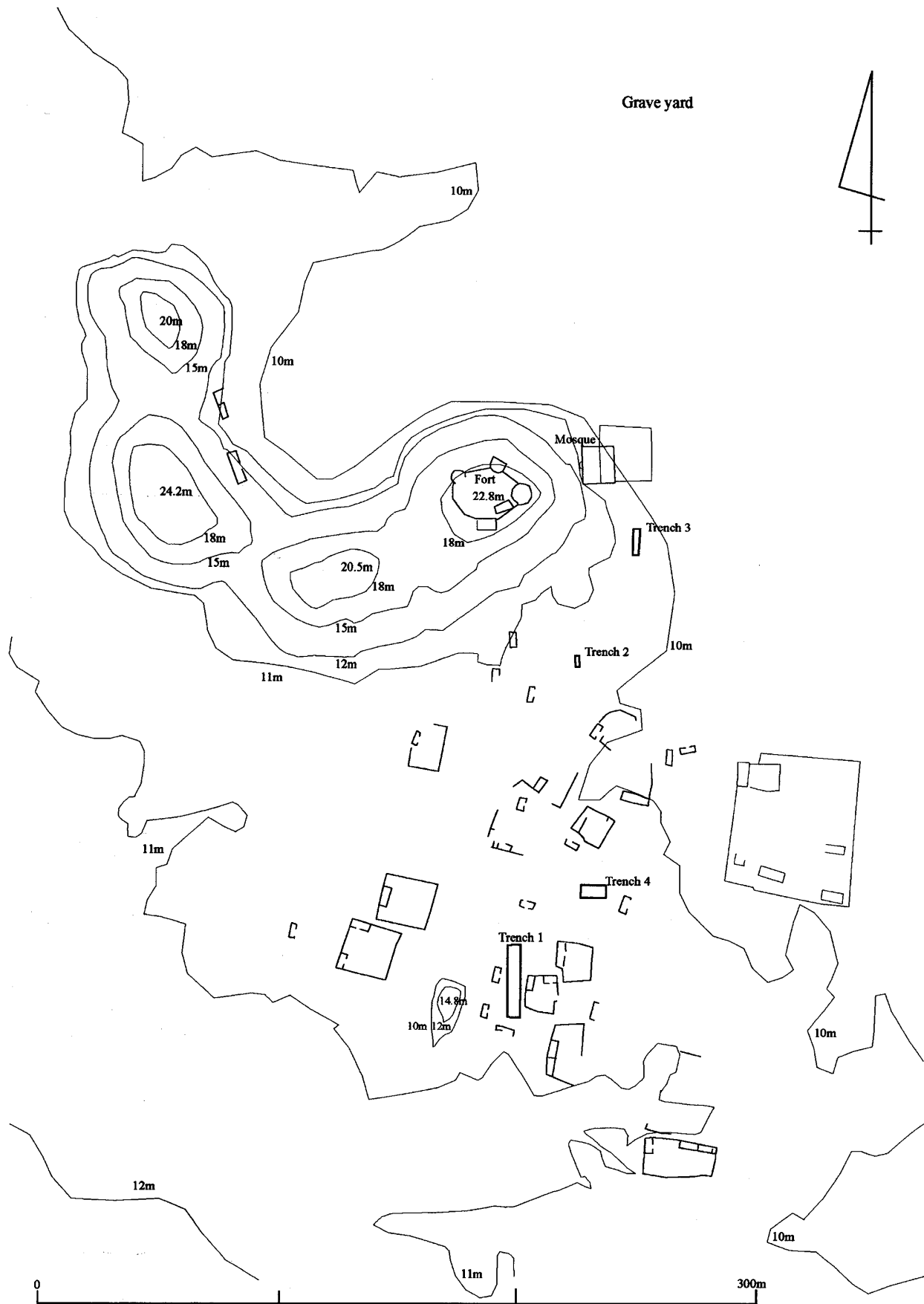
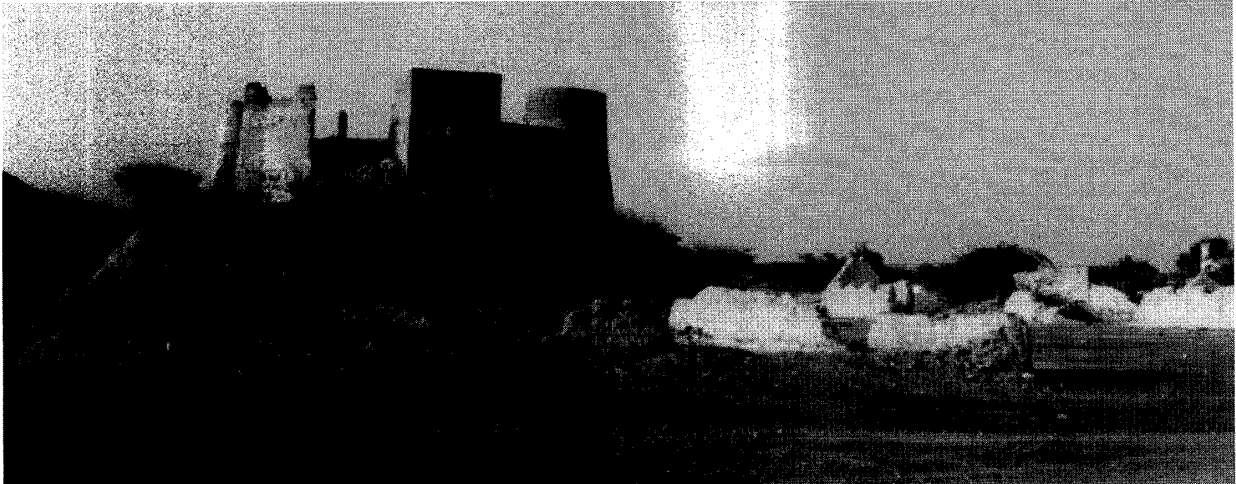
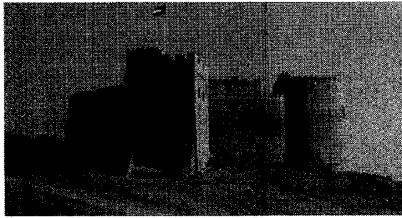


Figure 36 Plan of the latest buildings of Fujairah old town site.



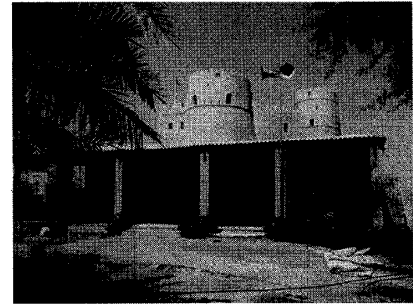
Fujairah fort before renovation, April 1994. Looking from South-west.



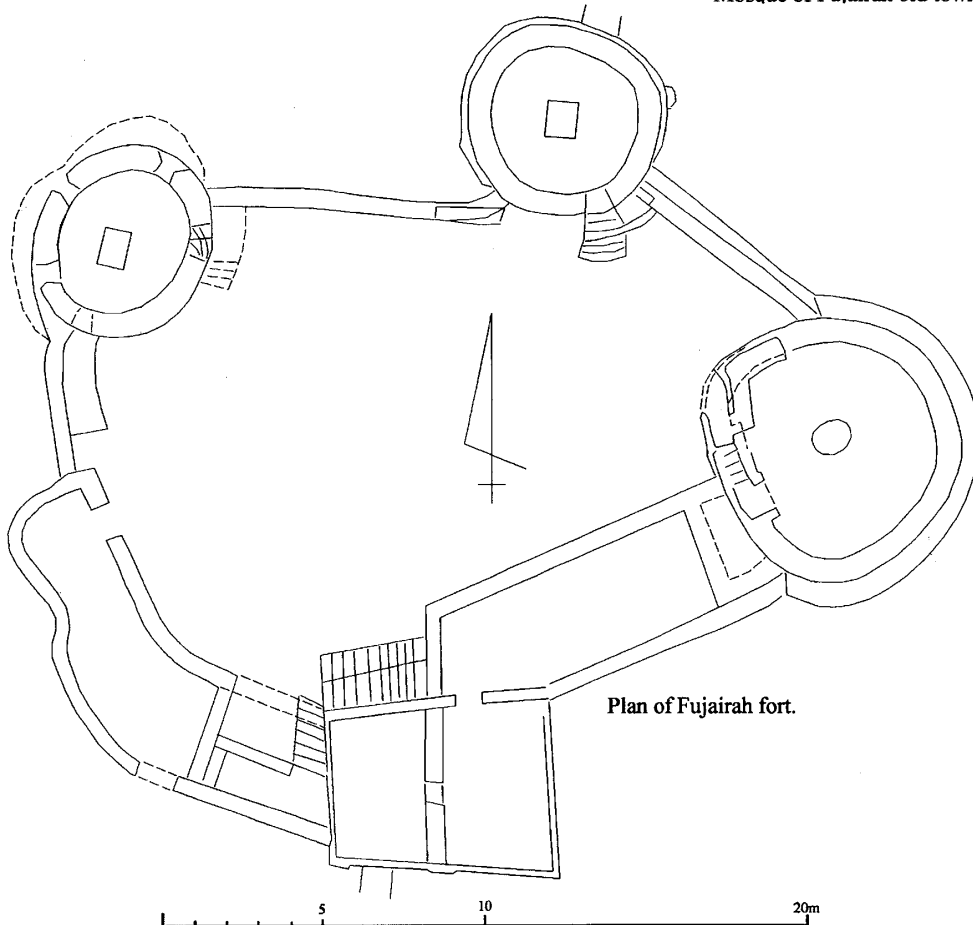
Fujairah fort after renovation, April 2004. Looking from South.



Mosque of Fujairah old town, Looking from fort. April 2004.

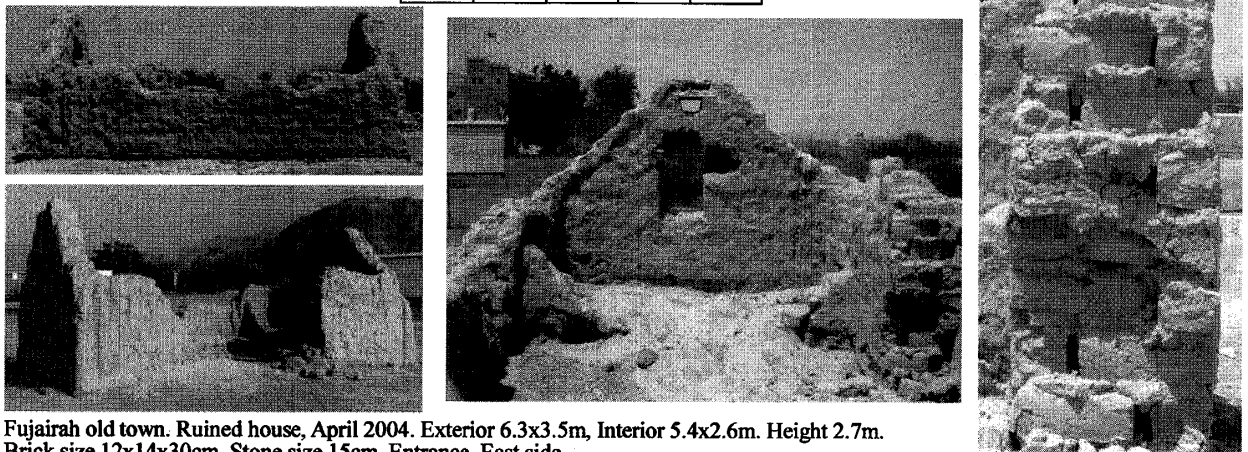
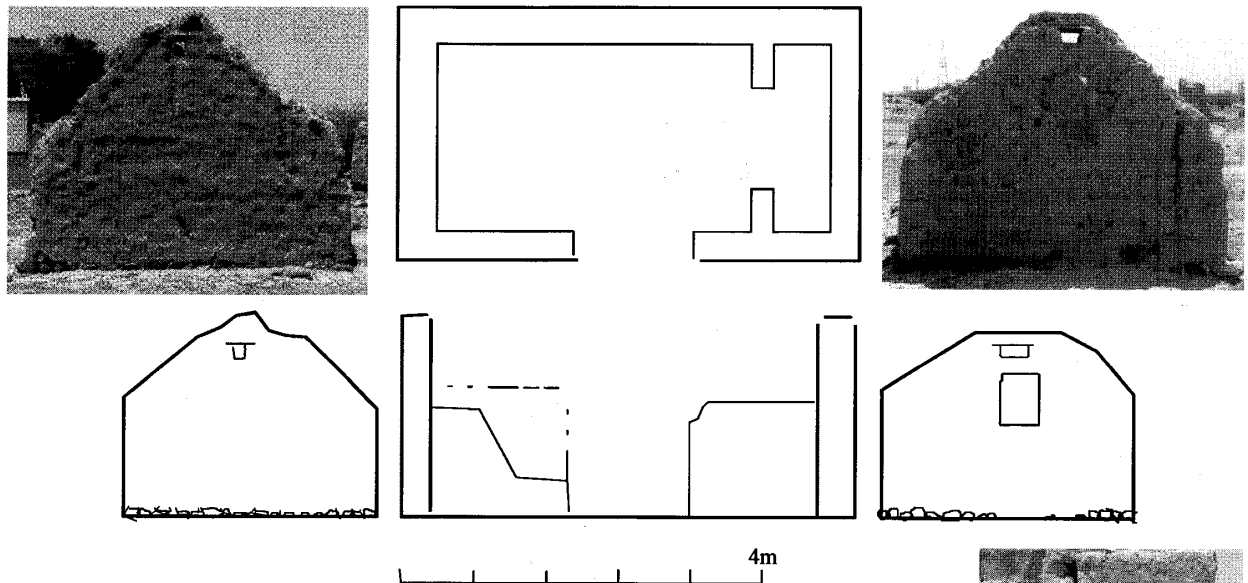


Mosque of Fujairah old town, Looking

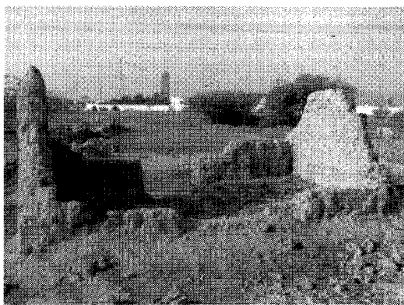


Plan of Fujairah fort.

Figure 37 Fujairah Fort and Mosque



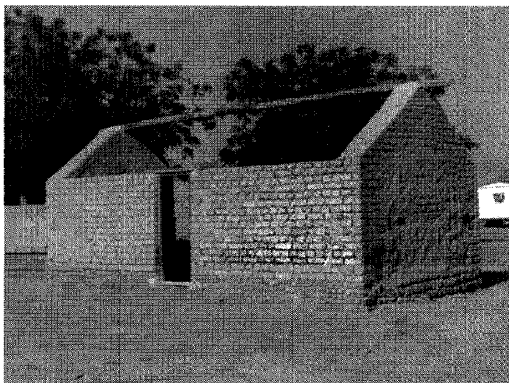
Fujairah old town. Ruined house, April 2004. Exterior 6.3x3.5m, Interior 5.4x2.6m. Height 2.7m. Brick size 12x14x30cm. Stone size 15cm. Entrance, East side.



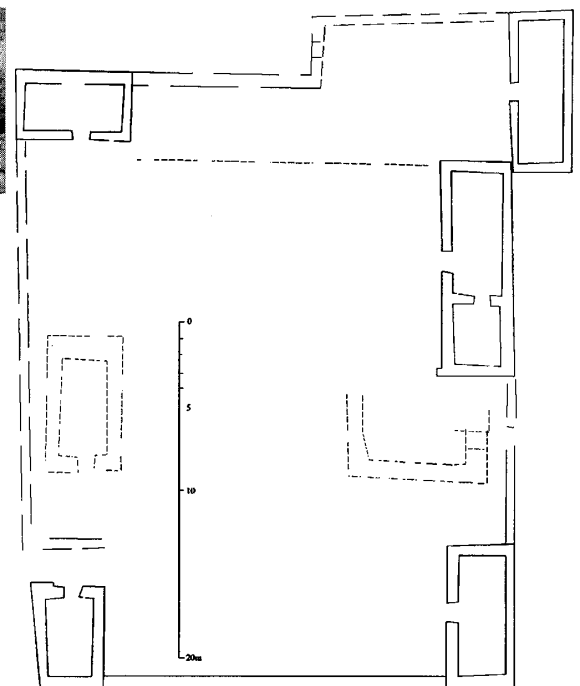
Ruined house near Trench 1, April 2004.



Brick of ruined house, April 2004.



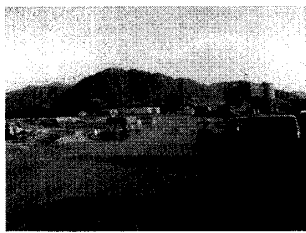
Fujairah old town. Reconstructing house.



Shaikh house of Fujairah old town.

Figure 38 Houses of Fujairah old town site.

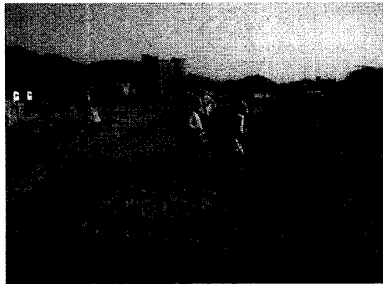




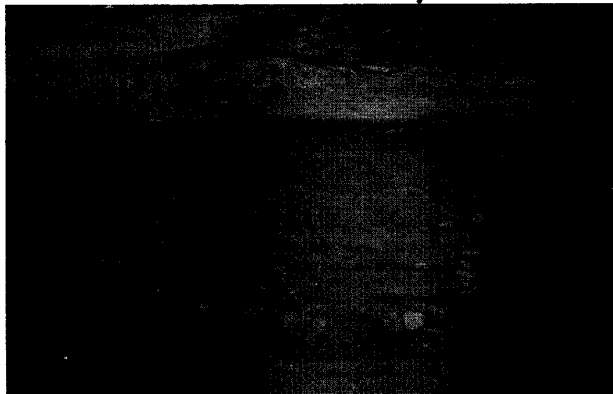
Fujairah old town site, Trench 1. Looking from South. April 2004.



Trench 1. Looking from North.

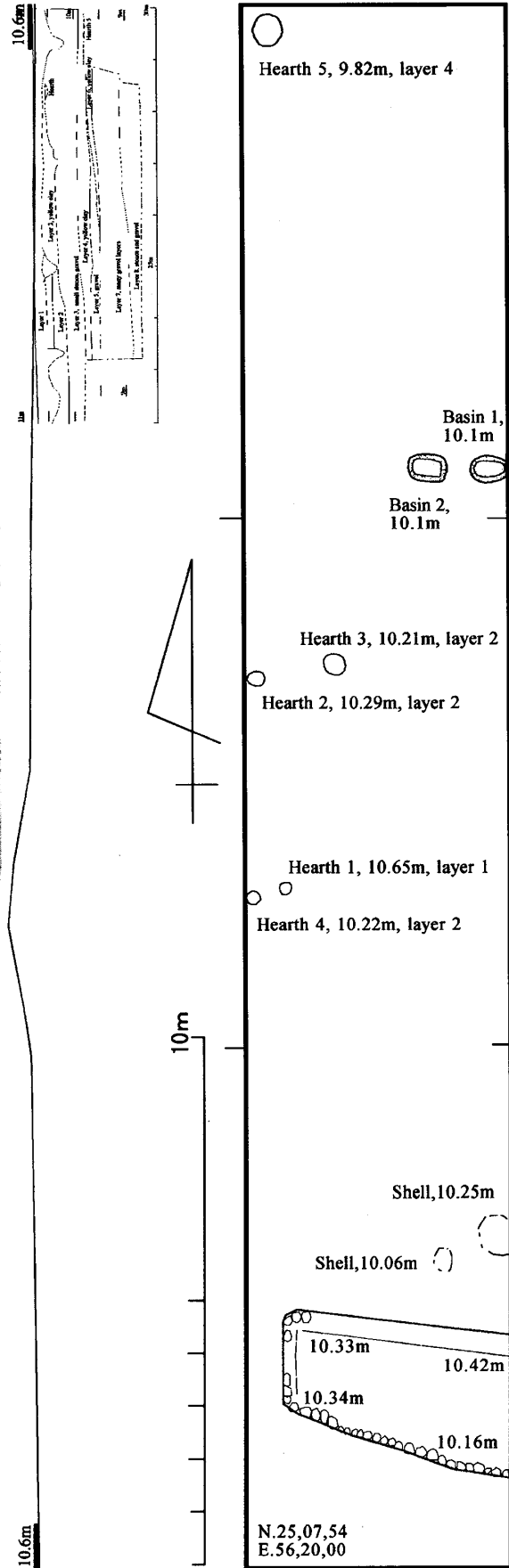


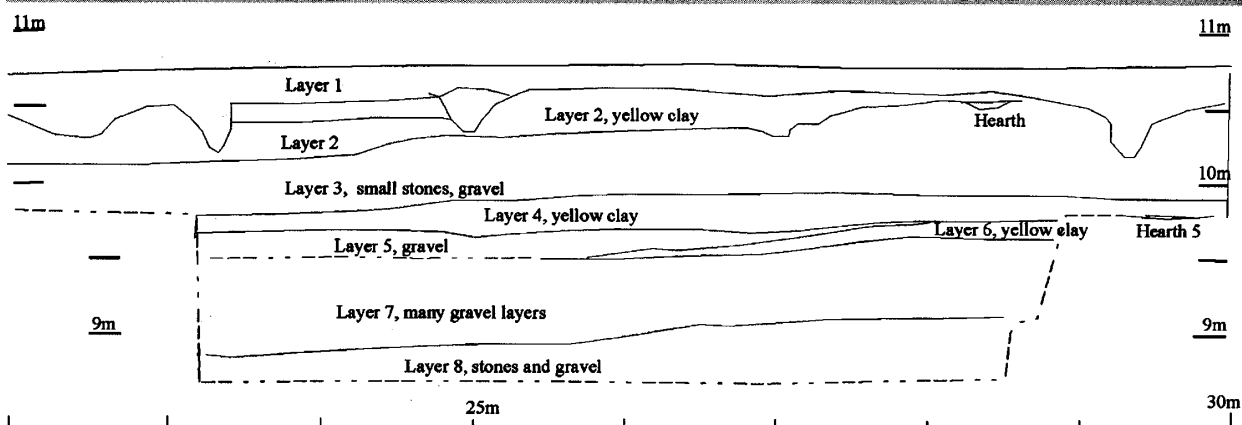
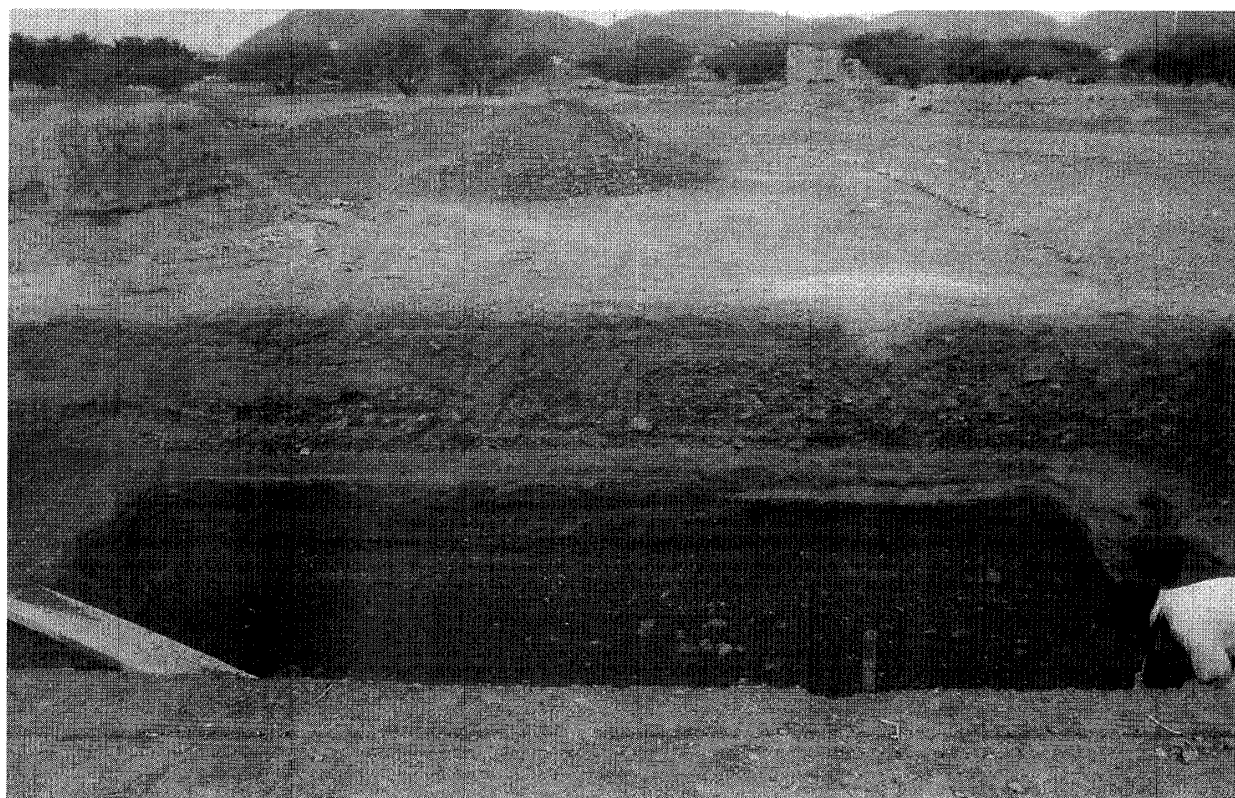
Trench 1. Shell, 10.25m, layer 2.



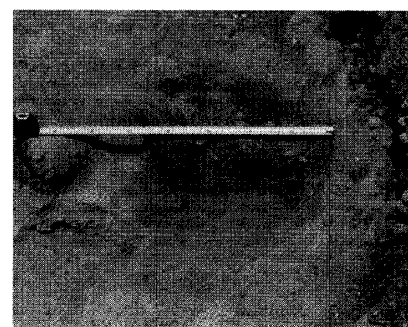
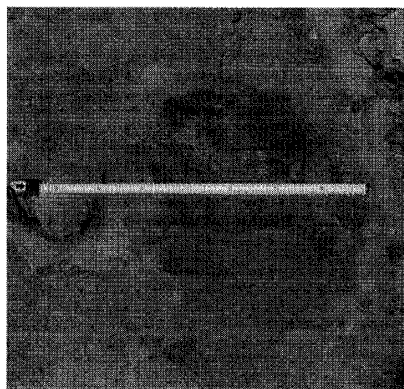
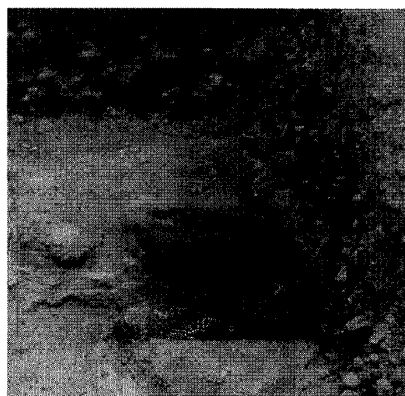
House 1, Trench 1. Level of upper part of stone construction; 10.35m, Lower part of stones; 10.??m, layer 2. Looking from West.

Figure 39 Trench 1, Fujairah old town site.



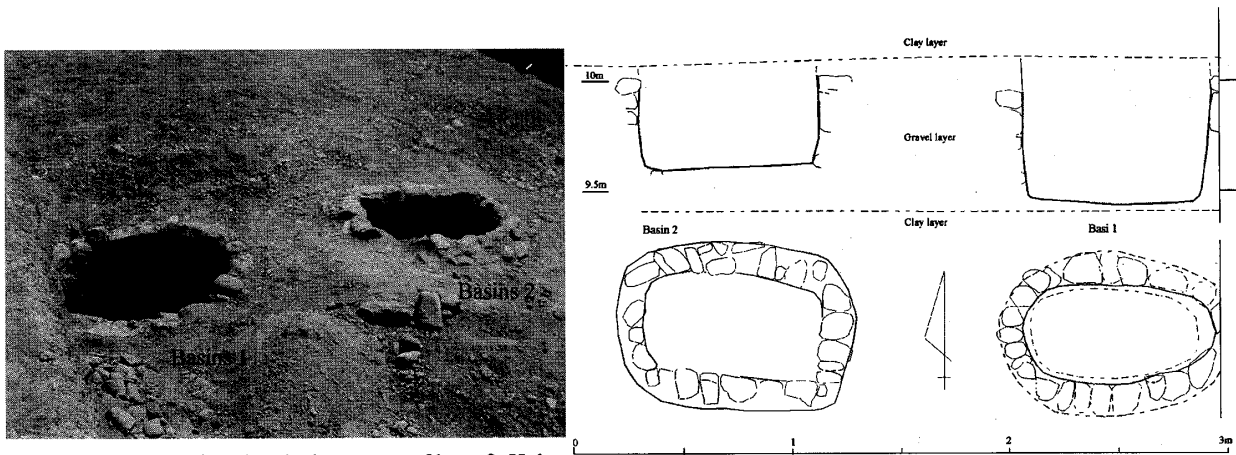


Section of west side, Trench 1.

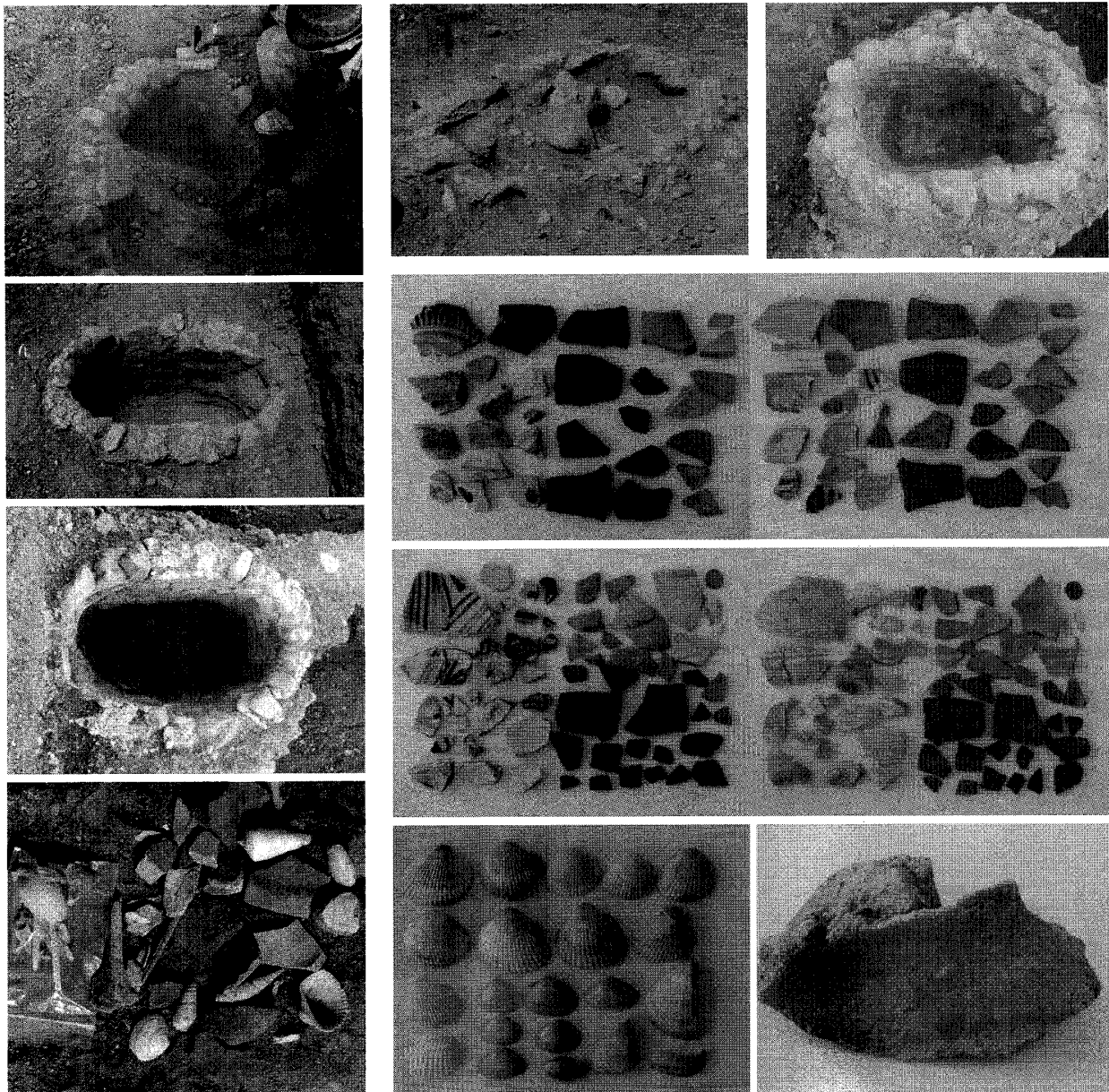


Hearth 5, layer 4 of yellow clay layer, trench 1.

Figure 40 Section and Hearth of Trench 1, Fujairah old town site.



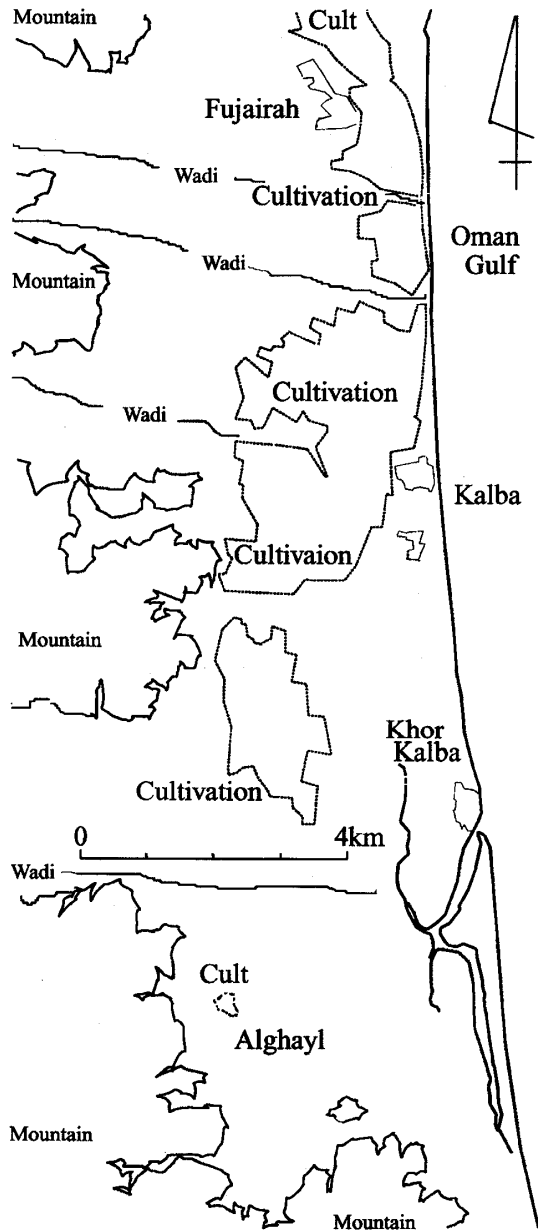
Basins 1 and 2 were found at the lower part of layer 2. Hole was dug into gravel layer and clay was plastered inside surface. Top parts of wall were made by 2 layers of round stones with clay. Deposited earth was same with layer 2 and materials found inside was also same with the one from layer 2. Wall stones which were falling down from the wall, were found at the upper parts of deposited earth.



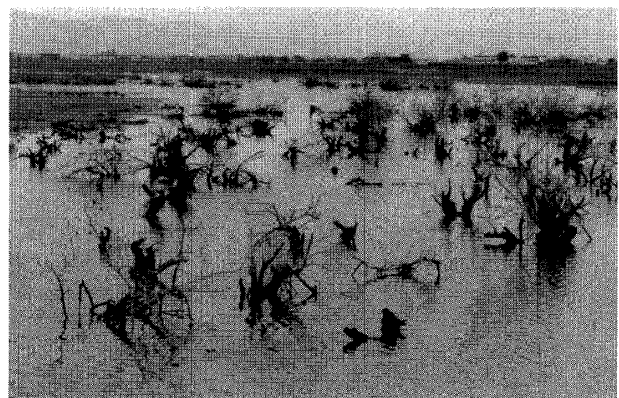
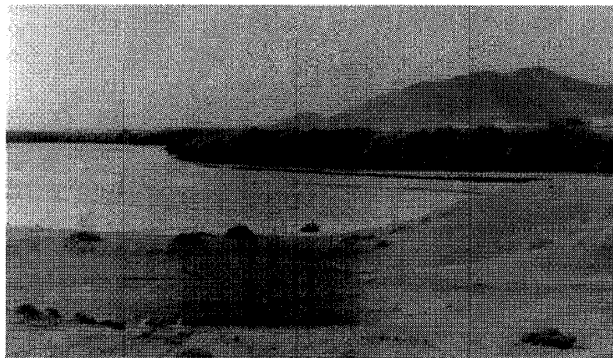
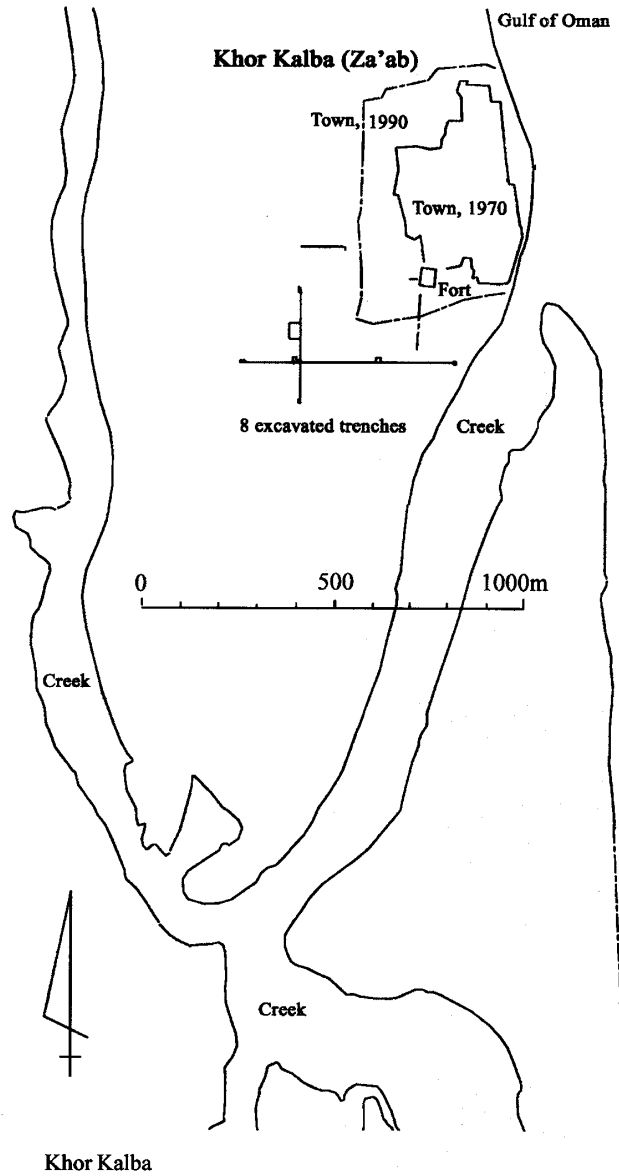
Left; Basin 1 and finds from inside.

Right; Basins 2 and finds from inside.

Figure 41 Basins 1 and 2, Trench 1, Fujairah old town site.

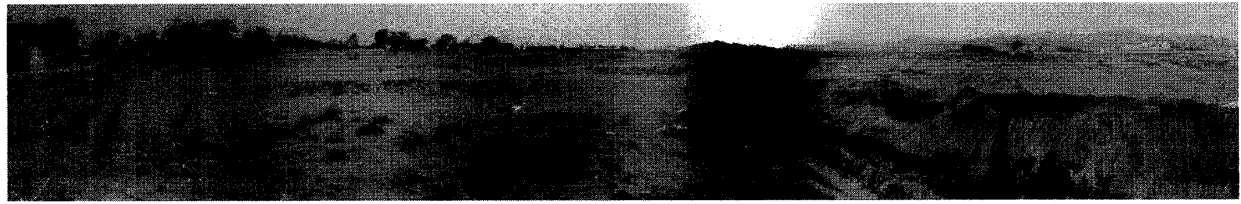


Topographical map of Khor Kalba, reconstructed from the map of 1976.

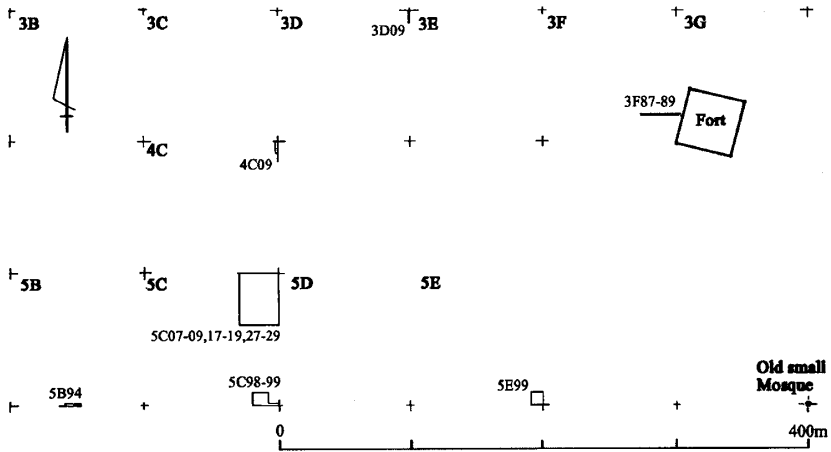


Mangrove and Creek at Khor Kalba, 1994(left). Mangrove in land was dying from lack of fresh sea water, 1994(right).

Figure 42 Topographical Map of Khor Kalba.



Khor Kalba, West(right), South(center), East(left) from 3D09 trench.



Plan of the Excavated 7 trenches and the location of Fort and Old small Mosque



House area, 5C07-09,17-19,27-29.



Tower of the Fort.



Small Mosque(left)



5B94



4C09



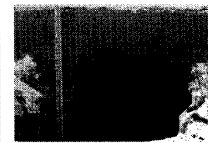
5C98,99



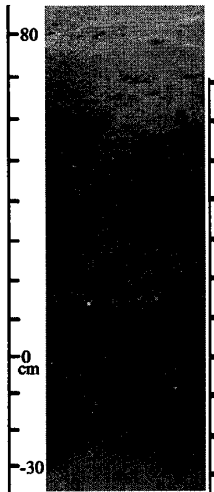
7C09



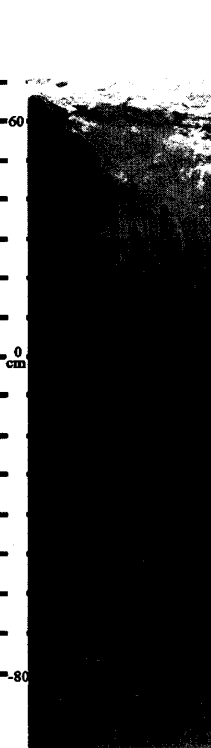
3D09



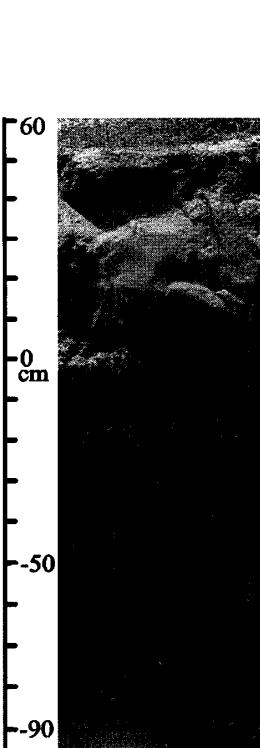
5E99



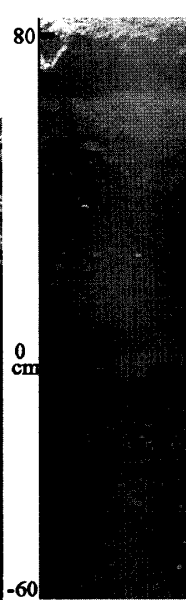
5B94



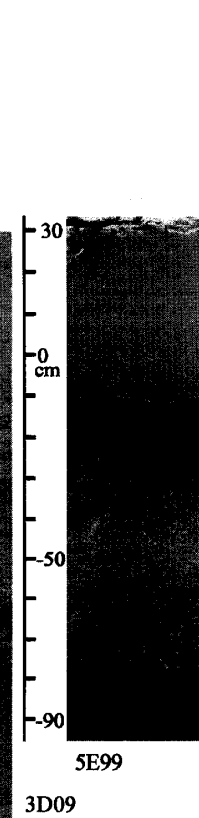
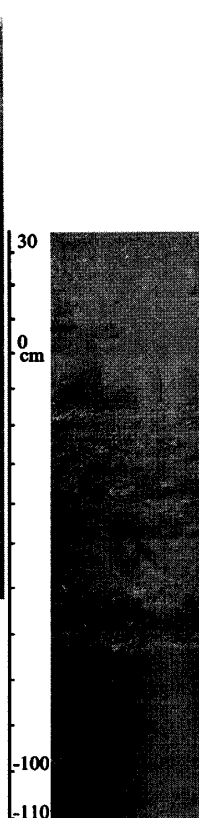
4C09



5C98,99

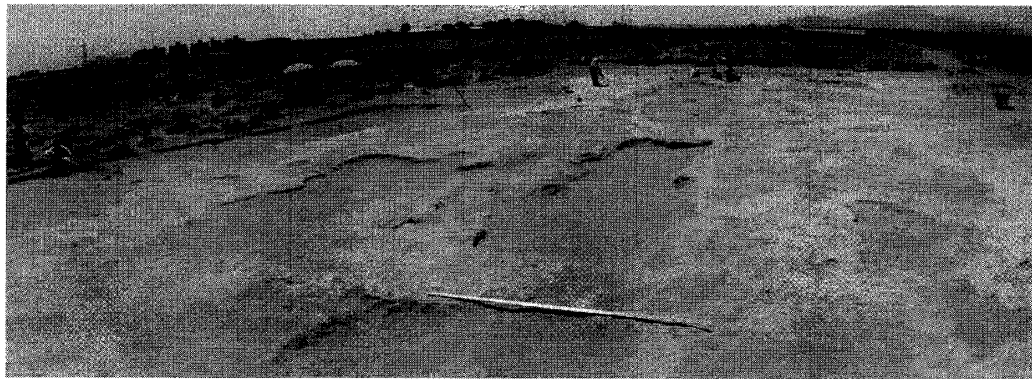


7C09, South

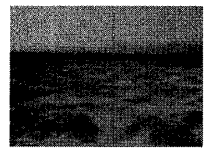


5E99

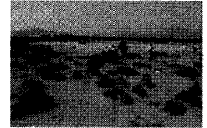
Figure 43 Layers of trenches, Khor Kalba.



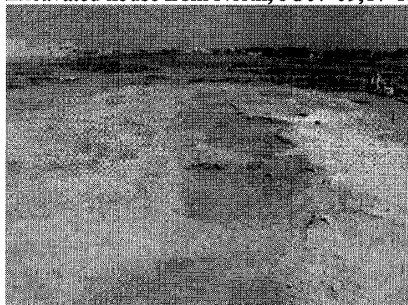
Excavated house from North, 5C07-09,17-19,27-29,37-39.



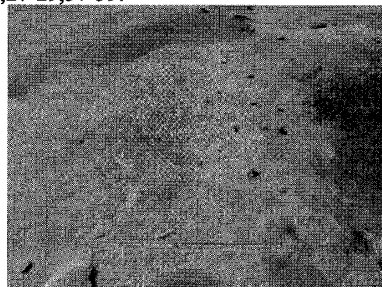
House area, before excavation from north-east



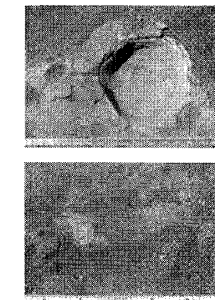
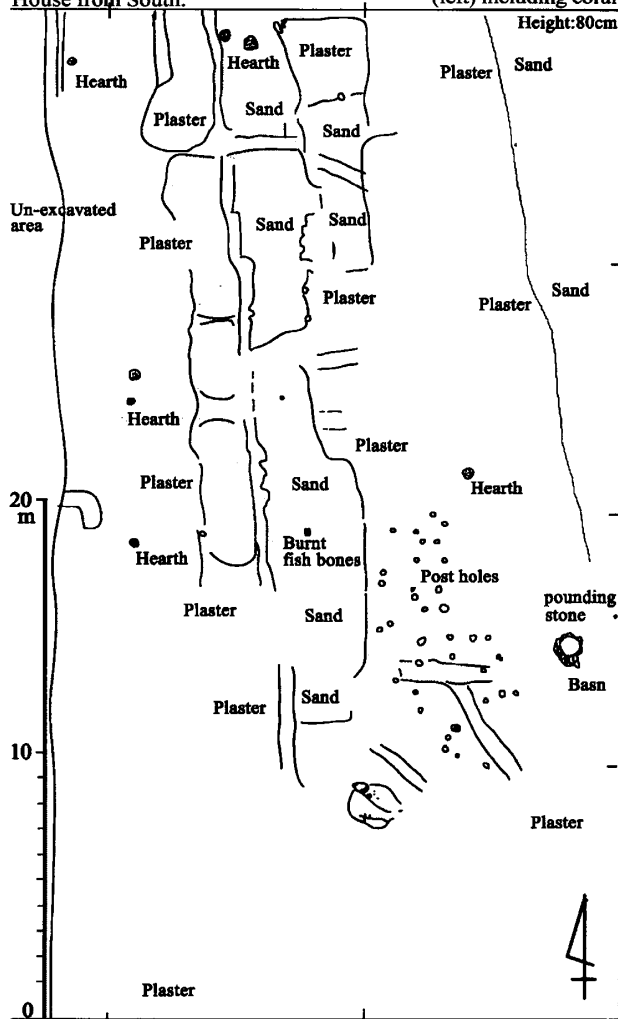
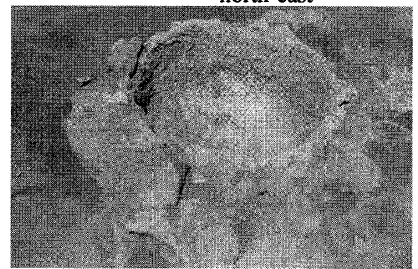
House area, during the excavation from north-east



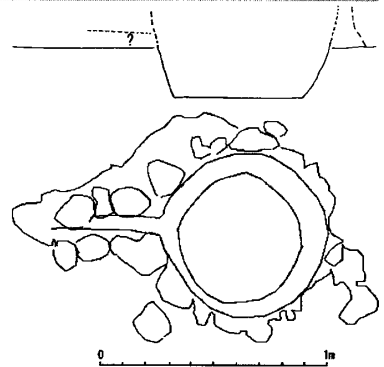
House from South.



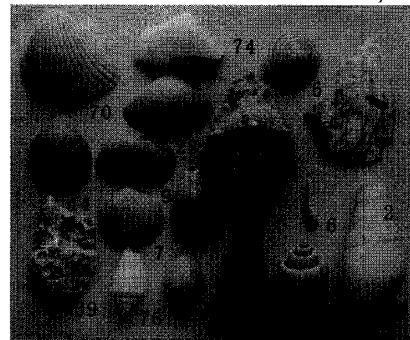
Post holes of house(right) and trace of wall (left) including coral and beach stones.



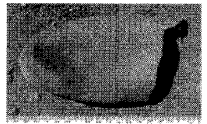
Hearth with whitish ash.



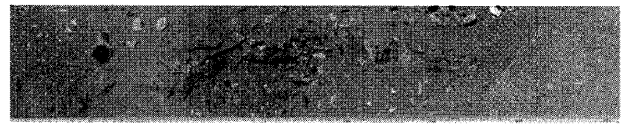
Hodh, Basin for water.



Shell found at House area (5F07 -09,17-19,27-29, 37-39) and their collected numbers.



Pounding stone.



Burned Fish bones in a hearth.

Figure 44 Plan of Excavated house, 5C07-09,17-19,27-29,37-39, Khor Kalba.

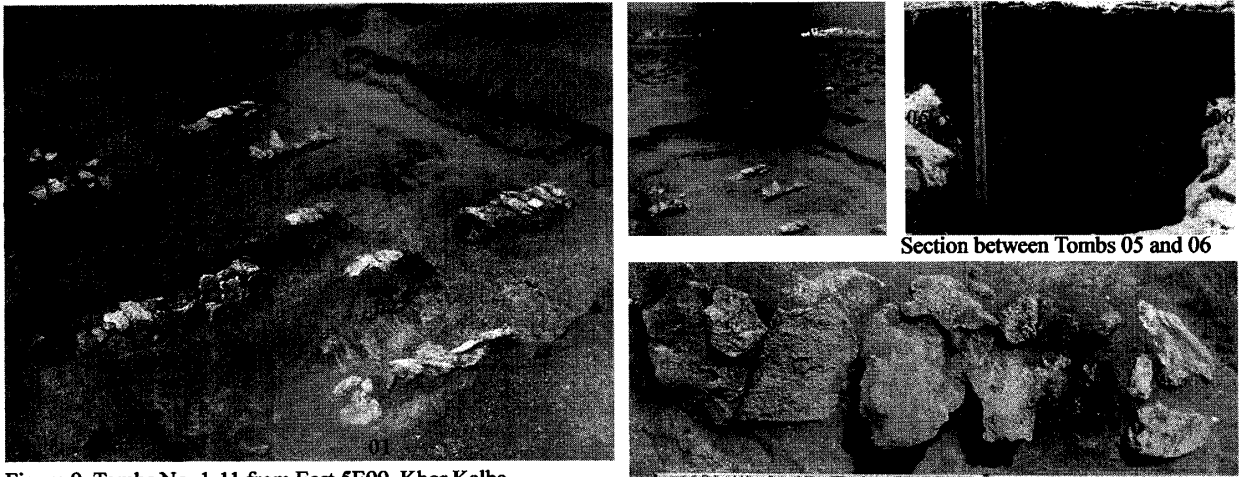


Figure 9 Tombs No. 1-11 from East, 5E99, Khor Kalba.

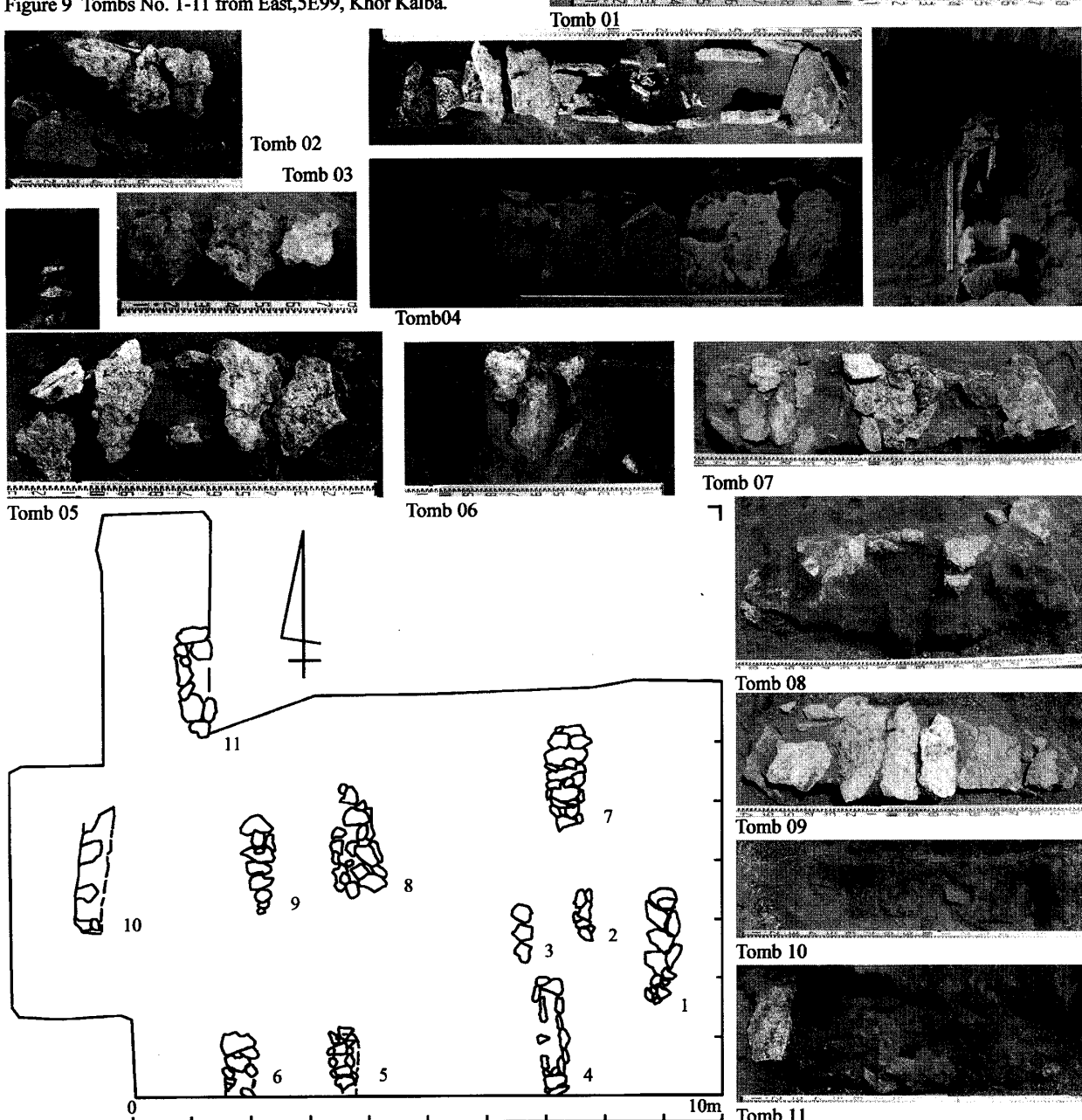


Figure 45 Plan of Tombs, 5E99, Khor Kalba.

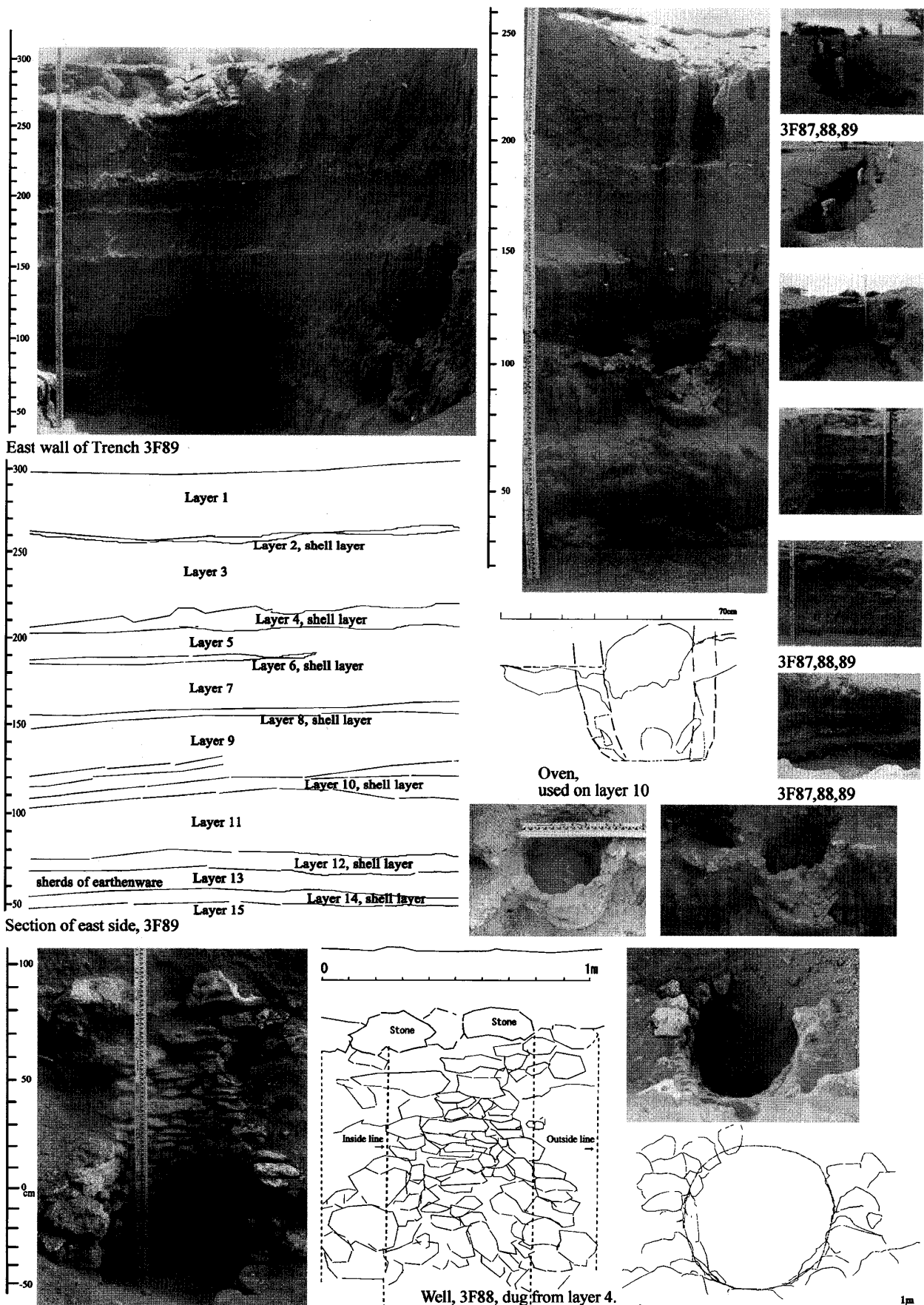
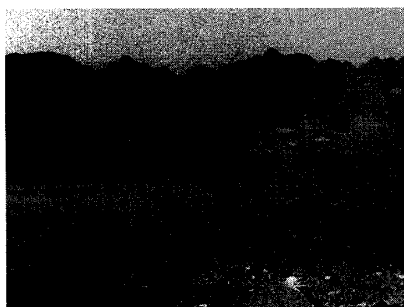
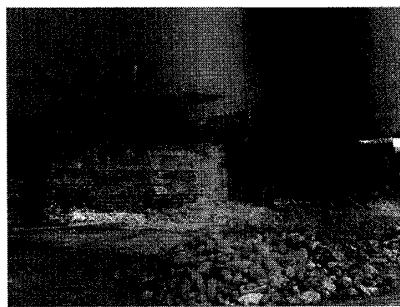


Figure 46 Section of trench, Oven and Well, Khor Kalba.





Awhala, 2004.



Awhala Fort.

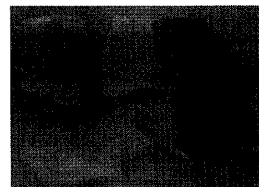
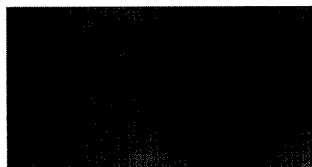
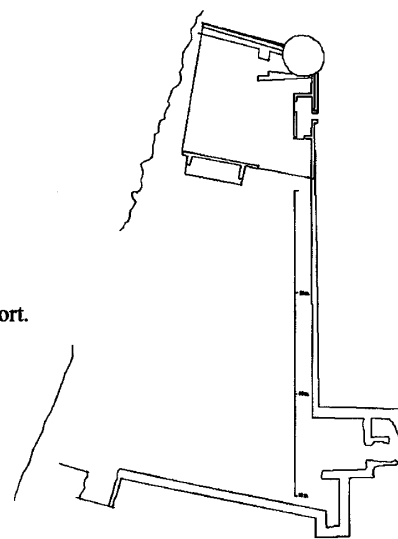
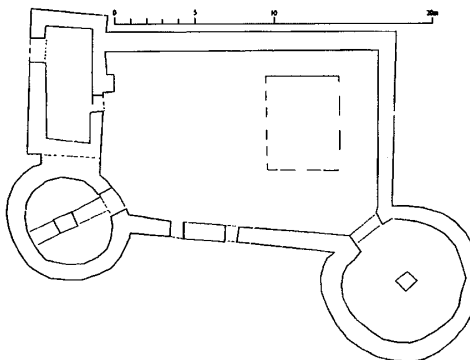


Figure 47 Awhala.



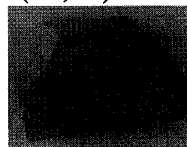
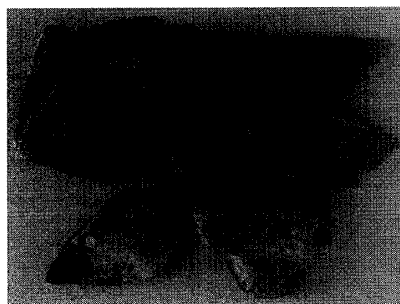
Bithnah Fort, 1987



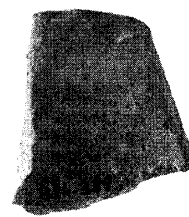
Bithnah 24(472,478)



Bithnah 24(382,378,378,382,403)



Bithnah 24(471)

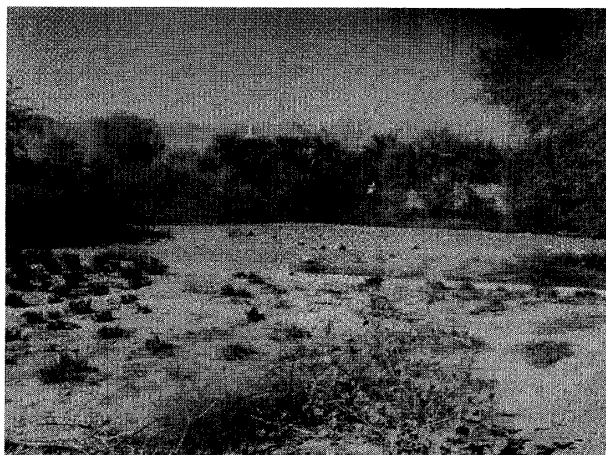


Bithnah 24 (389)



Bithnah 24(506)

Figure 48 Bithna.



Farm in Wadi, Diba.



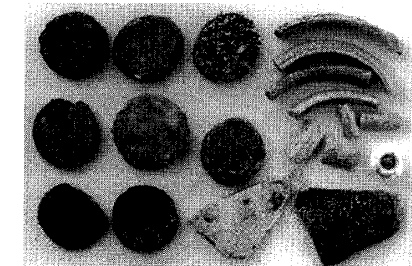
Myanmar green ware, Chinese green ware, Chinese blue-and-white, Islamic blue ware and brown ware. Farm in Wadi, Diba.



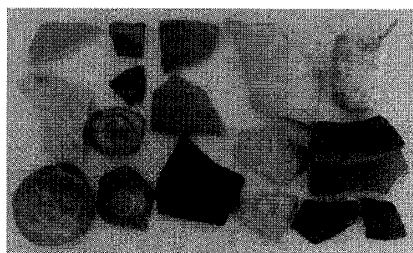
Finds from market beside sea.



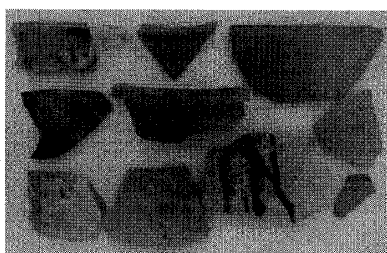
Finds from market beside sea.



Finds from market beside sea.



Finds from fort beside sea.



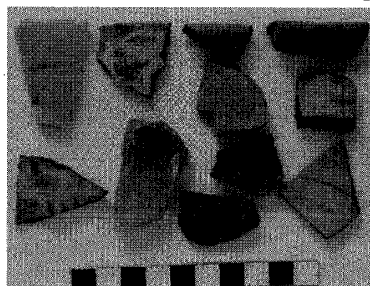
Finds from market beside sea.



Finds from market beside sea.



Finds from fort beside sea.



Finds from dwelling site near Hellenistic tomb beside sea.



Figure 49 Diba.